

NEUER GROSSER KURSUS
DER DEUTSCHEN SPRACHE

新ドイツ語大講座

関口存男著

SANSYUSYA VERLAG

ま え が き

「新ドイツ語大講座」は、元来は「基礎入門編」、「訳読編」、「文法詳説編」をそれぞれ一巻とする上・中・下三巻からなる講座であります。この講座についての多くの読者からの注文のひとつは、上・中・下の三巻を一冊にまとめたものを出してほしいという要請です。今までは、値段がかさばるのと、本の体裁が見ぐるしくなるということで、上の要請に応える決心がつかなかったのですが、さいわい、印刷用紙もよくなるし、印刷や製本の技術も進歩しましたので、合本の形に踏みきった次第です。

とはいっても、在来の三巻に分かれた形は、やはり読者の便を計って、そのまま残します。ですから、読者はどちらでも自由に選択することができるわけです。

「学卒」のレッテルだけでは世間が買ってくれない状況にきたようです。実力を地道に養成するためには、不出世の天才と無類の努力とを結び合わせて、ドイツ語教育のために全身を打ち込んだ関口先生の名講義に、読者も「打ち込んで」いただきたい。

1965 年 夏

藤 田 栄

基 礎 入 門 編

序

□ 本講座は、小生監修の『独逸語大講座』にかわるべき新講座として新たに書き下ろしたものであります。『独逸語大講座』の方は、すでに二十年も前に編したもので、いつか徹底的に改訂を加えたいと思っているうちに今回の敗戦騒ぎとなり、時勢も急変しましたので、改訂よりはいっそ全部編纂し直した方がよいと思い、種々考えたあげくこういう形に改編したわけです。従って従来の独逸語大講座は、これをもってひとまず廃刊ということにいたします。

□ 本講座各巻の関係——本講座は上・中・下の三巻より成り、上巻は『文法の輪廓』、中巻は、上巻を基礎として下巻を参考としつつ読む得る程度の『訳読』、下巻は、中級乃至高級程度の原文を読破するに必要な『文法詳説』であります。各巻は各々独立した一冊の単行本でもあり、また順次に修了して行く一貫した講座でもあるわけです。

□ 本講座において想定された読者の学力程度——本講座は、ほぼ中学卒業程度、ないし専門学校初級在学程度の学力を念頭において編したものであります。なお厳密に申しますならば、知識欲の最も旺盛なる諸君を対象としたものです。なおもっと厳密に申しますならば、単に学校で課せられる外国語の授業にやっとなついて行くことを目的として参考書を読もうとする人達ではなく、語学というものの好きな、かつまたあらゆる知識・文化・思想・情操の問題に対して深き関心と野心を抱いている学徒を眼中において編したものであります。この点を特にご理解願わないと、たとえば文例や例題をあげるにも、語学力以外に、人生・社会・人心に関するある種の深い物の感じ方を刺戟するように内容を特に吟味して編纂した私の努力が、水泡に帰するどころか、かえって勉学のじゃまになるといったような誤った批判を受ける心配があります。

□ 英語との関係——これからは、学校でもおそらく英語が第一語学となるでしょうから、本講座も、改修を機会に、あらゆる点において英語との緊密なる連絡をはかりました。そうすれば英語の復習にもなり、またこの二語を通じて、欧州語一般に通ずるある種の常識を獲得するという副効果もあるからです。

□ 本巻の諸項目は、最初から終りまで一貫した通し番号で(目次を見よ)、参照したり引用したりする時にはすべてこの番号を用いることにいたします。

□ 英語を対照することが多いので、混同を防止するため、英語はすべて *farmer, science* 等イタリック活字を用います。別に英語とも何とも断わってなくても、この斜体活字が用いてあれば英語です。

□ 発音の部で用いた万国音標文字は、大体において、W. Viëtor の *Deutsches Aussprachewörterbuch* に拠りましたが、多少修正を加えた点もあります。

昭和二十二年二月九日

長野県西筑摩郡吾妻村妻籠にて

著 者 識

目 次

	頁
第 1 講 字母と字体	2
1. ラテン体とドイツ体との区別	2
2. 活字と筆書体	2
3. 大文字と小文字	2
4. 字母 (アルファベット).....	3
第 2 講 発音の要点	6
5. 一般的注意	6
6. ドイツ語の発音はローマ字式である	6
7. 音標文字について	8
8. 無声の h	13
9. ei は アイ [ai] と読む	14
10. ie は イー [i:] と読む	14
11. eu は オイ [ɔy] と読む	15
12. 変音 (ä, ö, ü) について	15
13. au はアウ, あるいはアオ.....	19
14. äu は eu [オイ] と同発音	20
15. ch は a, o, u, au の次に来ると喉音 [音標: x]	20
16. a, o, u, au 以外の次に来る ch は舌音である [音標: ç]	22
17. j の発音 [音標: j].....	23
18. w の発音 [音標: v]	23
19. z の発音 [音標: ts]	24
20. tz の発音 [音標: ts].....	24
21. ß の発音 [音標: s]	24
22. sch の発音 [音標: ʃ].....	25
23. tsch の発音 [音標: tʃ].....	25
24. v の発音 [音標: f]	25
25. pf の発音 [音標: pf].....	26
26. qu の発音 [音標: kv]	26

27.	chs の発音 [音標: ks]	27
28.	語末の b, d, g は p, t, k と同発音	27
29.	語末の g には二種の発音法がある	28
30.	s は, 次に母音が来れば濁る [音標: z]	29
31.	st, sp の発音	29
32.	中間子音 ng の発音 [音標: ŋ]	30
33.	th, ph, rh などの発音	31
34.	tia, tio, tie などの発音.....	31
35.	その他外来語の例外的発音	31
36.	母音の長短について	32
第 3 講 動詞の不定形と人称変化 (1)		34
37.	不定形の語尾と定形の語尾	34
38.	三人称について	36
39.	二人称には親称と敬称の別あり	37
40.	不定代名詞 man.....	38
	例題 1.....	39
第 4 講 動詞の不定形と人称変化 (2)		41
41.	人称語尾の例外: bitten, reden など.....	41
42.	人称語尾の例外: rechnen など	42
43.	人称語尾の例外: küssen など.....	42
44.	人称語尾の例外: wandern, wandeln など	43
	例題 2.....	44
45.	人称変化の際, 発音にも注意すること!.....	44
第 5 講 動詞の不定形と人称変化 (3)		46
46.	単数の二人称・三人称において語幹を変ずる動詞多し	46
	例題 3.....	48
47.	sein, haben, wissen, werden, tun の人称変化	49
	例題 4.....	49
第 6 講 定冠詞・名詞の格変化		51
48.	男性名詞・女性名詞・中性名詞の区別	51
49.	名詞の格変化	52
	例題 5.....	54
50.	男性弱変化名詞	55
	例題 6.....	56

第 7 講 人称代名詞の格変化	58
51. ich, du, Sie の格変化	58
例題 7.....	58
52. er, sie, es の格変化	59
例題 8.....	59
53. wir, ihr, sie の格変化	59
例題 9.....	60
54. 人称代名詞二格について	60
第 8 講 der, dieser, jener など, および形容詞の格変化	62
55. dies-er, この。jen-er, あの。jed-er, おのおのの。welch-er? どの?	62
例題 10.....	62
56. der, dieser などの次に来る形容詞の格語尾.....	63
例題 11.....	64
57. 形容詞に語尾をつける際の注意	65
第 9 講 ein, kein, mein など, および形容詞の格変化	66
58. 不定冠詞 ein の格変化	66
例題 12.....	66
59. 物主形容詞も不定冠詞と同じ変化	67
例題 13.....	68
60. ein, kein, mein などの次にくる形容詞の格変化.....	69
例題 14.....	69
61. 前に何も来ない場合の形容詞の格変化	70
第 10 講 名詞の複数形	71
62. 英語とドイツ語の差	71
例題 15.....	72
63. 複数の格変化	73
例題 16.....	73
64. 複数形の前に来る形容詞の格変化	74
例題 17.....	74
第 11 講 定形とその位置	76
65. 定形 (verbum finitum).....	76
66. 定形正置	76
67. 定形倒置	77
68. 定形後置	78

例題 18.....	80
69. 副文章の後に来る主文章は定形倒置	81
70. weil と denn との相異	82
第 12 講 話法の助動詞	84
71. 話法の助動詞を用いる場合の構文	84
72. 話法の助動詞 müssen と können	84
例題 19.....	85
73. 話法の助動詞 wollen と dürfen.....	85
例題 20.....	86
74. 話法の助動詞 mögen と sollen	86
例題 21.....	87
75. 話法の助動詞 lassen	88
例題 22.....	88
第 13 講 動詞の三要形	89
76. 不定形・過去・過去分詞を三要形という	89
77. 規則動詞の三要形	89
78. ge- の省略について	90
79. 不規則動詞の三要形	91
80. 過去分詞の用法	93
例題 23.....	94
81. 現在分詞の用法	95
例題 24.....	95
第 14 講 過去と未来	97
82. 過去の人称変化	97
例題 25.....	98
83. 未来の人称変化	99
例題 26.....	100
第 15 講 受働形	101
84. 受働形の構成	101
例題 27.....	102
85. 状態相の受働形	103
86. 無意の es を主語とした受働文	104
例題 28.....	104
第 16 講 前置詞	106
87. 前置詞の格支配	106

88.	二格支配の前置詞	106
	例題 29.....	107
89.	三格支配の前置詞	108
	例題 30.....	109
90.	四格支配の前置詞	109
	例題 31.....	110
91.	三・四格支配の前置詞	110
	例題 32.....	111
92.	前置詞と冠詞との結合形 im, aufs, zur など	113
93.	damit, womit など	114
第 17 講	分離動詞	115
94.	動詞の前綴	115
95.	分離動詞と非分離動詞	117
96.	分離動詞を用いる場合の構文	119
	例題 33.....	120
97.	分離動詞の三要形	121
	例題 34.....	122
第 18 講	関係代名詞	123
98.	関係文の特徴	123
99.	関係代名詞の格変化	125
	例題 35.....	126
100.	関係代名詞の略形: womit, worin など.....	128
101.	不定関係代名詞	128
	例題 36.....	130
第 19 講	完了時称	131
102.	完了時称とは?.....	131
103.	完了形の構成と, 完了文の構造	134
	例題 37.....	136
104.	sein 支配と haben 支配	137
	例題 38.....	138
105.	完了時称の用法における英独の相違	139
106.	受働の完了時称	140
107.	話法助動詞の完了時称	140
第 20 講	zu を伴う不定句	142
108.	不定句	142

109.	zu を伴う不定句.....	143
	例題 39.....	145
110.	um, ohne, statt, anstatt と zu+不定句	147
	例題 40.....	147
第 21 講	再帰動詞	149
111.	再帰動詞とは?.....	149
112.	再帰代名詞	152
	例題 41.....	154
113.	三格支配の再帰動詞および再帰的熟語	155
	例題 42.....	157
第 22 講	比較級と最高級	158
114.	比較級・最高級の形	158
	例題 43.....	159
115.	最高級の述語的用法	160
116.	副詞の最高級	162
	例題 44.....	163
第 23 講	形容詞の名詞化	164
117.	形容詞の名詞化とは?.....	164
118.	名詞を略する場合とは違う	165
	例題 45.....	165
119.	Das Wahre などについて	167
	例題 46.....	167
120.	etwas Besonderes などについて	168
	例題 47.....	169
第 24 講	非人称動詞	171
121.	Es regnet (<i>it rains</i>) など.....	171
122.	Es hungert mich (<i>I am hungry</i>) など.....	172
123.	Es gibt について	172
	例題 48.....	173
124.	非人称主語 es について	173
	例題 49.....	175
125.	文の非人称化	176
	例題 50.....	176
第 25 講	命令法	178

126.	親称二人称の命令法	178
	例題 51.....	179
127.	その他の命令形	180
第 26 講	接続法の形	182
128.	直接法と接続法との区別	182
129.	接続法には二種の形あり	182
130.	第一式接続法の作り方	183
131.	第二式接続法の作り方	185
132.	接続法の用法	187
第 27 講	接続法の用法 (1) 間接話法	188
133.	間接話法とは?.....	188
	例題 52.....	190
134.	間接話法余録	191
第 28 講	接続法の用法 (2) 要求話法	193
135.	要求話法とは?.....	193
	例題 53.....	194
第 29 講	接続法の用法 (3) 約束話法	196
136.	約束話法とは?.....	196
137.	約束話法の構文	198
	例題 54.....	200
138.	前提部または結論部の独立用法	201
139.	Als ob について.....	202
	例題 55.....	204
第 30 講	数 詞.....	205
140.	基 数	205
141.	序 数	207
付 録	不規則動詞表	209

基礎入門編

第1講 字母と字体

1. ラテン体とドイツ体との区別

ドイツ語というとな誰でもすぐに考えるのは、例のクシャクシャしたひげ文字です。あのひげ文字は、ドイツ体といって、ドイツ語特有の字体です。けれども、ドイツ語は必ずドイツ体で書いたり印刷したりするというのではなく、その外に、英語と同じ式の字体、すなわちラテン体というの也有るのです。

では、どちらが一般的かというとな、これはちょっと容易には断言できません。ドイツの大衆にとつては、あのクシャクシャしたドイツ字体の方がむしろ親しまれていますが、国際的には、やはり万国的なラテン体の方が歓迎されます。通俗的な書物はすべてドイツ字体を用いているが、学問書はすべてラテン体で印刷してある、といったように。要するにドイツ字体の方は「通俗」で、ラテン体の方は「ハイカラ」だと思えばいいでしょう。

では、新たにドイツ語を学ぶ人達としては、どちらを用いて行けばよいかというとな、これは、一つは趣味の問題にもなりましようが、結局やはり一番とつつきやすいラテン体の方を用いて行くのが自然ではありますまいか？本書では、ラテン体を用いて行きます。

2. 活字と筆書体

活字の外に、ペンで書く際に用いる書体があります。これは英語の場合と同じです。ドイツ字の方の筆書体は、よほど練習しないと書けませんが、ラテン体の方は、大体英語と同じですから、改めて練習する必要がなく、この点からいっても、ラテン体を用いる方が初学者には便利です。

もつとも、詳しい事を言うとなすれば、同じラテン体でも、英米人の書く書体とドイツ人のとは、少し癖が違ひます。けれども、そんな微妙なことは初学者には大した関係はありますまい。

3. 大文字と小文字

大文字と小文字との二種があることは、これも英語と同じです。ただし、ドイツ語では、文章の途中でも大文字を用いることが多いので（名詞の最初の文字はすべて大

文字で書きますから), 大文字は英語より多く用いるわけです。

4. 字母 (アルファベット)

字母の名前が、英語のエー、ビー、シーとは少し様子がちがっています。まあ大体次の字母表のかな通りに覚えておけば当分間に合います。元来の字母 (A から Z ま で) 以外に、表の後部にいろんな補足的なものがついていますが、これらは発音の部 で説明します。

字母の名前だけは最初によく覚えてください。ドイツ語を相当やった人までが、い つまでも E を「イー」と言ったり A を「エー」と言ったりするのを見受けますが、 これはあんまりほめたことではありません。『ヘーゲルという名はどうつづりますか?』 としかかれて、『ハー・エー・ゲー・エー・エル (Hegel) です』と教えると、Hagal な どというトンチンカンなつづり方をするのには、よく出くわします。

英語は、「エイ」、「オウ」などと言いますが、ドイツ語では日本語通りの「エー」、 「オー」で、決しておしまいの方が「イ」や「ウ」にはなりません。

字 母 と 字 体

Deutsche Schrift (ドイツ字体)		Lateinschrift (ラテン字体)		Benennung (唱え方)	
A	a	A	a	ʔa:	アー
B	b	B	b	be:	ベー
C	c	C	c	tse:	ツェー
D	d	D	d	de:	デー
E	e	E	e	ʔe:	エー
F	f	F	f	ʔɛf	エフ
G	g	G	g	ge:	ゲー
H	h	H	h	ha:	ハー
I	i	I	i	ʔi:	イー
J	j	J	j	jɔt	ヨット
K	k	K	k	ka:	カー
L	l	L	l	ʔɛl	エル
M	m	M	m	ʔɛm	エム
N	n	N	n	ʔɛn	エン
O	o	O	o	ʔo:	オー
P	p	P	p	pe:	ペー
Q	q	Q	q	ku:	クー
R	r	R	r	ʔɛr	エル
S	f, s	S	s	ʔɛs	エス

Ƨ	t	T	t	te:	テ ー
U	u	U	u	ʔu:	ウ ー
Ƴ	y	V	v	faũ	フ ァ オ
Ƴ	w	W	w	ve:	ヴ ェ ー
Ƨ	x	X	x	ʔiks	イ ッ ク ス
Ƴ	y	Y	y	[ʔy'psi:lɔn] /ʔypsi'lɔn	ユ プ シ ロ ン
Ƴ	z	Z	z	tsɛt	ツ ェ ッ ト

留 意 す べ き 複 合 形

Ƨh	ch	Ch	ch	tse: ha:	ツ ェ ー ・ ハ ー
Ƨh	sch	Sch	sch	ʔɛs tse: ha:	エ ス ・ ツ ェ ー ・ ハ ー
—	ck	—	ck	tse: ka:	ツ ェ ー ・ カ ー
—	ß	—,ß	ss	ʔɛs tsɛt	エ ス ・ ツ ェ ッ ト
—	tz	—	tz	te: tsɛt	テ ー ・ ツ ェ ッ ト
Ƨt	st	St	st	ʔɛs te:	エ ス ・ テ ー
—	dt	—	dt	de: te:	デ ー ・ テ ー

第2講 発音の要点

5. 一般的注意

口から耳へと伝える教室の講義ではなく、眼で覚える紙上の説明のことゆえ、これからの説明は一言一句に注意して読んでいただかねばなりません。

ドイツ語の発音は、英・仏語などに比べると、はるかにやさしいという定評があります。これはなるほど、その通りで、たとえば、英語を日本の仮名を頼りに覚えたところで殆んど実用価値はありません。仏語もそうです。ところがドイツ語は、ふりがなで発音を習っても、ある程度までは用が足ります。それゆえ、本書においては、当分の間はふりがなで発音を示してゆきます。(けれども、ふりがなそのものの読み方については、この発音の部で、よく注意を覚えておいていただかねばなりません。)

万国共通の音標文字は、この発音の部において、一応の説明を試みることにしましたが、詳しい事は初歩の講義には向きませんから省きます。

6. ドイツ語の発音はローマ字式である

何時何分という『分』は、英語では *minute* と書いて、これを【ミニット】あるいは【メネット】、あるいはその中間を発音する。『十分間』はテン・メネツ (*ten minutes*) です。これを【テン・ミニュッツ】などと発音するのは、眼からはいった日本式発音で、耳からはいった本当の発音ではありません。ところがその同じ Minute は、ドイツ語では【ミヌーテ】と読みます。

literature (文学) という英語は、【リタリチャ】と読みます。*temperature* (温度) は【テンプラチャ】、または【テンプリチャ】です。ところがドイツ語は、Temperatur 【テムペラトゥール】、Literatur 【リテラトゥール】です。

要するに、ドイツ語では、読まない字は一字もはいつていません。書かれてある字は、馬鹿正直に、みんな読むのです。しかも、ローマ字のようによむのです。たとえば「くれ!」はローマ字では *kure* と書きますが、これをまさか【キューア】などと読む人はいないでしょう。ドイツ語もちょうどその通りと思ってください。なまじっか英語式の読み方が混入するのが一番いけません。

ドイツ語	音標	意味	英語
Name ナーメ	['na:mə]	名称	<i>name</i> ネイム

Garten ガルテン	['gartən]	庭	<i>garden</i> ガードゥン
Bibel ビーベル	['bi:bəl]	聖書	<i>Bible</i> バイブル
Religion レリギオーン	[re·li·gī'o:n]	宗教	<i>religion</i> リリチュン
Butter ブッテル	['bʊtər]	バター	<i>butter</i> バター
Atom アトム	[ʔa·'to:m]	原子	<i>atom</i> エタム

こうして英語とドイツ語とを照らし合わせて見ると、とにかく英語という奴は、とても発音のむずかしい、癖のある変な言葉だということがわかります。それに反してドイツ語の発音のいかに易しく、素直で、馬鹿正直なことよ。とにかくドイツ語の発音は読んで字の如く、英語の発音は読んで字の如からず——ドイツ語は書いてある通りに読む、英語は書いてない通りに読むと言っても過言ではありませんまい。

**力点(アクセント)
の位置に注意せよ**

ふりがなを読む際に、ただ一つだけ、非常に注意していただきたいのは、これは英語でも非常にやかましく言うアクセント(力点、強声)の位置です。すなわち、力の入れどころです。たとえば Garten [ガルテン] なら、「ガ」のところに力を入れて発音しなければなりません。

「ガ」に力を入れるというのは、ふりがなの読み方をいったので、詳しく言うと Gar というつづりの方を ten というつづりよりも強く発音するというわけです。つづりという奴は、いわば語を構成する細胞のようなもので、たとえば日本語の *wata-kushi* は、字を数えると、九つの活字から成っているように見えますが、発音法から言うと、*wa*, *ta*, *ku*, *shi* という四つのつづりから成っているように、ドイツ語の Garten も、Gar, ten という二個のつづりから成っているのです。決して Ga と r と te と n との四つに分けることはできません。つづりという以上は、必ず母音を含んでいなければならないというのが原則です。(日本語では「天」=te-n, のように、n だけが一つの独立したつづりとして発音されますが、こんなのは珍しい例外現象です。)

人間の身体は何から構成されているか? こう問われて、「それは炭素や窒素や酸素や水素などから構成されている」と答えたり、あるいは「原子から成っている」と答えたりするのは、誤った答ではないが、本当に正しい答ではありません。正しく言うならば、人体は細胞から成っているのです。——それと同様、単語は何から成っているか? と問われて、それは字から成っていると答えたり、あるいは縦の棒や横の棒や襷や・や・から成っている、などと答えるのは、間違った答ではないが、トンチンカンな答です。単語はつづりから構成されている、と答えなければ有意義な答ではあり

ません。——ドイツの医学者 Virchow [フィルヒョー] は、あらゆる有機体はすべて細胞 (Zelle [ツェルレ], 英語: *cell* [セル]) という生きた単位から成っていることを発見して生物学界に一大進歩をもたらしましたが、みなさんも、語を構成する生きた単位は字ではなくてつづり (Silbe [シルベ], 英語: *syllable* [シラブル]) であるという認識をはっきりさせて、語学的に一大進歩を遂げてください。

つづりについての講釈が長くなりましたが、これは力点の位置という事を正確に考えんがための基礎だからです。そこで、このつづりという単位を念頭に置きながらアクセントの位置を考えると、Garten の力点が「ガ」の所にあるというのは、本当は正しい言い方ではありません。本当は「ガル」にあるというべきところでしょう。

けれども、Gar というつづりの内部に立ち入って、なおも詳しく観察しますというと、たとえば細胞の内部には核というものがあって、その周囲に原形質があるのと同様に、つづりというものにも「母音」(すなわち、Gar の a) という核があって、その前後に子音 (前の G と、後の r) という原形質が付着していることが発見されます。そして、アクセントは、その中心たる母音に重心を置いているのですから、gar のアクセントの中心は a にあるのです。ところが「ガル」というかなでは、アという部分は特に一つの活字を成していないで、g という音と一体になって「ガ」という不可分の一字を成している。かるが故に、このガという一字を特に肉太文字で印刷してアクセントの詳しい位置を示して行くというのは、すこぶる合理的な、しかも実用的な方法ではありますまいか?

ふりがなという奴は、とかく軽蔑されがちなものですが、アクセントという見地からは、この通り非常に便利なものです。英語の *snow* [スノウ] はドイツ語の Schnee [シュネー] ですが、こうした単細胞動物、すなわち単綴語になると、アクセントはつづりにあるのだからといって、たとえば Schneeball (英語: *snowball*) 「雪つぶて、雪球」を [シュネーバル] などと示したら、初学者は「シュ」の方に力を入れるのか、「ネ」の方に力を入れるのか、わからなくなってしまうでしょう。それよりは [シュネーバル] と示した方が、実際に近い音が出るのではないのでしょうか。それゆえ本書では、時にはつづりの問題には関係なくアクセントの肉太がなを用いて行きます。

7. 音標文字について

次に音標文字について説明します。音標文字は各国語に共通ですが、みなさんはおそらく英語の場合に出て来る音標だけしかご存じないでしょう。ドイツ語の発音を示すには、英語の場合に出て来る音標だけでは間に合いませんから、多少目新しい標字を覚えなければなりません。それから、英語の方でせつかく苦心してお覚えになった Δ とか $\ae$ とか θ とかいったような標字は、ドイツ語ではいらなくなります。

まず一番肝心の母音のアイウエオについて述べましょう。

(1) 「ア」音は a の一種しかない

a という標字は、日本語の「ア」とちょっともちがいません。英語には、[ア]といっても a や æ や ʌ やの区別があって、初学者のみならず、ヘボ教師たちの頭痛の種になっていますが、ドイツ語はその点、すこぶる日本人向きで、ヘボ教師の第七天国、初学者の極楽浄土です。

もっとも、詳しくいうと、英語の *butter* は [バター] であるように、ドイツ語の *Butter* [ブッテル] も、実際的には殆んど英語の [ター] と同じように [ブッター] と発音します。そうすると、[ア] に相当するものには a の外に更に ʌ があるということになってきますが、これはまた改めて述べ直します。

(2) 「イ」音には i と ɪ の二種がある

i の方は、唇をきつく一文字に引きしめて発音する「イ」ですが、ɪ の方は、唇を自然の位置にしたまま発音して、ほとんど「エ」のように聞こえる、あいまいな「イ」です。たとえば、子供が相手を馬鹿にするように顔をゆがめて「イイイ!」と言う際には、模範的な i を発音します。それに反して、英人が *minutes* を [ミニツ] あるいは [メネツ] と発音する際には、これは明らかに ɪ を発音するのです。英語の辞書を見ると *minutes* は ['minits] と、i で表わしてあるようですが、あれは発音の理想を表わしたもので、実際はむしろ ɪ を発音するのです。

洋犬のことを「カメ犬」と申しますが、これは横浜あたりの米人が *come in!* ([カミン] あるいは [カメン]!) と言って愛犬を部屋へ呼び入れるのをコックさんか誰かが片耳に挟んで覚えたものらしい。これを神犬と聞かないで亀犬と聞いたのは、決してコックさんの聞き違いではありません。英語では i を ɪ と発音することが多いという何よりの証拠です。i を発音するには唇を引き締めて、唇の左右の端が、ずっと左右へはなれて、口が長い一文字にならなければならないのですが、そんな事をしているのは邪魔くさいから、いい加減なところで間に合わせると ɪ になってしまうのです。

わたしの田舎は埼玉ですが、埼玉の人は池袋を「エゲブグロ」、金を「ゼネ」という。品の悪いことこの上なし。エゲガミ(池上)の本門寺でゼネを盗んで来たらエゲブグロのアネキにエゲン(意見)されちゃった、こりゃエゲネエ! と聞くとまるで無茶みたいです。本人はイをイと言っているつもりなので、ただそのイが ɪ のようになってしまっただけです。

これで i と ɪ との区別はよくわかったでしょう。

ドイツ語では、ɪ の方は、「イッ」の際、その他イを短かく詰めて発音する際にのみ用い、その他の場合には(すなわちイーと長く伸びたり、あるいは日本語の「今」i-ma の i の如く、詰まりもせず伸びもしない普通の場合には) i を用います。

たとえば *Bibel* [ビーベル] の i は長いから ['bi:bəl] と表わしますが、*Nickel* [ニッケル] (金属の名) の i は短いから ['nikəl] と表わします。['nikəl] という音標は、

ちょっと見ると [ニッ] の [ッ] に相当する記号がないから、まるで [ニケル] とでも読みそうに見えるかも知れませんが、もし [ニケル] であるとしたら ['ni:kəl] でなくてはなりません。すなわち [ニッ] でも [ニー] でもない普通のニには、[:] という半長音符を要するのです。[:] の方は長音符です。下記の区別をよく記憶すること(ドイツ語ではなく、一般的に言ってです):

ni:	または	ni:	「兄さん」の「にい」
ni'	または	ni'	「荷」という「に」
ni	または	ni	「にッと笑う」の「にッ」

ただし ni と ni' は、もっと詳しく言うならば「ニッ」ではなくて、「ニッ」の ッを除いた「ニ」です。

そこで、音標文字には、長音符と半長音符はあるが短音符というものは無い、何等の符をも伴わないという事がとりも直さず短音の印なのである、という事を記憶しておいて下さい。

同時に、上に掲げた三行の表において、今までに述べた事と照らし合わせて、次の事実注目して下さい。すなわち、ドイツ語には [ni:] は存在するが [ni:] は存在しない、また [ni] というのはあるが [ni] というのは無い、というこの点です。

i の方は唇を引き締めて発音するから閉音の i, i の方は唇がたるんだまま、すなわち口を半ば開けたまま発音するから開音の i と呼びます。

(3) 「ウ」音には u と u の二種がある

ウの音にも、開音と閉音との区別があつて、這般(はん)の関係は i の場合と

全然同様です。前にあげた単語表の中の Butter ([ブッテル] または普通には [ブッター]) の標音を見ると ['butər] となっていて、ウの所に u という妙な音標が用いてあるのは、これが開音のウです。唇を特に引きしめたり尖らしたりしないで、ごくあいまいに発音するウで、ウでもなければオでもない、ウとオの中間です。

閉音の u は u で表わします。この方は、唇をうんとつぼめて前の方へ突き出しながら鋭く発音するウです。この u を発音する時には、口はまるでタコ入道の口のようにになります。たとえば「宜しい!」ということを gut [グート]! と言いますが(英語の good), ドイツ人が小さな声で gut! と返事するときには、たとえ声ははっきりきこえなくても、唇がキュッと尖るので gut! と言ったのだという事が眼で見てわかります。u の方だったら、唇は眼に見えるほど動かないはずです。

以上、Butter と gut の二例でわかる通り、u は必ず長音 [u:] で、u は必ず短音 [u] です。(もちろん半長音も u' です、たとえば化学でいうメタン、エタン、プロパン、ブタンのブタンは Butan [ブターン] ですが、その音標は [bu:'ta:n] です。)

(4) 「オ」音には o と o との二種がある

オも同様に、長つづりのオーは必ず閉音で、音標は [o:], 口を尖らして、

おちよぼ口に引きしめて鋭く発音します。Atom [アトム] (原子) の -tom がそれです。それに反して、短音のオは、e を逆にした o で表わし、その発音は、いわばオとアの中間音で、口を普通の自然な形にしたまま、ごくあいまいにオと言うつもりで発音します。たとえば Post (ポスト, 郵便) [post] など。英語では郵便は [ポウスト] (post) で、つづりは同じでも発音はだいぶちがっています。

(5) 「エ」音には e (閉音) と ε (開音) とのほかに、更に œ (咬音) というものがある

「エ」も、長音エー [e:] の方は、口をうんと引きしめて、舌の表面を平べっちゃくして、口の中の空間を狭くして発音します。従って、少し度を過ぎて力強く発音すると、ほとんど「イー」のように聞こえます。ドイツ人の発音を聞いていると ich lebe [イヒ レーベ] (英語の *I live*) が、ほとんど ich liebe [イヒ リーベ] (英語の *I love*) のように聞こえるという事は、初学者のよく言う事です。それは lebe [レーベ] の le- は長く引く「エー」だから、[ˈle:bə] で、閉音の「エー」であるという事実からくる当然の現象で、不思議でも何でもないのです。

いったい開音と閉音とを比べると、どの母音においても、日本人は閉音の方が不得手らしい。これは、日本人の発音法には、なるべく口や唇や舌などをハッキリと動かさずにいい加減に発音するという癖があるからです。閉音の e は、殊に日本人には不向きと見えます。「エ」といえば、我々はすべて ε (開音のエ) だと思っているので、e という音があることを知らないでいるのです。しかし、ただ一つだけ、明らかに [e:] を発音する場合があります。それは、たとえば、講談師などが、高座から、エヘンと一つ咳払いをしたのち、さておもむろに「エー、本日は……」などと気取った口調で話し出す際の「エー」です。この「エー」は、普通の「エー」とは違って、鋭く引き締まっておつに取りすましている。ほとんど「イー、本日は……」と聞こえる。あれが閉音の e です。

開音の ε の方は、殊更説明するまでもなく、日本語通りの、唇が弛んで口腔のだらしなく開いた普通の「エ」です。彼女に向かって「あなた僕が好きですか?」と問うた際、彼女が眼を伏せてうなずきながらおっしゃる「エ」です。

他の母音とは違って、「エ」という母音には œ という第三の標音があります。これは英語にもある音標で、e を逆さにした活字だから、*inverted e* [インヴァーティッド・イー] (逆立ちした e) といって、英語をやる人にはおなじみの符号です。

英語をやる人は、この œ はあいまいな「アー」だと思っている、ドイツ語をやる人は、œ はあいまいな「エ」だと思っている、フランス語をやる人は、œ はあいまいな「ウ」だと思っている。では誰の意見が最も正しいかというそれはたとえば、私も彼女が私に気があると思っているが、貴君もそう思っており、彼氏も彼氏でそう思っているのと同様、どれも正しくもあり正しくもないのです。責任の一部は彼女の方

にもあるわけで、音標としての $\textcircled{\text{a}}$ は、同じ $\textcircled{\text{a}}$ でも、英語ではやや（ややですよ、そうハッキリとではありません、彼女は利口だから引っ込みのつかなくなるような言動は致しません）「アー」に近い、ドイツ語ではやや「エ」に近い、フランス語ではやや「ウ」に近いのです。これは必ずしも各国語の我田引水論ではありません、事実がそのようなのです。けれども英の「ア」と独の「エ」と仏の「ウ」との間には、ほとんど彼女の微笑と嘲笑と憫笑との間に存する区別ぐらいしかありません。彼女の無表情な顔を五六年も研究した者でないと見分けることができません。

譬話(たとひ)はよして实际的に述べましょう。 $\textcircled{\text{a}}$ は、口全体をごく自然な恰好のままにして、唇も動かさず、舌も動かさず、口腔も動かさず、何一つ動かさないで、ただ喉だけで声帯を顫わした際に生ずるある種の陰気な母音です。たとえば、今ようやく寝つきかけてウトウトしている人に向かって、もしもし、と言って話しかけてごらん下さい。「あ？」とか「え？」とか「う？」とか何とか言って、変な返事をするでしょう。眼がさめて口を固く結んでいる際だと、鼻で返事するから「ん？」または「ふん？」（ドイツ語では hm? と書く）となるころでしょうが、眠りかけると大抵口の辺の筋肉がゆるんで締りがなくなるから口は少しばかり開いている（口という奴は少し開いているのが自然の姿勢です）ので、「ん？」とはならないで $[\text{a}]$ となります。友人に揺り起こされると「あ？」と英式で答え、美しい人に揺り起こされると独式に「え？」と答え、相手が目下の者を見ると仏式に「う？」と答えるという横着者もいるそうですが、なにしろ口を少しでも動かすのが邪魔くさい折のことですから、「ア」と言い「エ」と言い「ウ」と言い、そう大した区別のあるわけがありません。

あるいはまた、理髪店へ髭剃りに行って、髭を剃っている最中を想像してごらん下さい。散髪屋の親爺という奴には概しておしゃべりが多い。人の頬ぺたに剃刀をあてながら、『どうでしょう旦那、このインフレはいったいどうなるでしょう?』なんてきく。こっちはインフレどころの騒ぎじゃない、ちょっとでも口を利いたら頬ぺたに流血の惨事がしゅったいする場合の事だから、インフレ問題となると何か言わねば承知せぬ有名な一言居士なんだけど、この際は隠忍自重して、まあ『そうですなあ……』 $[\text{s}\text{a}:\text{d}\text{a}:\text{s}\text{a}:\text{n}\text{a}:]$ ぐらいのところでお茶を濁しておく。はっきり $[\text{s}\text{a}:\text{d}\text{e}:\text{s}\text{u}:\text{n}\text{a}:]$ と言ったり、いわんや閉音で $[\text{s}\text{a}:\text{d}\text{e}:\text{s}\text{u}:\text{n}\text{a}:]$ などとやった日には、絆創膏ぐらいでは片づかない事になる。

以上が $\textcircled{\text{a}}$ の音を理解していただくための示唆です。詳しい事は紙上では到底説明不可能です。以上の説明でわからない人は、まず $\textcircled{\text{a}}$ はごくあいまいな、殆んど「ウ」か「オ」か「ア」のように聞こえる「エ」だと思えばよろしい。

実例は Name, Garten, Bibel などの e で、力点のあるつづりの後方では e は大抵 $\textcircled{\text{a}}$ と発音するのです。（力点あるつづりの前で $\textcircled{\text{a}}$ と発音するのは、be-, ge- の二つの前つづりだけです。）

(6) 爆発母音符 ʔ について

さきに掲げた Atom (原子) の音標は [ʔaˈto:m] ですが、一番初めには [ʔ] という変な印がついています。これはアクセント符ではありません。アクセント符は、t の前の [ˈ] がそれです。

この、ちょっと (ʔ) の下点を除いたような [ʔ] という印は、次に来る母音を爆発的に、ポンと弾き出すように発音せよという印です。たとえば軽く咳をする時のようにです。

いったいドイツ人は、一番最初に来る母音を、まるで咳をするように喉から弾き出す癖があります。ですから、たとえば ein Atom [アイン アトーム] (一個の原子) という時に、英語や仏語のように n と A とを繋いで na のようにし、[アイナトーム] などとはやりません。これを *liaison* [リエーゾン]、繋音、又は連結発音と言いますが、繋音という現象はドイツ語には殆んどなく、一単語の最初に来る母音を、その前の子音と結ぶということは、建前として、絶対にやらない事になっています。なぜかという、それはドイツ語の語頭の母音は、すべて爆発的に発音するからで、その印が [ʔ] なのです。

この [ʔ] は、Atom (原子) とか Ideal [イデアール] (理想) とか Uranium [ウラニウム] (ウラニウム) とか、Esperanto [エスペラントー] (エスペラント) とか、Osmium [オスミウム] (オスミウム) とか、とにかく母音で始まる語には必ずつけるにきまっているのですから、あんまりきまりきったことゆえ、時には省略することもあります。たとえば Ideal が [iˈdeːʔa:l] と表わしてあるからといって、この語は例外か、などと思てはいけません。例外は絶対にないのですから。

(7) 力点符 [ˈ] について

力点符は、力点の位置するつづりの『前』につけます。[アトーム] なら、トの前にです [ʔaˈto:m]。後につけて [ʔaːto:mˈ] などとはしません。

(8) ア音には開音閉音の別なし

母音はすべて長ければ閉音、短かければ開音ですが、ただ一つア音のみは長くても短かくても同じアで、音標は [aː, aʰ, a] です。

8. 無声の h

ドイツ語の発音は、原則としてはローマ字の通りで、読まない字は一字もないと申しましたが、そのただ一つの例外は、母音の次に来る h [ハー] です。

Kuh クー	[ku:]	牝牛	英語 cow
Lohn ローン	[lo:n]	賃金	(loan)

Mahl マール	[ma:l]	食事	meal
mehr メール	[me:r]	より多く, もっと	more
nahe ナーエ	[ˈna:ə]	近い	near

無声の h は、つまり完全に標音の [:] にあたるわけです。こんな h は実は無用の長物とも言うべきもので、Kuh は Ku と書いてもやはり [クー] と読むはずなのですが、永年の習慣で、やはり h がないと、ドイツ人の眼が承知しないと言うわけですな。

9. ei はアイ [ai] と読む

ドイツ語の発音は、ほぼローマ字を読むが如し、と申しましたが、それには若干の例外があります。これから項目に分けて、ローマ字通りに行かない点を順次述べて行きます。

まず母音から述べると、ei という複母音は [アイ] と発音します。

Eis アイス	[ˈais]	氷	ice
Heim ハイム	[haim]	自宅	home
frei フライ	[frei]	自由な	free
nein! ナイン	[nain]	否	no!
Heine ハイネ	[ˈhainə]	(詩人の名)	Heine

10. ie はイー [i:] と読む

前項の ei と混同しないようにすること。

Liebe リーベ	[ˈli:bə]	愛	love
Miene ミーネ	[ˈmi:nə]	顔つき	mien
Bier ビール	[bi:r]	ビール	beer
Knie クニー	[kni:]	膝	knee
hier ヒール	[hi:r]	ここに	here

Knie の例でわかる通り、n の前の k は、英語では読みませんが、ドイツ語にはサ

イレントなし。ただ無声の h のみが唯一の例外です。

11. eu はオイ [ɔy] と読む

ɔy という音標は、ほんとうは、開音オと、後で改めて紹介するはずの ü (音標は y) との結合で、やかましく言えばまず [オユー] と言ったようなものであることを示します。しかしそれは一つの理想論で、実際的にはまあ [ɔi] あるいは [ɔɪ] と思って構いません。(音標はドイツ語音標発音辞典の権威 Viëtor によって ɔy を用いて行きます。)

Heu ホイ	[hɔy]	乾草	hay
Feuer フョイエル	[ˈfɔyər]	火	fire
neu ノイ	[nɔy]	新たな	new
Europa オイローパー	[ˈɔyˈroːpaː]	ヨーロッパ	Europe
Leutnant ロイトナント	[ˈlɔytnant]	少尉	(lieutenant)

独英は、語は同語でも、用法意味は必ずしも一致しません。ドイツでは、陸軍で Leutnant といえば少尉ですが、英国では lieutenant は中尉である、など。

ついでに独英の関係について一言しておきますが、今までの例を見ていると、ドイツ語の単語と英語の単語とは、非常によく似ているから、こんな調子なら英語さえ知っていればドイツ語は大抵察しがつくだろう……などと高をくくってはいけません。今までは単に諸君の興味を刺戟するために、わざわざ似ている単語ばかりを持って来たので、これからはそうは行きません。それに、今は発音を研究しているのですから、意味などはどうでもよい、別に覚えていただかなくても結構です。では、これから独英の対照は煩わしいから止すことにします。

12. 変音 (ä, ö, ü) について

ドイツ語には ä, ö, ü という三つの特殊な活字があります。字母の表には出していませんでしたが、実はこの三つは立派な字母なので、タイプライターを持っていたても、英文用のものだと、この三つが無いためにドイツ文を打つのに大変暇がかかります。やむを得なければ ä の代りに ae, ö の代りに oe, ü の代りに ue を用いてもよい事になっていますが、それは結局まに合わせで、ドイツ本国では殆んど用いません。

字母だから、名称も覚えなければなりません。ä は「変音アー」(あるいはドイツ語で a-Umlaut [アー・ウムラウト]), ö は「変音オー」(ドイツ語では o-Umlaut [オ

ー・ウムラウト]), ü は「変音ウー」(ドイツ語では u-Umlaut [ウー・ウムラウト]) と呼びます。上のチョンチョンは変音符と言います。

念のために断わっておきますが, この変音符は, 決して発音を教えるための便宜上の記号ではありません(たとえば英語や, ロシヤ語などの)。だから決して省略してはならないのです。つまり日本語の濁音符のチョンチョンみたいなものです。

それから, 母音の上にチョンチョンを打つのは, 時とすると分離符のつもりのこともあって, これは全然別物ですからはきちがえないようにしましょう。たとえば, 本書の万国発音音標は, 大体, Viëtor 氏の発音辞典によっていますが, この[フィートル]という人は, 発音のやかましい人だけあって, 自分の名を「フィートル」などと間違って発音されては発音の権威者の顔にかかわるとでも思ったのでしょう, e の上に分離符をつけて, これでも「フィートル」かとばかり, 大見得を切っています。要するに, ドイツ語には, 変音は ä, ö, ü の三つだけで, e の上にチョンチョンがあったらそれはこの母音を離して読めという分離符です。

(1) ä はエー [ɛ:], エ [ɛ'], [ɛ] と発音する

Bär [bɛ:r] 熊
ベール

Käfer [ˈkɛ:fər] 甲虫
ケーフェル

まず ä ですが, これは [ɛ] ですから, 日本語の普通の「エ」です。

Träne [ˈtrɛ:nə] 涙
トレネ

Ärmel [ˈʔɛrməl] 袖
エルメル

ただし, 大文字の Ä だけは, なんなら Ae と書いてもよいことになっています。袖は Ärmel でも Aermel でもいいのです。これは特に覚えておかないと, Aermel を「アエルメル」などと読んで笑われたり, 辞書で Ae のところを探しても見つからなかったなんて滑稽な話が起ったりします。タイプライターを打つ時には, 殊にこの知識が必要で, 独文タイプライターでも, たとえ ä, ö, ü はあっても, Ä, Ö, Ü まで備えることは鍵盤政策がこれを許さないことが多いので, 大文字の変音は大抵ありませんから, A と打って, あとから鉛筆でチョンチョン打ったりなどしないで, Ae とやった方が綺麗です。

(2) ö は, ふりがなでは, 便宜上「エ」を以て表わす。

音標は, 閉音は [ø], 開音は [œ]

さて次の ö が相当の難物です。居眠りしかけていた人は, ちょっと冷たい水

で顔でも洗って来ること。

ö を発音するには, o を発音する時のように口をまるくしたままで, 舌だけは e を発音するのです。すなわち, 唇と口腔だけは o を発音し, 舌だけは e を発音します。そうすると, o と e とが渾然融合して, e といわんには余りにもうっとうしく, o といわんには余りにも平べったい, ある種の独特な響きが発します。これがすなわち ö の音です。

○を発音せんがためには、上歯列と下歯列との間が上下にぐっと開いて、同時に唇はまるくつぼんで前方へ突き出し、そのために両頬は凹みます。○という字はおそらくこの際の唇の形を写したものでしょう。○だけ発音する場合には、舌は自然な位置にあって、口腔の底に沈んでいます。ところが e を発音せんがためには、舌はぐっと上方へ隆起して上表面が平らに張りきらなくてはならない。ö は、つまり、○を発音する時のようなガラン洞を作っておいて、そのガラン洞の中で、舌をグイと天井まで押し上げるというわけです。

ö の代用として oe という書法が用いられるのもこのわけからで、○は口の姿勢を示し、e は舌の位置を示しているのです。

ドイツ古典文学中の第一人者と言われる、例の有名な Faust [ファオスト] の作者 Goethe [ゲーテ, 'gø:tə] の名は、ö を用いないで oe が用いてあります。過ぎし第二次世界大戦の戦犯第一人者として絞首刑になる前夜青酸カリを飲んで自殺した Göring [ゲーリング, 'gø:riŋ] は普通の ö を用いています。けれども発音は両方とも同じことです。

以上は閉音の ö, すなわち長く伸ばす際の ö について述べたのですが、短かい開音の ö は、それをごくあいまいに発音します。あいまいではあまりあいまいで、よくわからないかも知れませんが、もっと詳しく言うと、以上述べたような口恰好と舌の隆起とを、まさに始めんとする着手段階においてすぐに止めてしまうのです。すなわち、唇はまだ本当に前方へ突き出しきらないで途中でとまります。舌はまだ完全に上へ上りきらないで中腰のままでとまってしまいます。そうすると、口恰好からいっても、舌の位置からいっても、ほとんど ○ と変らない音が出来上ります。

あるいはこう言ってもよいでしょう。前に述べた、口の端を剃られている最中の話に戻りますが、理髪師が頬を剃りながら、『旦那、ドイツ語の開音の ö はいったいどう発音するのですか?』と言ってきいたと仮定しましょう。散髪屋がそんな事をきくのはおかしいが、しかし散髪屋は絶対にドイツ語をやらないと決めてしまう必要もないでしょうから、まあそう仮定してもよいでしょう。そうしたら貴君は、今剃刀のあたっている口の端なるべく動かないように ö を発音なさるに相違ない。そしたら必然的に ö の開音が出ます。

結論として、開音の ö [音標 œ] を定義すると、それは○の一種であって、ただし ø がかった ○ である、と言えよよろしいでしょう。

以上の説明に従って次の単語を大きな声で発音して見ること。

Bö [bø:] 突風
ベー

Öl, Oel [ʔø:l] 油
エール

Amöbe [ʔa'mø:bə] アミーバ
アメーベ

Flöte ['flø:tə] 笛
フレーテ

Körper ['kœrpər] 身体
ケルペル

Löffel ['lœfəl] 匙(し)
レップェル

Mörder ['mœrdər] 殺人者
メルデル

Hölle ['hœlə] 地獄
ヘルレ

Öl (油) を Oel と書いてもよいことは、ä について述べた通り。英語が oil [オイル] だからといって Oel を「オエル」などと読むべからず!

(3) ü は、ふりがなでは、便宜上「ユー」で表わす (閉音: y, 開音: ʏ)

ü につ
いては、

ö に関して述べたことがそのままあてはまります。u を発音する時のままの口恰好で、舌を「エー」あるいはむしろ「イー」を発音するごとく隆起せしめます。その結果として出てくる音は、ちょっと「イー」のようで、「イー」よりはやや陰にこもったうっとりしい音です。かなでは、「イー」で表わした方がむしろ実際に近いのですが、昔から「ユー」で表現する習慣があるので、本書ではかりに習慣に従っておきます。(たとえば戦犯裁判で有名になった Nürnberg [ニュルンベルク] などを、今更「ニルンベルク」などと言ったのでは、人が変に思うでしょうから。) それに、「イー」でも「ユー」でも、あたらずといえども.....近からざる点では、いずれも兄たり難く弟たり難きものがあるからです。

参考のために ü と「ユー」との差がどこにあるかを指摘しておきましょう。たとえば英語の you [ユー] を、yu..... と長く伸ばして発音してごらん下さい。そのおしまい頃にはどんな音になるでしょう? おしまいの頃は、もはや「ユー」の音ではなく、「ウー」になってしまいます。ka を長く伸ばせば最後に残るのは a のみであるように、you を長く伸ばせば最後は ou になってしまうのです。それは当然で、ka が k という子音と a という母音から成っている複合体であるごとく、「ユー」も y [標音: j] と ou [標音: u:] との結合にすぎないのです。——ところが ü は、子音と母音との二部分から成る結合物ではなく、それ自体が一つの単純なる母音ですから、いくら伸ばして発音してみても、決して ü 以外の音にはならないはずです。これを試金石にして、「ユー」にならないように ü を発音してみて下さい。むしろ「イー」に近くなるように。ただし唇だけは「ウー」の形にしたままで!

Tür [ty:r] 扉
テュール

Flügel ['fly:gəl] 翼
フリューゲル

müde ['my:də] 疲れた
ミューデ

früh [fry:] 早い
フリュー

Brücke ['brykə] 橋
ブリュッケ

Hütte ['hytə] 小屋
ヒュッテ

fünf [fynf] 5
フュンフ

dünn [dyn] 薄い
デュン

(4) ギリシア語系統の y は ü と同じ発音

ギリシア語系統と言ったところで、西洋語の観念の稀薄な人には、

よくわからないかも知れませんが、たとえば *Psychologie* [プシュヒヨロギー, psy-
ço·lo·'gi:] (英語: *psychology* [サイコラジイ]) 「心理学」とか何とかいったような、学
問的なむずかしい語だと思えばよいでしょう。前出の *Atom* や *Amöbe* などやはり
ギリシア語から来た語です。

西洋の大昔の古典語たるギリシア語とラテン語とは、たとえば日本語の半分近くが
漢語であるように、現代のヨーロッパ各国語の語彙の大部分を占めています。英語や
ドイツ語をやる人にとっては、このギリシア・ラテン両語は、たとえば仏教の経典を
読んだり論じたりする坊様にとっての漢語と梵語の如きものがあります。つまりギリ
シア語が梵語でラテン語が漢語というところですよ。坊主たる以上、往生とか止観とか
弘願とか法とか相とか空とかいう漢語がわからなければ仏教を論ずることはできな
い。しかしまた同時に菩提とか涅槃とか槃若とか三昧とかいったような、一見漢語の
ような恰好をしたサンスクリット語に対しても、少なくともそれがサンスクリットで
あること位は知っていなくてはならない。三昧というから、何か数が三つあって、ほ
んのりと昧いものだろう……などと思ったらとんだお笑草になります。同様に、現在
の西洋語には、ギリシア語から来た語や、ラテン語から来た語や、ギリシア語がラテ
ン化した語がたくさんあって、それらが多少見分けられるようにならないと、英語も
ドイツ語も完全にはわからないのです。(ひどくおどかすようですが。)

それはさておき、ギリシア系の中によく出て来る y は ü と同じに発音するという
事はドイツ語だけの特徴で、英語や仏語では「イー」と言っても、ドイツ語では ü
でなければなりません。音標の [y] や [ʏ] も、これから思いついたものでしょう。

Typhus ['ty:fus] チフス
テューフス

Dynamit [dy'na'mi:t] ダイナマイト
デュナミート

Gymnastik [gʏm'nastik] 体操
ギムナスティック

Lyrik ['ly:rik] 叙情詩
リューリック

英語や仏語から来た語の y は、英仏語通りに「イ」と発音します。たとえば私刑
に処する、制裁を加えることを英語で *lynch* [リンチ] すると言いますが、これがド
イツでも有名になって、非合法的な私的制裁を加えることを *lynchen* [リンチェン]
すると言います。これはギリシア語ではないから、[リェンチェン]とは言いません。

13. au はアウ、あるいはアオ

au は、ei や ie と同じく複母音ですが、これは分解通り a と u です。ところが、
力は a の方にはいるので、あとの u の方は、開音 [ʊ] に発音するので、開音の [ʊ]
は非常に「オ」に近いから、au はむしろ「アオー」ときこえます。またそのつもり

で発音した方がよろしい。英語の *ow* は明らかに「アウ」ですが、ドイツ語の *au* はむしろ「アオ」です。音標は [aʊ]。

Tau [taʊ] 露
タオ

Faust [faʊst] 拳
ファオスト

Maus [maʊs] 廿日鼠
マオス

Baum [baʊm] 樹
バオム

Auge [ʔaʊgə] 目
アオゲ

Braut [braʊt] 花嫁
ブラオト

その他 *ui* [ウイ], *ai* [アイ], *ia* [イア], *aa* [アー], *ee* [エー], *oo* [オー] など、分解通りの発音をする複母音は特に述べません。

14. äu は eu [オイ] と同発音

äu は、au の変音で、「オイ」と発音します。au の変音が äu になるということは、いずれ文法をやりだすとわかります。

Fräulein [ˈfroylain] 令嬢
フロイライン

träumen [ˈtroymən] 夢みる
トロイメン

Käufer [ˈkɔyfər] 買手
コイフェル

läuten [ˈlɔytən] 鳴らす
ロイテン

15. ch は a, o, u, au の次に来ると喉音 [音標: x]

母音は以上で終わって、さて子音です。まず *ch* という子音を研究しましょう。

ch ほどその国語によっていろいろに発音する子音はありません。*chi* と書くと英語では「チ」、仏語では「シ」、イタリア語では「キ」、ドイツ語では「ヒ」です。

ドイツ語の *ch* は、決して最初には来ません。必ず母音の次に来ます。(もともと *Christus* [クリストゥス]「キリスト」とか、*Chrom* [クローム]とかいったようなものもありますが、それらはすべてギリシア語です。)そこで *ach*, *och*, *uch*, *auch* の四つの場合のみについてまず述べましょう。というのは *a*, *o*, *u*, *au* 以外の母音、及び子音の次に来る時は音が違ってくるのです(次の第 16 項参照)。

たとえばドイツ語に *ach!* [アハ] という間投詞があります。これはため息をつく時の感嘆詞で、まあだいたい日本語の「いやはや」とか「いやはやどうも」に当たりますが、この *ach* は、かなでは仕方なしに「アハ」と表わしますが、このハは決して *ha* ではなく、それから *a* を取った *h* だけだと思えばだいたいあたります。すなわち、この *ch* は、単に喉の奥で空気がかすれる音だけを表現したものにほかなりません。そのつもりで、たとえばドイツのトーキーなどを見ていると、女が *ach!* という時の音は、ほとんど *ア!* としかきこえませんが、しずかな時にはその後になんと息のかす

れが洩れます。それがまたとても性的魅力があって……(以下削除)。要するに a, o, u, au の次の ch は喉と息との摩擦音です。ach の時は「アハ」、och は「オホ」、uch は「ウフ」、auch は「アオホ」と便宜上ふりがなをふっては置きますが、「ハ」や「ホ」や「フ」は要するに音響の描写であって、風音をサラサラといい、尻餅をペタンといい、太ったのをデップリというが如き程度の、いわば一種の約束です。しかし a の時は「ハ」というア音で、「オ」の時は「ホ」というオ音で描出するのには若干理由があります。それは、och ならば、o と言った後に、その o の口恰好をそのままに残して息をかすらすのです。——平行した例で註釈しますと、たとえば英語の *ink* を、近頃の人々は、正しいつもりでインクと言いますが、私達の頃にはインキと言ったものです。k は「ク」だ、「キ」なんて変だ、などと言うなかれ、それは笑う方がおかしい。インと言ったら、言った口は「イ」の恰好をしている。その恰好のままで k と喉の奥を弾いてごらんなさい、どうしたって「キ」みたいな音が出るじゃありませんか。それを、in と言った後に、わざわざ口恰好を u のように変えて、それから「ク」だなんて言うのは、だいいち英語の発音を知らない大馬鹿野郎のすることです。だから、「インク」は誤り、「インキ」が正しいのです。どうだ、モダンボーイ共!

アハ、オホ、ウフ、アオホについても同じ事が言えます。ついでに uch を「ウフ」と表わして「フ」を用いる事には、特にご諒解を求めています。この「フ」はまさか f のつもりではありません。

Dach [dax] 屋根
ダハ

machen ['maxən] 英: *make*
マッヘン

Koch [kox] 料理人
コホ

Knochen ['knɔxən] 骨
クノッヘン

Buch [bu:x] 書物
ブーフ

fluchen ['flu:xən] 呪う
フルーヘン

Bauch [baux] 腹
バオホ

tauchen ['tauxən] 浮ぶ
タオヘン

Nacht [naxt] 夜
ナハト

lachen ['laxən] 笑う
ラッヘン

Tochter ['tɔxtər] 娘
トホテル

kochen ['kɔxən] 煮る
コッヘン

Tuch [tu:x] 布
トゥーフ

Kuchen ['ku:xən] 菓子
クーヘン

Rauch [raux] 煙
ラオホ

rauchen ['rauxən] 喫煙する
ラオヘン

音標の [x] は、ロシア語から思いついた音標で、英語やドイツ語の [x] とは無関係で、クスではないからご注意ねがいます。教室に出るとき、Nacht (夜) の発音を、まあ念のためというので、辞典でしらべて、夜は「ナックスト」と発音する! と五六

十人の学生に教えてしまつて、あとで訂正するのに困つたという話もありますが、教師がそれでは困つたものです。一度信用をナクスト学生が相手にしなくなります。

教師といえは、教師仲間にも *machen* を [マッヒェン], *lachen* を [ラッヒェン] などと発音するヘボ教師がありますが、これは次の項の *ch* とはきちがえた失敗です。

16. *a, o, u, au* 以外の次に来る *ch* は舌音である [音標: ç]

a, o, u, au 以外というのは、単に *e* と *i* ばかりではありません。ä, ö, ü, *eu, ei, ie, äu* などの母音は申すに及ばず、子音 (*r, l, m, n* その他) が全部含まれているのですから、場合としてはむしろ最も多いということになるでしょう。

これらの場合には、*ch* は、音標では仏語でおなじみの [ç] をもって表わし、「ヒャヒュ、ヒョ」などの「ヒ」を発音します。ヒャー! と言っておどろく、この「ヒャー」は音標で表わせば [ça:] です。

Licht [liçt] 光
リヒト

Blech [bleç] ブリキ
ブレヒ

keuchen ['kœyçən] 喘ぐ
コイヒェン

Märchen ['mæ:rçən] 童話
メールヒェル

Köcher ['kœçər] 箪(さび)
ケッヒェル

Milch [mılç] 乳
ミルヒ

ich ['ɪç] 私
イヒ

Reich [raiç] 国
ライヒ

riechen ['ri:çən] 嗅ぐ
リーヒェン

lächeln ['læçəlɪn] 微笑む
レッヒェルン

Küche ['kyçə] 台所
キュッヒェ

Mönch [mœnç] 僧
メンヒ

以上のごとく、*ch* の発音は、その前に来る母音の如何によって二種類に分かれる、ということがわかりましたから、その見地から改めて日本語のハ行なるものを科学的に再検討してみると、次のような興味ある事実が発見されます：

ハ 行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
音標表示	ha'	çi'	fu'	he'	ho'
または:	(xa')			(xɛ')	(xo')

もちろん、この日本語の発音法に対しては、多少異論が出るかも知れません。たとえば「夫婦」と言わせて見ると、ある人は [fu:fu:], ある人は [hu:hu:], またある人は [xu:xu:], 大部分の人は *f* でもあり *h* でもあり *x* でもある日本独特のかすれ音を出しますが、私は、たとえば正式発音という理想論からして、以上の表を妥当と信ずる者です。

少し詳しくなりますが、ch に関する例外にもちょっと触れておきましょう。元来のドイツ語ではない、外来語（希・羅・伊・仏・英など）の中には、ch を k と読んだり、[シュ] と読んだり、その他いろんなことがあります。けれどもそれらは要するに例外ですから、出て来るたびにそのつど特別におぼえるに限ります。ギリシア語系のものは、k, x あるいはドイツ化して [ç] となり、語によって慣習がちがいます。

Chlor [klo:r] 塩素
クロール

Chrom [kro:m] クローム
クローム

Chorus ['ko:rus] コーラス
コールス

Chemie [çe:'mi:] 化学
ヒエミー

ついでに h の音と x の音との差に注目しましょう。x は息のかすれる音ですが、h は息そのものの音です。日本語の「ハ」や「ホ」は、そのどちらをも用いています。強ければ x となり、弱ければ h となるのです。

17. j の発音 [音標: j]

Japan (日本) は、英語では「ジャパン」、または「ジャペン」ですが、ドイツ語では [ヤーパン, 'ja:pan] です。j はつまり英語の y の発音で、ただ、強く発音するときには、やや [ç] に似た息のかすれを伴います。

Jacht [jaxt] ヨット
ヤハト

Jude ['ju:de] ユダヤ人
ユーデ

Jahr [ja:r] 年
ヤール

Jäger ['jæ:gər] 獵人
イエーゲル

18. w の発音 [音標: v]

w は英語では「ワ」とか「ウォ」とかいう発音ですが、ドイツ語の w は、むしろ英語の v で、音標もやはり [v] です。これは f の濁音ともいうべきもので、唇は f と同じようになります。詳しく言うならば、上歯列の前の方が、軽く下唇に接し、歯と唇との間隙からフーと息がかすれるというわけです。

かなでは、これを「ヴ」で表わす習慣があります。「ヴ」や「ヰ」や「ヱ」を用いる人もありますが、この方はあまりはやるに至っていないようです。

b のように発音してはいけません。ba, bo は、唇と唇とが接しますが、v (及び f) は歯と唇が接するのです。violin を [バイオリン] などというのは、そもそも v の音を知らない証拠です。

Welt [velt] 世界
ヴェルト

Wagen ['va:gən] 車
ヴァーゲン

Wort [vɔrt] 言葉
ヴォルト

Löwe ['lø:və] ライオン
レーヴェ

19. z の発音 [音標: ts]

z の発音は、「ツァツィツツェツォ」の「ツ」です。音標は英語やヘボン式ローマ字通り ts ですが、これは本当は何か一つの活字を用いた方がよさそうです。

「ツィ」(Zi) の際には特に「チ」にならぬようご注意ください。

それからドイツ語には、英語の *tw* に相当する *zw* の音がよく出てきます。

Zahl [tsa:l] 数
ツァール

Ziege ['tsi:gə] 山羊
ツィーゲ

Holz [holts] 木材
ホルツ

Kerze ['kertsə] ろうそく
ケルツェ

Zweck [tsvək] 目的
ツヴェック

zwei [tsvai] 2
ツヴァイ

20. tz の発音 [音標: ts]

tz は zz に相当します。すなわち z と同発音ですが、その前の母音が必ず短綴になるというのが特徴です。z が「ツ」とすれば tz は「ツツ」です。だから一語の最初には決して用いられません。

Blitz [blits] 電光
ブリッツ

Platz [plats] 場所
プラッツ

Katze ['katsə] 猫
カッツェ

Witz [vits] 洒落(は*)
ヴィッツ

21. ß の発音 [音標: s]

ローマ字の s に相当するドイツ語の子音 (すなわちサシスセソの子音) は ß です。これは字母の番外として、第一講の字母一覧表に出ています。

この ß という奴は、ドイツ語特有の活字で、名を「エス・ツェット」と呼びます。s と z とが合して出来た字だからです。

サ行の発音には s という字があるではないか、と考える人があるかも知れませんが、s は、後で改めて述べますが、濁音 (ザジズゼゾ) に発音することが多いので、特に清音サシスセソのために存在するのがこの ß です。

Fuß [fu:s] 足
フース

Fleiß [flais] 勤勉
フライス

grüßen ['gry:sən] 挨拶する
グリュースェン

beißen [baisən] 噛む
バイセン

私の苗字は関口ですが、これを Sekiguchi とつづると、無教育なドイツ人は「ゼキゲーヒー」と読むでしょう。「セキグチ」と読ませんがためには Bekigutschi とつづる必要があります。

一つ重要な注意: B の活字がない時 (タイプライターなど) には, B を ss で代用します。「エス・ツェット」という名だから sz とやりそうなものですが, それはごく稀で, 普通は ss ということになっています。Fuss, Fleiss, grüssen, beissen など。

B の活字は, 斜体 (イタリック) では β で, 下の方が長くなります。ただしギリシア語字母の β とはちがいます。 β は, α (アルファ) β (ベータ), γ (ガンマ) の β です。よく似ているから注意すること。

22. sch の発音 [音標: ʃ]

英語, ヘボン式ローマ字の sh はドイツ語では sch です。

Schule [ˈʃu:lə] 学校
シュール

Schrei [ˈʃrai] 叫び
シュライ

Wunsch [ˈvʊnʃ] 願い
ヴンシュ

Schweiß [ˈʃvaɪs] 汗
シュヴァイス

Schloß [ˈʃlɔs] 城
シュロス

Tasche [ˈtaʃə] ポケット
タッシュ

哲学者 Schopenhauer [ショーペンハオエル] の名を, 誰だったか, 英語の school からでも思いついたものでしょうか, スコペンハワーと読んだ人がいるそうですが, そんなスコペンな真似をしてはいけませんな。

23. tsch の発音 [音標: tʃ]

英語, ヘボン式ローマ字の ch はドイツ語では tsch という厄介なつづりです。音標もそれに平行して [tʃ] です。

Deutsch [ˈdɔɪtʃ] ドイツ語
ドイツェ

Kutsche [ˈkʊtʃə] 馬車
クツェ

Peitsche [ˈpaɪtʃə] 鞭
パイチェ

Putsch [ˈpʊtʃ] 反乱
プツェ

24. v の発音 [音標: f]

元来のドイツ語に出て来る v は f と同じです。すなわち, 同じ音を, ある語は f で書き, ある語は v で書くというわけで, すべては習慣の問題です。

Vater [ˈfa:tər] 父
ファーテル

Volk [fɔlk] 国民
フォルク

Vogel [ˈfo:gəl] 鳥
フォーゲル

Nerv [nɛrf] 神経
ネルフ

ただし, 外来語の v は大部分濁音 [音標 v] に発音します。それは, 英仏伊その他すべてが濁って発音しているからです。上記の Nerv は実は外来語なのですが, これ

は一番最後に来るから f となるのです。ドイツ語では、後で s, d, g, b などについて述べる通り、語末の濁音はすべて清音として発音します。

Veranda [veˈranda:] ベランダ
ヴェランダ

Vase [ˈva:zə] 花瓶
ヴァーゼ

Vulkan [volˈka:n] 火山
ヴルカーン

Lava [ˈla:va:] 熔岩
ラーヴァー

25. pf の発音 [音標 : pf]

これはドイツ語独特の子音です。pf とあるからといって、p と f とを別々に分けて発音するのではなく、p と f との中間を発音するのです。中間だから、p でもなければ f でもありません。いや、p であると同時に f なのです。

こればかりは、ö や ü と同様、どうしても実際耳で聞いて見ないと見当がつかないかも知れませんが、しかし、よく説明を理解すれば自分でやれます。

分解して述べましょう。まず p の発音と f の発音とが、どう違うかを考えて見ましょう。p を発音するには、上唇を下唇にピッタリ接して、それからそれを勢よく開くと同時に声を出します。f を発音するには、上の歯を下唇の上に軽く接せしめて、それを弾きます。これでまず p と f との相違が明らかになりますが、両者とも、下唇を用いる点では似ているが、その下唇の上に何をのつけるかという点、p では上唇、f では歯をのつけるのです。この点をよく理解して下さい。

すると pf の際はどうなるかと言うと、下唇の上に接せしめてこれを押さえつけるのが、上唇だけでもない、歯だけでもない、唇と歯の両方なのです。上唇と歯と両方で下唇を軽く押さえて、それからそれを弾くのです。あるいはこう言ってもよいでしょう。普通の f を、少し強く、爆発的にやると自然 pf の音が出ます。あるいは歯を下唇が痛いほど強く噛みおろして f をやると、f にならずに pf になります。ではやってみてください。

Pfau [pfaʊ] 孔雀
ファウ

Topf [tɔpɪ] 壺
トッフ

Pfeil [pfail] 矢
ファイル

Pflanze [ˈpflantsə] 植物
フランツェ

こればかりはカナで表わしようがないから、フだけで我慢してもらいます。カナばかり見て読む人ならいざ知らず、いやしくも横文字の方を見て読む人なら、たとえフとふってあってもそれはフではないのだくらいのことは思い出していただけるでしょう。

26. qu の発音 [音標 : kv]

この q という字はおかしな字で、英語でもドイツ語でも、絶対に単独では用いず、

必ず qu という結合で用います。

発音は英独で大変ちがいます。英語ではクワ、クウィ、クウォ となりますが、ドイツ語はクヴァ、クヴィ、クヴォとなるのです。つまり英独とも kw にあたるのだが、ただ w を英は英式に、独は独式に発音すると思えばよろしい。

Quelle [ˈkvɛlə] 泉
クヴェルレ

Qual [kva:l] 苦しみ
クヴァール

bequem [bəˈkve:m] 便利な
ベクヴェーム

Aquarium [ˈaːˈkva:riom] 水族館
アクヴァーリウム

27. chs の発音 [音標: ks]

chs という結合を x と同じに、すなわちクスと発音することがあります。もちろんその外に更に英語と同じ x もあります。ただし x を英語のようにグズと濁ることはありません。

Ochs [ˈɔks] 牡牛
オックス

Fuchs [fʊks] 狐
フックス

Achse [ˈaksə] 軸
アックス

Lachs [laks] 鮭
ラックス

Taxi [taksi:] タクシー
タクシー

Luxus [ˈlʊksʊs] 奢侈
ルックス

ところが、この chs は、文字通り ch と s とに、すなわちホス、ハス、フス、ヒスなどに読む場合があります。それは、元来 ch までで終わるつづりのうしろへ、何か文法的な理由があって s が添加された場合です。たとえば英語の *book* は Buch [ブーフ, bu:x] ですが、*of a book* は eines Buchs と言い、この Buchs は [ブーフス (bu:xs)] と発音します。それに反して、Buchs 「黄楊 (つげ)」という単語の chs は、決して s が後から文法的に付加されたのではなく、もともとそういう形の単語なのですからこれは [ブックス, (boks)] と読みます。

28. 語末の b, d, g は p, t, k と同発音

Schubert [シューベルト] や Brahms [ブラームス] などの歌謡曲が世界的に有名なところから、Lied [リート, li:t] 「歌謡曲」というドイツ語がいつしか英語にもはいつて来、ついには日本の楽壇でもはやりだして、今では音楽通は何かというトリード、リードと言う。そこまでは大変結構なんですけど、リードのドが違っている。ドではなくてトです。英語の字引を見ると、なるほど [li:d] と音標が出ているから、英人も英語式にドとやるものと見えます。

d だけではなく、b も g も、語末に位置する際にはすべて濁らないのがドイツ語

の正しい発音です。これは発音の実際から言ってもごく合理的で英語の *mob* の *b*, *kid* の *d*, *bag* の *g* などにしても、本当に *b*, *d*, *g* のみを発音するとしたら、どんなに濁音にしようとしても、科学的必然性をもって *p*, *t*, *k* になってしまうはずなので、それが *b*, *d*, *g* に聞こえるというのは、*b*, *d*, *g* の次に何かこう多少 [ə] のような母音を発音している証拠です。

Dieb [di:p] 泥棒
ディーブ

Land [lant] 国土
ラント

Weg [ve:k] 道
ヴェーク

Grab [gra:p] 墓
グラブ

Tod [to:t] 死
トート

Berg [berk] 山
ベルク

語末というのは、必ずしも一番最後という意味ではなく、次のような場合も同じ扱いになります。

Krebs [kre:ps] 癌(ガ)
クレープス

Stadt [ʃtat] 市
シュタット

Herbst [hɛrpst] 秋
ヘルプスト

beredt [bə'reit] 雄弁な
ベレート

29. 語末の *g* には二種の発音法がある

ドイツ最大の港 Hamburg は、第二次大戦中、英空軍の大空襲のためにほとんど廃墟と化したので有名ですが、その発音は、語末の *g* は *k* ですからハムブルク [ˈhamb-
bʊrk] でなければなりません。ところが、恐らくみなさんもお存じでしょうが、ハム
ブルヒ [ˈhambʊɾɪ] とお申します。どちらが普通か、という問題になると答はちょっ
とやっかいですが、要するに両方とも用いられているので、クの方が標準的、規格的、
あるいは本格的な正式発音で、ヒの方は民衆的、通俗的、俚俗的発音なのです。また
a, *o*, *u*, *au*, の次の *g* は、[x] の発音もします。要するに語末の *g* は、本格的には *k*,
通俗的には *ch* と同じく発音します。

Tag	[ta:k]	あるいは	ta:x]	日
Zug	[tsu:k]	あるいは	tsu:x]	列車
Weg	[ve:k]	あるいは	ve:ç]	道
Sieg	[zi:k]	あるいは	zi:ç]	勝利
Berg	[berk]	あるいは	berç]	山
König	[ˈkø:nik]	あるいは	ˈkø:nɪç]	王

30. s は、次に母音が来れば濁る [音標: z]

前項の Sieg (勝利) という語の s は、英語の z (音標も z) と同じく発音して ジーク [zi:k], またはジーヒ [zi:ç] と発音します。s はいつでも濁音というわけではなく、sa とか se とか si とか、とにかく次に母音が来ると濁るのです。

Sonne ['zɔnə] 太陽
ゾンネ

Sommer ['zɔmər] 夏
ゾムメル

Rose ['ro:zə] パラ
ローゼ

Kaiser ['kaizər] 皇帝
カイゼル

次に母音が来ない時、たとえば Glas [グラス, gla:s] (ガラス) などの s は B と同じです。

濁音のことがたびたび問題になりますから、ついでにちょっと余談をしておきますが、どうもドイツ人という奴は、濁音がはなはだ不得手です。ba とか go とか du とかいったような場合にしても、どうも少し濁りかたが不完全な傾向があって、ややともすると pa とか ko とか tu とかに近く聞こえます。だから語末の b, g, d は p, k, t となるのでしょう。その癖、また、ある地方では p, k, t が完全に清音に発音できなくて、少し濁音がかかってしまう癖がある。s の問題も同じで、濁ると言っても、英語や日本語のザジズゼゾほど完全に濁り得るドイツ人は稀です。これはちょっと念のため。

31. st, sp の発音

たとえば stand とか hast とかいったような一つのつづりをとって考えると、つづりは必ず一個の母音(上例では a)を中心として、その前後に若干の子音を伴っているものでありますが、この中核をなす母音のことを幹母音 (Stammvokal ['ʃtamvo:'ka:l]) と呼び、その前に付く子音を頭子音 (Anlaut ['ʔanlaʊt]), 後に付く子音を尾子音 (Auslaut ['ʔauslaʊt]) といいます。

この術語を用いて定義すると、ドイツ語では、頭子音の st, sp はすべて [ʃt], [ʃp] と発音する、尾子音の st, sp は英語と同じ、ということになります。たとえば sta は [シュター] で、ast は [アスト] です。

説明法がひどく語学的に厳密になりましたから、厳密ついでにもう一つ厳密なことを申すとすれば、ast に e がついて aste とか asten とか astel とかいったように二つづりになった際、この母音と母音との中間に挟まった子音はなんというかというと、これは中間子音 (Inlaut または Zwischenlaut) と呼びます。中間子音の st, sp は、それががらんば頭子音であるか尾子音であるかをよく知っていないとシュプかスプか、ストかシュトかという区別がわかりません。たとえば Gestirn (星晨) という

語がありますが、これは星のことだから、Stern (星: 英の *star*) を考えて Ge-stirn [gə'ʃtɪrn] と発音しなければならないし、gestern (昨日) は英語の *yesterday* の *yester* から考えてもわかるごとく gest- が本つづりですから、st は尾子音で、従って [ゲシュテルン] ではなく、[ゲステルン] であるといったようにです。つまり構造を知らないと発音を誤ることがあるわけです。

Stein [ʃtain] 石
シュタイン

Strom [ʃtro:m] 流れ
シュトローム

Spion [ʃpi'o:n] 密偵
シュピオーン

Sprache [ʃp'ra:xə] 言語
シュプラーク

Geist [gaist] 精神
ガイスト

Kunst [konst] 術
クンスト

Knospe [k'nɔspə] つぼみ
クノスベ

Wespe [ˈvespə] 黄蜂
ヴェスベ

32. 中間子音 ng の発音 [音標: ŋ]

これは少々細かい話になりますが、音標の説明にも必要であり、ドイツ語を本当に正しく発音するためにも必要ですから、ついでに述べておきます。

ng が中間音となる時、たとえば Zunge, Lunge, Dinge, klingen, Finger などの ng は、g を鼻音に発音します。すなわち、鼻にかかる音となります。

鼻音の g は、たとえば日本語では一般的現象です。「私が.....」という際、この「が」を普通の ga と発音する人はほとんどまれで、大抵の人は鼻音に発音します。それから、外国語 (*gaikokugo*) といってみると、第一の g は普通の喉音ですが、最後の方の g は鼻音です。語学校 (*gogakko*) も同様です。午後 (*gogo*) もそうです。つまり日本語では、頭の g だけが喉音で、その次の g は鼻音になるわけです。

そうすると、たとえば言語道断という言葉 (*Gongo*) の ng, これがドイツ語の ng で、これに対する音標は [ŋ] という、n と g とを一緒にしたような変な活字です。

Klang [kɔŋ] 音響
クラング

Zunge [ˈtʃʊŋə] 舌
ツング

Ring [rɪŋ] 指輪
リング

Finger [ˈfɪŋər] 指
フィンゲル

もっとも、一番最後が ng になっている Klang, Ring などは、気取った発音をする際にはよく k をもひびかせて、[kɔŋk], [rɪŋk] と言うこともあります。

そういえば、nk という結合の n も、これは舌の n のではなくて鼻音の ŋ になるのですが、これは別に注意しなくても誰でも自然そうなるはずです。

Dank [daŋk] 感謝

Bank [baŋk] 銀行

以上は、すべて力点ある母音の次に来る中間子音の *ng* について言ったので、そうでないものは別です。たとえばマンガンという金属は *Mangan* [マンガン, *man'ga:n*] で、*n* は鼻音ですが、*g* の方は頭音ゆえ普通の *g* です。

33. *th, ph, rh* などの発音

すべてギリシア語系ですが、ことに *th* には注意すること。*th* は英語では英語特有の発音をしますが、ドイツ語では *t* と同じです。*ph, rh, rrh* は英語と同じく、*f, r, r* に発音します。

Theorie [te'o'ri:] 学理
テオリー

Thron [tro:n] 王位
トローン

Photo ['fo:to:] 写真
フォートー

Phrase ['fra:zə] 慣用句
フレーゼ

Rhein [rain] ライン河
ライン

Rhythmus ['rytmos] リズム
リュトムス

34. *tia, tio, tie* などの発音

英語でも *station, nation* などの *tion* は *t* の発音をしないで *sh* の発音をしますが、ドイツ語でも、ラテン語系統の *tia, tio, tie* などは *zia, zio, zie* [標音: *tsia, tsio, tsie*] などと同じに発音します。

Station [ʃta'tsi'o:n] 駅
シュタツィオン

Nation [na'tsi'o:n] 民族
ナツィオン

Patient [pa'tsi'ent] 患者
パツィエント

Spatium [ʃpa:tsiom] 余白
シュパーツィウム

しかし、*ie* を *i* と *e* に分けないで、ドイツ式に「イー」と発音する時には、その前の *t* は *t* の発音です。たとえば *Demokratie* は [デモクラティー, *de'mo:kra'ti:*] です。

35. その他外来語の例外的発音

その他、外国語から来た語は、元の発音に近く発音されます。たとえば仏語から来た語には *g* を「*ジ*」の濁音 [音標 *ʒ*] に発音するものがあります。

Genie [ʒe'ni:] 天才
ジェニー

Gage [ʒa:ʒə] 給料
ガージェ

この [ʒ] はジャ、ジュなどの音で「*ジ*」の濁音ですが、英語の *Japan* 等の *j* は、チャ、チュなどの音で、標音は [dʒ]、すなわち「*じ*」の濁音です。ジとヂとは、現在の日本語では、標準発音ではもはや無差別になっていますが、理論的には *ʒ* と *dʒ* の差があるはずなのです。

また仏語中に現われる *ill* という結合は、仏語でイユと発音する単語は、ドイツ語では *lj* 即ちリャリユリョなどの発音をします。これはおそらくスペイン語の影響でしょう。

Bataillon [ba'ta'ljɔ:n] 大隊
バタリョーン

Patrouille [pa'troljə] 斥候
パトルリエ

なお *Patrouille* の *ou* をウと読んだり、*Saison* [セゾン] の *ai* を ä と読んだり、その他例外はいろいろあります。

仏語のみならず、その他外来語の特殊な発音については、接したつど特別に覚えて行くの外はありません。

36. 母音の長短について

今までの語例とその発音法を一見して、厳密に物を考える癖のある方は、おそらく母音を長く発音するか短かく発音するかの問題について、何か多少根拠のある規則はないかとお思いになったでしょう。この長短の件は、アクセントの件と同様、やはり数多く単語に接するうちにだんだんと見当がついて来るのですが、初学者にとって重要な点を一つだけ紹介しておきます。

英語では「計画」を *plan* [プラン] と言いますが、ドイツ語でもこれは *Plan* です。頭を大文字にするのは、ドイツ語では名詞は（固有名詞以外の普通名詞も）すべて大書することになっているからです。ところがその発音は [プラン] ではなくて [プラーン] です。ドイツ語では、力点を有する母音の次に一個しか子音の来ない時には、その母音は長くなります。

Not ノート	艱難	Grab グラープ	墓
Tag ターク	日	Lid リート	眼瞼(まぶ)
Schaf シャーフ	羊	Flak フラーク	高射砲
grün グリューン	緑色の	Benzol ベンツォール	ベンゾール

例外はもちろんあります (*in* を [イン], *mit* を [ミット], *ab* を [アップ] と言ったりするなど)。

次の規則は、その逆で、一母音の次に二つ以上の子音が来ると、その母音は短くなります。たとえば *Gram* は [グラーム] ですが *Gramm* は [グラム], *Gas* は [ガース] ですが *Gast* は [ガスト], *wir* は [ヴィール] ですが、*Wirt* は [ヴィルト] など。

これにも例外はちょいちょいあります，たとえば：

Mond	お月さま	Wert	価値
モント		ヴェールト	
Schuster	靴屋	Erde	地球
シューステル		エールデ	

とにかく，母音が長いか短いかという事には，常に特別の注意を払ってください。
力点の位置の問題も同様です。

第 3 講 動詞の不定形と人称変化 (1)

注意!

英語をやる時には、別に文法らしい文法を必要としません。すぐに容易な読本をひらいて辞書を引きながら意味を考えて行っても結構わかります。ところがドイツ語となると、そうはゆきません。文法上の規則を知らずには、だいいち辞書を引くことが出来ません。辞書が引けても、さて語と語との関係を考えることができません。その代り、文法の基礎をしっかりと固め、変化表を明確に脳裡に焼きつけ、規則をはっきりと呑み込んだ後には、英語よりもずっとやさしくなるのです。それはなぜかという、ドイツ語の困難は主として理屈で片づくが、英語の困難は経験と習慣によってしか片づかないからです。文法とは、要するに規則の理解と変化表の暗記です。以下、37. とか 38. とか番号が打たれた肉太文字の「みだし」が掲げられるたびに、そこには必ず何か重要な一般法則が紹介されるのですから、その一項目がよくのみ込めないうちは次の項目に移ってはいけません。うわすべりして速く進むのは、その時は速いようでも、結局において時間の浪費なることをご銘記下さい。

37. 不定形の語尾と定形の語尾

英語では不定形（不定法ともいう）をあげる時には、よく *to* をつけて *to sing* とか *to bring* とか言います（もっとも近頃は単に *sing*, *bring* ともいうようですが）。なぜ *to* をつけるかという、*to* でもつけないという、*I bring*, *you sing* などという *bring*, *sing* と、形の上で区別することが出来ないし、また、たとえば『駐在せしめる』、『配置する』という *station* を、『駅』という *station* と形の上ではっきり区別することができないからでしょう。ところがドイツ語は、「もたらす」は *bringen*, 「歌う」は *singen* で、不定形にはちゃんと不定形語尾 *-en* がつくことになっているから、*to* に相当する *zu* [ツー] をつける必要がないのです。

この不定形に対して、*I bring*, *he brings* などの形を定形（英語では *finite verb* [ファイナイト・ヴァーブ]、ドイツ語ではラテン語を用いて *verbum finitum* [ヴェルブム・フィニトゥム]）と呼ぶことにします。これは人によると有限動詞とか、有主格動詞とか、厄介な名をしますが、不定形と対照して定形と呼ぶのが最も便利です。定法と言ってもよいでしょう。

なぜ「定」形というかと申しますと、それはすなわち「私が」とか「おまえが」とかいったように、主格が「定」まった時の「形」ということです。では次に、英語と

全然同形の *bringen* という動詞を例にとって、その人称変化を暗記しましょう。定形を一括して表示することを人称変化と言います。

不定形: bring-en もたらす			
	単	数	複
一人称	ich bring-e (私がもたらす)		wir bring-en (我々がもたらす)
二人称	du bring-st (汝がもたらす)		ihr bring-t (汝らがもたらす)
三人称	er bring-t (彼がもたらす)		sie bring-en (彼らがもたらす)

上表中、*bringen* を *bring-en* というふうに分綴して印刷したのは、特に *-en*, *-e*, *-st*, *-t* などの語尾に対して注意を向けしめんがため、表以外では続けて書くのです。

次に数個の動詞をあげますから (もちろん不定形で)、よく暗記し、同時に、表を見ないで人称変化して見てください。

singen	[ジングェン]	歌う	<i>sing</i>
sinken	[シンケン]	沈む	<i>sink</i>
sitzen	[ジッツェン]	坐る	<i>sit</i>
setzen	[ゼッツェン]	置く	<i>set, (put)</i>
hören	[ハーレン]	聞く	<i>hear</i>
denken	[デンケン]	考える	<i>think</i>
danken	[ダンケン]	感謝する	<i>thank</i>
trinken	[トリンケン]	飲む	<i>drink</i>
rauchen	[ラオヘン]	喫煙する	<i>(smoke)</i>
schreiben	[シュライベン]	書く	<i>(write)</i>
lernen	[レルネン]	学ぶ	<i>learn</i>
kaufen	[カオフェン]	買う	<i>(buy)</i>
bleiben	[ブライベン]	残る, とどまる	<i>(remain)</i>

人称変化表の運用が十分円滑になったら、次に、この表について、多少文法上の重要な概念を紹介しましょう。

(1) 動詞の語幹

上記の人称変化表において、太文字で印刷した **bring** という部分は、不定形、定形を通じて全部共通であることがわかりましょう。この **bring** というつづりを、この動詞の語幹と呼びます。同様に、*hören*

(聞く) の語幹は *hör*, *rauchen* の語幹は *rauch* です。

この語幹という概念は非常に重要で、たとえば『英語では、語幹がただちにもって不定形である』とか、『英語の *sing* は、過去と過去分詞において語幹が母音を変じて *sang*, *sung* となる』とか『英語の *sing*, *sang*, *sung* はドイツ語では *singen*, *sang*, *gesungen* で、語幹が同一である』とかいったように、これからしきりに語幹という言葉を用いますから注意して下さい。語幹は、動詞ばかりではなく、名詞、形容詞などにもあります。

(2) 人称代名詞と人称語尾

上記人称変化表中の *ich* [イヒ], *du* [ドゥー], *er* [エール] あるいは [エル], *wir* [ヴィール], *ihr* [イール], *sie* [ジー] を人称代名詞と言います。人称とは何か、一人称とは何か、などの問題は英語ですでにご存じの事ゆえ省きます。

各人称代名詞の要求する *-e*, *-st*, *-t* などの語尾は、これを人称語尾と言います。人称語尾は、前に述べた定形の語尾のことです。

38. 三人称について

単数三人称は *er bringt*, *er singt* などですが、この *er* は英語の *he* で、その他に *sie* (彼女), *es* (それ) があり、人称語尾はすべて *-t* です。

<i>er bringt</i>	彼がもたらす	<i>he brings</i>
<i>sie bringt</i>	彼女がもたらす	<i>she brings</i>
<i>es bringt</i>	それがもたらす	<i>it brings</i>

人称変化表では、代表として *er* だけをあげることにします。

ここで早速注意していただきたいのは、「彼女」という *sie* が、「彼ら」という *sie* と全然同語であるという点です。しかし、人称語尾がちがいますから、区別はつくはずで、*sie denkt* は「彼女は考える」、*sie denken* は「彼らは考える」というふうに。だから人称語尾というものが大切なのです。

「彼ら」という *sie* は、男女の区別はしません。英語の *they* の通り。

では、主格が *ich*, *du*, *er*, *sie*, *es*, *wir* など以外の、普通の名詞であつたら人称語尾はどうなるでしょう？たとえば「人間は考える」はどう言うでしょう？——これも英語と同じで、英語でも *Man thinks* と、*s* という三人称語尾をつけるように、ドイツ語でも *Der Mensch denkt* [der men] dɛŋkt] と、三人称扱いにします。(英語では、人間という *man* は冠詞をつけません、ドイツ語では定冠詞をつけるのです) もちろん *Men think* となると、これは複数ですから、*sie denken* の場合として取り扱って *Die Menschen denken* [di: 'mɛnʃən 'dɛŋkən] と言います。

39. 二人称には親称と敬称の別あり

二人称は、前掲の人称変化表では「汝」「汝ら」しかあげてありませんが、実はこの外に更に Sie (貴君、及び貴君達) という人称代名詞があるのです。そこで、二人称を詳しく表示すると次のようになります

	単 数	複 数
親称	du bringst (おまえがもたらす)	ihr bringt (おまえ達がもたらす)
敬称	Sie bringen (あなたがもたらす)	Sie bringen (あなた方がもたらす)

親称というのは、親子の間、兄弟の間、夫妻の間、親しい友達の間で、あるいは「汝」という語で気持を示した通り、多少擬古的な、文語めいた呼びかけをする時に用います。日本では、上品な家庭では、親は子に向かって「おまえ」と言うが、子は親に「おまえ」とは言わない。ドイツでは、親子とも、相手を du と言います。夫婦も同様です。つまり日本語の「おまえ」は、親称 (親しんで呼ぶ) というよりはむしろ蔑称なんですね。du, ihr は蔑称ではありません。だから、たとえば神に向かって語る時にも du を用います。物語の中では臣下が王に向かって話す時にも du と言います。

英語には、今は you しかありませんが、昔は thou というのがありました。たとえば「汝が考える」は *thou thinkst* と言って、ドイツ語と同じ st という人称語尾までつけました。その物主形容詞は *thy* (汝の) です。Frailty, *thy name is woman!* (弱きものよ、汝が名は女なり) という *Hamlet* のセリフは皆様もご存じでしょう。*thy* というから古風で気品があるので、これを *your* と言ったらとんだ興醒めでしょう。

次に敬称というのは、ほんとうは社交称とか、事務称とか言った方がよいのかも知れません。つまり普通の「あなた」で、あんまり親しくない相手に向かって語る時の、社交用語ですから、会話ではむしろこの方が普通の二人称でしょう。たとえば、軍隊にしる、会社にしる上級者は下級者に向かって Sie と言います。「君」とか「おまえ」とかにあたるわけです。だから敬称とは言っても、必ずしも日本語の「あなた」ではない事がわかります。

ドイツ人の若い男女は、お互いに恋仲になると、Sie を止して、du で話します。けれども、第三者が側へ寄ってくると、急にまた Sie に転向してごまかすことも出来てきましょう。これで親称と敬称の差がわかります。

敬称の人称語尾は、複数三人称のそれに等し

前に挙げた Sie bringen でわかるごとく、Sie の場合の動詞の人称

語尾は -en です。すなわち Sie bringen は、sie bringen (彼らがもたらす) と同形

で、ただ代名詞を大文字に書き換えただけの相違だという事がわかります。英語は「私」という *I* を大書して、「あなた」*you* を小書する、ドイツ語はその逆です。これは相手を尊敬して自分を卑下するドイツ語の方がもっともらしく思われます。

ですから、*Sie bringen* と *sie bringen* とは、眼で見れば区別はつくが、耳で聞いているだけでは「あなた」だか「彼ら」だかわかりません。ただその時々、の前後関係で判別するだけです。これは明らかにドイツ語の欠陥ですが、実際はまあ何とか間に合っているから不思議なものです。

耳で聞いた時ばかりではありません。眼で見た時も、両者は全然同じになることがあります。それは文章の初めに来る時です。文頭に来る語はすべて大文字で書き始めますから、*sie bringen* も *Sie bringen* も文頭では *Sie bringen* となります。たとえば

Sie bringen Reis? ジー ブリンゲン ライス

はどうでしょう？ *Reis* は英語の *rice* (お米) です。これは『あなたはお米を持って来たでしょうね？』の意にもなれば、『彼らはお米を持って来たのでしょうね？』にもなります。後者は、たとえば欠配で心配している最中に、駅からトラックが二三台景気よくやって来た時に言う『あれは米かな？』に該当します。*Sie bringt Reis.* ならば『彼女はお米をもって来た』になることは既に前項で述べましたが、そうなるとして、耳で聞いた際の [ジー] には場合が詳しくいうと四つあるわけです： 1. 彼女 2. 彼ら 3. あなた 4. あなた方

備考： *du* は普通小文字で書くことになっていますが、手紙の中で相手を指す際には *Du* と大書します。つまり *Sie* と同じように、敬意を表するわけです。

40. 不定代名詞 *man*

欠配の最中にトラックが二三台やって来たら、「そらお米だ！」(*Sie bringen Reis!*) というでしょうが、こういう時には *Man bringt Reis!* と言ってもよいのです。この *man* は、言葉としては英語の *man* と一致しますが、意味はむしろ *people, they, one*, 時には *you* にあたります。すなわち、別に誰がというほどハッキリと主格(主語)を考えない場合、すなわち日本語でなら主格を省く場合です。「そらお米をもって来た！」がそれで、『誰が』という主語(主格とも言う、英: *subject*; 独: *Subjekt* [ズプ イェクト])は別に明示されていません。誰が、ということになれば、それは営団の人達か何かでしょうが、そんな事は別に言う必要もなければ考える必要もないから、日本語では大抵の場合言わないのでしょう。ところが西洋語では、この主語という奴が非常にやかましくて、大抵の場合は必ず主語を入れなくてはならないという事になっています。ところがこの場合は、ちょっと考えたところ、何を入れてよいかわからな

い。そういう、とにかく人間であることだけは確かだが、別に『誰が』とわざわざ指して言うほどの必要がない時に用いるのがこの man という言葉で、これを文法では不定代名詞と申します。

man を主語にすると、動詞の人称語尾は -t で、つまり三人称単数扱いをするわけですが、そうかといって別に人数が一人というわけではありません。Sie bringen Reis. と Man bringt Reis. とが同意であることからわかるでしょう。

sie (彼ら) の代りになるばかりではありません。その他何の代りにでもなります。たとえば、お米も持たずに人の宅へ泊りに来た男に向かって、人の宅へ泊りに来る時にはせめて『お米ぐらい持って来るものですよ』という意味で

Man bringt doch Reis!
マン ブリングト ドホ ライス

というならば、この man は明らかに Sie (あなた)、あるいは du (おまえ) の露骨さを避けたものです。(doch は、『ですよ』にあたる助詞で、口調をきつくする時に入れる微妙なことばです) また、主人の方から『配給米で食っている時勢に、急に來て泊られては困るね』と言われた時の答として Man bringt doch Reis! (だってお米を持って來たんですよ) と言えば、これは明らかに Ich bringe doch Reis! の直截性を避けて婉曲な言い方をしたものです。

—例 題 1—

- | | | |
|---|--|-----------------------|
| <p>[1] Er trinkt Bier.
エル トリンクト ビール</p> <p>Du schreibst schön.
ドゥー シュライプスト シェーン</p> <p>[5] Ihr lernt Deutsch.
イール レルント ドイチュ</p> <p>Ich glaube, ich höre Musik.
イヒ グラオベ イヒ ヘーレ ムジーク</p> <p>[9] Ja, ich trinke Kaffee.
ヤー イヒ トリンケ カッフエー</p> <p>[11] Lernst du Deutsch?
レルンスト ドゥー ドイチュ</p> <p>[13] Was bringt ihr?
ヴァス ブリングト イール</p> <p>[15] Was man schreibt, bleibt.
ヴァス マン シュライプト ブライプト</p> | <p>[2] Wir kaufen Milch.
ヴィール カオフェン ミルヒ</p> <p>[4] Sie trinken und rauchen.
ジー トリンケン ウント ラオヘン</p> <p>[6] Sie singt sehr schön.
ジー ジングト ゼール シェーン</p> <p>[8] Trinken Sie Kaffee?
トリンケン ジー カッ</p> <p>[10] Danke schön!
ダンケ シェーン</p> <p>[12] Nein, ich lerne Englisch.
ナイン イヒ レルネ エング</p> <p>[14] Wir bringen Öl.
ヴィール ブリンゲン エール</p> | <p>[3]</p> <p>[7]</p> |
|---|--|-----------------------|

訳註: [1] かれはビールを飲む。 [2] 我々は乳を買う。 [3] 君はきれいに書く。
schön: きれいな, きれいに。 [4] 彼らは飲みかつ喫煙する。 und: 英の *and*. (あるいは
「あなたは」の意にもなる。) [5] 君たちはドイツ語を学ぶ。 [6] 彼女は非常にうまく歌
う。 schön: うまく, 上手に。 sehr: 英の *very*. [7] なんだか音楽が聞こえて来るよう
ですね。(英: *I think I hear music*.) glauben: 信ずる, 思う。 [8] あなたはコーヒー
をお飲みですか。 [9] ええ, 僕はコーヒーを飲みます。 [10] ありがとう。(Ich danke
schön. と言ってもよいが, 普通は主語を省く。 Danke sehr! Danke! ともいう) schön:
sehr と同じ (英: *very much*). [11] おまえはドイツ語を学んでいるのか。 [12] いや,
僕は英語を学んでいる。 [13] 君たちは何を持って来たんだ。(別に過去形ではないが, こ
ういう時には bringen の現在を用いるのが習慣である) was: 英の *what*. [14] おれ
たちは油をもって来た。 [15] 書いたものは後に残る。 was man schreibt: 英なら *what*
you write. 「なんでも字に書いたものは」の意。 was はここでは「何?」という疑問詞で
はなく「何でもおよそ.....するところのものは」という関係代名詞である(101 項参照)。
この句はドイツの有名なことわざで, 書いたものは後日の証拠に残るから危険だ, の意。
すなわち筆禍を戒めたもの。

第 4 講 動詞の不定形と人称変化 (2)

41. 人称語尾の例外: bitten, reden など

前講で紹介したところによると、不定形語尾は -en, 人称語尾は -e, -st, -t, -en, -t, -en でした。ところが、語幹（さあ、語幹が問題になります！ 忘れた人は 37 の (1) を読み直すこと）によっては、このままの形の人称語尾をつけては口調の悪いことがあります。

Bitte, trinken Sie!

ビッテ トリンケン ジー

さあどうぞお飲み下さい。

trinken Sie! (お飲みなさい), schreiben Sie! (お書きなさい), kaufen Sie! (買いなさい) はほぼおわかりでしょう。Bitte (どうぞ) は、英語の *please*, あるいはむしろ *pray* です。「どうぞ!」は *pray* とも言います。この *pray* は実は *I* に対する定形（さあ、定形を忘れた人は 37 をり）で、本当は *I pray* (私は乞う) という所を、主語を略して *pray* というのです。日本語の「乞う」にそっくりです。英語という奴は、人称語尾がすこぶる貧困で、よほどよく言葉を知っていないと、不定形だか定形だか、また何人称の定形だか判明しないことおよそかくの如し。その点ドイツ語はハッキリしています。Bitt-e の -e を見れば Ich bitte だということがすぐわかります。さて、この bitte は bitten (願う, 乞う) という動詞ですが、これを人称変化すると du bittst, er bittt..... となるところですが、これはどうも少し口調が悪い。そこで、st の代りに est, t の代りに et をつけます:

ich bitt-e

イヒ ビッテ

du bitt-est

ドゥー ビッテスト

er bitt-et

エル ビッテット

Wir bitt-en

ヴィール ビッテン

ihr bitt-et

イー ル ビッテット

sie bitt-en

ジー ビッテン

定義として言いますと、語幹の尾子音 (31 ㄱ見ヨ) が t または d である動詞は、-st, -t の代りに -est, -et を付ける、ということになります。換言すれば、変な子音同志が直接にぶつからないように、間に口調をよくするための -e- を挟むのです。この -e を語呂の e, または音便の e (euphonisches e, [ʔɔy'fo:nɪʃəs ʔe:]) と呼びます。

次の動詞の人称変化をやって見ること：

warten ヴァルテン	待つ	antworten アントヴォルテン	答える	arbeiten アルバイテン	働く
beten ベーテン	祈る	reiten ライテン	騎行する	töten テーテン	殺す
rasten ラストン	休憩する	baden バーデン	沐浴(♯♯)する	schaden シャーデン	害する
ermüden エルミューデン	疲れる	reden レーデン	語る	schneiden シュナイデン	切る

42. 人称語尾の例外：rechnen など

語幹の尾子音が chn, gn, ckn, dn, tm, dm, その他これに似た結合子音である時も、前項と同じになります：

rechnen レヒネン	計算する	zeichnen ツァイヒネン	図画を描く	regnen レーグネン	雨が降る
segnen ゼーグネン	祝福する	leugnen ロイグネン	否定する	ordnen オルドネン	整理する
begegnen ベゲーグネン	逢う	öffnen エフネン	開ける	waffnen ヴァフネン	武装する
trocknen トロックネン	乾かす	atmen アートメン	呼吸する	widmen ヴィドメン	献ずる

43. 人称語尾の例外：küssen など

ss, ß, s, sch, z, tz などはいずれもシューシューと風を切るような音で、英文法ではこれを *sibilant*, 独文法では *Zischlaut* [tsɪʃlaʊt], 訳して歯擦音あるいは飛箭音などと申しますが、語幹の尾子音がこうした歯擦音である際には、二人称単数の -st だけは、どうも歯擦音同志が衝突することになるので、そこだけ音便の e を挿むのが上品だという事になっています。たとえば

不定法：	grüßen グリューセン	挨拶する	二人称単数：	du grüßest ドゥーグリュースエスト
	reisen ライゼン	旅行する		du reise st ライゼ ス ト
	wünschen ヴェンシェン	望む		du wünsch est ヴェンシェ ス ト
	tanzen タンツェン	踊る		du tanz est タンツェ ス ト
	sitzen ジッツェン	坐る		du sitz est ジッツェ ス ト

通俗語では du grüßt, du reist, du wünschst, du tanzt, du sitzt など、全然三人

称単数と同形をも用います。また sch, z, tz は wünschst, tanzst, sitzt も可能です。

尾子音が ss である時は, ss が ß になることがあります。書法 (Orthographie [ʔortoˈɡraˈfi:]) の一般規則として, 最後に来る ss, 及び t の前に来る ss は必ず ß と書く, ということが決まっているのです。

küssen 接吻する
キュッセン

ich küsse
イヒ キュッセ

du küssest (または küßt)
ドゥー キュッセスト キュスト

er küßt
エル キュスト

wir küssen
ヴィール キュッセン

ihr küßt
イール キュスト

sie küssen
ジー キュッセン

44. 人称語尾の例外: wandern, wandeln など

今までに出て来た動詞のように, たとえば wanden などとはならないで, wandern とか wandeln とかいったようになる動詞があります。すると, 不定形語尾には -en の外に -ern, -eln という場合があるのかと思うと, そうではなくて, これは wander-n という構造です。すなわち語幹は wand ではなく, wander-, wandel- なので, -n だけが不定形語尾なのです。

それは英語と対照すればすぐわかります。wandern (てくてく歩く) は英語の wander で, 英語は語幹のままが不定形ですから, ドイツ語も wander- ままでが語幹にきまっています。同様に英語の wonder (不審る) は wundern です。

この種の動詞は, 人称変化を ich wand(e), du wandest などとやっては誤りで, 必ず wander- を根幹として, その上に人称語尾をつけなければなりません。ただし, 口調上, 人称語尾には若干の修正が行なわれます。(次表中の括弧した e は, 省くことあり, の意。)

wander-n 徒歩する, ハイキングする
ヴァンデルン

ich wand(e)r-e
ヴァンデレ(ドレ)

du wander-st
ヴァンデルスト

er wander-t
ヴァンデルト

wir wander-n
ヴァンデルン

ihr wander-t
ヴァンデルト

sie wander-n
ヴァンデルン

wandeln (漫步する, 逍遙する) も, r と l との相違だけで, wandern と同じようになります。l だと「ぶらぶら歩く」, r だと「てくてく歩く」, この区別は単語としてもよく覚えておくこと。

zittern 震える ツイッテルン	zögern ためらう ツェーゲルン	ändern 変える エンデルン
dauern 続く ダオエルン	bedauern 遺憾に思う ベダオエルン	hindern 妨げる ヒンデルン
lächeln 微笑む レツヒェルン	sammeln 集める ザムメルン	tadeln 非難する ターデルン
betteln 乞食する ベッテルン	handeln 行動する ハンデルン	zweifeln 迷う, 疑う ツヴァイフェルン

例 題 2

次の文中に出て来る動詞の不定形を言え。

- [1] Er zeichnet und rechnet. [2] Sie arbeitet Tag
エル ツァイヒネット ウント レヒネット ジー アルバイテット ターク
und Nacht. [3] Man rastet, wenn man ermüdet.
ウント ナハト マン ラステット ヴェン マン エルミューデット
[4] Was tadelst du? [5] Bitte, zögern Sie nicht!
ヴァス ターデルスト ドゥー ビッテ ツェーゲルン ジー ニヒト
[6] Wir sammeln Geld. [7] Ich tadle nicht, sondern
ヴィール ザムメルン ゲルト イヒ タードレ ニヒト ゾンデルン
bedauere. [8] Ihr reist nach Deutschland? [9] Man
ベダオレ イール ライスト ナーハ ドイチュラント マン
zittert und betet zu Gott. [10] Wer viel redet,
ツイッテルト ウント ベーテット ツー ゴット ヴェール フィール レーデット
handelt wenig.
ハンデルト ヴェーニヒ

訳註: [1] かれは製図しかつ計算する。zeichnen: 図画でも製図でも、何でも線をもって描くことをいう。英: draw. [2] 彼女は日夜働く。(Tag und Nacht: 英: day and night.) [3] くたびれると休憩する。wenn: 英: when. [4] 君は何を非難するの。[5] どうか躊躇なさいますな。nicht: 英 not. [6] 我々は金を集める。Geld: 英 money. [7] 僕は叱言を言うのではなく、残念だと言うのです。sondern は英の but. 英語でも not.....but..... は「云々ではなくて云々だ」と、否定と肯定とを並べる時に用いるように、ドイツ語でも nicht.....sondern..... という形式で、まず否定したのち、その裏を肯定で言い直すのである。「僕でなくて、あなたです」なら、英: not I, but you! 独: Nicht ich, sondern Sie! [8] おまえたちはドイツへ旅行するんだね? nach: どこそこ「の方へ」という前置詞。nach Deutschland: 英: to Germany. Reist ihr nach Deutschland? といえは「おまえたちはドイツへ旅行するの?」となる。語順に注意せよ。[9] 人々は震えて神に祈る。zu Gott: 英: to God. [10] 多くを語る者は行なうところ少なし。viel: 英: much. wenig: 英: little.

45. 人称変化の際、発音にも注意すること!

schreiben (書く) を Er schreibt. と変化すると、b はもはや b ではなくて p と発

音します。fragen (問う, 質問する) が du fragst となると, g は k の発音になります。reisen の s は濁音ですが, sie reist となると s は清音です。(28, 30 ヲ見ヨ) du fragst, er fragt は [ドゥー フラーハスト], [エル フラーハト] でもよろしい (29 ヲ見ヨ)。

要するに, 文法にはいつてからも, しょっちゅう発音に注意してください。ふりがなはこういうところを間違えないためについているのです。大きな声を出して音読すれば, アクセントの位置もよく覚えます。

眼で覚えた外国語は大して役に立ちません。耳で覚えた外国語は, それよりはいくらかましかも知れないが, 役に立たぬ点では大差ありません。では何で覚えた外国語が役に立つか? それは手で覚えた外国語, 舌で覚えた外国語です! 手で書きなぐり, 口一杯に頬ばって呶鳴り散らした外国語です!

呶鳴り散らすのはまだちょっと早いかも知れません。乞う, あたりに人無き頃を見はからい, やおら奇声を張り上げて例題を読誦し給え。柱時計がびっくりして止まったら, 『何だ!』といって睨み返してやるべし。それ位の元気がなくちゃ駄目です。

第 5 講 動詞の不定形と人称変化 (3)

注意!

今までは一般的な規則をやったのですが、これからは例外をやります、すなわち不規則動詞です。一糸乱れぬ整然たるドイツ文典にも不規則現象はあります。またその不規則なものこそ普通最もひんばんに用いられるものなのです。ひんばんに用いられればこそまた不規則になったものでありましょう。ひんばんにはく靴ほどゆがんでいるように。だから、これから紹介する不規則動詞は、今までの動詞より以上によく覚えましょう。西洋語は何語でもそうですが、不規則動詞さえよく覚えれば、その国語はわかり出します。——規則、というところがぜん緊張するが、不規則とか例外とかいうとたちまち顔を長くする人がよくあるので、——一言ご注意申し上げた次第です。

46. 単数の二人称・三人称において語幹を変ずる動詞多し

たとえば次の文章を読んで、その動詞の形に注目し、その不定形はどういう形か、と考えて見ましょう。なぜというに、辞典をしらべるには不定形を知らなければならぬからです。

Gott sieht alles. 神はすべてを見給う。
ゴット ジート アルレス

とにかく sieht が「見る」で、alles が「すべてを」には違いない。かつ sieht は、三人称単数だから、最後の t は英語の s にあたる人称語尾で、語幹は sieh までのはずゆえ、それに -en を加えた sehen が不定形だろう……と思うと、これはとんだ誤りで、不定形は sehen [ゼーエン] なのです！

そこで、sehen の人称変化はどうなるかという、次のようになります。星の印のついているところが不規則なところです。

不定形: **sehen** (英: *to see*)

ich	seh-e ゼーエ	wir	seh-en ゼーエン
du	sieh-st* ジースト	ihr	seh-t ゼート
er	sieh-t* ジート	sie	seh-en ゼーエン

不規則とはいっても、全部が不規則なのではなく、ただ du と er との二箇所だけ

が変っているので、その変り方も、ただ語幹の中の -e (これを幹母音という、31 参照) が -ie に変るだけです。次に最も普通の単語の例を挙げますが、多少の不規則こそあれ、すべて e が ie もしくは i に変るところが共通です。人称変化は、不規則な du と er だけを挙げます。ich, wir その他は規則的なのですから。

geben ゲーベン	英: <i>give</i>	与える	du gibst, ギーブスト	er gibt ギープト
sprechen シュプレッヒェン	<i>speak</i>	話す	du sprichst, シュプリヒスト	er spricht シュプリヒト
lesen レーゼン	(<i>read</i>)	読む	du liest, リースト	er liest リースト
helfen ヘルフェン	<i>help</i>	助ける	du hilfst, ヒルフスト	er hilft ヒルフト
essen エッセン	<i>eat</i>	食う	du ißt, イスト	er ißt イスト
brechen ブレッヒェン	<i>break</i>	折る	du brichst, ブリヒスト	er bricht ブリヒト
sterben シュテルベン	(<i>die</i>)	死ぬ	du stirbst, シュティルプスト	er stirbt シュティルプト
vergessen フェルゲッセン	<i>forget</i>	忘れる	du vergißt, フェルギスト	er vergißt フェルギスト
werfen ヴェルフェン	(<i>throw</i>)	投げる	du wirfst, ヴィルフスト	er wirft ヴィルフト
nehmen ネーメン	(<i>take</i>)	取る	du nimmst, ニムスト	er nimmt ニムト

lesen, essen, vergessen などは、語幹の尾子音が歯擦音 (43!) であるため、du も er も同形になる所に注目!

次に、幹母音 a が ä に変わるものがあります:

fallen ファルレン	<i>fall</i>	落ちる, 倒れる	du fällst, フェルスト	er fällt フェルト
fahren ファーレン		(乗物で行く)	du fährst, フェールスト	er fährt フェールト
fangen ファンゲン	(<i>catch</i>)	捕える	du fängst, フェングスト	er fängt フェングト
halten ハルテン	<i>hold</i>	保つ	du hältst, ヘルトスト	er hält ヘルト
schlafen シュラーフェン	<i>sleep</i>	眠る	du schläfst, シュレーフスト	er schläft シュレーフト
schlagen シュラーゲン	(<i>beat</i>)	打つ	du schlägst, シュレークスト	er schlägt シュレークト
tragen トラーゲン	(<i>wear, bear</i>)	佩(*)びる	du trägst, トレークスト	er trägt トレークト

du, er の二箇所で不規則なのは、以上の二種が主ですが、その他に次の変種を覚えておく必要があります。

laufen ラオフエン	英: (run)	走る	du läufst, ロイフスト	er läuft ロイフト
gebären ゲバーレン	bear	産む	du gebierst, ゲビールスト	er gebiert ゲビールト
stoßen シュトーセン	(push)	押す	du stößt, シュテースト	er stößt シュテースト

備考: (1) この項で取り扱った不規則動詞は、後出 (79!) の「三要形の不規則な動詞」のうちの一部のものです。——(2) e が i, ie に変ずるものだけは、命令法 (126) においても同じ現象が起こります。

例 題 3

次の文中に用いられた動詞の不定形を言え。

- [1] Er schläft noch. [2] Sie vergißt es nicht. [3]
エル シュレーフト ノホ ジー フェルギスト エス ニヒト
- Er nimmt alles, was man ihm gibt. [4] Sie stirbt,
エル ニムト アルレス ヴァス マン イーム ギープト ジー シュティルプト
- wenn du nicht hilfst. [5] Man spricht hier nur
ヴェン ドゥー ニヒト ヒルフスト マン シュプリヒト ヒール ヌール
- Deutsch. [6] Du fällst, wenn er stößt. [7] Es fällt
ドイチュ ドゥー フェルスト ヴェン エル シュテースト エス フェルト
- nicht, denn er hält es fest. [8] Er spricht nicht
ニヒト デン エル ヘルト エス フェスト エル シュプリヒト ニヒト
- Deutsch, sondern liest es nur. [9] Bitte, nehmen
ドイチュ ゾンデルン リースト エス ヌール ビッテ ネーメン
- Sie alles, was ich hier trage! [10] Not bricht Eisen.
ジー アルレス ヴァス イヒ ヒール トラーゲ ノート ブリヒト アイゼン

訳註: [1] かれはまだ眠っている。noch: 英: still. [2] 彼女はそれを忘れない。[3] かれは人がかれに与えるすべての物を取る。alles, was: 英: all that. (.....ところのすべて)。ihm: 英: him. (かれに) [4] 君が助けてやらなければ彼女は死ぬぞ。wenn: 英: if. [5] こちらはドイツ語しか話しません。hier: 英: here. nur: 英: only, but. [6] かれが押すとおまえは倒れる。[7] それは倒れない、なぜならば、かれがそれをしつかと支えているから。es: 英: it. denn: 英: for (なぜならば)。[8] かれはドイツ語を話さないで、単にそれを読むきりだ。sondern: 英: but. [9] どうぞ私がここに身につけているものをすべておとりください。[10] 危急は鉄をもくじく。Not: 困窮, 逼迫, 危急 (せっぱつまった状態)。Eisen: 英: iron. これは、「窮すれば通ず」にあたり、せっぱつまれば人間は一見不可能なことをもやってのけるものだ、の意。

47. sein, haben, wissen, werden, tun の人称変化

英語でも *to be* (ある, である) の人称変化は *I am, you are, he is* などと, 非常に不規則なものですが, ドイツ語にも *sein* (ある, である) その他, 非常に変わった不規則動詞があります。

sein (<i>be</i>) ザイン		haben (<i>have</i>) ハーベン	
ich bin ビン	wir sind ジント	ich habe ハーベ	wir haben ハーベン
du bist ビスト	ihr seid ザイト	du hast ハスト	ihr habt ハープト
er ist イスト	sie sind ジント	er hat ハット	sie haben ハーベン

wissen (<i>know</i>) ヴィッセン		werden (<i>become</i>) ヴェールデン	
ich weiß ヴァイス	wir wissen ヴィッセン	ich werde ヴェルデ	wir werden ヴェールデン
du weißt ヴァイスト	ihr wißt ヴィスト	du wirst ヴィルスト	ihr werdet ヴェールデット
er weiß ヴァイス	sie wissen ヴィッセン	er wird ヴィルト	sie werden ヴェールデン

tun (<i>do</i>) トゥーン	
ich tue トゥーエ	wir tun トゥーン
du tust トゥースト	ihr tut トゥート
er tut トゥート	sie tun トゥーン

werden は, 病気になる, などという「なる」で, 英語の *become, grow, get* などに相当します。たとえば *He is getting tired.* は *Er wird müde.* です。 *is getting* などの, いわゆる進行形はドイツ語にはありません。

例 題 4

- [1] Sie wissen, ich bin Kommunist. [2] Ich glaube,
 ジー ヴィッセン イヒ ビン コンムニスト イヒ グラオ
 be, du hast alles. [3] Sie arbeitet Tag und Nacht,
 ベ ドゥー ハスト アルレス ジー アルバイテット ターク ウント ナハト
 wird aber nie müde. [4] Sie sind sehr freundlich,
 ヴィルト アーベル ニー ミューデ ジー ジント ゼール フロイントリヒ

Herr Meier! [5] Sie hat heute Kaffee und Milch.
 ヘル マイエル ジー ハット ホイテ カッフエー ウント ミルヒ

[6] Wissen Sie es schon? Nein, ich weiß es noch
 ヴィッセン ジー エス ショーン ナイン イヒ ヴァイス エス ノホ

nicht. [7] Was tut er denn hier? [8] Man hat
 ニヒト ヴァス トゥート エル デン ヒール マン ハット

Macht, wenn man nur Geld hat. [9] Ihr werdet
 マハト ヴェン マン ヌール ゲルト ハット イール ヴェールデット

bald wieder gesund. [10] Der Mensch ist, was er
 バルト ヴィーデル ゲズント デル メンシュ イスト ヴァス エル

ißt.

イスト

訳註: [1] ご存じの通り、僕は共産主義者です。Sie wissen は英の *you know* のごとく、こういう風に用いるのが会話文の特徴である。[2] 君はどうやら何でも持っているらしいね。ich glaube: *I think*. [3] 彼女は日夜働くが、しかし決して疲れない。aber: *but, however*. nie: *never*. (aber の位置に注意せよ。aber wird というよりこの方がよいのである。wird は sie wird の略、二度目の同主語ゆえ省く。) [4] あなたは非常に親切ですね、マイエルさん。(マイエルさん、どうもありがとう、の意) freundlich: *kind*. Herr: *Mr*. [5] 彼女は今日はコーヒーと牛乳がある。heute: *to-day*. [6] あなたはそれを既にご存じですか? schon: *already*. いいえ、私はそれをまだ存じません。noch nicht: *not yet*. [7] かれはここでいったい何をするのですか。denn: いったい、そもそも。(例題 3 の [7] と比較せよ。denn は句の最初にある時は英 *for*, 如何となれば、の意であるが、句中に挿入された時は「いったい全体」の意。) [8] 金さえあれば羽振りが利く。Macht: *might*, 勢力, 権勢。wenn.....nur..... は「もし...さえ.....ならば」という形式。[9] 君達はやがて再び壮健になる。bald: *soon*. wieder: *again*. gesund: *healthy*. [10] 人間はその啖(く)う所のものなり。訳語だけではちょっと何のことだかわからないでしょうが、これはドイツの Feuerbach [ˈfɔɪərbax] という哲学者の言で、よく引用される面白い名句です。一見すればわかるとおり、ist と ißt とが同音であるのを利用した語呂洒落です。逐語的に分解すると、Der Mensch 人間は er かれが ißt 啖う was ところのその物 ist である、です。自然科学的唯物論の立場から見ると、人間というのは決して古人が考えていたような、霊と肉とから合成した複合体ではなく、霊なんてもの、精神なんてものは、要するに物質の機能にすぎず、我々の感情も意識も、それは単に脳の灰白質の中の細胞と細胞との間に起る電氣的現象のやや複雑なものにすぎない。だから、人間は物質そのものです。この頃のように野菜ばかり食べていれば、私は野菜であり、米を食べば私は米です。人間はすなわちその啖(く)うところのものなり、です。この警句は、自然科学的唯物論の立場を面白く皮肉に要約した言として、多くの人が引用します。人は食に異ならず、食は人に異ならず、食即是人、人即是食ですか。

Der Mensch (人間) の der は英語の *the* で、これが次講の研究題目です。英語なら *man* と冠詞をつけません、ドイツ語では「そもそも人間なるものは」の意には定冠詞をつけます。Mensch (人間), Mann (男、次講の始めを見よ), man (不定代名詞、40!) の三つを区別して覚えること。

第 6 講 定冠詞・名詞の格変化

48. 男性名詞・女性名詞・中性名詞の区別

動詞に関することは一応打ち切って、さてこれからしばらくは名詞に関する規則です。説明に先立って、まず次に掲げる若干の名詞を、その前についている定冠詞ぐりみまると暗記してしまいましょう。

男性名詞			女性名詞			中性名詞		
der	Mann	男	die	Frau	女	das	Kind	小児
デル	マン		ディー	フラウ		ダス	キント	
der	Kopf	頭	die	Hand	手	das	Auge	眼
	コッフ			ハント			アオゲ	
der	Tisch	机	die	Uhr	時計	das	Buch	書物
	ティッシュ			ウール			ブーフ	
der	Himmel	天	die	Erde	地	das	Meer	海
	ヒムメル			エールデ			メール	
der	Kaffee	コーヒー	die	Milch	乳	das	Bier	ビール
	カフエー			ミルヒ			ビール	

まず注目すべき現象は、ドイツ語では、名詞はすべて大文字で書き始めるという点です。英語では、固有名詞、その他ある種の特殊な場合にのみ大文字ですが、ドイツ語は名詞なら何でも大書です。

その次に面白いことは、名詞によってつける冠詞がちがっており、冠詞の形によって名詞を男性、女性、中性の三種に分けるという点です。「男」が男性、「女」が女性、その間に生れる「小児」が中性というのは話がわかるが、机が男性で時計が女性というのは、一たいどういうわけでしょう？

しかし、「わけ」なんぞを考えるのは、それこそわけの分らない人のする事で、頭のよい人はすべてを「わけ無く」覚える。日本語で「やすやすと」ということを「訳なく」というのは、こういう所から起ったのでしょう。

一般的に言うと、名詞は必ず定冠詞をつけるとは限りません。今までの例題を見てもわかる通り、Not bricht Eisen. とか Ich bringe Reis. とか言ったように、全然冠詞なく用いることもあれば、また後章に述べるごとく不定冠詞を附する際もあります。けれども、単語を覚えるときには、同時にその性をも覚えなければならないのですから、『Uhr: 時計, 女性!』なんて厄介な覚え方をする代りに『die Uhr: 時計』と覚える方がはるかに覚えやすい。だから、名詞を覚える時には必ず定冠詞をつけて

覚えるのです。まるで一語のように『ディーウール』とですね。単語をたくさん知っ
ていながら、作文となると「私は時計を失いました」という簡単な文すら作れない人
が大部分のように見受けられますが、これはつまり時計を Uhr と覚えたから性を忘れて
構文ができないのです。——ではなぜ『定』冠詞をつけて覚えるか、『不定』冠詞では
いけないか、という疑問が生ずるでしょう。それはごもっともです。しかし、不定冠
詞は、後章に述べるごとく、男性も中性も ein [アイン] であるために、男・中の区
別がわからなくなるのです。

では、der Mann, die Frau などは意味でわかるから性別を覚えなくてもいいかと
いうと、どっこい、そうはゆきません。女でも das Weib (英: *wife*) は中性です、
das Fräulein (未婚婦人, 英: *miss*) も中性です、男でも die Wache (歩哨, 英:
guard, sentinel) は女性です、die Waise (孤児, 英: *orphan*) は男の児でも大抵 die
をつけます。自然の性は必ずしも文法上の性に非ず!

最後に性を示す符号を紹介しておきます。*m.* は男性, *f.* は女性, *n.* は中性のしる
しで、辞書などで用いますから覚えておくこと。たとえば、

Himmel, *m.* 天 Erde, *f.* 地 Meer, *n.* 海

というふうに性を示すのが一般の習慣です。(*m.* は Maskulinum [masku'li:nom],
f. は Femininum [fe'mi'ni:nom], *n.* は Neutrum ['nɔytrom] の略字。)

49. 名詞の格変化

さあいよいよまた変化が始まります。動詞は人称変化 (Konjugation [konju'ga-
tsi'o:n]) でしたが、名詞は格変化 (Deklination [de'kli'na:tsio:n]) というのをするの
です。まず男性の場合をあげると:

第1格	der Mann デル マン			男が, 男は
第2格	des Mannes デス マンネス	あるいは	des Manns デス マンス	男の
第3格	dem Manne デム マンネ	あるいは	dem Mann デム マン	男に
第4格	den Mann デン マン			男を

すなわち、ドイツ語の名詞は、すべてこうした『が・の・に・を』四段の格変化と
いうものをするので、英語なら *to* やら *of* やらを用いるところを、冠詞そのものの
形でも表現し、名詞の語尾 (格語尾という) でも表現するのです。また、一格と四格
は、英語では区別がありませんが、ドイツ語では (男性の場合は) はっきりと冠詞で
区別します。

Der Kaffee reizt den Kopf.
 デル カフエー ライツト デン コッフ

コーヒーは頭を刺戟する。

しかし、男性ばかり覚えたのでは用をなしません。次の表で各性の各格を覚えましょう。括弧で囲った *e* は、いわゆる音便の *e* (41!) で、省くこともある、という意味です。

	男性, <i>m.</i>	女性, <i>f.</i>	中性, <i>n.</i>
第1格 (が)	der Mann	die Frau	das Kind
第2格 (の)	des Mann[e]s	der Frau	des Kind[e]s
第3格 (に)	dem Mann[e]	der Frau	dem Kind[e]
第4格 (を)	den Mann	die Frau	das Kind

(1) 語幹と幹語尾と格語尾

文法上のやかましい術語を覚えるのは、決して学者顔をするためではなくて、概念の明確を期し、認識を促進させるがためです。名称がわかると、なるほどそういう問題があったのかと、今までいい加減に考えていた事をハッキリと考えるようになり、今まで気のつかなかった詳しい事柄に気がつくようになるからです。

語幹というのは、既に (37 の 1.) 動詞の所で述べた通り、上例 *des Mannes* (男の) で言えば *Mann-* までです。この語幹に対して、そのうしろについている *-es* を、格語尾といいます。

それまでは何でもないことですが、次に、たとえば *Himmel* (天) を例にとって考えましょう。*Himmel* には *-el* という「語尾」がついていますが、これは何でしょう? *das Auge* (眼) も *-e* という語尾をもとから持っています。これは何でしょう? これらは、「名詞の語尾」という点では格語尾と同じような感じを与えますが、格語尾のように後からついたものではなく、名詞がもともと持っている語尾ですから、これを幹語尾といいます。

Mann は幹語尾のない名詞、*Himmel*, *Erde*, *Auge* などは幹語尾のある名詞、というわけです。

ドイツ語の名詞の幹語尾は非常に貧弱で、そういろいろな語尾があるわけではなく、主なるものは *-e*, *-en*, *-er*, *-el* の四種にすぎません。(動詞の幹語尾は *-er*, *-el* [44!] 及び *-ig* の三つきり) しかし何のためにこんな微妙なことを詮索するかというと、次をごらん下さい。

(2) 省くこともあるという口調上の音便 *e* は、*-e*, *-en*, *-el*, *-er* の幹語尾を有する名詞にあっては必ず省かなければなりません。たとえば、次にあげた名詞は、女性

は全然格語尾をつけない、男性と中性は二格で -s をつけるだけ、というわけになります。

幹語尾が e	幹語尾が en	幹語尾が el	幹語尾が er
die Katze 猫 カッツェ	der Garten 庭 ガルテン	der Onkel 叔父 オンケル	der Vater 父 ファーテル
die Liebe 愛 リーベ	der Magen 胃 マーゲン	das Mittel 手段 ミッテル	die Mutter 母 ムッテル
die Blume 花 ブルーメ	der Regen 雨 レーゲン	der Titel 表題 ティーテル	der Bruder 兄弟 ブルーデル

(3) 二格語尾 [e]s の音便の e は、省くと口調の悪い尾子音を有する名詞にあっては必ずつけます。たとえば der Arzt [アールツト] (医者) の二格は必ず des Arztes; das Eis (氷) の二格は必ず des Eises。

(4) その他、たとえば der Kommunismus [コンムニスムス] など、-smus に終るものは des Kommunismus と、全然格語尾を省くなど、こうした特殊な例外は、そのつど覚えるの外はありません。

例 題 5

- [1] Die Frau liebt den Mann. [2] Der Mann
フラオ リープト マン
respektiert die Frau. [3] Der Vater gibt dem Sohne
レスペクティールト ファーテル ギープト ソーネ
Geld. [4] Die Mutter gibt dem Kinde Milch. [5]
ゲルト ムッテル ギープト キンデ ミルヒ
Der Onkel ist der Bruder des Vaters oder der
オンケル イスト ブルーデル ファーテルス オーデル
Mutter. [6] Der Garten des Onkels wird grün. [7]
ムッテル ガルテン オンケルス ヴィルト グリューン
Der Kaffee schadet dem Magen. [8] Der Himmel
カッフュー シャーデット マーゲン ヒムメル
küßt die Erde. [9] Die Katze fängt die Maus.
キュスト エールデ カッツェ フェングト マオス
[10] Wissen Sie den Titel des Buches? [11] Das
ヴィッセン ティーテル ブーヘス
Werk lobt den Meister. [12] Auch der König ge-
ヴェルク ロープト マイステル アオホ ケーニヒ ゲ
horcht der Grammatik.
ホルヒト グラムマティック

訳註: [1] 婦人は男子を愛する。lieben: *love*. [2] 男子は婦人を尊重する。respektieren [レスペクティーレン]: *respect*. [3] 父が倅に金をやる。Sohn, *m.*: *son*. (*sun* は *Sonne*, *f.*) [4] 母は子に乳を与える。[5] 叔父は、父もしくは母の兄弟である。oder: *or*. [6] 叔父の庭は緑色になる。grün: *green*. [7] コーヒーは胃に害あり。schaden (害する, 害あり) は次に名詞の三格を要求する。[8] 天が地に口づけする。küssen (*kiss*) は、四格を要求する。[9] 猫が鼠をつかまえる。Maus, *f.*: *mouse*. [10] あなたはその本の表題をご存じですか? [11] 作が作者をほめる。Werk, *n.*: *work, deed*. (作品, 業績, 実績)—Meister, *m.*: *master* (作者, 師)—loben: *praise, commend*. (これはことわざであって、実績さえ立派ならば、本人は黙っていても、事実が物を言う、の意。「作が物を言う」と訳してもよい。)[12] 王も文法には頭があがらぬ。König, *m.*: *king*. auch: *also, too*. (auch der König で「王もまた」、すなわち「王といえども」) gehorchen: *obey* (服従する)。Grammatik, *f.*: *grammar*. (これも有名な警句で、たとえ人間社会の最高位に立って、なんなら天下の法律を土足にかけてもどこからも文句の出所のない王者といえども、ただ一つ、人間の作った規則で、どうしても守らなければならない、また実際戦々兢兢として守っている規則があるとすれば、それはすなわち「言葉使い」に関する規則たる文法というものである。何一つ恐ろしくない者でも、笑われるのだけはよほど恐ろしいものと見える。「王も文法には勝てぬ」と訳すも可。)

50. 男性弱変化名詞

前項の規則を知っていて、そして名詞の性さえわかれば、『が・の・に・を』四段の格変化は完全にできるわけですが、ただ男性名詞には、次のような例外的なものがあります。der Mensch (人間) と der Mann (男子) とは英語では共通の *man* ですが、ドイツ語では全然別語になり、おまけに格語尾のつけ方まで別式になるというわけです。

Mensch <i>m.</i> 人間	Knabe <i>m.</i> 少年
1. der Mensch	1. der Knabe
2. des Mensch-en	2. des Knabe-n
3. dem Mensch-en	3. dem Knabe-n
4. den Mensch-en	4. den Knabe-n

変化様式は Mensch も Knabe も全然同じで、Knabe の方は初めから幹語尾 *-e* を持っているが、Mensch の方にはそれがないだけの相違です。この変化様式は、男性だけにある例外で、女性や中性にはありません。

Mensch <i>m.</i> —en 人間 メンシュ	Held <i>m.</i> —en 英雄 ヘルト
Spezialist <i>m.</i> —en 専門家 シュペツィアリスト	Knabe <i>m.</i> —n 少年 クナーベ
Sklave <i>m.</i> —n 奴隸 スクラーヴェ	Kunde <i>m.</i> —n 顧客 クンデ

Gatte ガッテ	<i>m.</i> — <i>n</i>	良人	Laie ライエ	<i>m.</i> — <i>n</i>	素人
Nachkomme ナーハコムメ	<i>m.</i> — <i>n</i>	後裔	Affe アッフエ	<i>m.</i> — <i>n</i>	猿
Bote ボーテ	<i>m.</i> — <i>n</i>	使者	Kommunist コムニスト	<i>m.</i> — <i>en</i>	共産黨員
Buchstabe ブーフシュターベ (または — <i>ns</i>)	<i>m.</i> — <i>n</i>	字母	Graf グラーフ	<i>m.</i> — <i>en</i>	伯爵

(1) 男性名詞には、強変化名詞と弱変化名詞との別があるということになる

こうした式の男性名詞を男性弱変化名詞と呼び、前項に述べた正式の男性名詞を男性強変化名詞と呼びます。英語

の *man* に相当する *der Mann* と *der Mensch* とは、前者は強変化、後者は弱変化、ということになります。

(2) 辞書をしらべる時の注意

辞書で名詞をしらべるときには、この『強』と『弱』との区別に着目すること。辞書には、女性名詞や中性名詞には別に変化法の注意はありませんが、男性名詞の場合に限って、たとえば次のように強弱の指示が附加されています：

Mann *m.* — (e)s

Mensch *m.* — en

m. とあるのは、もちろん男性ということですが、その次の — (e)s とか — en とかあるのは、二格の形を示したものです。二格が — es または — s なら「強」にきまっているし、— en なら「弱」ということになりますから。しかし辞書によっては「強」とか「弱」とかいう漢字で示しているのもあります。本書では、「弱」の際のみ -n, -en などで二格形を示して「弱」なることを示唆しますが、「強」は正規ですから特に -es など示しません。

例 題 6

- [1] Der Kaufmann versteht den Wunsch des Kunden.
カオフマン フェルシュテート ヴンシュ クンデン
- [2] Das Volk liebt den Helden des Tages.
フォルク リープト ヘルデン ターゲス
- [3] Der Affe ist dem Menschen ähnlich.
アッフエ メンシェン エーシリヒ
- [4] Der Mensch ist der Nachkomme des Affen.
メンシュ ナーハコムメ アッフエン
- [5] Der

Mensch ist der Sklave der Gewohnheit. [6] Die
 メンシュ スクラーヴェ ゲヴォーンハイト

Erklärung des Spezialisten ist dem Laien unverständ-
 エルクレールング シュペツィアリステン ライエン ウン・フェルシュテント

lich. [7] Die Gattin liest den Brief des Gatten. [8]
 リヒ ガッティン リースト ブリーフ ガッテン

Der Graf gibt dem Boten Geld. [9] Der Kommunist
 グラーフ ギープト ボーテン ゲルト コンムニスト

schätzt die Maschine mehr als den Menschen. [10]
 シェッツト マシーネ メール アルス メンシェン

Der Buchstabe tötet den Geist und der Geist macht
 ブーフシュターベ テーテット ガイスト マハト

den Buchstaben lebendig.
 ブーフシュターベン レベンディヒ

訳註: [1] 商人は顧客の望みを理解する。Kaufmann, m.: merchant. Wunsch, m.: wish, desire. verstehen: understand. [2] 大衆はその日の勇者を好む。Volk, n.: people, the vulgar. der Held des Tages: the hero of the day; the idol of the day (時の勇者, その時々の人気者)。[3] 猿は人間に似ている。ähnlich: like, similar. [4] 人間は猿の後裔である。[5] 人間は習慣の奴隷である。Gewohnheit, f.: custom, habit, use. [6] 専門家の説明は素人にとっては難解である。Erklärung, f.: explanation. unverständlich: unintelligible, obscure. [7] 妻が夫の手紙を読む。Gattin, f.: wife, consort. Brief, m.: letter. [8] 伯爵が使いの者に金を与える。[9] 共産主義者は機械というものを人間よりも以上に評価する。schätzen: 評価する (estimate) の意も, 重んずる (esteem) の意もある。die Maschine: machine. mehr: more. als: than (mehr als: 「.....よりも以上に」) den Menschen をこの場合なぜ四格にするかという
 と, それは, 「機械をば, 人間をよりも」という意味関係だからで, die Maschine の方
 もやはり四格である。女性名, 四格が一格と同形だから, 格に気がつかぬことがあるが,
 男性名は四格がはっきりとわかる長所を持っている。[10] 文字は精神を殺し, 精神は文字
 を生かす。töten: kill. Geist, m.: spirit (語源的には ghost (幽霊) で, またその意に
 用いることもある)。machen: make. lebendig: vivid, living, alive. (聖書, コリント
 後書 3, 6, の「それは儀文は殺し, 霊は活せばなり」から出たことば。文字というのは, い
 わゆる死文である。法律でも何でも, 字義に拘泥しすぎると, その精神を没却してしまう。
 その精神から, その本当の意味から考えれば, 死文もたちまち一語一句が躍如として生動
 するに至る, の意。)

第 7 講 人称代名詞の格変化

51. ich, du, Sie の格変化

名詞が格変化をする以上は、ich, du, Sie などの人称代名詞もやはり格変化をします。ただ、名詞とちがうのは、格語尾もなく冠詞もつけず、『が・の・に・を』四段がおのおの別々の単語みたいなものですから、まあ理屈を言わずに丸暗記するしかないという点です。

ich イヒ	私が	du ドゥー	汝が	Sie ジー	あなたが
meiner マイネル	私の	deiner ダイネル	汝の	Ihrer イーレル	あなたの
mir ミール	私に	dir ディール	汝に	Ihnen イーネン	あなたに
mich ミヒ	私を	dich ディヒ	汝を	Sie ジー	あなたを

例 題 7

- [1] Ich liebe dich, aber du liebst mich nicht. [2]
 イヒ リーベ ディヒ アーベル ドゥー リーブスト ミヒ ニヒト
 Ich danke Ihnen sehr. [3] Geben Sie mir das Buch
 イヒ ダンケ イーネン ゼール ゲーベン ジー ミール ブーフ
 da. [4] Ich helfe dir, wenn du mir hilfst. [5] Ich
 ダー ヘルプフェ ディール ヴェン ミール ヒルフスト
 bitte Sie, schlagen Sie mich nicht! [6] Heute mir,
 ビッテ ジー シュラーゲン ジー ミヒ ニヒト ホイテ ミール
 morgen dir.
 モルゲン ディール

訳註： [1] 私はおまえを愛するが、おまえは私を愛さない。 [2] どうもありがとう。
 [3] ちょっとそこの本を取って下さい。 da: *there*. [4] もしおまえがおれに手を貸して
 くれるなら、おれもおまえの手伝いをしよう。 [5] どうか私をぶたないで下さい。 Ich
 bitte Sie: *I pray you*. schlagen: *beat*. [6] 今日は私に、明日はおまえに。 heute:
to-day. morgen: *to-morrow*. (今日は私にこうした禍がふりかかってきたが、その同じ
 禍が明日はおまえの頭上に一下するかも知れないのだぞ、という意のことわざ。『人の不
 幸を見て、人ごとと思うなかれ』。英語でも *to-day mine, to-morrow yours* と言う。)

52. er, sie, es の格変化

次は三人称単数です。中性の es (英: *it*) は、たとえば, das Kind (子供) など, 中性名詞を受ける時に用います。

er エル	彼が	sie ジー	彼女が	es エス	それが
seiner ザイナー	彼の	ihrer イーレル	彼女の	seiner ザイナー	その
ihm イーム	彼に	ihr イーレル	彼女に	ihm イーム	それに
ihn イーン	彼を	sie ジー	彼女を	es エス	それを

例 題 8

[1] Sie schreibt ihm, weil er ihr schreibt. [2]

シュライプト イーム ヴァイル エル イール シュライプト

Sie liebt ihn, traut ihm aber nie. [3] Die Katze

ジー リープト イーン トラウト イーム アーベル ニー

カッツェ

verfolgt die Maus und fängt sie. [4] Die Mutter

フェルフォルクト マオス フェングト

ムッテル

umarmt das Kind und küßt es. [5] Sie sind ihr

ウム・アルムト キント キュスト

ジー ジント イール

jederzeit willkommen.

イエーデルツァイト ヴィルコムメン

訳註: [1] かれが彼女に [手紙を] 書くから, 彼女もかれに [手紙を] 書くのである。weil: *because*. schreiben (書く) は, 人の意の三格と共に用いると「手紙を書く」意。weil を用いると, その次の句の定形は一番最後に置く。denn (*for*) だとそうはならない。[2] 彼女はかれを愛する, しかしかれを決して信用しない。trauen: *trust, rely on*. (trauen は三格と共に用いて「誰それに信頼する」) nie: *never*. aber の位置に注目せよ, aber traut ihm nie というに同じ。[3] 猫は鼠を追跡してこれを捕える。verfolgen: *pursue*. fangen: *catch*. [4] 母は子供を抱擁して, これにキスする。umarmen: *embrace*. [5] あなたはいつ彼女の所へおいでになっても大歓迎です。(逐語的には: あなたは, 彼女に, いつなんどきでも, ウェルカムです) jederzeit: *at any time, always*. willkommen: *welcome*.

53. wir, ihr, sie の格変化

こんどは複数です。だいたい似た形のものが頻出して, まぎらわしくなってきましたが, ここが大事ですから, 一生懸命覚えてください。

wir ヴィール	我々が	ihr イール	汝らが	sie ジー	彼らが
uns[e]rer ウンゼレル	我々の	eurer オイレル	汝らの	ihrer イーレル	彼らの
uns ウンス	我々に	euch オイヒ	汝らに	ihnen イーネン	彼らに
uns ウンス	我々を	euch オイヒ	汝らを	sie ジー	彼らを

例 題 9

- [1] Die Mutter gibt euch Kuchen, wenn ihr artig
ムッテル ギープト オイヒ クーヘン ヴェン アールティヒ
seid. [2] Vater und Mutter loben das Kind, wenn
ザイト ファーテル ローベン キント
es ihnen gehorcht. [3] Bitte, besuchen Sie uns von
イーネン ゲホルヒト ビッテ ベズーヘン ウンス フォン
Zeit zu Zeit! [4] Gott verzeiht euch die Sünde.
ツァイト ツー ツァイト ゴット フェルツァイト オイヒ ズェンデ
[5] Bitte, schreiben Sie uns bald!
シュライベン ウンス バルト

訳註: [1] おまえたちがおとなしければ, お母さんがおまえたちにお菓子をくれる。Kuchen, *m.*: cake. artig: *decent, proper* (お行儀のよい) [2] 父母は子供がかれらに服従するとほめる。[3] どうぞ時々私どもの所へおでかけください。besuchen: *visit, call on*. von Zeit zu Zeit: *from time to time*. [4] 神は汝らに罪を恕し給う。verzeihen: *forgive, remit*. Sünde, *f.*: *sin*. [5] どうかそのうちに私たちにお手紙をください。bald: 「やがて」, 「程なく」, *soon*.

54. 人称代名詞二格について

すでにお気づきだろうと思いますが、『私の』、『おまえの』その他二格の形は、今までの例題にはわざと用いないで来ました。それは、その用法が少しむずかしくて、初歩文法では述べにくいからです。ここでは、ほんのちょっと示唆の程度にとどめておきます。

(1) 人称代名詞二格と物主形容詞とは別物である

たとえば、『彼らの』という
と、英語を知っている人は、すぐ *their* を考える。『私の』といえはすぐ *my* を考える。*my* や *their* に相当するものは勿論ドイツ語にもありますが(後章 59 項で紹介する *mein, ihr* など), しかしそれらは物主形容詞であって、代名詞ではありません。前者は形容詞、後者は代名詞ですから、全然別物です。

ここで問題になっている人称代名詞二格は、英語の *my, your* に相当するものではなく、*of me, of you* に相当する形である、といえは英語を知っている人には多少区別がわかるでしょう。

(2) 用法の一端

ほんの一例ですが、たとえば英語でも『我々はその人たちを二千人救助する』といったような際に「その人たちの二千を」(*two thousand of them*) という形を用いて：

We rescue two thousand of them.

といいます、この *of them* がすなわちドイツ語の人称代名詞二格 *ihrer* で、ただ「二千」と「かれらの」が英語の逆順になって：

Wir retten ihrer zweitausend.
ヴィール レッテン イーレル ツヴァイ・タオゼント

となるだけの相違です。

(3) 人称代名詞二格の略形

少し古めかしい文には *meiner* の代りに *mein*, *seiner* の代りに *sein* など略形を用います。たとえば、英語の *forget-me-not* (勿忘草, わすれな草) は *Vergißmeinnicht* ですが、この *mein* は *meiner* と同じものです。(英 *me* は四格, 独 *mein* は二格)

<i>of me</i> : <i>meiner, mein</i>	<i>of him</i> : <i>seiner, sein</i>	<i>of us</i> : <i>uns[e]rer, unser</i>
<i>of thee</i> : <i>deiner, dein</i>	<i>of her</i> : <i>ihrer</i>	<i>of ye</i> : <i>eu[e]rer, euer</i>
<i>of you</i> : <i>Ihrer</i>	<i>of it</i> : <i>seiner, sein</i>	<i>of them</i> : <i>ihrer</i>

第 8 講 **der, dieser, jener** など, および 形容詞の格変化

55. **dies-er**, この。 **jen-er**, あの。 **jed-er**, おのおのの。 **welch-er**? どの?

定冠詞になれたならば, ほとんど定冠詞と同じ転尾をするこれらの語にも早速なれてしまう必要があります。

dies-er Mann	この男が	dies-e Frau	この女が	dies-es Kind	この子が
dies-es Mannes	この男の	dies-er Frau	この女の	dies-es Kindes	この子の
dies-em Manne	この男に	dies-er Frau	この女に	dies-em Kinde	この子に
dies-en Mann	この男を	dies-e Frau	この女を	dies-es Kind	この子を

定冠詞とよく似た格語尾であることがわかりましょう。定冠詞も, いわば d- に er, es, em, en がついたものと見る事が出来るのですから。——定冠詞とちよっとちがっているのは, die の -ie の代りに -e, das の -as が -es となっているというこの二点だけです。

上表中, 格語尾だけを特に肉太文字で印刷したのは, この格語尾さえしっかりと覚えておけば, 単に **dieser** のみならず, **jener, jeder, welcher**, その他多くの似たものの変化もすべてこれで行くからです。

それらすべてに共通なこの格語尾を, 強語尾と呼んでいます。それは次項で紹介する弱語尾と区別せんがためです。

d-er の d が英語の *the* にあたるごとく, dies- まだが *this*, jen- は (あまり用いない) *yon*, jed- は *each*, **welch-** は *which* に当ります。英語はすべて語幹だけ残って尻尾のちょん切れてしまった言葉と思えば間違いありません。用法は次の例題で。

— 例 題 10 —

[1] Kennen Sie den Autor dieses Buches? [2] ケンネン アオトル ディーゼス ブーヘス
Der Mensch weiß nichts von jener Welt. [3] Ich メンシュ ヴァイス ニヒツ フォン イェーネル ヴェルト

verstehe jedes Wort.	[4] Welchen Weg nehmen
フェルシュテエ イエーデス ヴォルト	ヴェルヒェン ヴェーク ネーメン
wir heute?	[5] Dieser Bruder ist mir gar nicht
ホイテ	ディーゼル ブルーデル ミール ガール
ähnlich.	[6] Jeder Japaner spricht japanisch. [7]
エーンリヒ	イエーデル ヤパ-ネル シュプリヒト ヤパーニツシュ
Was diesem Menschen Glück bringt, bringt jenem	
ヴァス ディーゼム メンシェン グリュック ブリント	イエーネム
Unglück.	
ウングリュック	

訳註: [1] あなたはこの本の著者をご存じですか? kennen: know. Autor: author. [2] 人間は、あの世という奴については何一つ知らない。nichts: nothing. von: of. (von の次には名詞を三格にする) Welt, f.: world. [3] 私は一言一句わかります。verstehen: understand. Wort, n.: word. [4] 我々は今日はどの道をとろう。Weg, m.: way. [5] この兄弟はちっとも私に似ていない。gar nicht: not at all (まるっきり...でない)。[6] どの日本人も日本語をしゃべる。japanisch は大書して Japanisch も可。sprechen を用いる時は、Deutsch または deutsch で、大文字も小文字も用いる。[7] この人間に福をもたらす事が、あの人間には禍をもたらす。Glück: good luck, good fortune. Unglück: misfortune. 「ある者」にはこう、「ある者」にはこう、と対照せしめるには dieser と jener とを並べて用いる。jenem の次には Menschen を省く。

56. der, dieser などの次に来る形容詞の格語尾

今までのところでは、まだ形容詞に関する文法をやりませんでした。形容詞というのは、たとえば Der Baum ist grün. (樹は緑だ) の grün ですが、こういう場合は英語の The tree is green. で、別に文法というほどの事は何もありません。ところが the green tree が der grüne Baum だとなると、この grüne という形はもはやもとの grün ではなく、また例の格変化という奴で、しかも男性一格が -e だとは、これはちょっと研究する必要があります。klein (小さい) で変化表を作ってみましょう:

m.	f.	n.
1. der klein-e Mann	die klein-e Frau	das klein-e Kind
2. des klein-en Mannes	der klein-en Frau	des klein-en Kindes
3. dem klein-en Manne	der klein-en Frau	dem klein-en Kinde
4. den klein-en Mann	die klein-e Frau	das klein-e Kind

形容詞のこの語尾は、その前についている冠詞の強語尾に対して弱語尾と呼ばれます。弱語尾は、要するに一種の音便であって、元来ならば冠詞にも形容詞にも同種の語尾をつけるべきところを、前の冠詞に相当念の入った語尾がついていて、それが十

分『が・の・に・を』の表現をしているから、二度目に来る形容詞には、こうした弱い、格の特徴のはっきりしない語尾をつけるというわけです。

初めてドイツ語をやる人には、この、強いとか弱いとかいう形容が、あまりピンとはこないかも知れませんが、ドイツ人が、ことにこの -en という語尾をいかにも軽く、弱く、口のあたりの筋肉を全然使わないで、ほんの鼻の先だけでフンといったように発音するのを聞いた人は、なるほど『弱』とはうまい事をいったものだと思感で肯定するに違いありません。弱語尾というのは、要するに、-en の多いことをいうのです。前に名詞をやった時にも、Mensch, Menschen, Menschen, Menschen と、ほとんど -en ばかりつく男性名詞のことを弱変化男性名詞といったのもこのわけです。-en に比べると、かえって -e の方が筋肉の努力を要する発音です。たとえば普通の会話で haben はほとんど hamn のように「ハーム」と発音して、唇は閉じただけで弾かずにすみませんが、ich habe という、この be は、唇を閉じた上に更にボンと開けなければならない、両者を何か微妙な計器で計ってみれば、使用カロリーが大変違うでしょう。-er や -es に至っては、指針がピンと跳ね上に相違ない。

そんな事はまあどうでもよいとして、とにかく der, dieser, jener, welcher, jeder などを強語尾に、その後の形容詞を弱語尾にするということを忘れないでください。表示は der でやりましたが、dieser などでも同じです。

例 題 11

- [1] Wer ist der kleine Mann dort? [2] Jedes
ヴェール クライネ マン ドルト イェーデス
 kleine Kind kennt ihn. [3] Ich schenke Ihnen die-
クライネ キント ケント イーン シェンケ イーネン ディー
 sen großen Fisch. [4] Wir lernen die Grammatik
ゼン グローセン フィッシュ レルネン グラムマティック
 der deutschen Sprache. [5] Welchem reichen Manne
ドイチェン シュプラーヘ ヴェルヒェム ライヒェン マンネ
 gehört jenes schöne Haus? [6] Der Fleiß des
ゲヘールト イェーネス シェーネ ハオス フライス
 deutschen Volks ist weltberühmt. [7] Er hilft jedem
ドイチェン フォルクス ヴェルト・ベリュームト ヒルフト イェーデム
 armen Studenten. [8] Kennen Sie die Mutter dieses
アルメン シュトゥデンテン ケンネン ムッテル ディーゼス
 kranken Knaben? [9] Vergessen Sie den Namen
クランケン クナーベン フェルゲッセン ナーメン
 jenes berühmten Dichters nicht! [10] Die Technik
ベリュームテン ディヒテルス テヒニク
 macht die weite Welt eng.
マハト ヴァイテ ヴェルト エング

訳註 [1] あそこの小さな男は誰ですか? *wer?: who? dort: over there, yonder.*
 [2] どの小さな児でも彼を知っています。 [3] あなたにこの大きな魚をあげます。
schenken: present, make a present of. Fisch, m.: fish. [4] 我々はドイツ語の文法
 を学ぶ。 *deutsch: German. Sprache: language.* [5] あの美しい家はどのお金持に属
 しますか。 *Haus, n.: house. reich: rich. gehören: belong, appertain.* [6] ドイツ
 国民の勤勉は世界的に有名である: *Fleiß m.: diligence, industry. weltberühmt:*
world-renowned, world-famed. [7] かれはどの貧乏学生にも援助を与える。 *arm:*
poor. Student, m. —en: student. [8] あなたはこの病気の少年の母を知っています
 か。 *krank: sick.* [9] あの有名な詩人の名を忘れてはいけません。 *Name* または *Na-*
men, m.: (二格以下は *Namen* を語幹とする): *name. berühmt: famous. Dichter, m.:*
poet. [10] 技術は広い世界を狭くする。 *weit: wide. eng: narrow. Technik, f.:*
technics. (アメリカまでも一足飛び、月の世界も今に避暑地になる、など)

57. 形容詞に語尾をつける際の注意

語幹が *-el, -er, -en* の幹語尾 (49 の 1) を有する形容詞 (*dunkel* 暗い, *edel* 貴い, *finster* 暗い, *heiter* 明朗な, *offen* 開いた, *trocken* 乾いた, など) は、幹語尾の *e* を省いて語尾をつけることがあります。ことに *-el* の際は大抵省きます: *der dunkle Himmel* 暗い空, *der edle Wein* 薫酒, など。

hoch 高い (発音は *o* を長く: *ho:x*) は、格語尾をつける時、*hoh-* という語幹を用います。すなわち『天は高い』は *Der Himmel ist hoch.* でよろしいが、『高い天』は *der hohe Himmel* でなければなりません。ただしこんなことはこの一語きりです。

第 9 講 ein, kein, mein など, および

形容詞の格変化

58. 不定冠詞 ein の格変化

英語でもドイツ語でも、『ある男』とか『一つの本』とかいう場合は不定冠詞をつけますが、ドイツ語の不定冠詞は英の *one* に相当する *ein* で、その格変化は:

<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>
1. ein Mann	ein-e Frau	ein Kind
2. ein-es Mannes	ein-er Frau	ein-es Kindes
3. ein-em Manne	ein-er Frau	ein-em Kinde
4. ein-en Mann	ein-e Frau	ein Kind

すなわち、男性一格と中性一格四格と、この三ヵ所において強語尾をつけないのを以て特徴とします。作文の際に初心者がよくやる誤りは、『一人の男』を *einer Mann* などとやる失敗です。

この *ein* や *eine* は、不定冠詞であると同時に、また数詞でもあります。すなわち英語の *a man* も *one man* も、ドイツ語では共に *ein Mann* なのです。ただ、*a man* の意には「アイン・マン」と名詞の方に強声を置き、*one man* の意には「アイン・マン」と前を強めて発音します。

kein (英の *no*) という否定冠詞もこれと全然同じ変化をします。 *I have no child.* は *Ich habe kein Kind.*

例 題 12

- | | |
|--|---|
| [1] Ihr habt keinen Vater.
イール ハープト カイネン ファーテル | [2] Das ist das Haus
ダス ハオス |
| eines Dichters.
アイネス ディヒテルス | [3] Haben Sie eine Schwester?
ハーベン アイネ シュヴェステル |
| [4] Das ist der Titel eines Romans.
ダス ティーテル アイネス ロマーンス | [5] Ich verstehe
フェルシュテエ |
| kein Wort Japanisch.
カイン ヴォルト ヤパーニッシュ | [6] Er ist reich, hilft aber
ライヒ ヒルフト |

keinem Menschen.	[7]	Das ist der Name einer
カインム メンシェン		ナーメ アイネル
Stadt.	[8]	Dieses große Haus gehört einem Millio-
シュタット	ディーゼ グローセ ハオス ゲヘールト アイネム ミルリオ	
när.	[9]	Der Staat braucht einen Mann der Tat.
ネール	シュタート ブラオホト アイネン タート	
[10]	Kein Volk folgt einem Mann des bloßen Wortes.	
カイン フォルク フォルク アイネム ブローセン ヴォルテス		

訳註: [1] おまへたちは父を持たない。 [2] それはある詩人の家です。das ist: that is. (das は中性の冠詞であると同時に、「それ」の意がある。) [3] あなたは姉妹をお持ちですか。Schwester, f.: sister. [4] それはある小説の名である。Roman, m. (発音に注意せよ, [ローマン] に非ずして [ロマーン]): novel. [5] 私は一言も日本語がわかりません。 [6] あいつは金持だが、誰をも助けない。helfen は三格支配。 [7] それはある都会の名です。Stadt, f.: city, town. [8] この大きな家はある百万長者のもので。Millionär, m.: millionaire. [9] 国家は行為の男児を必要とする。Staat, m.: state. brauchen: want, need. Tat, f.: deed, act. (Staat 「国家」と Stadt 「都会」とを区別して覚えること!) [10] いかなる国民も単なる言葉の人には従わない。folgen: follow. bloß: mere. (口先だけうまい事を言う男の意。)

59. 物主形容詞も不定冠詞と同じ変化

物主形容詞というのは英語の *my, your* などです。まず物主形容詞には次のようなものがあります。

	単 数			複 数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
独	私の mein マイン	汝の あなたの dein Ihr ダイン イール	かれの 彼女の それの sein ihr sein ザイン イール ザイン	我らの unser ウンゼル	汝らの euer オイエル	彼らの ihr イール
英	my	[thy] your	his her its	our	your	their

備考: 「あなたたちの」の ihr は単数と同形ゆえ省略した。

これらを全部頭の引出しに詰め込むのも一苦勞ですが、さてそれを前項の ein と同式に転尾させるのも容易なことではありません。だいいち、みんなそれぞれ違っていればかえって覚えいいのですが、ihr, Ihr のように、同じものがあるので困ります。けれども、そのまぎらわしいところを刻明に覚えるのが頭がよいのです。

ihr といえば、第7講でやった『彼女に』も ihr でした。『汝らが』も ihr でした。全然ちがった ihr が四つあるわけになります。

それから sein (*his*) は、動詞の sein (*to be*) (47!) と全然同形ですが、これは他人の空似(そり)で、両者の間に何の関係もありません。

(1) unser, euer の転尾法

数ある物主形容詞中、unser と euer だけは -er という幹語尾を持っています。この幹語尾が発音上少々わずらわしいので、たとえば「我らの父に」を unserem Vater, unsrem Vater, unserm Vater と、三通りに言います。euer も euerem, euerm, eurem の三通りが生じます。三格以外も同様です。

(2) 幹語尾と格語尾とを混同するなかれ

たとえば、『我らの母の』と言うには unser-er Mutter と、-er がある上に更にまた -er をつけなければなりません。unser Mutter でよいと思うのは、幹語尾と格語尾との混同です。

例 題 13

- [1] Jede Sprache hat ihre Schönheit. [2] Er und
 イェーデ シュプラーヘ イーレ シェーンハイト エール
 sein Kamerad besuchen ihren Lehrer. [3] Jeder
 ザイン カメラート ベズーヘン イーレン レーレル イェーデル
 Mensch ist ein Kind seiner Zeit. [4] Euer Lehrer
 メンシュ キント ザイネル ツァイト オイエル レーレル
 ist ein Freund unseres Vaters. [5] Dein Feind ist
 フロイント ウンゼレス ファーテルス ダイン ファイント
 zugleich mein Feind, denn ich bin dein Freund.
 ツーグライヒ マイン デン フロイント
 [6] Unser Land verdankt seinen Aufstieg erstens
 ウンゼル ラント フェルダンクト ザイネン アオフシュテイク エールステン
 der chinesischen Kultur, zweitens aber der europäi-
 ヒネージッシェン クルトウール ツヴァイテンス アーベル オイロペーイッ
 schen Zivilisation.
 シェン ツィヴィリザツィオーン

訳註: [1] いずれの言語もその美を持っている。Schönheit, *f.*: *beauty*. (*ihre* を用いたのは, Sprache が女性ゆえ) [2] かれと, かれの仲間は, かれらの教師を訪問する。Lehrer, *m.*: *teacher*. [3] 人はおのおのその時代の子である。Zeit, *f.*: *time*. [4] 君たちの先生は, 僕らの父の友人だ。Freund, *m.*: *friend*. [5] おまえの敵は同時におれの敵だ, 如何となればおれはおまえの味方だから。zugleich: *at the same time*. Feind, *m.*: *foe, enemy*. Freund (友) は「味方」の意にも用いる。[6] 我国はその勃興を第一には支那の文化に, 第二にはしかし欧州文明に負うものである。verdanken: *owe*. (英語の *owe* は不思議にも日本語の「負う」で, 「ある物がある人に負うところが多

い』(ある人のおかげである), *to owe something to someone* という用い方をするが, その *owe* がドイツ語では *verdanken* で, 用い方も同様である。詳細は 108 項参照。) *Aufstieg*, *m.*: *ascent*. *erstens*: *firstly, in the first place*. *zweitens*: *secondly, in the second place*. *chinesisch*: *chinese*. *Kultur*: *culture*. *europäisch*: *European*. *Zivilisation*, *f.*: *civilization*.

60. ein, kein, mein などの次にくる形容詞の格変化

この項は 56 と対照して研究していただきます。不定冠詞など, この講でやったものの次にくる形容詞の格語尾は, 次表中肉太文字のところだけが 56 の場合とちがい, 他は全然同じです。

ある小さな男, <i>m.</i>	ある小さな女, <i>f.</i>	ある小さな子, <i>n.</i>
ein klein-er Mann	eine klein-e Frau	ein klein-es Kind
eines klein-en Mannes	einer klein-en Frau	ein-es klein-en Kindes
einem klein-en Manne	einer klein-en Frau	ein-em klein-en Kinde
einen klein-en Mann	eine klein-e Frau	ein klein-es Kind

この太文字で示した三ヵ所は前にある冠詞に強語尾 (-er, -es, -es) がありませんから, その強語尾を形容詞の方が担当するというわけです。

56 項の場合と, この場合とは, よく混同されそうですから, あんまり先を急がないで, ここで一度よく表を覚えてしまうこと。

例 題 14

- [1] Ich schreibe meinem alten Vater einen langen
イヒ シュライベ マイネム アルテン アイネン ランゲン
 Brief. [2] Er liebt seinen kleinen Bruder. [3] Ihr
ブリーフ リープト ザイネン クライネン ブルーデル
 vergeßt das Schicksal eures armen Vaterlandes. [4]
フェルゲスト シックザール オイレス アルメン ファーテル・ランダス
 Ist unser Gast noch hier? [5] Die Mutter trägt ihr
ウンゼル ガスト ノホ ムッテル トレークト イール
 krankes Kind. [6] Ein ehrlicher Feind ist besser
克蘭ケス キント エールリッヒェル ファイント ベッセル
 als ein falscher Freund. [7] Erfolg ist ein rasches
アルス ファルシェル フロイント エルフオルク ラッシェス
 Gift. [8] Das menschliche Leben ist eine lange
ギフト メンシュリッヒェ レーベン ランゲ
 Komödie mit einem kurzen, tragischen Schluß.
コメーディエ ミット クルツェン トラーギッシェン シュルス

訳註: [1] 私は私の年寄った父に長い手紙を書く。 [2] かれはかれの小さな弟を愛する。 [3] 諸君は諸君の哀れな祖国の運命を忘れている。 Schicksal, *n.*: *fate, destiny*. Vaterland, *n.*: *fatherland*. [4] わたしたちのお客さまはまだこちらにお見えになりますか? Gast, *m.*: *guest*. noch: *still*. [5] 母が彼女の病める子を抱いている。 tragen: *bear*. [6] 心の許せぬ味方よりも、正直な敵の方が始末によい。 ehrlich: *honest*. falsch: *false*. besser als: *better than*. [7] 成功は[回りの]速い毒薬である。 Erfolg, *m.*: *success*. rasch: *prompt*. Gift, *n.*: *poison*. (人間は成功するとすぐ慢心して駄目になる、という意のことわざ) [8] 人生は、短かい悲劇的大詰を控えた長い喜劇である。 menschlich: *human*. Leben, *n.*: *life*. lang: *long*. Komödie (発音: ko'mø:diə): *comedy*. mit: *with*. (mit は三格支配ゆえ、次に einem となっている) kurz: *short*. tragisch: *tragic, tragical*. Schluß, *m.*: *close, end*.

61. 前に何も来ない場合の形容詞の格変化

形容詞の格変化には、以上 (56, 60) に述べた場合の外、更に第三の場合があります。それはすなわち:

Lieber Freund! 親愛なる友よ! (*Dear friend!*)
リーベル フロイント

といったような、名詞の前に形容詞のみが立つ場合です。(lieb は「親愛なる」という形容詞で, lieben, love, という動詞とは直接関係のない別語です。)

こういう場合の格語尾は、次に示すごとく、男性中性の二格が弱 (-en) で、他はすべて強語尾です。

よいぶどう酒, <i>m.</i>	よい乳, <i>f.</i>	よいビール, <i>n.</i>
gut- er Wein	gut- e Milch	gut- es Bier
gut- en Weins	gut- er Milch	gut- en Biers
gut- em Wein	gut- er Milch	gut- em Bier
gut- en Wein	gut- e Milch	gut- es Bier

以上で、形容詞の格変化は、単数の場合だけは終わりました。あとは複数の場合があるわけですが、これは次の講にゆずります。

第 10 講 名詞の複数形

62. 英語とドイツ語の差

そもそも名詞の形に単数形と複数形との差別があるという事は、英語もドイツ語も同じことですが、その両者がどういうふうに違うかという問題になると、英語とドイツ語とは、ある種の意味において、全然逆だという事が言えます。逆とはどういう意味かという、英語では *-s* さえつけば複数形になる名詞が大部分ですが、ドイツ語では *-s* で複数をつくる名詞はある種の特殊なものに限られています。英語では、*man* が *men* になったり、*mouse* が *mice* になったり、*child* が *children* になったりするのを不規則と称して例外視していますが、ドイツ語では *Mann* が *Männer* となり、*Maus* が *Mäuse* となり、*Kind* が *Kinder* となるのは、これが常道であって、名詞のほとんどすべてがそうなのです。だから、英語をやった後にドイツ語をやると、ドイツ語では名詞の複数形は全部不規則だという印象を受けます。

そういえばなるほど、その通りで、英語をやる人が *men* は *man* の複数、*oxen* は *ox* の複数、*sheep* は複数も *sheep*..... といったように、複数形をおのおの別個の単語として記憶しなければならないように、ドイツ語をやる人もまた、(少なくとも初歩の間は)複数形を各名詞について一つ一つ別に暗記して行かなければならないわけで、この意味においてドイツ語の複数形は全部不規則であり、全部例外であるといえます(全部例外という言葉は、おかしい言葉ですが)。

では、複数形(これからは *pl.* という略語を用います、これは英語も同じで、ラテン

大別	細 別	単複の関係	例	語
同 尾 式	同 音 同 尾 変 音 同 尾	<i>s.</i> — <i>pl.</i> — <i>s.</i> — <i>pl.</i> —	車 <i>der Wagen</i> 父 <i>der Vater</i>	die Wagen die Väter
E 式	同 音 E 式 変 音 E 式	<i>s.</i> — <i>pl.</i> — <i>e</i> <i>s.</i> — <i>pl.</i> — <i>e</i>	日 <i>der Tag</i> 鼠 <i>die Maus</i>	die Tage die Mäuse
R 式	a, o, u, au は 変 音	<i>s.</i> — <i>pl.</i> — <i>en</i>	家 <i>das Haus</i> 子 <i>das Kind</i>	die Häuser die Kinder
N 式	同 音	<i>s.</i> — <i>pl.</i> —(e) <i>n</i>	人 <i>der Mensch</i> 島 <i>die Insel</i>	die Menschen die Inseln

語の *pluralis* の略。単数は *s.* で、*singularis* の略。) は、支離滅裂で、あらゆる形があって、全然無茶苦茶かという、そういうわけでもありません。不規則な中にもある種の規則があり、大別すると四種、細別すると八種の型があります。前頁の表をしばらくにらんでください:

この表を十分研究した後に、以下の諸点をはっきりと頭に入れること。

(1) 複数に性や数を区別せず、たとえ何性でも、定冠詞はすべて *die* となります。ゆえに女性と間違えないようにしなければなりません。

(2) 変音に関する法則によく注意すること。たとえば、*Häuser* などという形を見たら、*-er* 式の複数形はいやしくも変音可能な幹母音 (ここでは *au*) があればすべて変音するはずで、これはちょうどその条件をそなえているゆえ、単数は *Haus* でないか、というふうに察するようにならなければなりません。

(3) 複数になると子音の発音が変わって来ることがあります。それは発音の法則を知っていればわかることです。たとえば「ハオス」、「ホイゼル」の *s* もそうですが、また *Buch*, *n.* (書物) の *ch* は標音 [x] ですが、複数 *Bücher* は [ʔby:çər] で、*ch* の発音がちがって来ます。*ch* は *u* の後では喉音、*ü* の後では舌音ですから (15, 16)。

(4) 複数形は、単語をたくさん覚えていくうちには、自然と類推できるようになります。また、ごくわけのない、細々した雑則があります。たとえば、*Mensch*, *Knabe* など、いわゆる弱変化男性名詞 (50) は、すべて *N* 式で、必ず *Menschen*, *Knaben* となる……といったようにです。

(5) ある種の外来語は、英語のごとく、*-s* を付して *pl.* を作ります。たとえば *das Photo* 「写真」 (*pl. die Photos*), *der Kimono* 日本の「着物」 (*pl. die Kimonos*), *der Streik* 「ストライキ」 (*pl. die Streiks*)。

例 題 15

複数を書き、かつ発音せよ:

- [1] *der Onkel*, *pl.* — (叔父) [2] *der Tag*, *pl.* — *e*
 (日) [3] *das Lied*, *pl.* — *er* (歌) [4] *die Frau*, *pl.* — *en* (女)
 [5] *der Bruder*, *pl.* — (兄弟) [6] *der Baum*, *pl.* — *e* (樹)
 [7] *der Mann*, *pl.* — *er* (男) [8] *die Mutter*, *pl.* — (母)
 [9] *das Weib*, *pl.* — *er* (女) [10] *der Zahn*, *pl.* — *e* (歯)
 [11] *der Titel*, *pl.* — (表題)
 [12] *das Buch*, *pl.* — *er* (書物) [13] *die Hand*, *pl.*

—e(手) [14] Gott, *m. pl.* —er(神) [15] der Mond,
pl. —e(月, 太陰, 衛星)

63. 複数の格変化

以上に研究したのは、格の見地からいうと、すべて複数一格の形であって、複数にもやはり『が・の・に・を』四段の格変化があることは改めて申すまでもありません。ところが、複数の格変化はすこぶる簡単で、しかも一つの例外もありません。要約すると、次の二点につきます：(1) 前に置く冠詞類 (dieser, mein, その他) には -e, -er, -en, -e の語尾をつける。ただ定冠詞だけは -e が -ie になる。(2) 名詞そのものには、三格で -n をつける。ただし既に n があればつけない。

車	私の子供たち	この日々
die Wagen	mein- e Kinder	dies- e Tage
der Wagen	mein- er Kinder	dies- er Tage
den Wagen	mein- en Kinder- n	dies- en Tage- n
die Wagen	mein- e Kinder	dies- e Tage

-s で複数を作るもの、その他特殊な例外は、各格を通じて同形になります。たとえば Photo, *n.* (写真) は die Photos, der Photos, den Photos, die Photos と変化します。(この語の Ph は、近時は F で Foto とも書きますが。)

例 題 16

- [1] Meine Katze fängt keine Mäuse. [2] Er liest
マイネ カツェ フェンクト カイネ モイゼ リースト
 nur die Titel der Bücher. [3] Die Hände der
ヌール ティーテル ビューヒェル ヘンデ
 Hausfrauen rasten nie. [4] Jede Mutter liebt ihre
ハオス・フラオエン ラステン ニー イェーデ ムッテル リープト イーレ
 Kinder. [5] Die Brüder der Väter oder der Mütter
キンデル ブリューデル フェーテル オーデル ミュッテル
 sind die Onkel. [6] Weiber reden, Männer handeln.
オンケル ヴァイベル レーデン メンネル ハンデルン
 [7] Die Menschen sterben, aber der Mensch stirbt
シュテルベンアーベル メンシュ シュティルプト

nicht. [8] Den Kindern ist das Spiel Ernst und
ニヒト シュピール エルンスト
 der Ernst Spiel. [9] Gott gibt den Menschen Zäh-
ゴット ギーフト ツェー
 ne, aber kein Brot. [10] Der Mars hat zwei Monde.
ネ ブロート マルス ツヴァイ モーнде

訳註: [1] 私の猫は鼠を捉えない。 [2] かれは書物の標題だけ読む。 [3] 家婦の手は瞬時も休まない。 *nie: never.* Hausfrau, f. は Haus と Frau との合成語。合成語の性は後に来る語の性で定まり、複数形も後の名詞を複数形にする、すなわち Häuserfrauen などと両方ともかえてはいけない。 [4] いずれの母もわが子を愛する。 [5] 父たちまたは母たちの兄弟たちは叔父たちである。 [6] 女はしゃべる、男は実行する。 *reden: talk. handeln: act.* (こうした強調した言い方には冠詞を省く) [7] 人間どもは死ぬが人間は死なぬ。(これはちょっと分かりにくいかも知れない。複数具体的な個々の人間のことを言い、単数の der Mensch は英の *man* で『そも人間なるもの』である。具体的な個人個人は、死んでは生れ、生れては死んでゆくが、そも人間なる現象は、何千年前とちっとも変わらず、今後また変らない、の意。) [8] 子供にとっては遊戯が重大事で、重大事が遊戯である。 Ernst, m. (たまじめなことがら、真剣): *earnest, seriousness.* Spiel, n.: *play.* [9] 神は人間に齒は与えるが、パンは与えない。(俚諺。つまりパンは自分で稼ぐべしというわけであろう) Brot, n.: *bread.* [10] 火星は二つの衛星をもっている。

64. 複数形の前に来る形容詞の格変化

複数名詞に冠せられる形容詞は、もし前に冠詞または diese, meine などがあれば各格とも -en を付し、もし前に冠詞の類がなければ、-e, -er, -en, -e をつけます:

小さな子供たち	小さな子供たち
die klein-en Kinder	klein-e Kinder
der klein-en Kinder	klein-er Kinder
den klein-en Kindern	klein-en Kindern
die klein-en Kinder	klein-e Kinder

例 題 17

[1] Der Sommer hat lange Tage und kurze Näch-
ゾムメル ランゲ ターゲ クルツェ ネヒ
 te. [2] Er vergißt manchmal die Namen seiner vie-
テ フェルギスト マンヒマール ナーメン ザイナー フィー
 len Söhne und Töchter. [3] Sie wird Mutter zweier
レン ゼーネ テヒテル ヴィルト ムッテル ツヴァイエル

Söhne. [4] Mutigen Männern gehorcht auch das
 ゼーネ ムーティゲン メンネルン ゲホルヒト アオホ
 Schicksal. [5] Die großen Taten der großen Män-
 シックザール グローセン ターテン グローセ: メン
 ner sieht die ganze Welt; die vernünftigen Taten
 ネル ジート ガンツェ ヴェルト フェルニユンフティゲン ターテン
 der vernünftigen Männer sieht nur Gott.
 メンネル ゴット

訳註: [1] 夏は長き昼と短き夜を有す。lang: long. kurz: short. Nacht, f.: night. [2] かれは往々かれの多くの息子たちや娘たちの名を忘れることがある。manchmal: sometimes, often. viel: many. Sohn, m.: son. Tochter, f.: daughter. [3] 彼女は二人の男の子の母になる。zwei: two. (普通ならば zwei には格語尾をつけないところであるが、このように、二格であることをはっきりさせるためには、zwei と drei (three) には -er をつける。von (of) を用いれば次は三格になるから Sie wird Mutter von zwei Söhnen. である。) [4] 勇ある男たちには運命も服従する。mutig: courageous. (いわゆる「断じて行なえば鬼神も避く」に当たる。) この文の主語は das Schicksal であって、その定形は gehorcht であるが、こうした配語法が次講で説明する定形倒置である、次の 5 もその通り。[5] 偉人の偉業は全世界がこれを見、賢者の賢行は神のみがこれを見る。(偉大であるという事と、正しく善であるという事とは、全然ちがった二つの事柄であって、偉大は必ずしも善に非ず、善必ずしも偉大に非ず、否人生の実際は、両者はむしろ背馳すると言っても過言ではない。偉大ならんとすれば少々悪い事もすることになる、善ならんとすれば現世において酬いを期待してはならない。) Tat, f.: deed, act. ganz: whole. vernünftig: reasonable. (賢明な、事のわかった、思慮ある)

第 11 講 定形とその位置

65. 定形 (verbum finitum)

定形という概念は 37 で説明しました。たとえば *kommen* (来る), 英 *to come*, は不定形ですが, *ich komme*, *du kommst* と人称変化すると, この *komme* や *kommst* は定形です。また英の *He will come*. (独では *Er wird kommen*.) では, *come* は定形ではなくて不定形, 助動詞 *will* の方が定形です。 *He has come*. (*Er ist gekommen*.) にあっては *come* は過去分詞, *has* の方が定形です。

ドイツ語の文章論において最も重要なのは, 一つの文章の中における定形の位置で, 英語の構文とドイツ語の構文との間の最も著しい相違がこの一点にあるのですから, 以下に述べる事の中には少々ばかばかしい事もあるかも知れませんが, 一步一步よく気をとめてお読みねがいます。

66. 定形正置

その昔, 日本語以外の外国語というものを全然知らず, 言語はすなわち日本語であり, 日本語はすなわち言語であると思っていた我々の祖先は, ある日のこと突如として漢文というものに接して眼をまるくしました。「君子は本を務む」ということを「君子は務む本を」という! 「我汝を愛す」ということを「我愛す汝を」という! まるで逆です。初めはどうしても読みづらくて仕様がなから, 返り点を打ったり, 一二三と番号を打ったりして, 文字通り七転八倒しながら読んだが, だんだん慣れて来ると, この動詞を前に置く言い方がひどく気に入ったと見えて, ついには『乞う我がために酒を設けんことを!』とか何とか言って, 日本語の中でもそうした配語法をまねるようになった。けれどもこれはただハイカラ (*high collar* だというのが, あるいは拝唐だろうとも言います) な連中だけのやったことで, 日本語は相変わらず動詞 (すなわち定形) を文章の一番最後へ持ってくることをやめなかった。すなわち, 定形後置という現象は, 漢文の渡来にもかかわらず, いぜんとして今日までつづいて来たのです。

ところが, その後, 西洋人という奴が現われて, こいつがまた『我汝を愛す』というのを『我愛す汝を』(*I love you*, *Ich liebe dich*.) と言う。日本人はまたおどろいた。こいつも昔の唐人の一種だ, こんどは毛唐人だ...

しかし, こんどは返り点や番号を打つわけにいなかった。というのは, 漢文はみな紙に書いてあったが, オランダ語や英語という奴はペラペラしゃべりやがるので,

返り点を打とうと思っているうちに風でどこかへ飛んでしまうからです。ところがそれが大変よかったので、そのために中学校の先生も別に『アイはユーをラヴす』なんてんで翻転したり急降下したり空中分解したりする必要がなくなってしまった。西洋語を習う人たちにとっては、この『我愛す汝を』という並べ方が一種の通念になってしまって、たとえば『お父さんとお母さんとが浅草へ行きます』という英作文を *Father mother Asakusa go.* などとやると、一つ噺になって残ってしまう位です。(これはマアどうせ誰か英語の先生が発明した話ではないかと思いますがね。)

話が少しくだらなくなりましたが、このあまりにも解かりきった基礎問題に対してこの際俄然驚異の眼を向けるという事は決してくだらなくない。この、まず第一位に主語をすえ、その次にすぐ定形(すなわち動詞)を持って来るという配語法は、これがおそらく最も自然な配語法であり、現に世界中の大抵の言語がそうしているのです。そうしていないのは、日本語とか朝鮮語とか蒙古語とか(あるいは西洋の古代の言語)といったような、少し悠長な、大勢の進歩にとり残された言語だけだったのです。支那語や西洋語が『我愛す汝を』において軌を一にしているのは、早くから進歩していた支那と西洋のことゆえ、むしろ当然の現象であったのです。

この、最も自然な、西洋の現代語や漢文などに共通な動詞の位置を、かりに定形正置と呼ぶことに致しましょう。(Father mother Asakusa go や、日本語の動詞の位置などは、これを定形後置と呼んで、いずれまた項を改めて詳述することに致します、ドイツ語にもそれがあるのですから。)

ドイツ語の定形正置については、改めて述べるには及びません。今までにやって来た文例のほとんどすべてが定形正置で、英語を知っている人は、*Father mother Asakusa go* 組でない限り、これを当然のこととして受け入れて来たでしょうから。ただ一つだけ特に強調しておきたいのは、ドイツ語は、英語に比べると、定形正置の点において更に一層嚴重である、という一事です。英語では例えば *He often comes to me.* とか、*I rarely meet him.* とか *Her husband tenderly kissed her cheek.* とかいったように、副詞を定形よりも前に置くことがあります。ドイツ語ではそれはいけません。*He often comes to me.* は *Er oft kommt zu mir.* ではなくて、*Er kommt oft zu mir.* と、なかなか定形正置が杓子定規です。

67. 定形倒置

定形正置に対して、たとえば *kommt er* といったふうに、動詞の次に主語を置く並べ方を定形倒置と呼ぶことに致します。これは、たとえば疑問文において用いられる語順で、*Kommt er?* (彼は来ますか?) *Liebst du mich?* (おまえは私を愛するか?) *Ist er krank?* (かれは病気ですか?) などの例は、既にこれまでの例題にたびたび用いて来ました。また *Sie kommen.* (あなたは来る) に対して *Kommen Sie?* の

外に *Kommen Sie!* (来たまえ, いらっしゃい) という命令形があるということもご存じのはずです。また *was?* (*what*) とか *wo?* (*where*) とか, その他疑問詞が先頭に来ると, その次が定形倒置になって *Was bringen Sie da?* (あなたはそこへ何を持って来たのですか) などと言うことも, ほぼおわかりの事と思います。

ところで, これからがドイツ語特有の癖になりますが, この定形倒置は, 以上に述べた場合のほか, 次のような場合にも用いるのです。kommt er を例に用います。

- | | |
|--------------------------------|---------------|
| 1. Da kommt er. | そこへ彼が来る。 |
| 2. Spät kommt er. | おそく彼は来る。 |
| 3. Zu mir kommt er. | 私の所へ彼は来る。 |
| 4. Oft kommt er zu mir. | しばしば彼は私の所へ来る。 |

共通な点を考えれば法則はおのずと発見されるでしょう。法則というのは, つまり, 主語以外の語句が文頭に置かれた場合には, その次は定形倒置にする, ということです。英語ならば *There* をまっさきに置いてもその後は *he comes*. でよろしいが, ドイツ語では *Da er kommt*. は絶対に許されないのです。

主語以外のものを文頭に置くというのは, その語句を特に強調せんがためで, 上に挙げた文例の訳をごらんになればわかりましょう。(なお既出の例題 17 の [4], [5] が好例です。)

備考: 英語ではこの現象はむしろ例外的で, 無いことはないが, ドイツ語のようにやかましい規則にはなっていません。また, ある種の場合には, 正置でも倒置でも, どちらでもよいという, すこぶるのんびりしたところがあります。例えば *So wags the world*. (世態はかくの如し, これが世の中) でも *So the world wags*. でもよい, など。ドイツ語は必ず *So geht die Welt*.

68. 定形後置

定形正置と定形倒置とは, 多少の相違こそあれ, とにかくまあ大体英語と同じでした。ところで, ドイツ語には, 英語にない定形後置という並べ方があります。すなわち我々が使っている日本語と同じ並べ方がです。

定形後置というのは, わかりよく言えば例の有名な *Father mother Asakusa go* です。もっとひどいのになると, 『私の父は月々私のところへやって来ます』という英作文を *I's father month month to me come* とやったというが, こうなるともう徹底していてむしろ可愛げがある。英作文の先生は天を仰いで長歎息するが, 独作文の先生は我が意を得たりとばかり悦に入るでしょう。如何となればドイツ語ではそれであればならぬ場合があるからです。もっとも *I's father* や *month month* は少々困るが, *come* の位置は大変よろしい。comes だったらなおよかったでしょう。すなわち:

.....mein Vater allmonatlich zu mir kommt.
 マイン ファーテル アルモーナトリヒ ツー ミール コムト
 (.....my father every month to me comes)

もっとも、このままではちょっと困るので、最初のところに何か *daß* (*that*) とか *wenn* (*if, when*) とか *weil* (*because*) とか *obgleich* (*although*) とかいったような接続詞がこなければいけません。たとえば、

Du weißt, daß mein Vater allmonatlich zu mir kommt.
 ドゥー ヴァイスト ダス

君は、私の父が毎月私の所へ来るという事を知っている。

とでもすれば、これでもう立派なドイツ語なのです。

これでいよいよ法則を定義化することができます。その法則というのは：接続詞、関係代名詞、および疑問詞によって導かれる句は定形を後置する。

だからドイツ語では、たとえば、よくあることですが、『この接続詞はいったいどこまで引っかかるのだろうか?』といったような、英語によくある疑問は生じないわけです。私は今、疎開地の信州妻籠村にいて、村の青年に炉ばたで英語を教えています。数日前 *Hanoi still presents the appearance of a ghost city although fighting inside the city has long ended and general conditions slowly improved.* という文を説明していると、一人の青年が、『私は *although* が *has long ended* までしかかからないのかと思って読んだので意味がとれなかった』と言ったので、なるほど英語という奴には慣れない人にはそんな困難があるかと思って感心した次第です。これがドイツ語なら、*although* に導かれる句の定形すなわち *has* が一番最後へ来るでしょうから、*although* がおしまいまで全部を一括して率いているという事は、この定形後置によって形式的に明瞭に示されることになるでしょう。

この定義の中に、接続詞、関係代名詞、疑問詞と、三つの場合を分類して挙げたのは、ごく实际的にわかりよく言ったままで、本当をいうと、単に接続詞といってもよいところなのです。なぜというに、関係代名詞というのは要するに代名詞の形をとった接続詞であり、疑問詞 (*was* など) も、この場合で言う疑問詞は、接続詞の役目をする疑問詞だからです。たとえば『毎月私のところへやってくる友人』となると *Ein Freund, der allmonatlich zu mir kommt* となり、コンマの次の *der* は英語の *who* で、これは関係代名詞ですが、要するに接続することばで、接続することばはすべて広義における接続詞です。また『なぜ父が毎月僕の所へ来るかを僕は知っている』という文を作ると、こんどは『なぜ』(*warum*) という疑問詞が前文と後文とを接続する接続詞になって、*Ich weiß, warum mein Vater allmonatlich zu mir kommt.* となります。その他 *was* でも *wann* (いつ) でも *wer* (誰が) でも *wie* (いかに) で

も、wo (どこ) でも、また welcher (いかなる) でも、すべて接続詞として用いることができます。これはドイツ語も英語も、またその他の西洋語もすべて同じことですが、ただドイツ語では定形が最後位を占めるので、一たいこの接続文はどこまで続いているのか、ということが、英語その他よりも、ずっとわかりやすいのです。

要するに、二つの文章がつながっていて、日本語に訳する時に、その一つの方を先に訳さないと日本語にならないといったような場合、その先に訳する方の文章は必ず接続文なので、それを分類すると、接続詞によって率いられた文、関係代名詞によって率いられた文、疑問詞によって率いられた文、この三種になるというわけです。

関係代名詞については、もっと先へ行ってから詳しく述べますが、重要な接続詞だけは次の例題に早速必要ですから、よく覚えましょう：

daß (<i>that</i>) ダス	という事を (は)
wenn (<i>when, if</i>) ヴェン	するならば,する時に
weil (<i>because</i>) ヴァイル	するがゆえに
obgleich (<i>although</i>) オップグライヒ	するにかかわらず
ob (<i>whether, if</i>) オップ	かどうか
wie (<i>as</i>) ヴィー	するごとく
während (<i>while</i>) ヴェーレント	する間に
bis (<i>till, until</i>) ビス	するまで
sobald (<i>as soon as</i>) ゾーバルト	するや否や
da (<i>since, as</i>) ダー	するので

例 題 18

- [1] Sie vergessen, daß Sie einen Gatten haben,
フェルゲッセン ダス ガッテン
 Frau Tanaka! [2] Es ist eine berühmte Frage, ob
フラオ ベリュームテ フラーゲ オップ
 der Affe der wirkliche Urahn des Menschen ist. [3]
アッフエ ヴィルクリッヒェ ウール・アーン メンシェン
 Ich gebe dir hundert Mark, wenn du mir zweihun-
フンデルト マルク ツヴァイ・フン

dert Mark gibst. [4] Die Europäer hassen die Zahl
 デルト マルク ギープスト オイローペーエル ハッセン ツァール

13, weil sie Unglück bringt. [5] Warten Sie,
 ドライ・ツェーン ヴァイル ウングリュック ヴァルテン

bis eine zweite Gelegenheit da ist! [6] Er ändert
 ビス ツヴァイテ ゲレーゲンハイト ダー エンデルト

sein Bekenntnis, wie man zum Beispiel seine Klei-
 ベケントニス ヴィー ツーム バイシュピール クライ

der wechselt. [7] Der arme Mensch weiß nicht,
 デル ヴェックセルト アルメ メンシュ ニヒト

was der eigentliche Sinn seines Daseins ist.
 ヴァス アイゲントリッヒェ ジン ザイネス ダーザインス

訳註: [1] あなたは、あなたが一人の良人をお持ちになるということをお忘れなん
 ですね、田中夫人! Frau Tanaka! Mrs. Tanaka! (Mr. は Herr) [2] 猿が人間の
 本当の祖先であるかどうかという事は有名な問題である。Frage, f.: question. wirklich:
 real, actual. Urahn, m. —en.: ancestor. [3] もしおまえがおれに二百マルクくれる
 なら、おれはおまえに百マルクやる。hundert: hundred. Mark: mark. zweihundert:
 two hundred. [4] ヨーロッパ人は、不吉だということで、13 という数を嫌う。Europäer,
 m.: European. hassen: hate. Zahl, f.: number. Unglück, n.: ill-luck, 13 = drei-
 zehn ['draitse:n], sie を用いたのは、主語が Zahl という女性名詞ゆえ。[5] 第二のチ
 ャンスが来るまでお待ちなさい! warten: wait. zweit: second. Gelegenheit, f.:
 chance. da ist = kommt. [6] かれは、たとえば世人がその着物を着換えるように、か
 れの宗旨を変える。ändern: change, alter. Bekenntnis, n.: creed. (信仰, 宗旨, すな
 わち, 「主義」, 「信条」のこと) zum Beispiel: for instance. Kleid, n.: pl. —er:
 clothes. wechseln: change, shift. [7] 哀れなる人間は、かれの存在の本来の意味が何
 であるかを知らない。eigentlich: proper, true, intrinsic. Sinn, m.: sense. Dasein,
 n.: existence.

69. 副文章の後に来る主文章は定形倒置

前項にすぐ関係して、まず二つの文法用語を紹介しておきます。たとえば Sie ver-
 gessen, daß Sie einen Gatten haben. (例題 18 の 1) という文を例にとると、前半
 をなす Sie vergessen の部を主文章 (あるいは独立文章) と呼び、daß Sie einen
 Gatten haben を副文章 (あるいは従属文章) と呼びます。

そして、従属文章の文頭に立つ daß を、従属的接続詞と呼びます。なぜかと言
 うと、単に接続詞というと、たとえば und, aber など (これを並立的接続詞という)
 も含まれてしまうからです。

そこで、ここにまた定形の位置に関する第三の法則を紹介します。それは、副文章
 の後に来る主文章は定形倒置になる、という法則です。

Sie vergessen, daß..... の順ならば Sie vergessen はこれでよろしいが, Daß.....

の文の方が先になると、vergessen Sie でなければなりません：Daß Sie einen Gatten haben, vergessen Sie.——もう一つ例を引くと、例題の 18 の 7 を、前後逆にすると：Was der eigentliche Sinn seines Daseins ist, weiß der arme Mensch nicht.

この法則には、勿論例外はあります。たとえば obgleich (.....するにかかわらず) の句が前に来ると、後の主文章は、特に力強く言う時には定形正置にします。また、副文章が次の主文章の主語になるときは、定形正置よりしかたがなくなり、動詞の次にまた第二の主語が来るといことは意味をなさなくなります。たとえば文例 18 の [2] を逆にすれば Ob der Affe der wirkliche Urahn des Menschen ist, ist eine berühmte Frage. となるのは当然です。

70. weil と denn との相違

ここで一つ、英語やドイツ語をやる人が、しきりに論じ合って、大抵の場合両方とも何を議論しているのかわけがわからなくなって別れてしまうという有名な問題にもちょっと触れておきましょう。それは、同じ『.....だから』を意味する接続詞に weil (because) と denn (for) との二つがあるが、用いる場合としてはいったいどう違うかという問題です。

まず真先に言っておきますが、weil は前項で言った従属的接続詞だから、その次に来る文は副文章で定形後置、denn は und や aber や oder と同類の並立的接続詞ゆえ、その次に来る文は前文とは別に直接結びついていない主文章で、これは定形正置または定形後置です。たとえば：

[A] Er kommt nicht, weil er krank ist.

かれは病気だから来ない。

[B] Er ist krank, denn er kommt nicht.

かれは病気だ、それが証拠に、かれは来ない。

この文例で、同時にまた、どんな場合にどちらを用いるかという問題もまた、大体察せられるはずです。すなわち、「病気である」は原因で、「来ない」はその結果です。だから、原因には weil を用いると言え、少し荒っぽい、大体あたっているのです。それに反して、[B] の方で denn を用いるのは、er kommt nicht ということは Er ist krank の原因ではない。来ないために病気になるなんてことは無いはずですから。こういうふうに、原因ではない際に denn を使うのです。

[B] の方でも Ich glaube ihn krank (私はかれを病気と信ずる) とでも言うなら weil er nicht kommt と言ってよいでしょう。如何となれば「信ずる」ということの原因は「彼が来ない」という事実ですから。

荒っぽく言えば以上の通りです。けれども、これ以上詳しく言い出すというと、相当面倒なことになりますから、まあこれくらいにして止しておきましょう。(詳細は拙著「独逸語学講話」三修社)

原因や理由を述べる接続詞には、更に *da* というのがありますが、これは用法は大体 *weil* と同じで、*weil* より少し弱いものです。*weil* を「.....がゆえに」とすれば *da* は「.....なので」ぐらいのところですか。今後例題にはよくこの *da* を用いますから記憶しておいてください。

第12講 話法の助動詞

71. 話法の助動詞を用いる場合の構文

話法の助動詞というのは、時の助動詞と区別した名称で、その点を含んでいただいて、本講では略して単に助動詞と申しましょう。助動詞を用いる場合には、英語でも、助動詞を定形とし、本動詞の方は不定形にしてこれに添えます、たとえば *I must do.* とか *I can speak.* のように。ドイツ語も、助動詞を定形とし、本動詞を不定形とする点は英語と同じですが、その外に動詞以外の色々なものが付け加わるというと、不定形をそれらの一番最後に持って来る点が英語とちがいます：

I must do it to-day.

Ich muß es heute tun.

He can speak German a little. Er kann ein wenig deutsch sprechen.

以上は、定形正置の場合の話です。倒置、後置を含めた、三つの主な場合を示すと、たとえば次のようになります。こんどは定形と不定形を斜体活字で示します：

定形正置： Er *kann* ein wenig deutsch *sprechen*.

かれは少しばかりドイツ語が話せる。

定形倒置： Deutsch *kann* er ein wenig *sprechen*.

ドイツ語はかれは少しばかり話せる。

定形後置： Da er ein wenig deutsch *sprechen kann*,

かれはドイツ語が少しばかり話せるので、

72. 話法の助動詞 **müssen** と **können**

英語の *must* と *can* は、必ず主語と共に用いる定形で、過去形も分詞も不定形もありませんが、ドイツ語の *muß* と *kann* は、あらゆる形をもっていて、従って不定形もあります。müssen, können がそれです。人称変化は：

不定形： **müssen**

ich muß wir müssen

du mußt ihr müßt

er muß sie müssen

不定形： **können**

ich kann wir können

du kannst ihr könnt

er kann sie können

特に注目すべきは、単数の語幹 (*muß-*, *kann-*) が不規則で、複数の語幹 (*müss-*,

könn-) は不定形の語幹と同じで、規則的であるという点とそれから単数の一人称と三人称は人称語尾が全然なくて語幹そのものであるという点です。この現象は wissen [47!] にもありました。

用法は、müssen は英語の通り『……せねばならぬ』、『……せざるを得ぬ』又は『するに相違ない』で、können は『できる』又は『……する可能性がある』です。

例 題 19

[1] Der arme Arbeiter muß wie ein Pferd arbeiten,

アルメ アルバイテル ムス ヴィー フェールト アルバイテン

weil er seine Frau und Kinder ernähren muß. [2]

ヴァイル フラオ キンデル エルナーレン ムス

Die armen Arbeiter müssen immer Wasser trinken,

ミュッセン イムメル ヴァッセル トリンケン

da sie kein Bier bezahlen können. [3] Was du heute

ダー ビール ベツァーレン ケンネン ホイテ

tun kannst, mußt du heute tun. [4] Sie müssen

トゥーン カンスト ムスト ホイテ トゥーン

deutsch sprechen, denn japanisch können Sie ganz

シュプレッヒェン デン ヤパーニッシュ ケンネン ガンツ

gut sprechen. [5] Was man nicht lesen kann, kann

グート レーゼン カン

man nicht schreiben. [6] Not bricht Eisen: der

シュライベン ノート ブリヒト アイゼン

Mensch kann alles, wenn er muß.

アルレス ヴェン ムス

訳註: [1] 哀れな労働者は、己が妻子を養わねばならないから、まるで馬のごとくに働かねばならぬ。Arbeiter, m.: worker, labourer. wie: as. Pferd, n.: horse. arbeiten: work, labour. ernähren: nourish. [2] 哀れな労働者たちは、ビール代が払えないから、いつも水を飲んでいなければならない。immer: always. Wasser, n.: water. bezahlen: pay. [3] 汝今日為し得る所の事柄は今日之を為さざるべからず。tun: do. (mußt du と倒置されているわけは? [69]!) [4] あなたはドイツ語をしゃべらなければいけません。というのは、日本語は非常によくしゃべることがおできになるからです。ganz: quite. (あるいは all right の all) [5] 読めないことは書けない。[6] 窮すれば通ず。人間はせっぱつまれば何事でもやってのけるものだ。

73. 話法の助動詞 wollen と dürfen

英語の will は、ドイツ語も will ですが、ドイツ語は英語と違ってちゃんと不定形 wollen があります。それから英語の will は『であろう』という、未来の助動詞とし

て用いることがあります。ドイツ語の *wollen* は決して『であろう』ではなく、必ず『欲する』『云々せんと思う』です。

dürfen (云々してよろしい、云々してかまわない) という助動詞は、語源的には英の *dare* (.....を敢てする,する勇気がある) ですが、用法の上では『云々してもよろしい』という *may* です。

不定形: <i>wollen</i>		不定形: <i>dürfen</i>	
ich will	wir wollen	ich darf	wir dürfen
du willst	ihr wollt	du darfst	ihr dürft
er will	sie wollen	er darf	sie dürfen

形の不規則さは、*können*, *müssen* について述べた通りです。

例 題 20

- [1] Ich will Politiker werden. [2] Hier darf man
ヴィル ポリーティケル ヴェールデン ヒール ダルフ
 nicht laut sprechen. [3] Wollen Sie mir diesen
ラウト ヴォルレン ディーゼン
 deutschen Satz erklären? [4] Wißt ihr nicht, daß
ドイッチェン ザッツ エルクレーレン ヴィスト ダス
 ihr hier nicht rauchen dürft? [5] Sobald ich meine
ラオヘン デュルフト ソーバルト
 Schulden zahlen will, habe ich kein Geld, und so-
シュルデン ツァーレン ヴィル
 bald ich kein Geld habe, will ich meine Schulden
 zahlen.

訳註: [1] 私は政治家になるつもりです。Politiker, *m.*: politician. [2] ここでは大きな声で話してはいけません。laut: *aloud, loudly*. [3] 私にこのドイツ語の文章を説明して下さいますか。Wollen Sie: *Will you*. Satz, *m.*: sentence. erklären: *explain*. [4] 君たちは、ここで煙草をすってはいけないことを知らないのか。rauchen: *smoke*. [5] 私は私の借金を払おうと思うと金がない、そして、金がないとすぐ払う気になる。sobald: *as soon as*. Schulden, *pl.* (単は Schuld, *f.* であるが、借金の意にはもっぱら *pl.* を用いる): *debt*. zahlen: *pay*. (前出の bezahlen と大体同じ)

74. 話法の助動詞 mögen と sollen

mögen は英語の *may* と同語であると同時に、用いる場合も大体よく似ています。(ただし、『云々してかまわない』の意には既に前出の *dürfen* がありますから、*mögen* は

用いません) それから mögen は『云々することを好む』、『云々するのが好きだ』の意にも用います。——sollen は英語の *shall* で、用法もよく似ていますが、ただ英語の *shall* のように未来の助動詞(『云々するであろう』)としては用いません。これは wollen について述べたのと同じです。というのは、『であろう』とか『するでしょう』の意には、ドイツ語には werden という助動詞(83)が別にあるからです。英語の *shall* と同じ用法というのは、『云々すべし』という用法で、たとえば『貴様を生かしてはおかぬぞ!』ということを、英語でも *You shall die.* (汝は死すべし!) というように、ドイツ語でも *Du sollst sterben.* と言います。つまり、言外に誰人かの意志を表現するわけで、いわば wollen の裏とでもいうべき用法です。

不定形: mögen

ich mag	wir mögen
du magst	ihr mögt
er mag	sie mögen

不定形: sollen

ich soll	wir sollen
du sollst	ihr sollt
er soll	sie sollen

例 題 21

- [1] Er mag nicht arbeiten, obgleich er alles kann,
マーク アルバイテン オップグライヒ アルレス
 wenn er nur will. [2] Was Sie da behaupten, mag
ヌール ヴィル ベハオプテン マーク
 wahr sein. [3] Du sollst einen süßen Kuchen ha-
ヴァール ザイン ゴルスト ズューセン クーヘン
 ben, wenn du mir folgen willst. [4] Ich weiß nicht,
フォルゲン ヴァイス
 ob ich diesem freundlichen Manne folgen soll. [5]
オップ ディーゼム フロイントリッヒェン フォルゲン
 Daß meine Frau mich betrügt, mag ich nicht glau-
ダス ベトリュークト グラオ
 ben; das ist zu abscheulich! [6] Er mag sagen,
ベン ツー アップショイリヒ マーク ザーゲン
 was er will: er soll mich nicht betrügen.
ゾル ベトリューゲン

訳註: [1] あいつは、その気になりさえすれば何でも出来るくせに働くことを厭がる。
 nur: only. (wenn...nur... で『云々しさえすれば』) [2] あなたがご主張になるこ
 とは、あるいは本当かも知れません。da: there (これはほとんど無意味の語で、しいて訳
 すれば「そこに」である) behaupten: allege, pretend. wahr: true. [3] もしおまえ
 が私について来る気なら、おまえに甘いお菓子をあげよう。(言葉通りには: 汝は一つの甘

第13講 動詞の三要形

76. 不定形・過去・過去分詞を三要形という

英語でも動詞の *principal parts* (要形, 重要部分) ということをやかましく言って, *see* なら *see, saw, seen*; *go* なら *go, went, gone* といったように, 必ず『不定形』と『過去』と『過去分詞』とを知っていなくてはならないことになっています。ドイツ語もその通りで, この三つを三要形といって, 英語と同様, 普通最もよく用いられる動詞に限ってこの三要形が不規則であるため, *see, saw, seen* は *sehen, sah, gesehen* であるとか, *go, went, gone* は *gehen, ging, gegangen* であるとかいったように, 口調でもってこの三要形を暗記しておく必要があるのです。この三要形さえ知っていれば, 他のあらゆる形は, それから出立して規則的に作ることができるからです。

また暗記かと歎息すべからず。たとえ何語をやっても動詞の不規則形という奴はやっかいなものです。要形にしても同様で, 英独をやる人はまだ三つだけ覚えればよいのですが, 例えばラテン語をやるのと五つ覚えなければならぬ, ギリシア語をやるのと一動詞について少なくとも十ないし二十は暗記しなければなりません。現代語でも, フランス語をやる人は, 動詞となると英語やドイツ語どころではない, 大変な量の変化表を理屈をいわずに丸暗記しなければならないのです。三要形だけで片づく英語ドイツ語はまだしも一番楽な方だと言えましょう。

77. 規則動詞の三要形

英語でも, すべての動詞が *see, saw, seen* や *go, went, gone* のようなわけではなく, たとえば *thank, walk* などになると, 過去と過去分詞を特に覚える必要はなく, *-ed* さえつけばよいという一般法則があります。すなわち, 不定形さえ知っていれば, 後の二形は規則的に作ることができるのです。ドイツ語もその通りで, *danken* (*thank*), *wandeln* (*walk, go*) などは, その語幹 (*dank-, wandel-*) をかりに —— で表わすならば:

不定形: ——(e)n	過去: ——(e)te	過去分詞: (ge)——(e)t
-------------	-------------	------------------

という公式に従って三要素を構成することができます。() で囲ったところは, 口調上省かれることもあるという意味です。(いわゆる音便の *e* です, 41.)

口調ということは, 感じのない初学者にとっては, ちょっとあいまいなむずかしい事かも知れませんが, 例を二三覚えれば別になんでもない事で, 理屈で分解的に説明する方がかえって厄介ですから, 次に数例を挙げます:

dank-en ダンケン	dank-te ダנקテ	ge-dank-t ゲダנקト	感謝する
hör-en ヘーレン	hör-te ヘールテ	ge-hör-t ゲヘールト	聞く
lieb-en リーベン	lieb-te リープテ	ge-lieb-t ゲリープト	愛する
wart-en ヴァルテン	wart-ete ヴァルテテ	ge-wart-et ゲヴァルテット	待つ
bad-en バーデン	bad-ete バーデテ	ge-bad-et ゲバーデット	沐浴する
hinder-n ヒンデルン	hinder-te ヒンデルテ	ge-hinder-t ゲヒンデルト	妨げる
sammel-n ザムメルン	sammel-te ザムメルテ	ge-sammel-t ゲザムメルト	集める
gehör-en ゲヘーレン	gehör-te ゲヘールテ	gehör-t ゲヘールト	属する
versammel-n フェルザムメルン	versammel-te フェルザムメルテ	versammel-t フェルザムメルト	集合させる

ふりがなで示したアクセントの所を正しく強めながら読み上げれば、『ge や e を入れるか省くか』という口調上の法則はわけなくわかります。ばくぜんと眼で眺めたきりではわかりません。

78. ge- の省略について

英語とひどく違っているのは、過去分詞に ge- という前綴をつけるという点ですが、上例中の gehören, versammeln の二例でわかる通り、既に不定形が、ある種の前綴 (ge-, ver- など) を有している場合には、なおその上に過去分詞において ge- をつけると口調が悪くなるので、つけないことになっています。前綴にはいろいろな種類がありますが、ここでいうのは、力点を有しない前綴です (主なるものは be-, er-, ver-, ge-, ent-, emp-, zer-, の七つです)。力点ある前綴を有するものは (たとえば aufstehen 起つ, 英 *stand up*, この *up* が auf にあたる) ge- をつけるわけで、これは分離動詞 (第17講) という奴になり、これはまた改めて詳述します。

次に、-ieren に終わる外来語の動詞も ge- を省略します。たとえば:

regieren レギーレン	支配する	respektieren レスペクティーレン	尊敬する
marschieren マルシーレン	行進する	kurieren クリーレン	治療する
studieren シュトゥディーレン	研究する	existieren エクシスティーレン	存在する

なぜ ge- を省略するかという口調上の問題は、これらの動詞はすべて -ier- のとこ

ろにアクセントがある、という事を考えればすこぶる明瞭です。すなわち、もしかりに、前に何もつかないで単に ieren とか tieren とか sieren とかいった形の動詞があるとしたら（そんなのはありませんが）、その三要形は、たとえば ieren, ierte, geiert となって ge- がつくところなのでしょうが、-ier は単なる幹語尾であって、実際はその前に必ず一つ、二つ、三つ、あるいはそれ以上のつづりがありまして、それらのつづりにはアクセントがないからつまり、前つづりがあるのと同じような口調になるわけで、結局前述の gehören や versammeln と同じ取り扱いをされることになるのです。-ieren 型の動詞はすべて規則動詞です。

規則動詞の、ge- を有しない過去分詞は、三人称単数の定形と同形になるから注意を要する：たとえば gehören（属する）の過去分詞 gehört は、er gehört（彼は属する）という際の形と同じになり、studieren（研究する）の過去分詞 studiert は、er studiert という studiert と同形になります。

79. 不規則動詞の三要形

ドイツ語のすべての動詞が前項で述べたようなふうにして三要形を作るのであったら、別に三要形ということをやかましくいう必要はないでしょう。如何となれば、原形たる不定形さえ知っていれば後の形は自分で勝手に作ることが出来るからです。ところが、一番最初にも述べた通り、不定形から出立して過去と過去分詞とを推察することの出来ない動詞、すなわち不規則動詞なるものがあって、しかも、困ったことには、一番よく用いる「見る」とか「立つ」とか「行く」とか「話す」とかいったような基礎単語が多く不規則動詞なのです。（英語もそうです）

不規則動詞の中、その大部分を占めるものは、いわゆる『強変化動詞』という奴です。強変化動詞というのは、過去分詞の語幹が、不定形の語幹と異なっているものをいいます。たとえば gehen, ging, gegangen（英：go, went, gone）においては、geh- という語幹が、過去では ging に、過去分詞では gang に変わっています。（下例でわかる通り、語幹が変わるとはいっても、主として幹母音のみが変わるものが大部分です。）

不定形		過去	過去分詞
geh-en ゲーエン	行く	ging ギング	ge-gang-en ゲガンゲン
komm-en コムメン	来る	kam カーム	ge-komm-en ゲコムメン
seh-en ゼーエン	見る	sah ザー	ge-seh-en ゲゼーエン
ess-en エッセン	食う	aß アース	ge-gess-en ゲゲッセン
steh-en シュテーエン	立つ	stand シュタント	ge-stand-en ゲシュタンデン

schreib-en シュライベン	書く	schrieb シュリープ	ge-schrieb-en ゲシュリーベン
zieh-en ツィーエン	引く	zog ツォーク	ge-zog-en ゲツォーゲン
tu-n トゥーン	なす	tat タート	ge-ta-n ゲターン
sei-n ザイン	ある	war ヴァール	ge-wes-en ゲヴェーゼン

この強変化動詞なるものに対して、前項の規則動詞のことを一名弱変化動詞ともいいます。弱変化と規則変化とは同じことですが、強変化と不規則変化とは必ずしも同一ではなく、不規則変化という中には後に述べるごとく、強変化以外のものもいくらか含まれているわけです。

強変化動詞は、すべてドイツ語きっすいの原始的な単語のみで、ただ schreiben (書く), pfeifen (笛吹く), preisen (称賛する) の三語のみが、途中でラテン語からはいって来た語であるにすぎません。日本語で言うなら、きっすいの大和言葉という奴に相当するわけです。

人称変化をする際、du と er の二ヵ所で、e が i になったり a が ä になったりする動詞 (46!) はすべて強変化に属します。

強変化動詞が弱変化動詞と違っている最も著しい点は語幹の変化にあります。しかし語尾の点でも特徴を持っています。それは、過去形が語幹そのものであって何等の語尾をも有しないという点と、それから、過去分詞の語尾が -t ではなくて -en, -n だという点です。この点は、過去形、過去分詞が出てきた時に、それが規則動詞であるか不規則動詞であるかを見分ける上に非常に重要です。たとえば hieb などという形の過去らしい語が出て来たら、その不定形は決して hieben ではなく (強変化の語幹は不定形と過去では必ずちがっています、それに反して不定形と過去分詞、過去と過去分詞では、同語幹のこともあります), h で始まる何か別なつづりであることが断言されます (hauen, 切る, 斬りつける, 伐採する)。また gesunken などという過去分詞が出て来たら、不定形は sunken か sanken か sinken か何かしらないが、とにかく強変化動詞にちがいないという事がわかります (sinken, 沈む)。

不規則動詞も、アクセント無しの前綴 (be-, er-, ge-, ent-, emp-, ver-, zer-, miß- など) のあるものは、過去分詞において ge- をつけません。それゆえ、語によると、不定形と過去分詞とが全然同形になるものがあります: bekommen, bekam, bekommen (得る)。

不規則動詞には、強変化動詞以外に、いわゆる混合変化というのが若干語あります:

bring-en ブリンゲン	もたらす	brach-te ブラハテ	ge-brach-t ゲブラハト
-------------------	------	------------------	---------------------

denk-en デンケン	考える	dach-te ダハテ	ge-dach-t ゲダハト
wiss-en ヴィッセン	知る	wuß-te ヴステ	ge-wuß-t ゲヴスト
nenn-en ネンネン	名づける	nann-te ナンテ	ge-nann-t ゲナント
kenn-en ケンネン	識る	kann-te カンテ	ge-kann-t ゲカント
brenn-en ブレンネン	焼ける	brann-te ブランテ	ge-brann-t ゲブラント
renn-en レンネン	駈ける	rann-te ランテ	ge-rann-t ゲラント

備考: wenden (向ける), senden (送る) の二語は、混合変化をすることもあり、また普通の規則変化をすることもあります。

混合変化の特徴は、語幹が強変化、語尾は規則的で弱変化、という点にあります。また bringen, denken, は英語の *think, thought, thought; bring, brought, brought* とよく似ています。

不規則動詞の中には、強と混合との二種の外、なお全くの例外的なものもありますが、不規則動詞の全部は挙げて巻末に表示してあります。

80. 過去分詞の用法

過去分詞の用い方は大体英語と同じで、つまり主として『……された』の意の形容詞として用います。*stained glass* は着色 (*stain*) されたガラス、すなわちステンドグラス、*corned beef* は塩漬け (*corn*) にされた牛肉で、いわゆるコーンビーフ、*broken English* は支離滅裂に引き裂 (*break*) かれた英語で、すなわちでたらめの英語、*United States of America* は *unite* (連合) された各州で、いわゆる合衆国ですが、ドイツ語も、ステンドグラスは *Farbenglas* (色ガラス) ですが、*corned beef* はやはり *gesalzenes Rindfleisch*, *broken English* は *gebrochenes Englisch*, *United States of America* は *Vereinigte Staaten von Amerika* です。

ただし、『云々された』の意、すなわち受働的で、同時に完了的な意味は、他動詞の過去分詞の場合に限ります。自動詞の場合には、完了的という点では同じですが、受働的ではなく、能働的になります。次の諸例をよく比較して見てください：

(1) 他動詞の場合：

der gefangene Spion	捕えられたスパイ	(fangen, 捕える)
die gebildete Klasse	教養ある階級	(bilden 陶冶する)
das gekochte Ei	ゆで卵	(kochen 煮る)

die betonte Silbe アクセントのあるつづり (betonen 強調する)
 das destillierte Wasser 蒸留水 (destillieren 蒸留する)

(2) 自動詞の場合:

die gestorbene Mutter 死んだ母 (sterben 死ぬ)
 das vergangene Jahr 去年 (vergehen 過ぎ去る)
 der gefallene Engel 墮落した天使 (fallen 落ちる)
 die versunkene Glocke 沈鐘 (versinken 沈没する)
 der gewesene Kaiser 前皇帝 (sein.....である)

der gefallene Engel なら『落ちた天使』です、『落ちられた天使』ではありません (墮落天使とはキリスト教の信仰で、悪魔は天を追われて地獄に降った天使であるとなっているところから悪魔の異名として用いる語ですが、同時に冗談に、結婚前に子をはらんで世間に顔向けのならなくなった娘のことも言います。Engel は純真な処女のこと、fallen には普通の墮落の意もありますから)。versunkene Glocke も、Hauptmann のお伽劇で有名な、湖底に『沈んだ』鐘です、『沈まれた』鐘なんてものは意味をなさないでしょう。これらはすべて fallen (落ちる)、versinken (沈む) が自動詞であるために、受働的な形容詞にはならないのです。

例 題 23

[1] Wir Japaner sind ein geschlagenes Volk. [2]
ヤパーネル ゲシュラーゲネス フォルク
 Meine Gedichte sind schon gedruckt. [3] Alles ist
ゲディヒテ ショーン ゲドルックト アルレス
 in Schnee und Eis gehüllt. [4] Die verbotene
イン シュネー アイス ゲヒュルト フェルボーテネ
 Frucht verführt ihn. [5] Erlaubte Sünde reizt nicht
フルフト フェルフュールト イーン エルラオプテ ズュンデ ライツト ニヒト
 mehr. [6] Ein ungeschriebenes Gesetz hüten selbst
メール ウンゲシュリーベネス ゲゼッツ ヒューテン ゼルプスト
 die Verbrecher. [7] Geteilte Freude ist doppelte
フェルブレッヒェル ゲタイルテ フロイデ ドッペルテ
 Freude.
フロイデ

訳註: [1] 我々日本人は敗戦国民である。schlagen: beat, rout, defeat, (打ち負かす), 三要形: schlagen, schlug, geschlagen. Volk, n.: people, nation. [2] 私の詩集は既に印刷されている。Gedicht, n. pl.—e: poem. drucken: print. [3] すべて

が雪と氷の中につつまれている。Schnee, *m.*: *snow*. Eis, *n.*: *ice*. hüllen: *cover, wrap*.
 [4] 禁断の木の実がかれを誘惑する。verbotene Frucht: *forbidden fruit* (アダムとエヴァとの故事より, 何でも「手を出したくはあるが, 手をつけてはならない」ものをいう, たとえば人妻など) verbieten: *forbid, prohibit, interdict*. verführen: *seduce, tempt*.
 [5] 許された罪はもはや魅力がない。erlauben: *allow, permit*. Sünde, *f.*: *sin*. reizen: *charm, attract*. nicht mehr: *no more*. [6] 不文律は犯罪者といえどもこれを守る。ungeschriebenes Gesetz: *unwritten law* (不文律すなわち慣例, 慣習) hüten: *guard, watch, preserve*. selbst: *even*. Verbrecher, *m.*: *criminal, felon*. [7] 分けた喜びは二倍の喜び。teilen: *share*. Freude, *f.*: *joy*. doppelt: *double*. (人と共に喜びをわかてば, 一人でこっそり喜んでいるよりもはるかにうれしい, の意。奇論的に言ったもので, 大抵の物は二つに分ければ半分になるのに, 喜びだけは二分すると倍になる, というわけ。ドイツの俚諺。)

81. 現在分詞の用法

現在分詞の用法も英語と同じで、『云々しつつある』、『云々する』という意の形容詞として用います。また、『云々しつつ』という副詞にも用いることができます (例題 24, 5)。

ただ英語の『進行形』という奴はドイツ語にはありません。I am going to school. は Ich bin gehend zur Schule. ではなく Ich gehe zur Schule. です。

das kommende Jahr	来年	<i>the coming year</i>
das folgende Jahr	その翌年	<i>the following year</i>
ein lachendes Gesicht	笑顔	<i>a laughing face</i>
ein heulendes Kind	泣く児	<i>a crying child</i>
ein lebender Leichnam	生ける屍	<i>a living corpse</i>

—例

題 24

- [1] Die Oberfläche der ruhenden Flüssigkeit ist
オーベル・フレッヒェ ルーエンデン フリュッシヒカイト
 horizontal. [2] Amerika und Rußland sind die zwei
ホリツォンタール アメーリカー ルスラント ツヴァイ
 stabilisierenden Mächte der Welt. [3] Können Sie
シュタビリジーレンデン メヒテ ヴェルト ケンネン
 den beleidigenden Ton nicht lassen? [4] Die
ベライディゲンデン トーン ラッセン
 schmerzende Wunde läßt mich nicht ruhig schlafen.
シュメルツェンデ ヴンデ レスト ルーイヒ シュラーフェン
 [5] Was man zweifelnd tut, glückt selten.
ツヴァイフェルント トゥート グリュックト ゼルテン

訳註: [1] 静止せる液体の表面は水平なり。Oberfläche, *f.*: *surface*. ruhen: *rest, repose*. horizontal: *horizontal*. [2] 米露は世界の二大安定勢力である。Rußland, *n.*: *Russia*. stabilisieren: *stabilize* (安定せしめる) Macht, *f. pl.* —e: *Power*. [3] あなたは、その侮蔑的な調子をおよしになることはできないものではないでしょうか (失礼なことをいうのはいい加減にして止してください)。beleidigen: *offend, insult*. Ton, *m.*: *strain* (語調, 話し振り) lassen (ここでは助動詞の lassen ではなく、『止す』意の本動詞で unterlassen と同じ): *give up, cease, leave off*. [4] 傷の痛みのために私は安眠できません (逐語的には『痛む傷が私を静かに眠らせない』)。schmerzen: *ache, smart*. Wunde, *f.*: *wound*. ruhig: *quietly, calmly*. [5] 狐疑しつつ為すところの事柄が首尾よく行くことは稀である。zweifeln: *doubt*. glücken: *succeed, turn out well*. selten: *seldom*. (selten は英の *seldom* と同じく、全文を否定的にし、『云々すること稀なり』すなわち『めったに云々しない』の意味になる。)

第14講 過去と未来

82. 過去の人称変化

動詞の過去形は、前講で研究した三要形の第二番目の形ですが、あの形にもやはり人称変化というものがあります。次に示す如く、あの形のままで用い得るのは *ich* と *er* との個所だけで、その他の人称では、現在変化 (37!) の場合と同様の人称語尾をつけなければなりません。

動詞の過去形は、弱変化動詞、すなわち規則動詞 (77!) の場合には *-te* という語尾がつきますが、強変化動詞 (78!) の場合には *ging* (*went*) とか *sah* (*saw*) とかいったように、語幹のままでポツンとした形をしていますから、強弱によって人称語尾のつけ方が多少ちがって来ます。

弱変化の例: <i>lieben</i> (<i>love</i>)				強変化の例: <i>gehen</i> (<i>go</i>)			
<i>ich</i>	<i>liebte</i>	<i>wir</i>	<i>liebte-n</i>	<i>ich</i>	<i>ging</i>	<i>wir</i>	<i>ging-en</i>
<i>du</i>	<i>liebte-st</i>	<i>ihr</i>	<i>liebte-t</i>	<i>du</i>	<i>ging-st</i>	<i>ihr</i>	<i>ging-t</i>
<i>er</i>	<i>liebte</i>	<i>sie</i>	<i>liebte-n</i>	<i>er</i>	<i>ging</i>	<i>sie</i>	<i>ging-en</i>

肉太活字で示したところが、三要形として挙げる際の過去形です。

この人称変化の様式は、現在の場合 (たとえば *ich liebe*, *du liebst*, *er liebt* など) とは多少違っています。すなわち、*ich* と *er* の所に、人称語尾が省かれて、*ich* と *er* とが同形になるという点が現在形とちがっています。頭のよい人は、これを見て、何か思い出すことがあるにちがいありません。何を思い出すでしょう? それはすなわち、話法の助動詞の変化と、*wissen* (47!) という動詞の変化です。換言するならば、動詞の現在形でありながら、過去形と同様に、単数一人称と単数三人称とが同形になる変則的な動詞がドイツ語には七語あるということになるのです: *wissen*, *wollen*, *können*, *müssen*, *dürfen*, *sollen*, *mögen* (話法助動詞の中では *lassen* のみが例外)。

それにはまたハッキリとした原因があるので、*ich kann* の *kann* や *ich weiß* の *weiß* などは、歴史的にいうと実は過去形であったのです。英語の *visible*, *vision*, *visit*, *visual*, などに現われている *vis* は元来ラテン語の *videre* (見る) から来たものですが、この *vis* がドイツ語の *weiß* や *wissen* と同じもので、*weiß* は実は『見た』という意味であったのです。そして『見た』から『知っている』ということになったのはごく自然です。(この *weiß* という語は、英語の *wit* は申すに及ばず、ギリ

シア語系の Idee, f. (英 *idea*), Ideal, n. (英 *ideal*), さては「吠陀経」で有名な梵語の「吠陀」(*veda*) とまで縁つづきの語です。

例 題 25

- [1] Ich war damals zwanzig Jahre alt. [2] Sie
ヴァール ダーマルス ツヴァンツィヒ ヤーレ アルト
 schwieg, als er ihr seine Liebe gestand. [3] Ihr
シュヴィーク アルス ザイネ リーベ ゲシュタント
 verstandet nicht, was wir euch damals sagten. [4] Ich
フェルシュタンデット オイヒ ザークテン
 dachte, du warst in Deutschland. [5] Wir dankten
ダハテ ヴァールスト ドイチュラント ダンクテン
 ihm, als wir ihm begegneten. [6] Er gab mir alles,
アルス ベゲーグネテン ガープ
 was er hatte. [7] Der Lehrer fand, daß drei Schüler
ハッテ レーレル ファント ダス ドライ シューレル
 fehlten. [8] Sie lachten, als sie es hörten. [9]
フェールテン ラハテン ヘールテン
 Kolumbus entdeckte Amerika aus Versehen, denn
コルムブス エントデックテ アメーリカー アオス フェルゼーエン
 eigentlich wollte er nach Indien fahren. [10] Ich
アイゲントリヒ ヴォルテ ナーハ インディエン ファーレン
 kam, sah und siegte.
カーム ザー ジークテ

訳註: [1] 私は当時二十歳だった。war (三要形: sein, war, gewesen): *was. damals: at that time. zwanzig: twenty. Jahr, n. pl.—e: year. alt: old.* [2] かれが彼女にかれの愛を告白したとき、彼女は沈黙した。schwie (三要形: schweigen, schwieg, geschwiegen): *was silent. als: when. Liebe, f.: love. gestand (三要形: gestehen, gestand, gestanden): confessed.* [3] 君たちは、僕らが当時君たちに向かって言ったことを理解しなかった。verstandet nicht (三要形: verstehen, verstand, verstanden): *didn't understand. sagen: say.* [4] 僕は、君はドイツにいたと思っていた。dachte (三要形: denken, dachte, gedacht): *thought* 日本語では「いる」というが、ドイツ語では時称を dachte に一致せしめて warst と過去にする。[5] 我々は、かれに会った時、かれに礼を言った。begegnen: *meet.* [6] かれは、かれが持っていたものをすっかり私にくれた。hatte (三要形: haben, hatte, gehabt): *had.* [7] 教師は、三人の生徒が欠席していることを発見した。Lehrer, m.: *teacher. fand (三要形: finden, fand, gefunden): found. drei: three. Schüler, m.: schoolboy, pupil. fehlen: be absent.* [8] かれらは、それを聞いた時、笑った。lachen: *laugh. hören: hear.* [9] コロンブスは間違っアアメリカを発見したのである、というのは、本当は彼はインドへ行こうと思ったのだから。entdecken: *discover. aus Versehen: by mistake. wollte*

(三要形: *wollen, wollte, gewollt*): *intended to*. nach Indien: *to India*. fahren: *go*. (船に限らず, 一般に何でも乗物で行くことを *fahren* という)。[10] 余は来ぬ, 見ぬ, 而して勝ちぬ。kam (三要形: *kommen, kam, gekommen*): *came*. sah (三要形: *sehen, sah, gesehen*): *saw*. siegen: *win*. (この句は, ローマのシーザーが, 自分が戦場に姿を現わすや否や勝利を占めたと言って, 勝利の素速さを誇称した有名な句, 原語はラテン語の *veni, vidi, vici*.)

83. 未来の人称変化

過去をやったついでに未来を紹介しましょう。そうすれば, 過去・現在・未来の三基本時称が全部片づくことになります。

ドイツ語も, 英語と同様, 特に未来形というものはなく, 助動詞と不定形とを用いて未来の表現を致します。ただし, ドイツ語には, 特に未来のための *werden* という助動詞があるが, 英語は *shall* と *will* とを交々使い分けてまに合わせているという点が違います。(werden は, 元来は『.....になる』[英: *become, grow, get*] という動詞です, 47!)

kommen の未来形

ich werde kommen	wir werden kommen
du wirst kommen	ihr werdet kommen
er wird kommen	sie werden kommen

英語は, 一人称は *shall come*, 三人称は *will come*, 二人称は微妙に *shall* と *will* とを使い分けるといふ, 実に厄介なことになっていますが, ドイツ語はその点非常に簡単です。

(werden は, 次講において, 受働の助動詞として再び登場することになります。)

上表中, 助動詞と不定形との間に があるのは, 文章を成すときにはそこにいろんなものがはいつて来るといふ意味で, 構文の方法は, 前に話法の助動詞について述べたのと同じことです (71!) が, 念のためにちょっと復習しましょう:

定形正置 Er wird morgen zu mir kommen.

かれは明日私の所へ来るだろう。

定形倒置 Morgen wird er zu mir kommen.

明日はかれが私の所へ来るだろう。

定形後置 Da er morgen zu mir kommen wird,

かれが明日私の所へ来るだろうから,

例 題 26

[1] Morgen werden wir ein schönes Wetter haben.

モルゲン ヴェールデン シェーネス ヴェッテル ハーベン

[2] Was wird dein Vater sagen, wenn er es sieht?

ヴィルト ダイン ザーゲン ジート

[3] Du wirst sterben, wenn du den Rat deines

ヴィルスト シュテルベン ラート

Arztes nicht befolgst. [4] Der Mensch weiß, daß

アールツテス ベフオルクスト

er einst sterben wird. Er denkt aber: Ich werde

アインスト ヴィルト デンクト イヒ ヴェールデ

doch nicht sterben! [5] Ich habe das Resultat, ich

ドホ レズルタート

weiß nur noch nicht, auf welchem Wege ich es

ヌール ノホ アオフ ヴェルヒエム ヴェーゲ

erreichen werde. [Gauß]

エルライヒェン ヴェールデ

訳註: [1] 明日我々は美しい天気を持つであろう。morgen: *to-morrow*. schön: *beautiful, fine*. Wetter, *n.*: *weather*. [2] 君のお父さんがこれを見たら何と言うだろう。[3] 君は、もし君の医師の忠告を守らなければ、死ぬかも知れないぞ。Rat, *m.*: *counsel, advice*. Arzt, *m.*: *physician*. befolgen: *observe*. [4] 人間は、自分がいつかは死ぬであろうことを知っている。しかし彼は: おれはまさか死ぬまい、と思っている。einst: *once, one day*. doch nicht... (まさか...しはすまい)。ich が ich となっているのに注意せよ! 英語ならば斜体(イタリック)を用いて一語、一句を強調するところを、ドイツ語は字間をすかす。「おれは」まさか死にはすまい、と、「おれ」を強めたのである。[5] 私は結果を擲んでいる。ただいかなる筋路を通してそれに到達するであろうかがまだわからない。Resultat, *n.*: *result, answer*. nur: *only, however*. noch nicht: *not yet*. auf welchem Wege: *in what way, by what means*. (auf は英の on にあたる前置詞で、三格支配)。erreichen: *reach, arrive at, come to*.——(これは、よく引用される、数学者ガウス(Gauß)の言で、数学のような理屈一点張りの学問でも、最後は直観の問題であることを告白したものである。「答はわかっているんだが、どうしてそんな答が出るかはまだわからない」の意。直観は常に理屈の一步先を歩む。数学の試験でカンニングして答だけ書いて出して、運算はどうしたときかれた時には、この言を引用すべし。)

第15講 受働形

84. 受働形の構成

ich liebe (私は愛する), du verstehst (おまえは理解する)などを能働形といい、その逆の ich werde geliebt (私は愛される), du wirst verstanden (おまえは理解される)などの形を受働形(または受身の形)といいます。

英語では *I am loved, you are understood* などと、受働形は助動詞 *be* と過去分詞とを結びつけて作りますが、ドイツ語は助動詞 *werden* と過去分詞とを組んで構成します。英語と同様の *ich bin geliebt, du bist verstanden* などもありますが、これは次項において述べます。受働形と言ったら、まずさしずめ *werden* を用いる方の構造を考えるように慣らした方が、ことに英語を知っている人には、後日に誤解を残さなくてよいのです。

前講で紹介した未来も助動詞 *werden* を用いますが、その次に来る本動詞が不定形であるか過去分詞であるかによって、未来形か受働形かの区別がつくのです。

頭の良い人は、ちょっと変な点が気にかかりはしませんか? 不規則動詞の中には、不定形と過去分詞とが同形になるものがあつたはずですね? (79) たとえば *entlassen* (解雇する) は *entlassen, entließ, entlassen* という三要素形です。では *Er wird entlassen.* と言ったら、「かれは解雇する」のでしょうか「される」のでしょうか? なるほど、形式的にいうと、どちらにでもとれます。これは明らかにドイツ文典の大欠陥です。

けれども、そんな事はどこの国語にだってあります。日本語だって、*Kono nimotsu wa okuremasu ka?* などときかれたら、局員は、「そうですねえ、送れますが.....遅れますよ」と言うでしょうし、*Asu wa irasshaimasu ka?* とときかれたら、「明日は行きません」と答えていいのか「明日はいません」と答えていいのかわからないでしょう。(それにドイツ語の *Ich werde entlassen.* は、もし未来の意味なら *Ich werde ihn entlassen.* とかなんとか、必ず目的語を入れるでしょう。)

受働文の配語法は、未来と同じです:

定形正置: *Diese Zeitung wird in ganz Japan gelesen.*

この新聞は日本中で読まれている。

定形倒置: *In ganz Japan wird diese Zeitung gelesen.*

日本中でこの新聞は読まれている。

定形後置: Obgleich diese Zeitung in ganz Japan **gelesen wird**,
この新聞は日本中で読まれるにかかわらず,

英語の *by* はドイツ語では *von* (次の名詞は三格) または *durch* (次の名詞は四格) で, これは受働文と関係して記憶する必要があります。von と durch との区別はちょっと微妙ですが, 単に『誰それに云々された』ぐらいならば von で, 特に『誰それによって』と強く言う場合には durch の方が適當です。

Amerika wurde im Jahre 1492 von (durch) Kolumbus entdeckt.
(Amerika was discovered by Columbus in the year 1492.)

wurde は過去形です。werden の三要形は, 「なる」 (*get, become, grow*) の意ならば werden, wurde, geworden, 「られる」 (受働) の意ならば werden, wurde, worden です。未来は不定形だけで, 過去も過去分詞ありません。あつたら理屈に合わないでしょう。

例 題 27

- [1] Auch während des Tages leuchten die Sterne,
アオホ ヴェーレント ターガス ロイヒテン シュテルネ
obgleich sie nicht gesehen werden. [2] Radium
オップグライヒ ゲゼーエン ヴェールデン ラーディウム
wurde von Professor Curie entdeckt. [3] Wird das
ウルデ フォン プロフェッソル キュリー エントデックト ヴィルト
Glück der Menschen durch die Zivilisation gesteigert?
グリュック ドウルヒ ツィヴィリザツィオーン ゲシュタイ
[4] Durch Sport wird der menschliche Körper
ゲルト ドウルヒ シュポルト メンシュリッヒェ ケル
gesund und schön erhalten. [5] Ein Prinzip
ペル ダズント シェーン エルハルテン プリンツィープ
wird oft durch die Absurdität seiner Konsequenzen
オフト アップズルディテート コンゼクヴェンツェン
widerlegt. [6] Der schönste Roman wird nicht von
ヴィーデル・レークト シェーンステ ロマーン フォン
den Dichtern, sondern von dem Leben selbst geschrieben.
ディヒテルン ゾンデルン レーベン ゼルプスト ゲ
[7] Was große Männer tun, wird nie
シュリーベン グローセ メネル トゥーン
verstanden, sondern immer nur gelobt oder getadelt.
フェルシュタンデン ゾンデルン イムメル ヌール ゲロープト オーデル ゲダーデルト

訳註: [1] 昼間も、たとえ眼にこそ見えね、星は輝いているのである。 *während*: (二格支配の前置詞): *during*. *während des Tages*: *during the day, by day*. auch: *also, too, as well*. *leuchten*: *shine, glisten*. *Stern, m. pl.* — *e*: *star*. [2] ラジウムはキュリー教授によって発見された。 *Radium, n.*: *radium*. *Professor, m.*: *professor*. [3] 人間共の幸福は文明によって向上されるか? *Glück, n.*: *happiness, felicity*. *Zivilisation, f.*: *civilization*. *steigern*: *enhance, raise*. [4] スポーツによって人体は健全かつ美麗に保持される。 *Sport, m.*: *sport*. *menschlich*: *human*. *Körper, m.*: *body*. *gesund*: *healthy*. *schön*: *beautiful*. *erhalten*: *maintain*. (*erhalten* の三要形は *erhalten, erhielt, erhalten* で、不定形と過去分詞が同形であるが、この場合、*wird erhalten* が未来形ではなくて受働形であることは意味によって明らかである)。 [5] 原則はしばしばその帰結の不条理によって反駁される。 *Prinzip, n.*: *principle*. oft: *often, oftentimes*. *Absurdität, f.*: *absurdity*. *Konsequenz, f. pl.* — *en*: *consequence*. *widerlegen*: *refute*. [6] 最も面白い小説は、詩人によってではなく、人生そのものによって書かれる。 *schön*: *fair, pretty, nice* (*schönst*: *fairest, prettiest*). *Leben, n.*: *life*. *selbst*: *itself*. (*von dem Leben selbst*: *by the very Life*.) [7] 偉人の為すところは、決して理解されるということがなく、いつもただ褒められるか、けなされるかのいずれかにすぎない。 *groß*: *great*. *immer*: *always*. *nur*: *only, but*. *loben*: *praise*. *tadeln*: *blame, censure, find fault with*.

85. 状態相の受働形

受働形には、*ich werde geliebt* などの形以外に、英語の *I am loved* などと同様の *ich bin geliebt* などの形もあると前項で断わっておきましたが、両者の間には多少意味の区別があります。

動作相の受働形: *Der Brief wird geschrieben.*

(手紙が書かれる) (手紙が書かれつつある)

状態相の受働形: *Der Brief ist geschrieben.*

(手紙が書いてある) (手紙が書かれてしまった)

ですから、『手紙というものはこういうふうを書くものだよ』といって人に書き方(動作!)を教える場合には *Ein Brief wird so geschrieben.* というでしょうが、『その手紙はこういうふうに書いてあるよ』といって状態を描写する際には *Der Brief ist so geschrieben.* というでしょう。

『アメリカは 1492 年コロンブスによって発見された』は、英語でこそ *America was discovered by Columbus in the year 1492.* ですが、ドイツ語でこれを文字通り直訳して *Amerika war von Kolumbus im Jahre 1492 entdeckt.* といったら、1492 年には『既に発見されていた』、というような感じを与えてしまいます。

この状態相の受働形というのは、要するに 80 項でやった過去分詞の用法なので、から、例題は省きます。

86. 無意の es を主語とした受働文

これは英語には無いことですが、ドイツ語では、たとえば『労働が行なわれる』、『歌が歌われる』、『字が書かれる』ということ es wird gearbeitet (それが働かれる), es wird gesungen (それが歌われる), es wird geschrieben (それが書かれる) という妙な習慣があります。これは結局 man を主語にした能働形と同意です。

Es wird gearbeitet.=Man arbeitet.

Es wird gesungen.=Man singt.

Es wird geschrieben.=Man schreibt.

この es という主語は、後章 (124) に至って「非人称主語」という名称の下にまた改めて述べることになりますが、英語でいえば、たとえば *it rains* (雨が降る) の *it* と同じで、意味といっでは別に無いのです。

こうした妙な受働文は、定形正置の際だけ es を主語にしますが、倒置、後置となると es を省き、主語無しの文になります。たとえば『今日は働かない』は *Heute wird nicht gearbeitet.* で、『もし働けば』または『もし労働が行なわれれば』は *Wenn gearbeitet wird,* です。おのこの *Heute wird es nicht gearbeitet.; Wenn es gearbeitet wird,* の es を省略したものです。*Heute wird gearbeitet.* を『今日が働かれる』などと、*Heute* が主語であるように思ってははいけません。

例 題 28

- [1] Es wird nicht mehr gezankt. [2] Ich weiß
メール ゲツァンクト
 nicht, wie geschwommen wird. [3] Im Herbst wird
ヴィー ゲシュヴォムメン イム ヘルプスト
 nicht mehr gebadet. [4] Es wird auf einmal ge-
ゲバーデット アーフ アインマール ゲ
 klingelt. Etwas später hört man, daß geöffnet wird.
クリンゲルト エトヴァス シュペーテル ヘルト ダス ゲエフネット
 [5] Wo gehobelt wird, da fallen Späne.
ヴォー ゲホーベルト ダー ファルレン シュペーネ

訳註: [1] 喧嘩(けんか)はもうやめた。(直訳: それはもはや喧嘩されない。) zanken: quarrel. [2] 私はどういうふうに泳ぐかを知らない。wie: how. schwimmen: swim. (英語なら *I don't know how to swim.*) [3] 秋にはもはや海水浴は行なわれぬ。im (in と dem との結合形). Herbst, m.: autumn. baden: bathe. [4] たちまち呼鈴が鳴る。しばらくすると戸を開けるのが聞こえる。(直訳: それがたちまち鳴らされる。少し

後に開かれるのを聞く。) auf einmal: *at once, on a sudden.* klingeln: *ring (the bell).* etwas: *a little.* später: *afterwards.* hören: *hear.* öffnen: *open (the door).* [5] 鉋をかければ鉋屑がちる。(直訳: 鉋かけられる所, そこには鉋屑が落ちる。wo: *wherever.* (wo は従属的接続詞 [68]) であるから次が定形後置) hobeln: *to plane.* da: *there.* fallen: *fall.* Span, *m. pl.* —e: *shavings* (鉋屑).——これはことわざで, 荒仕事をすれば多少はたの迷惑になるのは当然で, そうお上品にはしてられない, の意。Wo man hobelt, fallen Späne. ともいい Wo man zimmert, fallen Späne. ともいう, zimmern は *to carpenter* (大工仕事をする).

第16講 前置詞

87. 前置詞の格支配

ドイツ語の前置詞には格支配という現象があります。英語だったら、たとえば『昼間』は *during the day* でよろしいが、ドイツ語では *during* が *während* だからといって *während der Tag* というわけには行かないのです。なぜかという、*während* なる前置詞は二格支配の前置詞ですから、*während des Tages* とならなければならないのです。

『だってそれは当たり前じゃないか、昼間は昼の間で、「昼の」という以上は二格にきまっているじゃないか……』と言う人があるかも知れませんが、それはこの場合偶然符合しているにすぎないので、前置詞と共に用いる名詞の格を日本語の「て・に・を」通りに決めるわけにはいきません。

こういうふうに、この前置詞は何格を要求するという事が習慣で決まっているのですが、こうした現象を前置詞の格支配と呼びます。

格支配という現象は、実は前置詞ばかりではなく、動詞にも、また形容詞にもあります。たとえば、例題で数回用いた *helfen* (助ける) ですが、日本語でも『私はあなたを助ける』と言ひ、英語でも *I help you.* と言うから、ドイツ語でも *Ich helfe Sie.* かと思うと、そうではなく、*Ich helfe Ihnen.* (私はあなたに助ける) と言ひます。すなわち *helfen* は三格支配なのです。そうかと思うと、同じ「助ける」でも「救う」、「救助する」(*to rescue*) の意の *retten* は日本語と同様四格支配で、*Ich rette Sie.* でよろしい……といったように、格支配という奴は、大体日本語に近くはあるが、ちょいちょい違っていることがあります。

前置詞をその支配する格によって分類すると四種になりますが、これから項を追ってそれらを紹介します。ただし、これは特にお断りして置かなければなりませんが、前置詞の意味と用法は実に複雑微妙で、とても訳語などで示し得るものではありません。ですから、用法は単にその一端を示すにとどめ、他はまた先へ行ってから追々と紹介することに致します。

88. 二格支配の前置詞

数からいうと、二格支配の前置詞が最も多数ですが、特殊なものが多いから、普通なのをほんの少々挙げるにとどめます。

前置詞は、それだけを単語として覚えたのでは駄目で、必ず句の形、文の形で暗記する必要があります。(女性の二格は三格と区別がつきませんから、男性、中性、又は複数形と結合した形を覚えるべきです。)

während des Tages ヴェーレント	昼間、日中
wegen des Erdbebens ヴェーゲン エールト・ペーベンス	地震のために
statt Geldes シュタット ゲルデス	貨幣の代りに
trotz aller Bemühungen トロツ アルレル ベミューウングエン	あらゆる努力にもかかわらず
infolge eines Skandals インフォルゲ スカンダールス	ある醜聞事件の結果
um der Kinder willen ウム キンデル ヴィルレン	子供たちのために
innerhalb eines Monats インネルハルプ アイネス モーナツ	一カ月以内に
außerhalb des Hauses アオセルハルプ ハオゼス	家の外で

備考: wegen は後置詞としても用います: des Erdbebens wegen. um...willen は変な前置詞で、名詞の前後につくわけです。

例 題 29

- [1] Der Mensch wird wegen seiner hervorragenden Eigenschaften die Krone der Schöpfung genannt.
ヴェーゲン ヘルフォール・ラーゲン
デン アイゲンシャフテン クローネ シェッフング ゲナント
- [2] Oft wird statt aller Antwort geschwiegen. [3]
オフト シュタット アルレル アントヴォルト ゲシュヴィーゲン
- Infolge eines Skandals mußte er seine Heimat verlassen. [4] Um ihrer Kinder willen tun die Eltern
スカンダールス ムステ ハイマート フェル
ラッセン トゥーエン エルテルン
- alles. [5] Die Wärmestraahlen werden ultrarote
ヴェルメ・シュトラーレン ウルトラー・ローテ
- Strahlen genannt, weil sie im Spektrum außerhalb
シュトラーレン ゲナント シュペクトルム アオセルハルプ
- des Rotes liegen. [6] Die Planeten Venus und Mer-
ローテス リーゲン プラネーテン ヴェーヌスメル

kur kreisen innerhalb der Erdenbahn. [7] Er kann

クール クライゼン

エールデン・バーン

trotz seines hohen Alters noch Tennis spielen.

ホーエン アルテルス ノホ テニス シュピーレン

訳註: [1] 人間はその卓越せる諸性質のゆえを以って万物の靈長と呼ばれる。her-vorragend: *prominent, eminent*. Eigenschaft, *f.*: *quality*. Krone, *f.*: *crown* (ただし「絶頂」, 「至上のもの」, 「極度」の意). Schöpfung, *f.*: *creature, creation* (造化, 万物). genannt (nennen: *call*, の過去分詞). [2] しばしば一切の返事に代えて口を噤(きん)むことあり。all: *all, every*. Antwort, *f.*: *answer*. schweigen: *keep silence, cease to speak*. [3] ある醜聞事件の結果, かれは己が故郷を去らねばならなかった。Skandal, *m.*: *scandal*. mußte (müssen の過去). Heimat, *f.*: *native country*. verlassen: *quit*. [4] 両親はその子たちのためには何でもする。Eltern, *pl.*: *parents*. [5] 熱線は, スペクトルにおいて赤の外側にあるので, 赤外線と呼ばれる。Wärme: *heat*. Strahl, *m. pl.* —en: *ray*. (Wärmestrahlen: *thermal rays*) ultrarot: *infra-red*. (ドイツ語でも infrarot とも言う, 赤「下」線の意。ultra はラテン語で, außerhalb の意, infra は unterhalb (二格支配), 「...の下部に」) Spektrum, *n.*: *spectrum*. Rot, *n.*: *red*. im (in と dem との結合形). [6] 金星と水星は地球の軌道の内側を回る。Planet, *m.* —en: *planet*, 遊星。Venus (金星): *Venus*. Merkur: *Mercury*. kreisen: *revolve, turn*. Erde, *f.*: *earth*. Bahn, *f.*: *orbit*. (Erdenbahn: *orbit of the earth*.) [7] かれはその高齢にもかかわらずまだテニスをやることのできる。hoch: *high* (hohen という形については 57). Alter, *n.*: *age*. Tennis, *n.*: *tennis*. spielen: *play*.

89. 三格支配の前置詞

三格支配の前置詞は, 最もよく用いられる普通のものばかりで, それだけにまた用法が広汎にわたり, たとえその一端を示すのすら困難を感じるのですが, まあとにかく列挙して見ると:

mit dem Finger ミット フィンゲル	指をもって	(英: <i>with</i>)
zu mir ツー ミール	私に向かって, 私の所へ	(英: <i>to</i>)
bei mir バイ ミール	私のもとに, 私の手もとに	(英: <i>by</i>)
von Berlin フォン ベルリール	ベルリンの, ベルリンから	(英: <i>of, from</i>)
aus dem Loch アオス ロホ	穴の中から	(英: <i>out of, from within</i>)
seit diesem Tage ザイト	この日以来	(英: <i>since</i>)
nach dem Essen ナーハ エッセン	食後	(英: <i>after</i>)
nach dem Bahnhof ナーハ デム バーンホーフ	駅の方へ	(英: <i>to, towards</i>)

例 題 30

- [1] Man spitzt den Bleistift mit dem Messer. [2]
シュピッツト ブライ・シュティフト メッセル
 Er ging zu seinem Onkel. [3] Willst du bei mir
ツー ヴィルスト バイ
 übernachten? [4] Wir fahren von Berlin nach Paris.
ユーベル・ナハテン フーレン ベルリール ナーハ パリース
 [5] Eine Maus guckt aus dem Loch. [6] Sie ist seit
マウス グックト アウス ロホ ザイト
 drei Wochen krank. [7] Ich ging gleich nach dem
ドライ ヴォッヘン クランク グライヒ ナーハ
 Abendessen zu Bett. [8] Der Magnet zeigt nach
アーベント・エッセン ツー ベット マグネート ツァイクト
 dem Nordpol.
ノルト・ポール

訳註: [1] 鉛筆はナイフでとがらす。spitzen: *sharpen*. Bleistift, *m.*: *pencil*. Messer, *n.*: *knife*. [2] かれはかれの叔父のところへ行った。[3] 君は僕の所に泊るか? übernachten: *stay the night, pass the night*. [4] 我々はベルリンからパリの方へ車行した。fahren: (乗物で) 行く。(三要形: *fahren, fuhr, gefahren*). [5] 鼠が穴から覗いている。Loch, *n.*: *hole*. gucken: *peep*. [6] 彼女は三週間前から病気です。Woche, *f.*: *week*. krank: *sick*. [7] 私は夕食後直ちに就寝した。gleich: *immediately, directly*. Abendessen, *n.*: *supper*. Bett, *n.*: *bed*. [8] 磁石は北極の方を指す。Magnet, *m.*: *magnet*. zeigen: *show, indicate*. Nordpol, *m.*: *north-pole*.

90. 四格支配の前置詞

四格支配のものは、何性の名詞と結びつけて覚えておいても誤解は生じません。というのは、四格と同じ形になるのは一格だけで、一格支配というものは無いからです。

durch den Tunnel ドゥルヒ トゥンネル	トンネルを抜けて (英: <i>through, across</i>)
gegen den Wind ゲーゲン ヴィント	風にさからって (英: <i>against</i>)
um den Tisch ウム ティッシュ	机の周囲に (英: <i>round, about</i>)
für die Zukunft フュール ツークンフト	将来のために (英: <i>for</i>)
ohne jeden Widerstand オーネ イェーデン ヴィーデル・シュタント	なんらの抵抗もなく (英: <i>without</i>)
bis sechs Uhr abends ビス ゼックス ウール アーペンツ	晩の六時まで (英: <i>till, until</i>)

備考: bis (まで) は大抵の場合、もう一つ他の前置詞を添えて用います: bis zum Abend (晩まで), bis in die Nacht (夜まで).

例 題 31

[1] Jetzt fährt der Zug durch einen Tunnel. [2]

イエッツト フェールト ツーグ ドゥルヒ トゥンネル

Der Mond läuft um unsern Planeten. [3] Er han-

モント ロイフト ウンゼルン プラネーテン ハン

delt offenbar gegen meinen Befehl. [4] Die Pflanze

デルト オッフエンバル ゲーゲン ベフェール フランツェ

braucht für ihre Existenz Licht und Wasser. [5]

ブラオホト フェール エクシステンツ リヒト ヴァッセル

Ohne Nahrung kann ein Tier nicht leben. [6]

オーネ ナールング ティール

Warten Sie bitte bis Weihnachten!

ビス ヴァイナハテン

訳註: [1] 列車はただ今トンネルを通過します。jetzt: now. Zug, m.: train. Tunnel, m.: tunnel. [2] 月は我々の遊星(地球)のぐるりを運行する。Mond, m.: moon. laufen (46!): run, go. Planet, m. —en: planet. [3] かれは明らかに余の命令に反して行動する。handeln: act. offenbar: obviously, evidently, undoubtedly. Befehl, m.: order. [4] 植物はその生存のために光と水とを要する。Pflanze, f.: plant. brauchen: want, need. Existenz, f.: existence. Licht, n.: light. Wasser, n.: water. [5] 食物なしには動物は生きていられない。Nahrung, f.: food. Tier, n.: animal. [6] どうかクリスマスの頃までお待ちください。Weihnachten, pl.: Christmas, Xmas.

91. 三・四格支配の前置詞

英語では, *in* (.....の中で) と *into* (.....の中へ) とを区別して使い分けますが, ドイツ語には *into* に相当する前置詞がありません。しかし, その代り, *in* が四格支配だと *into* の意味になり, 三格支配だと普通の *in* になるのです。

1. Der Falter fliegt in die Flamme.

ファルテル フリークト フラムメ

蛾が焰の中へ飛び込む。

2. Der Falter verbrennt in der Flamme.

フェルブレント

蛾が焰の中で焼け死ぬ。

ところが, 便利なことには, 単に『中』という前置詞のみならず, 上下前後.....などを意味する合計九個の前置詞に関しても, 同じような区別を立てることができるのです。すなわち, 次に表示した九つの前置詞は, 動作の方向を指す際には四格を, 動作の行なわれる場所(すなわち点もしくは範囲)を指す際には三格を支配するのです。

	三格支配 (動作の場所)	四格支配 (動作の方向)
in	の中で (を)	の中へ
an	の際(き) で (を)	の際(き) へ
auf	の上で (を)	の上へ
unter	の下で (を)	の下へ
vor	の前で (を)	の前へ
hinter	のうしろで (を)	のうしろへ
neben	の傍で (を)	の傍へ
zwischen	の間に (を)	の間へ
über	の上方で (を)	の上方へ
	の彼方で (を)	の彼方へ

これ以外のものは、その場合によって、違った前置詞を用いてこの区別を明らかにします。たとえば「私は私の友人のところに住んでいる」は Ich wohne **bei** meinem Freund. 「私は私の友人のところへ行く」は Ich gehe **zu** meinem Freund. など。

上表中、三格支配は「に」で表現してもいいのですが、日本語の「に」はややもすると方向をも表現しますから、わざと「で」を用いたのです。

この区別は、よく「運動」とか「静止」とかいったような語を用いて定義されますが、それはよくありません。如何となれば、三格支配は必ずしも静止ではなく、たとえば『彼はホールの中をあちこちとぶらつく』は Er wandelt in der Halle. 『鉄道はあの山の背後を通っている』は Die Eisenbahn läuft dort hinter dem Berge. など、とにかく静止であろうと運動であろうと、動作の行なわれる場所はすべて三格なのです。上表中 (を) と付加したのは、運動の場合を意味します。

例 題 32

- [1] Diese Krise stellt uns vor die Frage: Sein
クリーゼ シュテルト フォール フラーゲザイン
oder Nichtsein. [2] Vor dem Gesetz sind alle Men-
オーデル ニヒト・ザイン フォール ゲゼッツ アルレ メン
schen gleich. [3] Nach der Operation wurde der
シェン グライヒ ナーハ オペラツィオーン ヴルデ
Patient sachte auf das Bett gelegt. [4] Mancher
パツィエント ザハテ アオフ ベット ゲレークト マンヒェル
Schauspieler starb auf der Bühne. [5] Ein Verräter
シャオ・シュピーレル シュタルプ アオフ ビューネ フェルレーテル
mischte Gift in den Wein. [6] Das lateinische
ミッシュテ ギフト ヴァイン ラタイニッシュェ

Sprichwort „in vino veritas“ bedeutet: im Wein
 シュプリヒ・ヴォルト イン ヴィーノー ヴェーリタース ベドイテット イム ヴァイン
 ist Wahrheit. [7] Das Kind guckt verwundert hin-
 ヴァールハイト グックト フェルヴンデルト ヒン
 ter den Spiegel. [8] Jemand lacht hinter deinem
 テル シュピーゲル イェーマント ラハト ヒンテル ダイネム
 Rücken! [9] Der Fischer taucht tief unters Wasser.
 リュッケン フィッシエル タオホト テーフ ウンテルス ヴァッセル
 [10] Unter diesem Preis kann ich Ihnen die Ware
 ウンテル ディーゼム プライス ヴァーレ
 nicht verkaufen. [11] Er klebte das Plakat an die
 フェルカオフエン クレープテ プラカート アン
 Mauer. [12] Der Kalender hängt an der Wand.
 マオエル カレンデル ヘングト ヴァント
 [13] Neben mir sitzt eine schöne Dame. [14] Die
 ネーベン ジット シェーネ ダーメ
 Schwester stellte die Wiege neben das Bett der
 シュヴェステル シュテルテ ヴィーゲ ネーベン ベット
 Wöchnerin. [15] Er wohnt halbwegs zwischen dem
 ヴェヒネリン ヴォーント ハルプ・ヴェークス ツヴィッシェン
 Dorf und der Eisenbahnstation. [16] Man nimmt
 ドルフ アイゼンバーン・シュタツィオーン ニムト
 die Zigarette gewöhnlich zwischen den Zeige- und
 ツィガレッテ ゲヴェーンリヒ ツヴィッシェン ツァイゲ
 den Mittelfinger. [17] Das Luftschiff schwebt über
 ミッテル・フィンゲル ルフト・シッフ シュヴェープト ユーベル
 der Stadt. [18] Sie flogen bis über den Nordpol.
 シュタット フローゲン ビス ユーベル ノルト・ポール
 [19] Es brennt über dem Fluß. [20] Was über den
 ブレント ユーベル フルス ヴァス ユーベル
 Zaun fällt, gehört dem Nachbar.
 ツァオン フェルト ゲヘールト ナハバル

訳註: [1] この危機は我々をして生か死かの問題に直面せしめる。(直訳: ...の問題の前に据える) Krise, f.: crisis. stellen: place, put. Frage, f.: question. Sein oder Nichtsein: to be or not to be. (To be or not to be, that is the question. [生か死か, 問題はここじゃ] という Hamlet のせりふが有名なので, それからこの to be or not to be が, あるいは幽明両界の意に, あるいは死すべきや存すべきやの意に, あるいはただ今のような単なる死活の問題 (Lebensfrage) の意に用いられる。ドイツではシェークスピアの訳は August Schlegel のが權威になっていて, この句は Sein oder

Nichtsein, das ist hier die Frage と訳されている。[2] 法の前にはすべての人間が平等である。(All men are equal before the law.) Gesetz, *n.*: law. gleich: equal. [3] 手術後患者はそっと床の上に置かれた。Operation, *f.*: operation. Patient, *m.*—*en*: patient. sachte: gently (そっと, しずかに). legen: put, set, place. [4] 舞台の上で死んだ役者も少なくない。mancher: many a (多くの, 幾多の). sterben, starb, gestorben: die, died, died. Bühne, *f.*: stage. [5] ある裏切者がぶどう酒の中へ毒を混ぜた。Verräter: traitor. mischen: mix. Gift, *n.*: poison. Wein, *m.*: wine. [6] in vino veritas というラテン語のことわざは、酒中に真理あり、を意味する。lateinisch: Latin. Sprichwort, *n.*: proverb. bedeuten: mean. im=in dem. Wahrheit, *f.*: truth. (酒中に真理ありとは、酔えば本音が出る、の意。) [7] 子供が不思議がって鏡のうしろをのぞく。gucken: peep. verwundert: surprised, wondering. Spiegel, *m.*: mirror, looking-glass. [8] 誰かがおまへの背後で笑っているぞ。jemand: someone, somebody. Rücken, *m.*: back. [9] 漁夫は深く水中に潜る。(直訳:「水の下に」「水面下へ」) Fischer, *m.*: fisherman. tauchen: dive. tief: deeply. unters は unter と das との結合形。(英語でもドイツ語でも、水中にかくれていることを、「水の中」と言わないで「水の下」という: unters Wasser, under water, beneath water.) [10] これ以下の価では、この品をあなたに売るわけにはいきません。Preis, *m.*: price. Ware, *f.*: ware, commodity. verkaufen: sell. [11] かれはポスターを壁に貼りつけた。kleben: paste, stick. Plakat, *n.*: poster, placard. Mauer, *f.*: wall. [12] 暦が壁に掛かっている。Kalender, *m.*: calendar. hangen: hang, be hung. Wand, *f.*: wall. (前出 Mauer は、石、煉瓦、土の壁や塀をいう、Wand は何でもいい一般の壁。) [13] 私の横に美しい婦人が掛けている。sitzen: be sitting. Dame, *f.*: lady. [14] 看護婦が摇篮を産婦のベッドと並べて置いた。Schwester (=Krankenschwester): sick-nurse. Wiege, *f.*: cradle. Wöchnerin, *f.*: lying-in woman. [15] かれは村と駅との間の、まんなかどろに住んでいる。wohnen: dwell. halbwegs: half-way. Dorf, *n.*: village. Eisenbahn, *f.*: railway. [16] 巻煙草は大抵人差し指と中指との間にはさむ。Zigarette, *f.*: cigaret. Zeigefinger, *m.*: forefinger, index. Mittelfinger, *m.*: middle-finger. nimmt (不定形: nehmen: take).—Zeige- とあるのは、次の Mittelfinger と共通の finger を省いたのである、ドイツ語はこの - なる略語符によって合成語の一半を省略することが非常に多い。「北極と南極」: Nord- und Südpol; 「壁暦あるいは卓上暦」: Wand- oder Tischkalender; 「日曜及び祭日には」: an Sonn- und Feiertagen. [17] 飛行船は市街の上空にうかんでいる。Luftschiff, *n.*: airship. schweben: hover. Stadt, *f.*: city, town. [18] 彼らは北極の上空まで飛んだ。fliegen, flog, geflogen: fly, flew, flown. [19] 河向こうが火事だ。brennen: burn (燃える); (Es brennt は文字通りには it burns で、「火事だ」の意。) Fluß, *m.*: river. [19] 垣の向こうへ落ちたものは隣家のもの。Zaun, *m.*: hedge. gehören (と三格): be owned by. . . . Nachbar, *m.*: neighbour. — これは巷間に認められている不文律を平たく定義化したことわざである。

92. 前置詞と冠詞との結合形 im, aufs, zur など

例題中に既にたびたび出て来ましたが、im (in dem), unters (unter das) など、前置詞と冠詞とが一語に結びついたものがよく用いられます。(英語の don't や I'm のように ' を打つには及びません。)

im=in dem

ins=in das

am=an dem

ans=an das

vom=von dem

beim=bei dem

zum =zu dem	zur =zu der	vorm =vor dem
vors =vor das	hinterm =hinter dem	hinters =hinter das
unterm =unter dem	unters =unter das	überm =über dem
übers =über das	fürs =für das	durchs =durch das
aufs =auf das		

93. damit, womit など

英語では、『それをもって』は、今では *with it*, 『何をもって』は *with what* ですが、昔は *with it* の代りに *there-with*, *with what* の代りに *where-with* という語を用いたもので、その他の前置詞にもそうした *there-* や *where-* との結合形がありました。ドイツ語では、それと平行した *damit* (*there-with*), *womit* (*where-with*) などを現在も盛んに用います。ほんの数例をあげると：

darin	その中に	worin?	何の中に
darauf	その上に	worauf?	何の上に
davor	その前に	wovor?	何の前に
dafür	そのために	wofür?	何のために

da- の次に母音が来ると大抵 *r* を挿めます。

この *da* は、*es* であると言ってもよし、*das* であると言ってもよいでしょう。両方ともあるのです。*es* に相当する場合には *darin* [ダーリン], *darauf* [ダーラオフ] など、前置詞の方にアクセントを置き、*das* に相当する時には [ダーリン], [ダーラオフ] など、*ダー*の方を強く発音します。

90 項でやった「で」と「へ」の区別は、この形ではもはや分らなくなりますが、ただ *in* だけは *darein* (その中へ), *worein* (何の中へ) というのが別にあって、その区別を存しています。

前置詞は、その他、*hier-* とも結合して、*hierin* (この点に), *hiermit* (これをもって), *hierdurch* (かくする事によって) など、少し理屈っぽい調子の語を造りますが、それらは、新聞や論文を読み出せばすぐに慣れます。

第17講 分離動詞

94. 動詞の前綴

英語には *run away* (駆け去る), *come back* (帰って来る), *wander about* (歩き回る), *die out* (死に絶える), *give up* (放棄する), などといった熟語動詞がたくさんありますが、それらに相当するドイツ語は:

weglaufen	(<i>run away</i>)	駆け去る
zurückkommen	(<i>come back</i>)	帰来する
umherwandern	(<i>wander about</i>)	歩き回る
aussterben	(<i>die out</i>)	死に絶える
aufgeben	(<i>give up</i>)	放棄する, あきらめる
abschießen	(<i>shoot down</i>)	射落とす, 撃墜する

どれを見ても、英語ではお尻についている *away* とか *back* とかいったものが、ドイツ語では、みんな頭についています。しかも、続けて一語に書きます。(weg は英語の *away* または *off* で「去る」ことを意味し, zurück は *back* で, 「うしろへ」, 「もと来た方へ」, 「戻る」の意, umher は *about* で「あちこち」, aus は *out* で, 「果てる」「終熄する」, auf は *up* で, 「上へ」とか「上がる」(雨があがる, あがったり, 飯の食い上げ, などの), ab は *down* で, 「下へ」「落とす」「降る」などの意。)

ついでに、ちょっと、日本語の複合動詞の一斑をうかがってみると参考になります。日本語では、たとえば『見る』という動詞を基礎にして、その後に aus や auf や ab に相当するいろいろな微妙な語を添えて、少しずつ様子を変えて行きます: 見つける, 見渡す, 見上げる, 見下ろす, 見込む, 見とれる, 見そめる, 見果てる, 見落とす, 見違える, 見それる, 見送る, 見かえる, 見合う, 見破る, 見通す, 見張る, 見晴らす, 見分ける, 見殺す, 見失う, 見届ける, 見限る, 見比べる, 見のがす....., 『書く』にもいろいろな書き方があって, 書きつける, 書き上げる, 書き込む, 書き落とす, 書き誤る, 書き散らす, 書きなぐる, 書きかける, 書き続ける, 書き損ずる, 等々..... これらの後半部を成している『かける』とか『込む』とか『合わす』とかいう言葉がすなわち英語の *on*, *up*, *out* やドイツ語の *auf*, *an*, *ab* などの前綴に該当する非常に微妙な部分なので、たとえば『合わせる』とは何ぞやという事になると、説明は非常にむずかしい。鰻と梅ぼしはいけないそうだが、蟹と柿は『食い合わせ』になるかど

うかと『聞き合わせ』たら、ちょうど『居合わせ』た女医さんが、それは『たべ合わせ』になるといったので『見合わせ』たなんてのはどうです？ それはまず見合わせて『仕合わせ』だったのかも知れませんが、この『仕合わせ』などになると、『仕』と『合わせ』とがすこぶる面白く提携していて、英語やドイツ語にも *to do together* とか *zusammentun* とかいったような同種のものが欲しい気がするくらいですが、これは僭越ながら大和言葉にだけしかありません。似たものでは *zusammentreffen* (英語に直訳すれば *meet together*, すなわち『逢い合わせ』ですな.....) が『まんが好い』、『お誂え向き』の意に用いられるくらいのものです。英語には *to do well* 調子がよい、あんばいが良い、景気が良い、——*to do good* 益する、ためになる、とは別物です——ギリシア語でも、「仕合わせである」、「運がよい」ことを *εὖ πράττειν* [良く・やる] または *καλῶς πράττειν* [佳く・やる] と言い、日本語でも「あいつはうまいことをしている」、英語でも人の顔を見ると早速 *How do you do?* (という *do* がすなわちこれです) というのがあって、仕合わせの『仕』だけは持っていますが、肝心の『合わせ』の方はお生憎(ぞ)さまです。

こんな種類の事を、国の言葉にわたってしらべ『合わせ』だした日には曾孫(そご)が学校を出て嫁を貰うようになるかも知れないから、それはまずその辺にしておいて、さてちょっと曾孫で思い出したことです(話が長くなってすみません.....), 私の知人で、非常に孫を可愛がっている人があったのですが、あんまり可愛がりすぎたためか、その孫がある日のこと、東京へ出て日本一の映画俳優になるんだと啖呵(たんか)を切って家出してしまった。爺さん吃驚して、自分で上京までして探しあて、いろいろとさとしたが、どうしても日本一のスターになると言ってきかないので、そんなら勝手にしろと行って田舎へ引き揚げ、しばらく様子をうかがっていると、そのうちにある日のこと、新聞に孫の写真が出た。日本一の映画俳優、とは書いてなくて、『ああ無情』という一般標題で、火葬場の前の乞食や、神田川の舟の生活などを毎日総めぐりやっている欄に、共同便所の横で靴みがきをやっている青年が出ているのが、てっきり自分の孫だ！そこで爺さんの打った電報が面白い：『ユメ、ミハテタカ、ヂヂ』——それに対する孫の返電も相当思い切ったもので：『ミハテタ、リヨヒオクレ、ヨシカズ』.....

というのは、この『夢を見果てる』というのが現にドイツ語にもあって、『.....果てる』、『.....し終わる』、『.....しつくす』、『.....しきる』、『.....しやむ』は *aus-* (英語でも *out: burn out* 燃えきる, など) という前綴で表現され, *austräumen* (*to dream out*) といえは夢を見はてることになるのです。従って、爺の電文は、ドイツ人なら „ausgetraeumt? opa“ で、返電は „Ja!“ でしょう。(ae=ä) (opa=Großpapa を子供がオーパーという) 類似の複合動詞を挙げると：

ausspielen (手の札を) 出しつくす spielen=play

ausschlafen	寝がたりる, 存分眠る	schlafen= <i>sleep</i>
austoben	あばれたいだけあばれる	toben= <i>rage</i>
ausweinen	倦きるほど泣く	weinen= <i>weep</i>
auskämpfen	戦い抜く	kämpfen= <i>fight</i>
austragen	着古す	tragen= <i>wear</i>
ausblühen	咲きやむ, 花時を過ぎる	blühen= <i>bloom</i>
auslernen	学びつくす	lernen= <i>learn</i>

すべて、行くところまで行き「つくす」、やれるところまでやり「きる」ことで、何なら「出しきる」、「眠りきる」、「あばれきる」、「泣ききる」などといっても日本語として受け取れます。(上例中には *sich* [自分を, *oneself*] と共に用いた方がよいものもありますが、そんな話はまあ別としましょう。)

この *aus-* という前綴 (あるいは接頭詞) は英語の *out* だと言いましたが、*out* と言えば、英語でも、*burn out* や *fight out* など以外に、『……し負かす』という *out* は、ドイツ語と同じように前綴として用います: ある人を『走りまかす』(*outrun*), ある人を『生き負かす』, すなわちその人が死んでもまだ生きている (*outlive*), 月が群星を『照りまかす』(*outshine*), 敵将を『将しまかす』(*outgeneral*) すなわち一枚うわ手に出る, 等々。この *out* はドイツ語では *über-* という前綴で:

überscheinen	照りまかす, 光りまかす
überlisten	計りまかす (裏をかく)
übertönen	響きまかす
überwuchern	はびこり負かす
überleben	生き負かす

その他、何でも勝手な語を製造してよろしいので、たとえば、女に向かって恋愛遊戯をしかけたら、ヒジ鉄を食うと思いきや、相手の方が更に猛烈で、さすがの *Don Juan* も散々 *outflirt* (*überflirten*) されて、すなわち「いちやつき負かされて」顔まけしたなどという目もあてられない嬉しい話は英独期せずしてその軌というよりはむしろその奇を一にしています。

以上の長談義で、動詞の前綴というものがいかに微妙なはたらきを持った、またいかに興味深いものであるかがおわかりになったことと思います。

95. 分離動詞と非分離動詞

ところでさて、実際問題にかえて、いよいよ本講の主題たる分離動詞について述

べましょう。ただ今 *auslernen* (学びつくす, 学びきる) という動詞を挙げましたが、これは勿論不定形で、文章を成すと (定形正置の場合ですが):

Man lernt nie aus. 人は決して学びつくさず。

有名な通り言葉ですが、何の事かと言うと、『いくら年をとっても人生には次から次へとおどろくようなことがある』、『こりやまた一つ学問をした』という時に言う言葉です。過ぎぬる食糧危機の最中に、自分の養女を煮て食ったという記事が新聞に出ていたが、そう思って私も自分の娘を見ると、なるほど娘も蛋白質の一種だと気がついたが、これなどは正に *Man lernt nie aus.* の絶好の例ですな。英語でも *We are never too old to learn.* という事を言うが、これは余り面白くない、むしろ『あきれても又あきれてもあきれても、あきれきれぬはこの世なりけり』に止めを刺しますか。

それはそうとして、*auslernen* が *lernt.....aus* と分かれてしまった所にお目をとめていただきます。これがすなわち分離動詞の名のある所で、分離動詞とはすなわち定形正置 (および倒置) の文において前綴が遊離してしまう複合動詞のことです。英語の *run away*, *come back*, *give up* などに相当するものはすべて分離動詞で、*away* や *back* や *up* に相当する *weg-*, *zurück-*, *auf-*, さてはただ今の *aus-* などを「分離前綴」と言います。

それに反して、英語の *outlive*, *outshine*, さては *become*, *forgive* などに相当する *überleben*, *überscheinen*, *bekommen*, *vergeben* などは、たとえば:

Der Mond überscheint die Sterne. 月が群星を輝きまかす。

といったように、*über* を遊離せずに用いる点は、英語の *outshine* と全然同じで、これを分離動詞と区別するために非分離動詞と呼びます。*über-* は、ここでは、非分離前綴です。(be-, ver-, ge-, ent-, zer-, emp-, er- は必ず非分離前綴ときまっています。)

備考: 非分離前綴を有する動詞、すなわち非分離動詞は、その三要素形において、過去分詞の前綴 *ge-* を省略します (78!)

以上の説明で、複合動詞 (すなわち前綴を有する動詞) には分離動詞と非分離動詞の区別があることがわかりました。ところで、その二種類を見わけけるには、大体次の二点を心得ておけばよろしい。

(1) 分離前綴は語幹よりも強く発音する

不定形を見ると両方とも同じようですが、分離動詞は必ず前綴に主なるアクセントがあります。*auslernen* は [アオス・レルネン] であって、決して初学者がよく読み誤るように [アオス・レルネン] ではありません。([アオスレルネン] などと発音

すると、たとえば *Aus Lernen wird ein Spielen*. [学修が遊び事になってしまう] などという際の *aus Lernen* のようにきこえます)——非分離動詞はその逆で、英語の *become* においても *be* より *come* の方が強くなるように *bekommen* は [ベコムメン] であって、[ベコムメン] ではありません。*über-listen* (裏をかく、してやる) は [ユーベル・リステン] ではなく、[ユーベル・リステン] です (英語の *outwit*, *outgeneral*, *outmanoeuvre* も然り)。

(2) 前綴によって、分離、非分離がほぼきまっている

auf, an, aus, vor, weg, zurück など、大部分のものは

分離ときまっています。*über*, *unter*, *um* などは、語によって、また意味によって分離非分離がきまります (たとえば前述の「……まかす」の *über* は必ず非分離)。必ず非分離ときまっているのは *be-*, *ge-*, *er-*, *ver-*, *ent-*, *emp-*, *zer-* の七個だけです。

96. 分離動詞を用いる場合の構文

さて、一番重要なのは文章を作る場合における分離動詞の置き場所です。こんどは、今まで用いたような特殊な語ではなく、なにか最も普通な、たとえば *aussprechen* [アオス・シュプレッヒェン] (*to pronounce*) 「発音する」という分離動詞を用いて文章を作ってみましょう。定形正置の場合は既に前項で紹介しましたが、こんどは正置と倒置と後置との三つの場合を比較して見ましょう。

定形正置: *Man spricht „Vater“ etwa wie „Vata“ aus.*

ファートルは大体ファータのように発音する。

定形倒置: *„Vater“ spricht man etwa wie „Vata“ aus.*

ファートルは大体ファータのように発音する。

定形後置: *Daß man „Vater“ etwa wie „Vata“ ausspricht,*

ファートルは大体ファータのように発音するという事を、

すなわち、分離前綴 (今の場合ならば *aus*) は、既に前項において定義したごとく、定形正置と定形倒置の場合において分離し、しかも文章の一番最後に置かれるのです。定形後置の場合には分離しません。

この定義はもっと簡単に言い表わすことが出来ます。すなわち、分離前綴は主文章 (すなわち独立文章) においては分離し、副文章 (すなわち従属文章) においては分離しない。(主文章、副文章という概念については 69 項!)

こうした配語法は、今までにも既に二回、よく似た場合があります。それはすなわち、助動詞を用いる場合において不定形の位置、受働文における過去分詞の位置です。次に、定形正置の場合における五種の文を比較して見ます。不定形にしる、過去

分詞にしる、分離前綴にしる、『いやしくも定形と密接に係る部分はずべて最後位を占める』というドイツ語文法の基本原則が明らかに看取されるに違いありません：

助動詞： Er **kann** ein wenig deutsch **sprechen**.

かれは少しばかりドイツ語が話せる。

受 働： Deutsch **wird** auch in Amerika **gesprochen**.

ドイツ語はアメリカにおいても話される。

分離動詞： Man **spricht** „Vater“ etwa wie „Vata“ **aus**.

人はファーターをほぼファータのごとく発音する。

熟語動詞： Ich **gehe** heute zu Fuß **nach Hause**.

私は今日は徒歩で帰宅する。

同 : Sie **nimmt** gewöhnlich neben mir **Platz**.

彼女は大抵私の横に着席する。

nach Hause gehen (*to go home*) は「帰宅する」という熟語、Platz nehmen (*to take a seat, to sit down*,——文字通りには *take place* ですが、*take place* は「行なわれる」だから、意味が違います!) は「着席する」という熟語ですが、これらの nach Hause (家の方へ) という句や、Platz (*place*) という名詞は、つまり分離前綴と同じような取り扱いをするわけです。不定形も、分離動詞のように一語に続けては書かないだけで、やはり Platz nehmen, nach Hause gehen というふうな順にして、動詞を後へ持ってきます。英語のように gehen nach Hause とか nehmen Platz とかいう順にはしません。

例 題 33

[1] Die Schwalben kommen im Frühling oder erst

シュヴァルベン

フリュERING オーデル エールスト

im Sommer zurück. [2] Ich schlug zwei Seiten

ゾムメル

ツーリュック

シュルーク ツヴァイ ザイテン

auf einmal um. [3] Er nahm den Vorschlag mit

アオフ アインマール ウム

ナーム

フォール・シュラーク ミット

Freuden an. [4] Man kann einen Satz nicht verste-

フロイデン アン

マン

ザッツ

フェルシュテ

hen, wenn man zwei Seiten auf einmal umschlägt.

エン

アオフ アインマール ウム・シュレークト

[5] Man teilte mir in einem Brief mit, daß er den

タイルテ

ミット ダス

Vorschlag mit Freuden annahm. [6] Die Salpeter-
 フォール・シュラーク アン・ナーム ザルペーテル・
 säure greift die meisten Metalle an und löst sie auf.
 ゾイレ グライフト マイステン メタルレ アン レースト
 [7] Die Astronomie berechnet die Sonnen- und Mond-
 アストロノミー ベレヒネット ゾンネン モーント・
 finsternisse auf Jahrtausende hinaus mit unfehlbarer
 フィンステルニッセ ヤール・タオゼンデ ヒナオス ウンフェールパーレル
 Sicherheit voraus. [8] Die Geburtswehen setzen
 ジッヒェルハイト フォーラオス ゲブールツ・ヴェーエン ゼッツェン
 aus bisher ungeklärten Gründen meist mitten in der
 アオス ビスヘール ウンゲクレールテン グリュンデン マイスト ミッテン
 Nacht ein.
 ナハト アイン

訳註: [1] つばめは春あるいはやっと夏になって帰ってくる。Schwalbe, f.: swallow. erst: only (やっと). Frühling, m.: spring. Sommer, m.: summer. zurück-kommen (分): come back. [2] 私は二つの頁を一ぺんにめくった。um-schlagen (分): turn over (めくる). Seite, f.: page. auf einmal: at once, all at once. [3] かれはその提議を欣然として受諾した。Vorschlag, m.: proposal, offer, proposition. mit Freuden: with joy, with pleasure. an-nehmen (分): accept. [4] 二頁を一緒にめくってしまうと、文章を理解することができない。Satz, m.: sentence. [5] 人は私に、かれがその提議を欣然受諾したと、手紙で知らせて来た。mit-teilen (分): inform. [6] 硝酸は大抵の金属を腐食して、これを溶解する。Salpeter, m.: saltpetre nitre. Säure, f.: acid. (Salpetersäure: nitric acid.) an-greifen (分): attack, corrode. meist: most. Metall, n.: metal. auf-lösen (分): dissolve, liquefy, melt. [7] 天文学は日食月食を幾千年かの先まで絶対無過誤の確実性を以て予測する。Astronomie, f.: astronomy. voraus-berechnen (分): precalculate, calculate beforehand (予め算定する). Sonnenfinsternis, f. pl. —se: eclipse of the sun, solar eclipse. Mondfinsternis, f. pl. —se: eclipse of the moon. auf Jahrtausende hinaus: for thousands of years. Jahrtausend, n. pl.—e: millennium, millenary. auf~hinaus: for~. unfehlbar: infallible. (決して誤たざる). Sicherheit, f.: certainty. [8] 陣痛というやつは、ただ今までのところ未だははっきりしないある種の理由から、大抵真夜中に始まる。Geburt, f.: birth, childbirth. Wehe, f.: pain, pangs. (Geburtswehen, pl.: labour pains, throes.) ein-setzen (分): set in, begin, commence. aus: out of. (ただし aus... Gründen: for reasons, by reasons) bisher: hitherto, up to this time. klären: to clear. (ungeklärt: unknown) Grund, m. pl. —e: reason. meist: generally, for the most part. mitten in: amidst. Nacht, f.: night.

97. 分離動詞の三要形

分離動詞の三要形を明らかにしておく必要があります。ことに過去分詞において、ge- なる前綴が、分離前綴と語幹との間へ挟まり込んでしまうという変な現象に着目していただきます:

不定形	過去	過去分詞
mitteilen 通知する	teilte mit	mitgeteilt
aussprechen 発音する	sprach aus	ausgesprochen

不定形を知っていれば、助動詞を用いる構文も、未来形もわかるはずですし（例：Ich kann das r nicht richtig aussprechen. 私は r を正しく発音できない；Er wird es mir bald mitteilen. かれはそれを私にほどなく通知するだろう），また受働文も作れるはず（例：„Vater“ wird etwa wie „Vata“ ausgesprochen. ファーテルはほぼファータのように発音される）。

過去形が *teilte mit* などと分離しているのは、三要形においては、過去は *ich* または *er* を主語とした定形の形で示すことになっているからで、*teilte mit* は正置または倒置される場合の定形です。——過去形は既に例題において実際に用いてきました。

—例 題 34—

- [1] Soeben wurde im Radio eine interessante
ゾーエーベン ヴルデ ラーディオー インテレッサンテ
 Neuigkeit mitgeteilt. [2] Ich wußte noch nicht, daß
ノイヒカイト ミット・ゲタイルト ヴステ ノホ
 „Vater“ etwa wie „Vata“ ausgesprochen wird. [3]
エトヴァー アオス・ゲシュプロッヘン
 Ich werde es Ihnen nachher telephonisch mitteilen.
ナーハヘル テレフォニッシェ ミット・タイレン
 [4] Vom Benzol werden verschiedene andere organi-
フォーム ベンツォール フェルシーデネ アンデレ オルガーニッ
 sche Stoffe abgeleitet. [5] Aufgeschoben ist nicht
シェ シュトッフェ アップ・ゲライテット アオフ・ゲショーベン
 aufgehoben.
アオフ・ゲホーベン

訳註： [1] たった今ラジオで面白いニュースが伝えられた。soeben: *just now*. Radio, *n.*: *radio*. interessant: *interesting*. Neuigkeit, *f.*: *news*. [2] ファーテルがほぼファータのように発音されるということを私はまだ知らなかった。——noch nicht: *not yet*. wußte (*wissen* の過去). [3] 私はそれをあなたに後刻電話でお伝え致しましょう。nachher: *afterwards*. telephonisch: *by telephone*. [4] ベンゾルからは、いろんな他の有機物が導き出される。Benzol, *n.*: *benzol, benzene*. verschieden: *various*. ander: *other*. organisch: *organic*. Stoff, *m.*: *pl.* — *e.*: *substance, matter*. ab-leiten (分): *derive, deduce*. [5] 延期は取りやめに非ず。aufschieben (*schob auf, aufgeschoben*): *postpone, adjourn, delay*. aufheben (*hob auf, aufgehoben*): *annul, cancel, avoid*. (過去分詞は「云々されたる」の意ゆえ、直訳すれば、「延ばされた」は「やめられた」に非ず、である。不定形を用いて Aufschieben ist nicht aufheben. と言うに同じ) 英語: *Forbearance is no acquittance; omittance is no acquittance; to put off is not to put away.*

第18講 関係代名詞

98. 関係文の特徴

英語にも関係代名詞というものがあって、*which* とか *who* とか *whom* とか *that* とかいったようなものを介して一つの文がある名詞に引っかかることはご存じでしょうが、ドイツ語では、関係代名詞の使用法が、英語よりもはるかに固苦しくて形式ばっています。というのは、たとえば英語ではある種の場合には関係代名詞なんてものは一切用いないで、単に名詞のうしろへ文を置いたきりでよいことがあります：*The thesis I defend is this*：たとえば「私が主張する命題はこうだ」ということになって、*The thesis* と *I defend* との間に別に *that* も *which* も必要としない。*The room we are in* と言えば『我々のいる部屋』の意になって、必ずしも *The room in which we are* なんて言う必要はない、等々。ところが、こんな事はドイツ語では絶対に許されない。*The thesis I defend is this*. は何とあっても *Die These, die ich verteidige, ist diese*. でなければ筋路が立たない。*The room we are in* は何とあっても *Das Zimmer, in welchem wir sind*, とやらないと食った物が腹の中で消化しないのです。一たいドイツ人という奴は、筋路の通らない事は大嫌いです。部屋・われわれいます・中に・は食堂です……なんてのは少なくともドイツ語では文章をなさないのである。

そこで、みなさんの頭を、一つ再教育する必要があります。まず次の文をにらんで、細かいところをよく論理的に考えてください：

Ein Fehler, den man zeitig einsieht, ist halb gebessert.

われわれがつとに了知する欠点は是正されたるに近し。

逐語的に訳すと：man 我々が zeitig 適当な頃に（早目に）ein-sieht（ein-sehen：to get an insight into）悟る den ところの Ein Fehler 欠点は halb 半ば gebessert（bessern：mend）改まって ist いる。悪い点にそもそも気がつくということは相当の進歩である、の意です。——この文の中で、太い活字のところが、den という関係代名詞を介して Ein Fehler に引っかかっているわけです。den でわかる通り、関係代名詞は、大抵定冠詞と一致します。den は男性四格の形ですが、なぜ男性でしょう？なぜ四格でしょう？

そこで、関係代名詞及び関係文の特徴を、以下に箇条書にして述べます：

(1) 関係代名詞には必ず先行詞というものがある

この文で言えば ein Fehler という名詞が関係代名詞 den に対する先行詞（あるいは先行名詞ともいう）です。先行詞は勿論必ず名詞です。先行詞という語は Antezedens [アンテツェーデンス]（英文法では *antecedent* という）の直訳語です。

(2) 関係代名詞は、性は先行詞の性に一致せしめ、格は関係文内の意味関係が何格を要求するかによって決める

上例で言えば、先行詞 Fehler が男性ゆえ、それを受ける den も男性になっています。ただし格は、先行詞の方は一格ですが、den の方は四格です。なぜ四格かというと、それは man zeitig einsieht（我々が適時に認める）というのはすなわちその Fehler『を』認めるのですから、Fehler の代表者たる den は、郷に入れば郷に従えというわけで、関係文内におけるその地位に従って四格になっているのです。先行詞が一格だから、おれも一格だぞ、などといって der となってしまう事は関係文内の事情がこれを許しません。

(3) 関係文の前後は必ずコンマで仕切る

こういうふうに、同じ Fehler という概念が、外部では一格顔をしていられるが内部では四格になって小さくなっていなければならないといったように、関係文外と関係文内とはいわば全然の別世界なのですから、関係文の前と後とは厳重に [,] を打って、無用の者が出入りしないようにしておきます。英語は、時々思い出したように [,] を打ってあることもあるが、大抵忘れて、錠がかかっていなかったり、戸が開いていたりします。ドイツ語であんな事をしたら始末書を取られます。これは関係文ばかりではありません、たとえ接続詞を使おうと疑問詞を使おうと（69!）主文章と副文章との間をコンマで仕切らずに明けっぱなしにしておくなどという無用心なことは、ドイツ語では厳禁です。米英社会は公德心が発達しているからあれで済んでいるのかも知れませんが。

(4) 関係文は従属文章（副文章）であるゆえ定形後置の構造

これは当たり前です。関係代名詞というのは、要するに代名詞を従属的接続詞として用いたものであって、広い意味では単に「接続詞」と言ってもよいのです。ここでまた改めて 69 項で述べたことを思い出してください。英語だと、この関係文はどこまで続いているのかしらという疑問がよく起きますが、ドイツ語では、いやしくも「定形」というものに関するはっきりした認識がありさえすれば、決してそんな疑問が起こらないはずで、コンマという往来止めの横木が降りている上に、おまけにその前に定形の爺さんが危険信号の赤旗を上げて立

っているのですから、この両者を気がつかずに突破して読んでしまうという乱暴は、まあ普通人にはちょっと出来ませんな。

とにかく、ドイツ語では、主文章は正置又は倒置、副文章は後置、これを忘れた者は留置ですからそのつもりでいてください。

99. 関係代名詞の格変化

関係代名詞は二種類あります。英語の *that* と同語源の *der, die, das* などと、*which* にあたる *welcher, welche, welches* とがそれです。英語は *who, whom* などがあって、先行詞が人間である場合を区別しますが、ドイツ語では人と物とを特に差別待遇しません。(ただし 101 項で述べる不定関係代名詞は人と物とを区別します。)

まず定冠詞とほとんど同形の *der* の方(実際はこの方を多く用います)の格変化を表示します。太文字の所だけが定冠詞とちがっています:

	<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>	<i>pl.</i>
1.	der	die	das	die
2.	dessen	deren	dessen	deren
3.	dem	der	dem	denen
4.	den	die	das	die

次に挙げる *welcher, welche* などは、いわば文語口調の時にのみ用いる固苦しい関係代名詞で、既習の疑問詞 *welcher* (55) と同一物です。表中かっこをしたところは、ほとんど絶対に用いないものです。

	<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>	<i>pl.</i>
1.	welcher	welche	welches	welche
2.	(welches)	welcher	(welches)	welcher
3.	welchem	welcher	welchem	welchen
4.	welchen	welche	welches	welche

ですから、さきに用いた例文を、少し格式ばった口調で言うとなれば *Ein Fehler, welchen man zeitig einsieht, ist halb gebessert.* ということになります。

関係代名詞の用い方は、一格や四格などは比較的簡単ですが、二格、三格、あるいは前置詞を伴った *mit dem* とか *mit denen* などになると、よほど論理的にハッキリと概念関係も考えないと、うっかりするとわからなくなります。例題をよくご研究ください。

例 題 35

- [1] Ein Arbeiter, der nicht arbeitet, ist kein
アルバイテル アルバイテット
 Arbeiter. [2] Ein Mann, dem du eine Million Mark
デーム ミルリオーン マルク
 schuldig bist, wird dich nicht mehr im Stich lassen.
シュルディヒ ニヒト メール シュティヒ
 [3] Jede Potenz, deren Exponent Null ist, ist gleich
ポテンツ デーレン エックスポネント ヌル グライヒ
 Eins. [4] Eine Hölle, die man wohl kennt, ist
アインス ヘルレ ヴォール ケント
 besser als ein Himmel, den man noch nicht kennt.
ベッセル アルス ヒムメル デーレン ノホ
 [5] Die Pflanze ist ein Tier, dessen Magen in der
フランツェ ティール デッセン マーゲン
 Wurzel, das Tier dagegen eine Pflanze, deren Wurzel
ウルツェル ダーゲーゲン デーレン
 im Magen liegt. [6] Der Tod ist ein Schlaf, aus
リークト トート シュラーフ
 dem man nicht mehr erwacht. [7] Die Temperatur,
デーム エルヴァハト テムペラトゥール
 bei der ein fester Körper flüssig wird, heißt
フェステル ケルペル フリュッシヒ ハイスト
 Schmelzpunkt. [8] Fast alle Elemente, deren
シュメルツ・プンクト ファスト エレメンテ デーレン
 Atomnummer höher liegt als 80 sind radioaktiv.
アトム・ヌンメル ヘーエル ラディオ・アクティーフ
 [9] Das Vitamin C, bei dessen Mangel Skorbut
ヴァイタミーン ツェー デッセン マンゲル スコルブート
 auftritt, ist in frischem Obst und frischen Gemüsen
アオフ・トリット フリッシェム オープスト ゲミューゼン
 enthalten. [10] Die organischen Stoffe, aus denen
エントハルテン オルガーニッシェン シュトッフエ アオス デーネン
 die Lebewesen gebildet sind, sind chemische Ver-
レーベ・ヴェーゼン ゲビルデット ヒェーミッシェ フェル
 bindungen, in denen der Kohlenstoff die Hauptrolle
ビンドゥンゲン デーネン コーレン・シュトフ ハオプト・ロルレ
 spielt. [11] Ein Viereck, in welchem die gegen-
シュピールト フィール・エック ヴェルヒェム ゲーゲン

überliegenden Winkel einander gleich sind, ist ein

ユーベル・リーゲンデン ヴィンケル アイナンデル グライヒ

Parallelogramm.

パラレロ・グラム

訳註: [1] 働かざる労働者は労働者に非ず。[2] 汝が一万マルクを借りた相手の男は、もはや絶対に汝を見捨てないであろう。Million, f.: million. schuldig sein: to owe. (ある人に大金を借りている, ならば英でも to owe a large sum to one というように, 物を四格にし, 人を三格にして einem (ある人に) eine große Summe (大金を) schuldig (負って) sein (いる) という使い方をする。) — nicht mehr: no more, no longer. einen im Stich lassen: to forsake one, to turn one's back to one. (この im Stich lassen が, 96 項で述べた熟語動詞の好例であって, imstich と書いてもよいほど, 前綴化している。) [3] その指数が零である冪はすべて 1 に等しい。Potenz, f.: power. (冪, 乗) Exponet, m.: exponent, index. gleich: equal. Null, f.: zero. Eins: one, 1. (これは $A^0=1$ のこと。) [4] よく承知している地獄の方が, まだ知らぬ天国よりはよい。Hölle, f.: hell. wohl: well. besser als: better than. Himmel, m.: heaven. (知らぬ京より知った里, 人間生来の保守主義ほど根強いものはなく, こういう心理があるから, 救済してやろうとしても本人が承知しない。碌でもない嬖でも追い出すとなるとまたもとの鞆におさまるところか, なまじっか一辺抜いて湿気にあてたために, こんどは錆びついて抜けなくなってしまう, これを腐れ縁という, 等々。) [5] 植物は, その胃が根にある動物であるが, 動物はそれに反して, その根が胃にある植物である。(同類項ノ省略サレタ文デアルカラ注意! 省略部ヲ補エバ: Die Pflanze ist ein Tier, dessen Magen in der Wurzel liegt, das Tier ist dagegen eine Pflanze, deren Wurzel im Magen liegt. トナル) Magen, m.: stomach. Wurzel, f.: root. liegen: lie (「嘘をつく」の lie は lügen). [6] 死とは, もはや再び目ざめる事なき眠りである。(直訳: 死は, それから人がもはや覚めぬところの眠りである。) Tod, m.: death. Schlaf, m.: sleep, slumber. aus dem: from which. erwachen: awake. [7] 固体が液化する温度は融点と呼ばれる。Temperatur, f.: temperature. fest: solid. Körper, m.: body. (ein fester Körper: a solid body). flüssig: fluid, liquid. heißen: to be called. Schmelzpunkt, m.: melting-point. (heißen は, 「と呼ばれる」, 「という名である」という自動詞である。) [8] 原子番号が 80 よりも高位にある殆んどすべての元素が放射性能を有している。fast: almost, nearly. Element, n. pl. —e.: element. Atom, n.: atom. Nummer, f.: number. (Atomnummer [または Ordnungszahl]: atomic number. たとえば水素が 1 番, 酸素が 8 番, ラジウムが 88 番といったような。) höher: higher. liegen: lie. (位置する, 位する。) als: than. 88=achtundachtzig, [アハト・ウント・アハツィヒ] と読む。radio-aktiv: radio-active (放射性能を有する)。[9] それが欠乏するに当っては壊血病なるものが生ずるところのビタミン C は, 新鮮な果物や新鮮な野菜の中に含まれている。—Vitamin, n.: vitamine, vitamin. Mangel, m.: lack, want, deficiency. Skorbut, m.: scurvy. auf-treten (分): appear (treten は du trittst, er tritt, 46 項!) frisch: fresh. Obst, n.: fruits. (ドイツ語の Obst は集約名詞であるから, 単数でありながら, 「多くの果物」を指す。英の fish, aircraft などの如し。) Gemüse, n.: vegetables, enthalten (enthielt, enthalten): contain. (注意: bei は「...に際して」で, 英の by のごとく「...によって」の意にはならない。ここでは「その欠乏によって」と考えても十分意味を成しそうに思われるだけに, なおさら誤解のないようにしていただきたい。英の by (...によって) は durch (と四格) である, 84 項!) [10] 生物を構成する有機物質は, 炭素が最も重要な役割を演ずる化合物である。(直訳: それから生物が構成されているところのその有機物質は, その中において炭素が主役を演じてい

るところのその化学的結合である。) *organisch: organic. Stoff, m.: matter, substance, stuff. aus denen: of which. Lebewesen, n.: living being. bilden: compose, constitute. chemisch: chemical. Verbindung, f.: combination. Kohlenstoff, m.: carbon. Hauptrolle, f.: principal part, the most important role. spielen: act, play. [11] 相対する角が互いに等しき 四角形は、平行四辺形 である。Viereck, n.: rectangle. gegenüberliegend: opposite. (分解すると gegenüber は「向かい側に」, face to face; liegend は lying) — Winkel, m.: angle. einander: each other; (einander gleich sein: be equal each to each.) Parallelogramm, n.: parallelogram.*

100. 関係代名詞の略形: womit, worin など

関係代名詞が前置詞を伴う場合には、疑問詞の場合と同様 (93!), womit, worin, woran などの略形を用いる事ができます。ただし、これは人を意味する時には用いられません。たとえば例題 35 の 11 は Ein Viereck, **worin** die gegenüberliegenden Winkel einander gleich sind, ist ein Parallelogramm. と言ってもよろしいが, der Freund, womit ich Freud' und Leid teile..... (私が苦楽をともにするところの友...) なんてことを言っではいけないのです。これは必ず der Freund, **mit dem** ich Freud' und Leid teile..... です。その他、いったいこの略形を使用するには多少の判断力がないといけないのですが、そんなむずかしい事は別として、とにかくこうした関係代名詞があるということを覚えておいてください。その他、単に wo または da (日本語で『云々するところの.....』とって関係代名詞を『ところの』と訳しますが、wo, da はまさにその『ところ』に文字通り一致しています!) を用いて、時または所を指す先行詞を受けることができますが、これはもはや関係代名詞ではなく、いわば関係副詞です。たとえば:

Kennst du das Land, wo die Zitronen blüh'n?

ケンスト ドゥー ラント ヴォー ツイトローネン ブリューン

君知るや、シトロンの花咲く国を?

君知るや否や知りませんが、これは例の有名な Mignon (ミニョン) の歌なるもので、ドイツの最大詩人といわれる Goethe の作です。wo は worin, in dem, in welchem というに同じです。

101. 不定関係代名詞

不定関係代名詞というのは、wer (誰でも.....する者) と was (何でも.....する物、または事) です。両方とも元来は疑問詞で、wer は英語の *who*, was は *what* ですが、その次に来る文が定形倒置になると疑問詞となり、定形後置になると従属疑問文、または関係文になります:

疑問文	Was liegt auf der Straße?	往来に何が落ちているか?
従属 疑問文	Ihr wißt wohl nicht, was auf der Straße liegt ?	諸君は恐らく往来に何が落ちて いるかご存じなからう。
関係文	Was auf der Straße liegt gehört dem Finder.	往来に落ちているものは見つけ た人の物だ。

wer の方も全然同様です。

疑問文	Wer hat Geld?	誰か金を持っている者はないか?
従属 疑問文	Ich weiß, wer Geld hat .	誰が金を持っているかを僕は知 っている。
関係文	Wer Geld hat , ist ein lieber Mann.	金を持っている人はよい人さ。

関係文に用いる *wer* は、英語では *he who* または *he that* ですが、昔はドイツ語同様単に *who* とも言ったものです。

wer と *was* は右の表のごとく格変化があります。
was は 主として一格と四格を用い、三格はなく、二格もすこぶる稀です。二格を用いるのは、ずっと前 (54) 人代名詞の二格に関して言ったごとく、単に二格支配の動詞、形容詞、前置詞と共に用いるく

1. <i>wer</i>	<i>was</i>
2. <i>wessen</i>	<i>wessen</i>
3. <i>wem</i>	(...)
4. <i>wen</i>	<i>was</i>

らいのものです: *Wessen bedürfen Sie?* あなたは何を必要としますか (*bedürfen* [*want, need*] は二格支配)。しかしこれとても普通は *Was bedürfen Sie?* と言います。

この *wer, was* をなぜ「不定関係代名詞」というかと申しますと、それは『およそ誰でも……』、『およそ何でも……』(英語の *whoever, whomever, whatever, whatsoever* など) というふうに、別にはっきりとしたある物を指すのではなく、多くのものに共通なようにいうからです。従って、先行詞というものがありません。あっても、それは *der Mann* とか *eine Frau* とかいったような、性数を有する普通の名詞ではなく、たとえば *alles* (すべてのもの), *etwas* (あるもの *something*), *nichts* (*nothing*), *das* (*that*) といったような不定指示詞のみで、しかもそれは *was* とのみ結合し、*wer* の方とは結合しません。たとえば、*Hamlet* の中の句: *All that lives must die* を独訳すると:

Alles, was lebt, muß sterben.

例 題 36

- [1] Wer leicht vertraut, wird leicht betrogen.
ヴェール ライヒト フェルトラウト ベトロージェン
- [2] Wer nicht hören will, muß fühlen. [3] Was
フューレン
- man hofft, glaubt man gern. [4] Wen Gott strafen
ホフト グラオプト ゲルン ヴェーン シュトラーフエン
- will, den schlägt er mit Blindheit. [5] Wem Gott
デーニ シュレークト プリントハイト ヴェーム
- ein Amt gibt, dem gibt er auch den Verstand. [6]
アムト ギープト デーム アオホ フェルシュタント
- Das müssen wir vor allem vom Amerikaner lernen:
フォール アルレム フォム アメリカーネル レルネン
- er ist durch und durch realistisch, er kann alles,
ドゥルヒ レアリスティッシュ
- was er will, weil er nur das will, was er kann.

訳註: [1] 容易に信ずる者は容易に欺かれる。leicht: *easily*. vertrauen: *confide in, rely upon, trust to*. betrügen, betrog, betrogen: *deceive, cheat*. [2] 聴くことを肯ぜざる者は痛い目を見るの外なし (直訳: 感ずる必要あり)。fühlen: *feel*. (忠言に耳を傾けないような奴は、一度思う通りにやってみて、その結果によって思い知るに限る。) [3] 己が望むところはよろこんで信ずる。hoffen: *hope*. glauben: *believe*. gern: *willingly*. (実は単なる希望にすぎない意見が多いことを言う。) [4] 神、人を懲しめんとするや、まずその目を眩ましむ。(直訳: その者を神が罰せんとする、この者を彼は盲目をもって打つ。) strafen: *punish*. den: この者を、その者を (これは冠詞ではなくて、前の *wen* を受けて同一者を指す「指示代名詞」である)。mit Blindheit schlagen: *strike with blindness*, 「盲目をもって打つ」というのは聖書用句で (たとえば創世紀 19, 11.) 目をくらませ盲目にすることである。(この通り言葉は、前出の *Wer nicht hören will, muß fühlen*. と同じような趣旨で、認識不足は一種の天罰なることをいう。盲目にされているというのは、事実が見えないことである。) [5] 神、人に役目を授くれば、また智慧をも授く。Amt, *n.*: *appointment, charge*. Verstand, *m.*: *sense, wit*. (これはすこぶる皮肉な俚諺で、どんな馬鹿でも、位につけば、位だけの智慧は自然と生じて来る、ということ。金持の馬鹿息子が親爺の後をついで社長になっても、結構やっていく、など。) dem: 定冠詞ではなく、前出の *den* と同じ指示代名詞で、「その者に」の意。[6] この点は我々として何よりもアメリカ人に学ばなければならないが、アメリカ人は徹頭徹尾現実的である、かれは己れの欲するところをすべて能う、如何となれば彼は己れの能うところのみしか欲しないから。Das: この点を (四格!)。vor allem: *above all, before every thing, in the first instance*. vom: *from the*. durch und durch: *through and through*. realistisch: *realistic*.

第19講 完了時称

102. 完了時称とは？

動詞の現在、過去、未来の三形は既に紹介しましたが、まだその他に現在完了、過去完了、未来完了の三形を研究しなければなりません。

われわれ日本人の頭で考えると、時の表現法は、現在・過去・未来の三つで十分のように思われますが、英語にもドイツ語にも、その他に更に完了時称というものがあるのは、一体どういうわけなのでしょう？

そのわけを説明するのはちょっと容易なことではありませんが、とにかく現在・過去・未来という三つの基本時称が、各々一つずつの補助時称を持っている関係を表示すると次のようになります。

基本時称	現在： ich finde 私は見つける	過去： ich fand 私は見つけた	未来： ich werde finden 私は見つけるだろう
完了時称	現在完了： ich habe gefunden 私は見つけている (私は見つけた)	過去完了： ich hatte gefunden 私は見つけていた	未来完了： ich werde gefunden haben 私は見つけているだろう (私は見つけただろう)

理屈よりはむしろ訳語をよく味わいながら考えていただいた方がわかりが速いかと思います。完了形の特徴は、『云々している』とか『云々していた』とかいったように、すべて『いる』という状態的な性質を伴うのがまず第一の特徴です。あるいは、『云々してしまっている』、『云々してしまっていた』、『云々してしまっているだろう』と、『しまつて』という表現を入れると更にハッキリします。完了というのは、つまりこの『しまつ』という特徴から考え出した術語なのです。

それから第三の特徴は、大抵の場合『すでに.....云々してしまっている』といったように、『既に』(独: schon, 英: already) という副詞を加えて考えることができるのが完了形の特徴です。たとえば、切符をなくして探していた人に向かって『見つかりましたか?』と問うのも Haben Sie Ihre Fahrkarte gefunden? ですし『ええ、見つかりました』と答えるのも Ja, ich habe sie gefunden. で、なんなら schon を入れて Ich habe sie schon gefunden. と言ってもよいわけです。

この『既に』という特徴は、最も極端な場合をいったので、必ずしもあらゆる場合に当てはまる訳ではありませんが、一番間違いない特性は、最初に述べた『いる』、『いた』という状態的表現です。だから表の方でも、『しまっている』などの方を用いなくて、『いる』、『いた』の方を用いておきました。

感じの鋭い人は、すでに受働形の文法にも同じような場合があった事を思い出すでしょう (85!)。すなわち、同じ受働の表現にも、Der Brief **wird** geschrieben. (手紙が書かれる) という動作相の外に、Der Brief **ist** geschrieben. (手紙が書いてある、すなわち、書かれている) という状態相があるという事を紹介しておきました。『書かれている』というのは、現在書かれつつあるのではなくて、しばらく前に書いたのが、今は結果として残っている、ということです。この、動作相と状態相との関係をば、受働から能働へそのままごっそり移したものが、現在と現在完了との関係であり、過去と過去完了との関係であり、更にまた未来と未来完了との関係なのです。

これを具体的な例で申しますと、

	受働形で言えば:	同じ事を能働形で言えば
現在	Der Brief wird geschrieben. 手紙が書かれる	Der Adressant schreibt den Brief. 差出人が手紙を書く
現在完了	Der Brief ist geschrieben. 手紙が書いてある	Der Adressant hat den Brief geschrieben. 差出人が手紙を書いた 

 のところは、『差出人が手紙を書いている』と言ってもよいのですが、この場合は(書くという動作が、持続的に行なわれる動作であるがために)ややともすると *is writing* の意に誤解されるおそれがあるので、わざと『書いた』としました。

この『書いた』という日本語のために、schrieb という過去形とどう違うのか? という疑問が起こるでしょう。また、この疑問が、英語でもドイツ語でも、初学者にとっては一番無理もない、また一番有名な疑問です。*I have written* と *I wrote* (ich schrieb) とは、どう違うのでしょうか?

この点を解決する鍵がすなわちただ今指摘した状態相(『ている』、『てある』)の観点です。たとえばここに、何が書いてあるのか判読できない変な手紙があるとします。その手紙を批評して『この手紙はひどく不明瞭に書いたものだなあ!』という際には、差出人 (der Adressant, 英: *addressor*, *addresser*) を主語にして、Der Adressant hat sehr undeutlich geschrieben. (*The addresser has written very indistinctly.*) と言うべきでしょうか、あるいは過去形で Der Adressant schrieb sehr undeutlich. (*The addresser wrote very indistinctly.*) と言うべきでしょうか? それは勿論前者です。な

ぜというに、現に手紙が眼の前にあるのですから、その手紙を指して『この手紙は...
...だ』(Der Brief ist....., *The letter is.....*) と言いたくなるのは自然で:

Der Brief ist sehr undeutlich geschrieben.

(*The letter is very indistinctly written.*)

この手紙は随分不明瞭に書いてある。

なんなら、過去分詞を省いて Der Brief ist sehr undeutlich. (*The letter is very indistinct.*) と言ってもよいくらいです。つまり現在形で表現するわけです。手紙を主語にすれば現在形で言い表わす、そんなら差出人を主語にすれば当然現在完了で Der Adressant hat den Brief sehr undeutlich geschrieben. というのが本場で、Der Adressant schrieb.....などと過去を用いては、『変な書き方がしてある』という状態相の表現にはなりません。日本語で言って見ても、『なんだ、この手紙は随分不明瞭に書いた!』ははなはだおかしい。どうしても『書いた』の次に『ものだ』という現在形の結びが必要になってきます。この現在形の結びが、英語の *has*, ドイツ語の *hat*, 受働形ならば *ist* なのです。

これを要するに、「書く」なら「書く」、「見つける」なら「見つける」という動作によって生じた目前の結果(たとえば字が不明瞭だとかいう)を主として表現せんがために「書いた」、「見つけた」という場合には、過去を用いなくて現在完了を用いるのです。財布はこの通りここにありますが、という意味で、「財布をみつけた」という場合には Ich habe meinen Geldbeutel gefunden. です。私はお腹が一杯です、という意味で『私は食べました』という場合には Ich habe gegessen. です。——それに反して、「私が財布をみつけた時に.....」などという際には、これはもはや現在とは直接何の関係もない、いわば別世界とでもいったような「過去」界の中の『お話』なのですから、これは als ich den Geldbeutel fand と純粹の過去を用います。als (*when*) と言った以上は既に身を過去に置き移して、現在とは直接交渉のないお話の中へはいつてしまっているわけです。

以上が、まず大体、現在完了と過去との差です。この差がわかれば、現在完了というものの性質もまた従って明らかになるはずです。

現在に対する現在完了の関係は、それは直ちに過去に対する過去完了(あるいは大過去ともいう)の関係であり、また未来に対する未来完了の関係です。

現在完了が、現在より以前に既に完了してしまっている動作、あるいはその動作の現在における結果を表現する時称であると同様に、過去完了は、過去より以前に既に完了してしまっている動作、あるいはその動作の過去期における結果を表現します。未来完了も同様で、未来より以前に既に完了してしまっているであろう動作、あるいはその動作が、想像された未来の瞬間においてもたらしているであろうところの結果

を表現する時称なのです。具体的な例は、次項へ行って、また例題中にたくさん出て来ますから、以上の定義をよく覚えておいてください。

103. 完了形の構成と、完了文の構造

完了形を構成するには、定形には助動詞 (haben または sein) を用い、動詞は過去分詞の形にして用います。つまり受働形とほぼ同じようなことになるわけで、ただ助動詞が werden ではなく、haben (have) あるいは sein (be) になるところに相違点があります。(英語はすべて have を用いますが、ドイツ語では、動詞によると sein を用いるものもあるのです。たとえば英語では *I have come.* (私は来た) ですが、ドイツ語は *Ich bin gekommen.* です。英語でも、擬古調の文になると *I am come.* ということを行いますが、して見るとドイツ語は、英人の目から見ると、少し古めかしい感じがするにちがいありません。しかし、この *Ich bin gekommen.* などの完了形の事は、次の 104 項において改めて紹介することにし、ここではまず haben を用いる場合のみについて研究して行きます。)

構造は、結局英語と同じことですから、特に表示するにも及ばないのですが、haben の変化、その他基礎的な事柄の復習にもなりますから、次に人称変化を表示します：

現在完了

ich habe.....gefunden	wir haben.....gefunden
du hast.....gefunden	ihr habt.....gefunden
er hat.....gefunden	sie haben.....gefunden

過去完了

ich hatte.....gefunden	wir hatten.....gefunden
du hattest.....gefunden	ihr hattet.....gefunden
er hatte.....gefunden	sie hatten.....gefunden

未来完了

ich werde.....gefunden haben	wir werden.....gefunden haben
du wirst.....gefunden haben	ihr werdet.....gefunden haben
er wird.....gefunden haben	sie werden.....gefunden haben

未来完了は三語からなっていて、えらい厄介な形ですが、三語を分解して逐語訳をすると、たとえば：ich 私は gefunden 発見して haben いる werde であろう、となります。gefunden haben (発見してしまっている) を、過去の不定形、または完了の不定形といいます。

次に、こうした形を文章の中へ入れて用いる場合の構文の問題ですが、これは、既にたびたび述べた三種の場合（96!）と同じで、前表中.....で示したところに語句を入れると定形正置になり、それから倒置、後置と、例によっておきまりの三つの構造が生ずるわけです。また同じことになりますが、完了形はどんな場合に用いるかという典型的な例のためにも必要ゆえ、一応文例を提示することにいたします。

現在完了を用いる場合の配語法：

- 定形正置： Ich *habe* eine Stellung gefunden. 僕は就職口を見つけた。
 定形倒置： Nun endlich *habe* ich eine Stellung gefunden. さてとうとう僕は就職口を見つけたよ。
 定形後置： Ich heirate dich, weil ich eine Stellung gefunden *habe*. 僕は就職口を見つけたからあなたを貰います。

過去完了を用いる場合の配語法：

- 定形正置： Ich *hatte* noch keine Stellung gefunden, als ich dich zuerst sah. あなたに初めてお目にかかった時にはまだ就職口が見つかっていなかったのです
 定形倒置： Als ich dich zuerst sah, da *hatte* ich noch keine Stellung gefunden. (同上)
 定形後置： Ich schwieg, weil ich damals noch keine Stellung gefunden *hatte*. 当時はまだ就職口を見ていなかったのも、何も申し上げませんでした。

未来完了を用いる場合の配語法：

- 定形正置： Ich *werde* sicher eine Stellung gefunden haben, wenn ich dich wieder sehe. こんど再びお目にかかる時には、僕はきっと就職口を見つけているでしょうよ。
 定形倒置： Wenn ich dich wieder sehe, da *werde* ich sicher eine Stellung gefunden haben. (同上)
 定形後置： Daß ich eine Stellung gefunden haben *werde*, wenn ich dich wieder sehe, das steht bombenfest. こんど再びお目にかかった時には就職口を見つけているだろうという事は、これは絶対確実です。

例 題 37

- [1] Haben Sie etwas verloren? [2] Mit wem
 エトヴァス フェルローレン ヴェーム
 haben Sie gesprochen? [3] Ich habe vergessen, mit
 ゲシュプロッヘン フェルゲッセン
 wem ich gesprochen habe. [4] Ich bin müde,
 ミューデ
 obgleich ich heute gar nicht gearbeitet habe. [5]
 オップグライヒ ガール ゲアルバイテット
 Er zeigte mir den Apparat, den er selbst konstruiert
 ツァイクテ アッパラート ゼルプスト コンストルイールト
 hatte. [6] Unser Nachbar schenkte uns einen
 ナハパール シェンクテ
 riesigen Karpfen, den er im nahen Teich geangelt
 リージゲン カルプェン ナーエン タイヒ ゲアングルト
 hatte. [7] Kommen Sie nicht zu spät! Sonst werden
 ツー シュペート ゾンスト
 wir das langersehnte Bier getrunken haben. [8] Die
 ラング・エルゼーント ゲトルンケン
 Vorstellung wird schon begonnen haben, wenn wir
 フォール・シュテルング ショーン ベゴンネン
 nicht mit der Taxe fahren.
 タクセ

訳註: [1] あなた何かおなくしになりましたか? etwas: something. verlieren, verlor, verloren: lose, lost, lost. [2] あなたは誰と話していたのですか? Whom have you spoken to? [3] 私は、誰と話したのだったか忘れてしまいました。[4] 僕は、今日はちっとも働かなかったのに、くたびれた。müde: tired. obgleich: although. gar nicht: not at all. [5] 彼は私に、彼が自分でこしらえた装置を見せた。Apparat, m.: appliance, apparatus, gadget. selbst: himself. konstruieren: construct, set up. [6] 私たちのお隣の方が、近くの池で釣った大きな鯉をくださった。schenken: give, make a present of. riesig: gigantic, big. Karpfen, m.: carp. nahe: near. Teich, m.: pond. angeln: angle. [7] あんまりおそくいらっしてはいけませんよ。あんまりおそくおいでになると、待望のビールを飲んでしまっているかも知れませんよ。zu spät: too late. sonst: else, or else (でないと、しからずんば). langersehnt: long wished for. (長らく待ちこがれていた。) trinken, trank, getrunken: drink, drank, drunk. [8] タクシーに乗ってゆかないと、芝居はもう始まっているかも知れませんよ。(この文例でわかる通り、未来完了は、真の未来完了としてではなく、単に現在における「想像」をいうにも用いられる) Vorstellung, f.: presentation (上演). beginnen, begann, begonnen: begin, began, begun. Taxe, f.: taxi. fahren: go.

104. sein 支配と haben 支配

前項でちょっと断わっておいたように、ドイツ語では、必ずしもすべての動詞が haben を助動詞として完了形を構成するわけではなく、ある種の動詞は sein (to be) を助動詞として完了形を作ります。たとえば英語の *I have been.* は *Ich bin gewesen.*, *He has come.* は *Er ist gekommen.*, *You have fallen.* は *Du bist gefallen.* です。

そうすると、状態相の受働形と混合しはしないか、という心配が生ずるかも知れません。状態相の受働形も *Ich bin vergessen.* (私は忘れられている), *Er ist entlassen.* (かれは解傭されてしまった) など、助動詞 sein と過去分詞との結合ですから。

ところがその心配は無用なのです。なぜかという、sein 支配の動詞は、以下に挙げるように、すべて純粹の自動詞ばかりだからです。純粹の自動詞というのは、たとえば「死ぬ」などのごとく、絶対に『何々を』(これを四格目的語という) という対象を考えない動詞で (たとえば『私がおまえを死ぬ』とか『おまえがりんごを死ぬ』なんて事は考えられません)、従って受働形というものは無いはずなのです (おまえが私に死なれる、りんごがおまえに死なれる、なんてことはありません。日本語では「おまえに死なれては困る」なんてことを言いますが、それは日本語だけの変な癖なので、それが証拠に、その逆の能働形、たとえば『わたしを死んじやあ厭よ』なんてことは言いません)。もっとも、純自動詞でも、例の「無意の es を主語とする受働文」(86!) というのはありますが、この方は、助動詞が werden ですから混同の怖れはありません。

sein 支配動詞の例:

sein (<i>be</i>)	gehen (<i>go</i>)	kommen (<i>come</i>)
werden (<i>become</i>)	fallen (<i>fall</i>)	sterben (<i>die</i>)
laufen (<i>run</i>)	rennen (<i>run</i>)	fliegen (<i>fly</i>)
fliehen (<i>flee</i>)	fahren (<i>go</i>)	geschehen (<i>happen</i>)
sinken (<i>sink</i>)	steigen (<i>rise</i>)	erscheinen (<i>appear</i>)
erwachen (<i>awake</i>)	genesen (<i>recover</i>)	erkranken (<i>fall sick</i>)

人称変化は、sein の変化さえ知っておれば (47!), haben の代りに sein を入れて作るのはわけのないことです。全人称変化を表示する代りに、単数一人称の場合のみを挙げます:

現在完了: ich bin genesen	私は快癒した
過去完了: ich war genesen	私は快癒していた
未来完了: ich werde genesen sein	私は快癒しているだろう

備考：英語では何でもかでも *have* で完了形が作れるのに、ドイツ語は、動詞によって *haben* だったり *sein* だったりするということは、これは明らかにドイツ語文法の一難関です。To be or not to be, that is the question. と言って煩悶したハムレット王子も、あるいはあの時ドイツ語の文法でもやっていたのではないのでしょうか...は冗談ですが、この点に関する、ほんの示唆的なことだけ、ちょっと言っておきましょう。初学者としては、大体次の三つの法則を覚えておくにあらゆる場合の九割九分までは判断できるようになります：法則の一：「何々を見る」、「誰それを待つ」などと、日本語で言ってみて『を』のつけられる動詞、すなわち広い意味の他動詞は、すべて *haben* 支配です。これは実に多いから、これだけ知っていれば、既に八九割がた片づきます。法則の二：「病気になる」、「丈夫になる」、「大きくなる」、「年寄になる」、「高くなる」、「見えなくなる」、など、「...なる」(*werden*) の一種と見なしうる動詞はすべて *sein* 支配です。たとえば *sterben* (死ぬ) も「死人になる」ことですから *Er ist gestorben*. (かれは死んだ) です。従って「なる」という *werden* そのものも *sein* 支配なのです。法則の三：ある位置から他の位置までたどりつくことを意味する動詞は *sein* 支配です： *gehen*, *kommen*, *fallen*, *steigen*, *sinken*, *eintreffen* (到着する), *fahren*, 等々。——要するに、自動詞の中の、ほんの一部のもののみが *sein* 支配であるということになります。

例 題 38

- [1] Ich bin in Europa gewesen. [2] Die Temperatur ist rasch gestiegen. [3] Wir kamen zeitig an, da wir mit der Taxe gefahren waren. [4] Wenn ich so spät nach Hause komme, werden die Leute schon eingeschlafen sein. [5] Er ist außer Atem, weil er gerannt ist. [6] „Haben Sie getan, was ich Ihnen befohlen?“ — „Ja, es ist bereits geschehen.“ [7] Der Pneumatik meines Fahrrades ist unterwegs zerplatzt. [8] Der Mai ist gekommen, die Natur ist erwacht. [9] Ein B-29 ist über den Nordpol bis nach Afrika geflogen. [10] Wissen Sie, daß eine junge Dame über den Englischen Kanal geschwommen ist?
- オイローパー ゲヴェーゼン テム
ペラトウール ラッシュュ グシュティーゲン カーメン ツァイティヒ
タクセ ゲファアーレン
シュベート ナーハ ハオゼ ロイテ
アイン・ゲシュラーフェン アオセル アーテム
ゲターン
ベフォーレン ヤー ベライツ ゲシェーエン
プノイマーティック ファール・ラーデス ウンテル・ヴェークス
ツェルプラッツト マイ ナトゥール
エルヴァハト ノルト・ポール
アーフリカー ゲフローゲン
ユンゲ ダーメ エングリッシェン カナール ゲシュヴォム
メン

訳註: [1] 私はヨーロッパにいたことがある。(I have been in Europe.) [2] 温度は急速に上昇した。rasch: quick. steigen, stieg, gestiegen: rise, rose, risen. [3] 我々はタクシーで行ったので、早目に到着した。zeitig: early, in good time. an-kommen (分): arrive. [4] 私がそんなにおそく帰宅したら、家の人たちはもう寝入っているだろう。spät: late. nach Hause kommen: come home. Leute, pl.: people. (Leute は複数形のみ存する名詞。) einschlafen: fall asleep. [5] 彼は駆けたので息を切らしている。außer Atem: out of breath, breathless. rennen, rannte, gerannt: run, ran, run. [6] 「あなたは私が命じておいたことをやりましたか?」 tun, tat, getan: do, did, done. befehlen, befahl, befohlen: command. (befohlen の次に haben が省かれている。完了形においては、定形後置された haben や sein は省略することが多いという事を特に記憶していただきたい。)——「はい、もうちゃんと致してございます」。(It is already done; It is already executed [or accomplished, effected]. など、英語や日本語では受働のように訳するの外はない。英語でもこういう時に it has happened と言わず、日本語でも「それは生じました」とは言わないから。geschehen という動詞はつまり「行なわれる」、「為される」という動詞であって、heißen が to be called (... と呼ばれる, ... という名である) という意の動詞であるのと同じ関係である。) bereits (= schon): already. [7] 私の自転車のゴム輪が途中でパンクした。Pneumatik, m.: pneumatic tire. Fahrrad, n.: bicycle, bike. platzen: crack, crash, burst. unterwegs: on the road. [8] 五月が来た、自然は目ざめた。Mai, m.: May. Natur, f.: nature. [9] 一台の B-29 が北極を越えてアフリカまで飛んだ。B-29 (ベー・ノイン・ウント・ツヴァンツィヒ)。bis nach (90!). fliegen, flog, geflogen: fly, flew, flown. [10] ある若い婦人がドーヴァー海峡を泳いで渡ったという事をご存じですか? jung: young. Dame, f.: lady. der Englische Kanal: the English channel. schwimmen, schwamm, geschwommen: swim, swam, swum.

105. 完了時称の用法における英独の相違

完了時称、殊に現在完了の用法は、話をわかりやすくするために、今までのところでは、英語とドイツ語とが完全に一致しているものとして取り扱って来ましたが、少し詳しい話をするとすれば、用法の上において、多少の相違がないでもないのです。

というのは、まず、英語をやる人が必ず一度は聞かされる規則として、『現在完了を用いる場合には yesterday とか last Wednesday とかいったような、過去を指す副詞を用いてはならぬ、そういう時には過去を用いよ』というのがあります。ところがドイツ語では、gestern (昨日) を入れようと letzten Mittwoch (この前の水曜日に) を入れようと平気です。これは何を意味するかというに、英語の方は『云々してしまっている』という、現在完了特有の、「現在」の方を強調した用法であるが、ドイツ語の方は、そうした純現在完了目的用法以外に、過去と同じように用いる癖がある、ということの意味します。つまり、ドイツ語では、英語よりもずっと多く現完を用いるといってもよし、また、ドイツ語では、過去と現完との間の区別が、英語ほどやかましくない、といってもよいでしょう。これは一見、今まで説明したことをぶちこわすようなことになってますが、複雑微妙な言葉の実際をお伝えするには、かく言わざるを得ないのです。

たとえば『私は昨日彼女に会いました』と言おうとすると、英語では、*yesterday* があるから（別にその理由だけではありませんが）*I saw her yesterday.* と過去で言いますが、ドイツ語では *Ich habe sie gestern gesehen.* とも言うし *Ich sah sie gestern.* とも言います。むしろ現在完了の方が本場で、過去の方は、特に簡潔に言い表わすための便法、といったようなところがあります。

106. 受働の完了時称

受働の完了時称、すなわち『云々されてしまっている』、『云々されてしまっていた』、『云々されてしまっているだろう』を構成するには、受働表現の助動詞 *werden* の過去分詞 *worden* を知っている必要があります。

備考: *werden* には三種の用法があります (84 の終わり)。そのうち、『...になる』(*get, become, grow, turn* など) の意の *werden* の三要素形は: *werden, wurde, geworden* で、受働の助動詞としての三要素形は: *werden, wurde, worden* です。

かつ、受働の完了形には、状態相と動作相との区別があって、能働の完了形の場合には「純現在完了」と「過去の現在完了」の二傾向としてドイツ語の現在完了の用法を多少曖昧ならしめている二つの区別が、受働の場合においては、以下に示すごとく、*worden* の有無によって画然と表現されるという点に着眼する必要があります。

現 在 完 了

状態相	Er ist gerettet.	彼は助かっている。
動作相	Er ist gerettet worden.	彼は助けられた。

過 去 完 了

状態相	Er war gerettet.	彼は助かっていた。
動作相	Er war gerettet worden.	彼は助けられていた。

未 来 完 了

状態相	Er wird gerettet sein.	彼は助かっているだろう。
動作相	Er wird gerettet worden sein.	彼は助けられたであろう。

107. 話法助動詞の完了時称

話法助動詞そのものの完了時称は、今までの一般法則に従えばよいわけで、たとえば（話法助動詞は全部 *haben* 支配）:

Ich habe es nicht gekonnt .	私はそれが出来なかった。
Er hat es eigentlich gewollt .	彼はそれを実は欲したのだ。
Sie hat es leider gemußt .	彼女は残念ながらそうせねばならなかった。

というふうになるわけですが、動詞の不定形と共に用いる時は（それがまた話法助動詞の本来の用法なのですが）gekonnt, gemußt, gewollt などの代りに、不定形を用います。というよりはむしろ、過去分詞が können, müssen, wollen などの形になる、といった方が妥当でしょう：

Ich habe es nicht tun können .	私はそれをする事が出来なかった。
Er hat es mir sagen wollen .	彼はそれを私に言おうと思った。
Sie hat ihn lieben müssen .	彼女は彼を愛せざるを得なかった。

しかも、この構造は、定形後置になると、最後に来るはずの定形が、二つ並んだ不定形の前に来ます：

Da ich es nicht **habe** tun können,
Wenn er es mir **hat** sagen wollen,
Weil sie ihn **hat** lieben müssen,

こうした妙な配語法は、助動詞の場合のみならず、助動詞と似た用い方をするある種の動詞 (hören, 聞く; sehen, 見る, など) にも適用されます。たとえば『私は彼が来るのを見る』を Ich sehe ihn kommen. と言い、『私は彼が大きな声でどなるのを聞いた』を Ich hörte ihn laut rufen. と言いますが、これが完了形になると：

Ich habe ihn kommen **sehen**.
Ich habe ihn laut rufen **hören**.

ということがあるのです。この場合の *sehen, hören* は、ともに過去分詞ですが、*gehört, gesehen* といっても間違いではありません。そしてこれが定形後置になると、*ge-* のついた過去分詞を用いれば当然 *Da ich ihn kommen gesehen habe*, (彼が来るのを見たので) となるのですが、不定形の形の方を用いると：

Da ich ihn **habe** kommen sehen,
Da ich ihn laut **habe** rufen hören,

第 20 講 zu を伴う不定句

108. 不定句

言が肯綮(きんきょ)に中(ちゆう)る, すなわち穿った巧いことを言ってのける, ということを英語でもドイツ語でも『釘の頭を叩きあてる』と言います:

独: den Nagel auf den Kopf treffen

英: to hit the nail on the head

den Nagel は『釘を』, auf den Kopf は『頭の上をと』, treffen は『打ちあてる』すなわち「ヒットする」です。『釘をば・頭の上をと・打ちあてる』というのは, つまり, 狙いはずさず, ちょうど金槌の中央が釘の頭の所へ行くように巧く打ちあてることです。皆様も経験がおありでしょうが, 狙い過まらず釘を打ち込んだ時の手応えという奴は実に気持のよいもので, 打ち込んだ当人も胸がスツとするし, 打ち込まれた釘も気持がよいと見えて, すねたりむくれたりしないで, 一ぺんで真直に行くべき所へ行ってしまいます。こういうふうに思ったところまで徹底的に打ち込むことを英語では *drive home* とか *knock home* とかいいいますが, ちょうどその *home* (独: heim) という気持ですね。穿った事をスパッと行ってのけるのもまさにこれと同じで, 聴いている人の心では, これぞという釘が, 一撃の下に胸底深くめり込んで, 届くべき所に小気味よく届いたという気持がする (*home!* です)。どうです, この『釘の頭をピタリと叩きあてる』という慣用句こそまさにまずみずから率先して釘の頭をピタリと叩きあててはいないでしょうか?

それは余談として, この独英両句を, よく比較して見ますと, 英語では *to hit* が一番最初に来ていますが, ドイツ語の方は, 日本語で言って見た場合と同じように, 不定形が一番最後に位置しています。これでよいのでしょうか? 少し *father mother Asakusa go* 式なところがありはしないでしょうか?

乞う, 安心し給え, これはこれでよいのです。『不定句』として挙げる場合には, 英語, フランス語, イタリア語, その他多くのヨーロッパ語では必ず不定形を先頭に持って来ることになっているのですが, ドイツ語は日本語と同じ並べ方なのです。

『不定句』というのは, 要するに語句を語句として挙げる場合の形で, たとえば熟語動詞や, 全体が動詞を基礎としている慣用句や通り言葉を辞書の中に集録する場合には, 大抵この『不定句』という形式で挙げます。たとえば, 英語の辞書を開けて *owe* という動詞の『使い方』を研究するとします。(例題 13 の 6 および例題 35 の

2 をも参照。) 意味だけ知りたいのなら『負う』(owe と同じ発音) とか『借りている』でたくさんでしょうが、いざこれを使おうとすると、『誰とかに何々を借りている』という、「誰とか」や「何々」をどういうふうに入れてよいのかわからないから、当然何か公式のようなものが必要になって来る。その公式は、あるいは実際の「文例」で (*I owe you my success.* 私の成功はあなたのおかげです) と挙げてあることもあり、あるいは不定句 (*to owe one something* あるいは *to owe something to a person*, ある人にある物を負う, 借りている) で挙げてあることもあります。辞書はといった親切に親切にと心がけるものだから、文例のことが多いが、実際の場合に一番多く用いるのは、単に動詞の用法を示すためになら、やはり *to owe one something* といったような不定句です。不定句は要するに物理の公式みたいなもので、

独: einem etwas schulden

英: *to owe one something*

なんてものは、たとえば、加速度の法則を表現した $S = \frac{1}{2}gt^2$ みたいなものです。このままでは形式だけで何の役にも立たない。 t や S の実数は不定で、ただ g が約 980 ときまっておき、 $\frac{1}{2}$ や 2 はこのまま使うというだけです。けれども t は何か時間数であり、 S はそれに応じた長さであることは約束できまっている。不定句もそれで、*einem* は何か「人」の三格、*etwas* は何か「事物」の四格と約束できまっています。実際に用いると、たとえば *Ich schulde ihm eine große Summe.* (*I owe him a large sum.*) などとなるわけです。*einem* の代りに *jemandem* (英: *someone*) というのも用いることがあります。

こういう全然公式的な、実際の具体的な単語を抜きにした不定句は、まあ、辞書で動詞の用法を示したり、あるいは（これからは全部そうして行きますが）語学的な説明に用いたりする位のものですが、これに実語を入れた *dem Freunde die Zeche schulden* (友人に飲食代を借りている) とか、*den Nagel auf den Kopf treffen* とかいったような不定句は、非常に応用範囲が広いのです。たとえば、これらの前に *ich will* とか、*du mußt* とか *er kann* とかいうものをつけますと文章が出来上ります：*Ich will den Nagel auf den Kopf treffen.* (おれが道破一番してくれよう) など。

結論を申しますと、不定句というのは、動詞の用法を公式的に示したり、動詞を基礎とする慣用句を句として挙げたり、あるいはまた助動詞と共に用いたりする時の形なのです。

109. zu を伴う不定句

ところで、英語の不定句とドイツ語の不定句とは、不定形の位置が違うのみならず、英語ではよく *to hit* などと *to* をつけるが、ドイツ語では単に *treffen* となっている

点も違います。ただしこれは単に *hit the nail on the head* と言ってもよいのですから、別に相違という程の事はありません。ただ英語にはドイツ語の *-en* のような不定形語尾がないため、たとえば単に *sentence* と言ったのでは名詞だか動詞だかわからないので、これを「判決する」と読ませるためにはどうしても *to sentence* という必要がある関係上、*to* をつけて明瞭にするのです。

ドイツ語にも *to* に相当する *zu* というのがあって、ある種の場合には *den Nagel auf den Kopf zu treffen* という不定句を用い、これを **zu** を伴う不定句と呼んでいます。(zu treffen, to hit, だけならば *zu* を伴う不定形 [あるいは不定法] です) たとえば:

Es ist schwer, den Nagel auf den Kopf zu treffen.

Es ist schwer は *It is difficult* ですから、『肯綮(きんぎょ)に中(な)めることはむずかしい』です。直訳すると『それはむずかしい、肯綮に中めることは』で、この *zu* を伴う不定句は、*es* をもう一度言い直したもの、といったような文法関係になっています。それから『肯綮に中めるという事』という訳語でわかる通り、*zu* を伴う不定句という奴は(普通の不定句もそうですが)、いわば一つの長い名詞と思ってよいでしょう。それは次の場合になるとなおはっきりわかります:

Seine Art, den Nagel auf den Kopf zu treffen, ist köstlich!

『彼のスッパ抜き方はとてもふるってる!』の意です。*Art, f.* は英語の *art* (術)ではなく、*manner* (流儀、やり方、癖)です。*köstlich* はちょうど日本語でいう「ふるっている」、「痛快な」という形容詞。——この場合は、英語では *His manner of hitting the nail on the head is excellent!* と、*of -ing* の形になります。*hitting the nail* 云々となれば、これは一つの長い名詞であることは明瞭です。こうした *-ing* 形は、現在分詞と区別して、英文法ではこれを *gerund* (名詞形動詞、体用詞) といっています。ドイツ語の *zu* を伴う不定句は、大体英語の *to* を伴う不定句と同用法のようではありますが、その上更に英の *of* を伴う *gerund* の用法をも含むという事になって来ます。英語では *of -ing* 型と *to -* 型との使い分けが非常に面倒で、たとえば同じような意味の *able* と *capable* とでも、*able* の方は *to -* 型で (*He is able to do something*), *capable* は *of -ing* 型 (*He is capable of doing something.*) といったような区別がありますが、ドイツ語はいかなる際でも *zu* を伴う不定句を使えばよいのですから非常に簡単です。

どんな場合とどんな場合とに *zu* を伴う不定句を使うかという事は、分解していうと大変面倒な事になりますから、次の例題の実例によって研究してください。

最後に二、三重要な注意:

(1) **zu** を伴う不定句の前後には必ず **Komma** を打つ

ここが英語と違うところです。従属的接続詞に

率いられた文章や関係文章と同様、zu を伴う不定句もまた一種の副文章（普通よく省略副文章といいます）と見て、その前後に必ずコンマを打ちます。

今までの文例をよくご覧ください。

(2) zu を伴う不定句の中には主語があってはならない！

「不定」形とか「不定」句とかいうものは、主語が

定まっていないから「不定」というので（きまった主語があれば「定」形を用いて、正置とか倒置とか後置とかの構造をとるはずですから）、その不定句の中に主語があるという事は変な話ですから、これは英語でもドイツ語でも、その他何語でも絶対に許されません。たとえば『言が肯綮(きんきょ)に中(ちゆう)るという事は非常にむずかしい』のつもりで *It is very difficult to hit the words the nail on the head* などと言ってははいけません。従ってドイツ語でも *Es ist schwer, die Worte den Nagel auf den Kopf zu treffen.* とは言えないのです。作文の際によくある誤りです。

(3) 分離動詞の zu を伴う不定形

たとえば *aus-sprechen* (発音する), *mit-teilen* (通知する) などの zu を伴う不定形は、*auszusprechen*, *mitzuteilen* となります。(過去分詞の *ge-* と同じ位置に *zu* がはいるわけです: *ausgesprochen*, *mitgeteilt*.)

ちょうどよい機会ですから、分離動詞と非分離動詞との差が露骨に現われる場合の事を述べて置きましょう。たとえば *über-* という前綴は、分離のこともあり非分離のこともあります。*übersetzen* (翻訳する) は発音が [ユーベル・ゼッツェン] ですから非分離、同じつづりの *übersetzen* (向こう側へ渡す、渡河せしめる) は発音が [ユーベル・ゼッツェン] ですから分離です。そうすると、この二語の過去分詞と、zu を伴う不定形はすっかり違ってきます:

	不 定 形	過 去 分 詞	zu を伴う不定形
分 離 動 詞	übersetzen (渡す)	übergesetzt	überzusetzen
非分離動詞	übersetzen (翻訳する)	übersetzt	zu übersetzen

例 題 39

[1] Es ist gefährlich, bei einem Gewitter unter
ゲフェールリヒ バイ ゲヴィッテル ウンテル
 einem Baum zu stehen. [2] Es ist leicht, zwei
バオム ツー シュテーエン ライヒト ツヴァイ
 oder drei Sprachen zu beherrschen. [3] Es ist der
オーデル ドライ シュプラーヘン ツー ベヘルシェン
 oberste Grundsatz der Feuerwehr, erst die Men-
オーベルステ グルント・ザッツ フォイエール・ヴェール エールスト メン

schenleben, dann die Materialien zu retten. [4] Es
シェン・レーベン ダン マテリアーリエン レッテン

ist schwer, das Glück in uns selbst zu finden, und
シュヴェール グリュック ゼルプスト

es ist unmöglich, es anderswo außer uns zu ent-
ウン・メークリヒ アンデルスヴォー アオセル エント

decken. [5] Wer zu viel liest, verliert allmählich
デッケン ヴェール ツー フィール リースト フェルリールト アルメーリヒ

die Fähigkeit, selbst zu denken. [6] Wer etwas
フーイヒカイト ゼルプスト デンケン エトヴァス

behauptet, hat zu gleicher Zeit auch die Pflicht,
ベハオブテット グライヒェル ツァイト フリヒト

diese Behauptung zu beweisen. [7] Kein Mensch
ベハオプトウング ベヴァイゼン

ist imstande, über sich selbst vollkommen objektiv
イムシュタンデ ユーベル ジヒ ゼルプスト フォルコムメン オブイェクティーフ

zu denken. [8] Auch die vollkommenste Maschine
フォルコムメンステ マシーネ

ist außerstande, eine Energie, die von Brennstoffen,
アオセルシュタンデ エネルギー プレン・シュトッフエン

Wasserkraft usw. ihr zugeführt wird, restlos
ヴァッセル・クラフト ウント・ゾー・ヴァイテル ツーゲフュールト レストロース

in eine andere Energie umzusetzen. [9] Ver-
アンデレ エネルギー ウム・ツー・ゼッツェン フェル

schwiegenheit zu fordern, ist nicht das rechte Mittel,
シュヴィーゲンハイト フォルデルン レヒテ ミッテル

sie zu erlangen. [10] Ich habe keine Zeit, müde
エルランゲン ミューデ

zu sein. (*Wilhelm I.*)

訳註: [1] 雷雨の際に樹の下に立つのは危険である。gefährlich: dangerous. Gewitter, n.: tempest, thunder-storm. Baum, m.: tree. [2] 二つあるいは三つの言語に熟達することは容易である。leicht: easy. zwei oder drei: two or three. beherrschen: to master. Sprache, f.: language. [3] まず人命を救い、次に物件を救うということが消防の最高原則である。oberst: supreme. Grundsatz, m.: principle. Feuerwehr, f.: fire-brigade. erst: first. Menschenleben, n: human life. dann: then, afterwards. Material, n. pl. —ien.: material. retten: rescue, save. [4] 幸福を我々自身の裡に見出すのは難しいが、それを我々自身以外のどこかに発見することは不可能である。schwer: difficult. Glück, n.: happiness. in uns selbst: in ourselves. finden: find. unmöglich: impossible. anderswo: elsewhere, in some other place. außer: outside. (『だから多少難しくてもやはり我々自身の心の中に見出すの外はない』という事)

[5] あまり多く読みすぎる者は、だんだんと自分で考えるという能力を失ってしまう。zu viel: *too much*. liest (不定形: *lesen*). verlieren: *lose*. allmählich: *gradually, by little and little*. Fähigkeit, *f.*: *ability*. [6] 何かを主張する者は、同時にまたその主張を立証する義務を持つ。behaupten: *pretend, assert, affirm*. zu gleicher Zeit: *at the same time*. auch: *too, also*. Pflicht, *f.*: *duty, obligation*. Behauptung, *f.*: *thesis, proposition*. beweisen: *demonstrate*. [7] 何人といえども己れ自身について全然客観的に考えるという事は出来ない。imstande: *able*. über: *about*. (...について, ...に関して) vollkommen: *completely, entirely*. objektiv: *objectively*. [8] たとえ最も完全なる機械といえども、燃料、水力その他によって己れに供給されるところのエネルギーを残しなく他のエネルギーに転換することは出来ない。vollkommen (-st は「最も...」を意味する語尾): *accomplished*. Energie, *f.*: *energy*. Brennstoff, *m. pl.* -e: *fuel*. Wasserkraft, *f.*: *water-power*. usw. (und so weiter): *and so forth, and so on, et cetera [etc.]*. zuführen: *convey, carry*. restlos: *without rest*. ander: *other*. um-setzen (分): *convert, turn, change*. außerstande (前出 imstande の反対): *unable*. auch die vollkommenste Maschine: *even the most accomplished machine*. [9] 緘黙(けんもく)を要求するは、これを得る正しき手段に非ず。(他言するなといわれると、反ってしゃべりたくなるからである。) Verschwiegenheit (口が固いこと、秘密を守ること、口のつつしみ): *reticence, discretion*. fordern: *claim, require, ask for*. recht: *suitable, proper, right*. Mittel, *n.*: *means, way*. sie は Verschwiegenheit. erlangen: *obtain, acquire*. [10] 余は疲れる暇なし。müde: *tired*. ドイツの皇帝ヴィルヘルム一世の言として有名である。帝は二六時中休む暇なく忙しくしているので、誰かが心配して、「陛下はさぞお疲れでしょう」と言ったら、「馬鹿な事を申せ、疲れている暇なんかあるものか」と言ったのである。

110. um, ohne, statt, anstatt と zu+不定句

既述のごとく、zu を伴う不定句は、句全体が一個の長い名詞のようなもので、『.....云々する事』を意味するのですから、本当ならばその先頭に種々の前置詞をつけて、『.....云々する事の前に』、『.....云々する事の後に』、『.....云々する事を以て』、『.....云々することによって』などの意に用いてよいはずなのですが、ドイツ語の実際としては um (.....せんがために。英: *in order to*), ohne (.....することなく。英: *without* [-ing]), statt または anstatt (.....する代りに。英: *instead of* [-ing]) の四前置詞だけしか zu を伴う不定句の前には置けないことになっています:

um eine Sprache zu erlernen——言語を習得せんがため(には)
 ohne eine Sprache zu erlernen——言語を習得することなく(ては)
 statt
 anstatt } eine Sprache zu erlernen——言語を習得する代りに

例

題

40

[1] Der Mensch ißt und trinkt, um zu leben,
 イスト トリンクト

nicht umgekehrt. [2] Es ist unmöglich, gerecht zu
 ウム・ゲケールト ウン・メークリヒ ゲレヒト

handeln, ohne jemand zu kränken. [3] Statt eine
 ハンデルン オーネ イェーマント クレンケン シュタット

negative Zahl zu addieren, kann man ihren absoluten
 ネガディーヴェ ツァール アッディーレン アプゾルーテン

Wert subtrahieren. [4] Man muß stark sein, um
 ヴェールト ズプトラヒーレン シュタルク ザイン ウム

gut sein zu können. (Napoleon)
 ゲート ケンネン

訳註: [1] 人間は生きんがために食いかつ飲むのである, その逆ではない。ist (不定形: *essen, eat*). *trinken: drink*. *umgekehrt* (「その逆」, または「その逆も真なり」): *vice-versa*. [2] 何人かを傷つけることなく正しく振舞うことは不可能である。(正しく振舞わんとする者は一部のくだらない人間を怒らすくらいのは覚悟の前でなければならぬ。) *gerecht: rightly, righteously*. *handeln: act*. *jemand: some one, somebody*. *kränken: injure, hurt, mortify*. [3] 負数を加える代りにその絶対値を減じてもよい。negative Zahl: *negative number, negative quantity, a negative*. *addieren: add*. *absolut: absolute*. Wert, m.: *value*. *subtrahieren: subtract*. [4] 善良たり得んがためには強からざるべからず。stark: *strong*. *um gut sein zu können*: 分解すれば gut sein 善良たり zu können 得ること um のためには。(英語は zu können に相当する *to can* は不可能で, *to be able* あるいは *to be capable* とでもいうの外はなからう。)—これはナポレオンの言として伝わっている金言で, 弱者は真に善良な気持にはなり得ない, 本当に善良な, 円満な, 磊落(れいらく)な, 朗らかな気持というものは, 本当に強い者にして初めて生ずる。如何となれば, 好人物性というものはある種のしゃくしゃくたる気持の余裕であるから, の意。

第21講 再 帰 動 詞

111. 再帰動詞とは?

再帰動詞は英語にもあります。例えば『申しわけをする』、『弁解する』ことを *to excuse oneself* (自分自身を免除する) といいます。ドイツ語もこれと全然同じ構造で *sich entschuldigen* といいます。つまり『自分自身を……云々する』という構造の動詞を再帰動詞というのです。ただ、ドイツ語は英語と違って、非常に再帰動詞が多いので、特にその文法に慣れておく必要があるのです。

Die Zeiten ändern sich. 時代は変わる。

(*Times change.*)

Times は *time* の複数であるように、*Zeiten* (時代) は *Zeit* (時) の複数で、英独とも複数形は『時代』という別意を持っています(有名な *Times* という新聞は、つまり『時代』という意味です。それに反してアメリカの *Time* という週刊雑誌は *present time*, すなわち時下、今日という意味の名です)。ところで、その次の *ändern* は『変える』、『改める』ですが、*sich* (自身を) と共に用いると、『変わる』、『改まる』という意味になります。別に時代が『自分で自分を改める』などという分解通りの意味ではなく、全然別な『変わる』という意味が生ずるのです。この『変える』と『変わる』、『改める』と『改まる』において見受けられる母音 *e* と母音 *a* との関係は、『他動』と『自動』との関係で、たとえば:

他動詞 (母音が *e*)

<i>suteru</i>	捨てる
<i>uderu</i>	茹でる
<i>tomeru</i>	止める
<i>tsukeru</i>	漬ける
<i>mageru</i>	曲げる

自動詞 (母音が *a*)

<i>sutaru</i>	廃る
<i>udaru</i>	茹だる
<i>tomaru</i>	止まる
<i>tsukaru</i>	漬かる
<i>magaru</i>	曲がる

} ドイツ語では再帰動詞で表現することが多い。

「すたる」や「うだる」は、ほとんどこうした関係を考えずに使っていますが、少し考えて見るとそういう関係がわかるではありませんか。夏期講習などで、講習生のぎっしり詰まった(ツメル, ツマル)部屋の中でウダリながら講義していると、まったく茹でられているとしか思えません。そう思って見ると、煮過ぎたお餅がドロドロになるように、どの講習生も表面がドロドロに融けて、部屋の空気がモロモロと溷濁

(泳ぐ)している。講師も講習生も、一部はグンニャリ腰かけてベトベトしているが一部は溶けて空中を游(遊)いでいるというわけです。ウダルとは全く巧いことを言ったものじゃありませんか！

けれども、ウダルと言う時には、まさか「茹でる」の自動詞化したものだとは考えません。ドイツ語の *sich ändern* (変わる) も、まあ大体そんなものだと思えば間違いありません。

母音だけ変えて他動詞と自動詞とを区別するという日本語式な方法、それから英語に多い (たとえば *change* [他] 変える, [自] 変わる) 同語を自動・他動の両意に用いるという方法は、ドイツ語にもあることはあります:

他動詞 (e, あるいは ä)		自動詞 (i)	
setzen	置く (<i>set</i>)	sitzen	坐る (<i>sit</i>)
legen	横たえる (<i>lay</i>)	liegen	横たわる (<i>lie</i>)
senken	沈める	sinken	沈む (<i>sink</i>)
sprengen	飛ばす, 爆破する	springen	はねる (<i>spring</i>)
verschwenden	浪費する	verschwinden	消える
schwemmen	泳がす	schwimmen	泳ぐ (<i>swim</i>)
drängen	せめる	dringen	せまる
tränken	飲ます (<i>drench</i> *)	trinken	飲む (<i>drink</i>)
blenden	眩惑する	erblinden	めくらになる
他動詞 (変音) (e は ä と同じ)		自 動 詞	
fällen	落とす (<i>fell</i>)	fallen	落ちる (<i>fall</i>)
hängen	掛ける (<i>hang</i>)	hangen	掛かる (<i>hang</i>)
zücken	ピクつかす	zucken	ピクつく
erkälten	冷やす	erkalten	冷える
erwärmen	暖める	erwarmen	暖まる
kränken	傷つける	erkranken	罹病する
stärken	強める	erstarken	強まる
schellen	鳴らす	schallen	鳴る
heften	くっつける	haften	くっつく
regen	掻き立てる	ragen	聳(も)える
prellen	弾く	prallen	跳ねかえる

	他 動 詞	自 動 詞
wechseln	変える	変わる
brennen	燃やす	燃える
fahren	運ぶ	運ばれる
heißen	と呼ぶ, と名づける	と呼ばれる, と名づけられる
stecken	挿み込む, 入れる	ささっている, 入っている
biegen	曲げる	曲がる
heilen	癒(な)す	癒(な)る
kochen	煮る	煮える

けれども、これらの現象に比べて、ほとんど比較にならない程、はるかに一般的なものは、再帰動詞によって自動詞を造る型です。

他 動 詞	自 動 詞
setzen 置く (据える)	sich setzen 坐る (=据わる!)
entfernen 遠ざける	sich entfernen 遠ざかる
bewegen 動かす	sich bewegen 動く
drehen 回わす	sich drehen 回る
verbergen 隠す	sich verbergen 隠れる
öffnen 開ける	sich öffnen 開く
mitteilen 伝える	sich mitteilen 伝わる
gewöhnen 慣らす	sich gewöhnen 慣れる
vermehrten 増やす	sich vermehren 増える
verbreiten 拡める	sich verbreiten 拡まる
langweilen 退屈させる	sich langweilen 退屈する

日本語には、なお、受働形によって自動詞を区別する法があります。たとえば子供が『生れる』(母によって『産まれる』ゆえ)などがそれです。ドイツ語も、『生れる』という一語はなくて、やはり geboren werden (『産む』は gebären, gebar, geboren) という受働形を用い、これはさすがに sich gebären (自分を産む) とは言わない事になっていますが、こんなのはむしろ例外で、大抵の場合は、むしろ受働で表現しそうな場合に再帰動詞を使うことが多いのです：

他 動 詞	自 動 詞
unterscheiden 区別する	sich unterscheiden 区別される
gestalten 形造る	sich gestalten 形造られる

aussprechen	発音する	sich aussprechen	発音される
erlernen	習得する	sich erlernen	習得される
vergessen	忘れる	sich vergessen	忘れられてしまう
konzentrieren	集中する	sich konzentrieren	集中される
wiederholen	繰り返す	sich wiederholen	繰り返される
vorbereiten	準備する	sich vorbereiten	準備される

けれども、これは単に日本語の訳語の問題で、子供が「生れる」という時に、別に母によって産み落とされるという受働的な考え方はしないのと同様、『……られる』というのは、*sich* というのと同様、自動詞化の単なる方便にすぎないのです。

備考：自動と他動との関係は、現存する各国語においては、殆んど乱雑そのものと言ってよいほどで、系統的なドイツ語すらなおかくのごとく複雑怪奇を極めているのですから、他の国語はおして知るべしです。漢文などは語順で区別するのはご存じでしょう。「動天地」の動は「動かす」、「天地動」の動は「動く」となるなど。その他「飛」（飛ぶと飛ばす）、「開」（開(?)くと開(*)く)、「迷」（迷わすと迷う）、更に他動詞をすら更に他動詞にして、【令（せしむ）を使わずに語順で表現し、「君飲酒」は「君酒を飲む」、「飲君酒」は「君に酒を飲ませる」と区別するなど、言語によっていろいろな手法があります。（唐詩選、王維の「送別」に「下馬飲君酒」「馬より下って君に酒を飲ましむ」とあるのがそれです。）ただ人工語 *Esperanto* だけは、*-igi* で他動化し、*-igi* で自動化すると決まっています、たとえば *jun-a* (若い, *jung, young*) から *junigi* (若返らせる), *junigi* (若返える) をつくるなど。けれども、たとえば *fermi* が「閉める」であって「閉まる」ではないということは、フランス語 (*fermer*) の知識がないと判断できないわけだから、これも根語に相当の問題がわだかまっています。

112. 再帰代名詞

さて、再帰動詞には英語の *oneself* (自分自身) に相当する *sich* という代名詞（これを再帰代名詞という）をつけると申しましたが、これは不定形の場合について言ったので、その人称変化は次のようになります：

不定形: sich ändern (変わる)	
ich ändere mich	wir ändern uns
du änderst dich	ihr ändert euch
er ändert sich	sie ändern sich
(二人称敬称は Sie ändern sich [小文字!])	

英語は、不定形の場合は *oneself*, *he* は *himself*, *she* は *herself*, *it* は *itself*, *they* は *themselves* と、いろいろに変わった形を用いますが、ドイツ語は、不定形、及び三人称全部（性と数にかかわらず）が *sich* ですから簡単です。

三人称の場合には、*er* には *ihn (him)* という四格形があり、*sie* には *sie (her)* が

あり、その他、すべて人称代名詞の四格形があるのに、それを用いないで、どうしてわざわざ *sich* という語を用いるかというと、それは次のような区別が出来る点で便利だからです：

A. Sein Vater entschuldigt ihn. かれの父はかれの申訳をする。

B. Sein Vater entschuldigt sich. かれの父は己れ自身の申訳をする。

では、英語の *self* に相当する *selbst* をつけて *ihn selbst* (*himself*) を用いれば *sich* の代りになりはしないかという、そうもいきません。Sein Vater entschuldigt ihn selbst. という、『かれの父はかれ自身の弁解をする』すなわち、やっぱり忤の言い分けをするわけで、ただ、忤の代理人や忤の妻などではなく、忤自身の言い分けだということで、決して父自身の意味にはならないのです。

sich に *selbst* をつけると、それはもはや本当の自動詞ではなく、分解通りの意味になります：

Kenne dich selbst! 汝自身を知れ!

どこまでが真の自動詞で、どこからが分解通りの再帰的な意味（たとえば自殺、自重、自尊、自嘲、自爆、自棄、自薦、自讃、等々）かという事は微妙な問題ですが、とにかく真の自動詞には *selbst* をつけてはいけない、たとえば「時代が変わる」を *Die Zeiten ändern sich selbst.* などというのは、よく英人または英語をやった人の犯す過ちである事をご銘記ねがいます。

そこで最後に、再帰代名詞の表を示すと次のようになります。普通の人称代名詞とちがったところのあるのは三格と四格で、またこの二つの格のみが再帰動詞に関係して来るのです。

	単 数			複 数		
	一人称	二人称	三人称(各性)	一人称	二人称	三人称
三 格	mir	dir	sich	uns	euch	sich
四 格	mich	dich	sich	uns	euch	sich

(1) 敬称二人称 *Sie* に対する再帰代名詞は **sich** (小文字!)

Sie に対する普通の人称代名詞は (51!)

二格: *Ihrer*, 三格: *Ihnen*, 四格: *Sie* で、すべて大書しますが、再帰代名詞だけは小書の *sich* です。勿論三四格とも *sich* です。

(2) **sich** は英語の何と何とに該当するか?

まず単数三人称の各性に当りますから *himself*, *herself*, *itself* に相当しま

す。また複数三人称ですから *themselves* に相当します。なお、性も数も人称も無い

不定の *oneself* にも該当します。また敬称二人称も *sich* ゆえ、*yourself* 及び *yourselves* にも当ります。それから——これを忘れてはいけません——三格にも用いられて『自身に』の意になるのですから、*to myself, to himself, to herself*, 等々等々等々にも該当するわけです。

(3) 三格支配再帰動詞と四格支配再帰動詞との二種あり

今までに紹介した再帰動詞はすべて『自身を……

云々する』という構造のものばかりでした。これを四格支配の再帰動詞と言います。しかしその他に更に三格の *sich* を伴う再帰動詞もありますが、これは、混乱せぬように、項を改めて説明します。

例 題 41

- [1] Die Erde dreht sich um die Sonne. [2] Das Wetter ändert sich sehr leicht. [3] Die Geschichte wiederholt sich. [4] Das Salz löst sich im Wasser auf. [5] Der Schall pflanzt sich durch die Luft mit etwa 333 Meter Sekundengeschwindigkeit fort. [6] Die Wärmestrahlen unterscheiden sich von den Lichtstrahlen durch ihre größere Wellenlänge. [7] Oft entsteht ein Ärger dadurch, daß du dich darüber ärgerst, daß der andere sich nicht ärgert. [8] Der Junggesell langweilt sich überall, der Verheiratete bloß zu Hause. [9] Ihr Weiber interessiert euch bloß für die Oberfläche des gesellschaftlichen Lebens. [10] Wir Menschen gewöhnen uns mit der Zeit an alles. [11] Du handelst gar nicht
- エールデ ドレート ジヒ ウム ソンネ
ヴェッテル エンデルト ゼール ライヒト ゲシヒテ
ヴィーデル・ホルト ザルツ レースト ヴァッセル
シャル フランツト ドゥルヒ ルフト
エトヴァー メーテル ゼクンデン・ゲシュヴィンディヒカイト フォルト
ヴェルメ・シュトラレン ウンテル・シャイデン
リヒト・シュトラレン グレーセレ ヴェルレン・レンゲ
オフト エントシュテート エルゲル ダー・ドゥルヒ
ダー・リューベル エルゲルスト アンデレ エルゲルト
ユング・ゲゼル ラングヴァイルト ユーベルアル フェル
ハイラーテテ ブロース ツー ハオゼ ヴァイベル インテレッ
シールト オイヒ ブロース オーベル・フレッヒェ ゲゼルシャフト
リッヒェン レーベンス ゲヴェーネン
ハンデルスト

und begnügt dich damit, dich zu beklagen; ich

ベグニュークスト

ダーミット

ベクラーゲン

beklage mich über nichts, sondern begnüge mich

ベクラーゲ

ユーベル

ニヒツ

ベグニューゲ

damit, die Ursachen des Übels zu entfernen.

ダーミット

ウールザッヘン

ユーベルス

エントフェルネン

訳註: [1] 地球は太陽の周囲を回る。sich drehen: *turn*. [2] 天気は非常に変わりやすい。Wetter, *n.*: *weather*. leicht: *easily, soon*. [3] 歴史は繰り返す。History repeats itself.—有名な通り言葉, 外形的には違っている, 本質的には同じ過ちが繰り返され同じ局面が繰り返されるのが古今の歴史である, たとえばモスクウで敗れたナポレオン, スターリングラードでつまづいた Hitler など。[4] 塩は水に溶ける。Salz, *n.*: *salt*. sich auflösen: *dissolve, melt down*. [5] 音響はおよそ 333 米の秒速を以て空中を伝播する。Schall, *m.*: *sound*. sich fortpflanzen: *be propagated*. etwa: *about*. 333: dreihundert drei und dreißig (語順通りには: *three hundred three and thirty*). Sekunde, *f.*: *second*. Geschwindigkeit, *f.*: *speed, velocity*. mit etwa 333 Meter Sekundengeschwindigkeit: *at a velocity of about 333 meters per second*. Luft, *f.*: *air*. durch die Luft: *through the air*. [6] 熱線は光線とはそのより大なる波長によって異なっている。Wärmestrahlen, *pl.*: *thermal rays*. Lichtstrahlen, *pl.*: *beams, rays, light*. sich von etwas unterscheiden: *to differ from something*. durch: *in*. größer (groß: *large*, の比較級). Wellenlänge, *f.*: *wave-length*. [7] 往々にして相手がちっとも憤慨せぬという事について汝が憤慨するという事によって一つの憤慨が発生することがある。entstehen: *arise*. Ärger, *m.*: *anger*. dadurch (「その事によって」, da- は daß 以下を受けている). sich über etwas ärgern: *to be offended at something*. der andere: *the other*. (相手, 先方) darüber (「その事について」, dar- は daß 以下を受ける). [8] 独身者はいたるところで退屈する, 既婚者は自宅でのみ退屈する。Junggesell, *m.*: *bachelor*. sich langweilen: *to feel dull, tedious*. überall: *everywhere*. der Verheiratete: *a married man*. bloß: *only*. zu Hause: *at home*.——これは婦人の悪口である。独身者はいたるところで退屈する, 如何となれば女の相手がないから。けれど, 一旦嬢を貰ってしまうと, 嬢はどうるさくて退屈なものはなく, さかんに外出するようになる, の意。[9] 君がた女たちは, 社会生活の表面にだけしか関心を持たない。Weiber: *women*. sich für etwas interessieren: *to take an interest in something*. Oberfläche, *f.*: *surface*. gesellschaftlich: *social*. Leben, *n.*: *life*. [10] われわれ人間なるものは, 時と共に何にでも慣れるものである。sich an etwas gewöhnen: *to grow familiar with something, to accustom oneself to something*. mit der Zeit: *with time, in time, sooner or later*. [11] 君はちっとも實際行動をしないで, ただ愚痴をこぼすだけで満足している, 僕は何一つ愚痴をこぼさないで, ただ禍の原因を除去するだけで満足するんだ。sich mit etw. begnügen: *to content oneself with something*. sich über etw. beklagen: *to complain of something*. Ursache, *pl. — n.*: *cause*. Übel, *n.*: *evil, mischief*. entfernen: *remove*.

113. 三格支配の再帰動詞および再帰的熟語

次には, 再帰代名詞の三格 (sich: *to oneself* など) を伴う再帰動詞です:

Er setzte es sich vor, sich zu bessern.

彼は行ないを改めようと志した。

逐語訳すると：Er 彼は，sich 己れを bessern 改める zu べく es それを sich (to himself) 己れ自身に setzte vor (proposed) 提議した。——同じ sich が，最初のは三格として用いてあり，最後のは四格として用いてあります。

この『志す』、『企む』、『目論む』を意味する三格支配の再帰動詞は，不定句の形でいうと：

sich etwas vorsetzen (to propose [s. to oneself])
自分に ある事を 前に・置く

少し詳しい事になりますが，英語の *pro-pose* とドイツ語の *vor-setzen* とは同じ構造なのです。ラテン語の *pro-* は語源的にも意味の上でもドイツ語の *vor* (前) と同じもので，(他に *prae-* もあります：*preposition* 前置詞，など)，*pose* は *setzen* (置く) です。『自分に・ある事を・前に・置く』というのはすなわち自分の眼前に堂堂とある物をドッカとすえて，さあこれからこれをやるぞという気構えを示すわけです。物はとかく眼の前に置かないと，見えないのをよい事にして，なかなか手をつけようとしなない。眼の前に置いておくと，邪魔になって仕様がなから，ついやることになる。そこで『ある事を志して，決意を以て取りかかる』ことを，*sich etwas vorsetzen* とは，なかなか巧い事を言ったものではありませんか。もっとも *pro-pose* の *pro* の方は，(*prae* と区別して)「人前に」，「衆目の前に」の意だという説もあります。だからまた「提議する」，「建議する」の意になったものでしょう。けれどもドイツ語の方ではドイツ語なりに考えて作ったもので，自分で自分の鼻の先に置く，という構造です。

ついでにもう一つ例を挙げると，ただ今の *setzen* を，全然同意の *stellen* (置く) に変えると『ある事を念頭に描く』すなわち『心に描く』という意味での『考える』，『想う』になります：

Ich stellte mir sein Staunen vor.

私はかれの驚きを心に描いてみた。

sich etwas vorstellen は英語の *fancy, imagine, think of* ですが，逐語的にはむしろ *to represent* (または *figure*) *something to oneself* にあたりましょう。だから概念，観念，考え，(*idea, conception, notion*) を *Vorstellung* といいます。

これを要するに，三格の *sich* を伴う再帰動詞は大抵ある種の熟語で，これまた前項で述べた四格支配再帰動詞と同様，代名詞と動詞とが渾然融合して一つの新たな意味を結晶せしめます。ただ，この方は，必ずしも自動詞にはならず，前出の二例でもわかる通り，四格の目的語がはいり，他動詞になることも多いのです。

見たところでは全然同じ恰好をした *sich* が，あるいは三格になったりあるいは四

第22講 比較級と最高級

114. 比較級・最高級の形

形容詞と副詞に「比較する場合の形」、すなわち「より……云々なる」とか「最も……云々なる」とかいう形があって、これが文法上の一項目をなしているという事は、日本語だけしか知らない人にとっては、ちょっとこうなんだか非常に特殊な変なことのようと思われるかも知れませんが、英語、ドイツ語は申すに及ばず、西洋語系統の言語においては、古くはサンスクリット語、ギリシア語、ラテン語から、現在のヨーロッパ諸語に至るまで、比較級、最高級の問題は、語形が変化するという見地から、どうしても文法として取り扱わなければならないのです。たとえば英独とも最高級には -st, -est などの語尾をつけますが、そういえばギリシア語でも、またお経でご存じのサンスクリット語でも (iṣṭha) この同じ語尾をつけたものなのです。

Das Virus ist klein-er als die klein-st-e Bakterie.
ヴィールス クライネル アルス クラインステ バクテーリエ

ろ過性病原体は最小の細菌よりも小さい。

kleiner (*smaller*) は勿論 klein の比較級で『より小なる』を意味し、-er という語尾は今までにやった格語尾ではなく、『より……』、『更に……』、『もっと……』を意味する比較級語尾です。kleinste の st は『最も……』の意の最高級語尾で、その次についている -e は格語尾です。(als, than, の用法を銘記すること！)

英語は大抵 -est をつけますが、ドイツ語は大抵 -st をつけ、ただ母音の後 (frei, 自由な, freiest など) とか、発音しにくい子音の次にだけ est をつけます。

英語では、やっかいな語は -er, -est をつけず、more (より), most (最も) という副詞を前に置いて代用形を造ります (interesting, more interesting, most interesting) がドイツ語ではどんなやっかいな長いものにでも必ず -er, -st をつけます: interessant 興味ある, interessanter, interessantest.

ある種の、最も普通に用いられて来た、簡単な、通俗な形容詞には、比較級、最高級で変音するものがあります：

原 級		比較級	最高級
alt	(old)	älter	ältest
jung	(young)	jünger	jüngst
lang	(long)	länger	längst

kurz	(short)	kürzer	kürzest
warm	(warm)	wärmer	wärmst
kalt	(cold)	kälter	kältest
arm	(poor)	ärmer	ärmst
klug	(clever)	klüger	klügst

英語の *old* は, *older*, *oldest* の外に *elder*, *eldest* という形をつくりませんが, そのわけがドイツ語の見地からわかるでしょう。

英語には *good*, *better*, *best*: *bad*, *worse*, *worst* などの, 非常に不規則なものがありますが, ドイツ語にも若干の不規則があります。(太文字のところ!)

gut	(good)	besser	best
groß	(great, large, big)	größer	größt
hoch	(high)	höher	höchst
nah	(near)	näher	nächst
viel	(much, many)	mehr	meist
wenig	(few)	weniger	wenigst
		minder	mindest

例 題 43

- [1] Die Erde ist kleiner als die Sonne und größer
エールデ クライネル アルス ソンネ グレーセル
 als der Mond. [2] Das Raketenflugzeug fliegt
モント ラケーテン・フルークツォイク フリークト
 schneller als der Schall. [3] Die Knochen der Frau
シュネルレル シャル クノッヘン
 sind leichter, dünner und weicher als die des Mannes.
ライヒテル デュンネル ヴァイヒェル ディー デス マンネス
 [4] Die Macht des Milieus ist stärker als der Mensch.
マハト ミリユース シュテルケル
 [5] Kunstwerke sind die besten Diplomaten. [6] Die
クンスト・ヴェルケ ベステン ディプロマーテン
 Schuster tragen die schlechtesten Schuhe. [7] Das
シューステル トラーゲン シュレヒテステン シューエ
 strengste Recht ist das strengste Unrecht. [8] Die
シュトレングステ レヒト シトレングステ ウン・レヒト
 arbeitende Klasse fordert kürzere Arbeitsstunden
アルバイテンデ クラッセ フォルデルト キュルツェレ アルバイツ・シュトウンデン

und höhere Löhne. [9] Die Springflut, die dem
ヘーエレ レーネ シュプリング・フルート

Erdbeben auf dem Fuße folgt, richtet womöglich
エールト・ペーベン フーセ フォルクト リヒテット ヴォー・メークリヒ

größeres Unheil an, als das Beben selbst.
グレーセレス ウン・ハイル アン ペーベン ゼルプスト

訳註: [1] 地球は太陽よりも小さく、月よりも大きい。 [2] ロケット式飛行機は音響よりも速く飛ぶ。 *Raketen-Flugzeug, n.: rocket airplane, jet-propelled plane.* schnell: *fast.* Schall, *m.: sound.* [3] 女の骨は男のそれよりも軽く、細く、やわらかである。 *Knochen, m. pl. —: bone.* leicht: *light.* dünn: *thin.* weich: *soft.* die des Mannes: *those of man.* die は die Knochen の省略形で、『...のそれ』にあたる(これを指示代名詞という)。 [4] 環境の力は人よりも強い。 *Macht, f.: power, might.* Milieu, *n.: milieu.* (この「環境」という Milieu は元来フランス語ゆえ、フランス語に近く「ミリュー」[mi'ljø:] と発音し、日本語でも周囲、環境のことを現に「ミリュー」といっているが、これは人間を環境の産物として考えかつ描写することを主張したフランスの自然主義文学が一時世界中を風靡したからである。この *Die Macht des Milieus ist stärker als der Mensch.* も自然主義の Motto である) stark: *strong.* [5] 芸術品は最良の外交官なり。 *Kunstwerk, n. pl. —e: work of art.* Diplomat, *m. —en: diplomat, diplomatist.* [6] 靴屋が一番悪い靴をはく。(医者の不養生にあたる俚諺) *Schuster, m.: shoemaker.* tragen: *wear.* schlecht: *bad.* (schlechtest: *worst*) Schuh, *m. pl. —e: shoe.* [7] 最厳の正は最厳の不正。 *streng: rigorous, strict, severe.* Recht, *n.: justice, righteousness.* Unrecht, *n.: injustice, wrong.* (ラテンの格言、厳正な物の考え方にもある種の限界があつて、それを越えて極端にはしるとかえって悪鬼羅刹のごとき行ないになる、と云って司法者を戒めた言葉。) [8] 労働階級は、より短き労働時間と、より高き賃金とを要求する。 *arbeitende Klasse, f.: working class.* fordern: *demand, claim.* Arbeitsstunden, *pl.: work-hours.* Lohn, *m. pl. —e: wages, pay.* (英語の *loan* は「公債」。) [9] 地震の直後にやって来る津波という奴は、ややもすると地震そのものよりも大なる災害をひき起こすものである。 *Springflut, f.: spring-tide.* (津波) *Erdbeben, n.: earthquake.* einem auf dem Fuße folgen: *to follow at one's heels* (逐語的には *to follow one on the foot*) ...と踵を接して続く。 *anrichten: to cause.* (Unheil anrichten: *to do mischief*) Unheil, *n.: calamity, harm, evil.* womöglich: *possibly.* (ややもすれば, [...しがちである]) Beben (*Erdbeben* を二度使う代りに、二度目には前半部を省く): *quake.* selbst: *itself.*

115. 最高級の述語的用法

最高級の用法で一つ注意しなければならない事は、その述語的用法です。述語的用法というのは、たとえば *Dieser Weg ist der nächste.* (*This way is the nearest.*) といったような場合のことで、その反対は付加語的用法、すなわちたとえば *der nächste Weg* (*the nearest way*) などと、形容詞を名詞に冠して用いる場合です。述語的用法の場合には、英語でも定冠詞をつけて *is the nearest* と言いますが、ドイツ語では、主語になる名詞の性数によって *der, die, das, die* を使い分け、おまけに形容詞に格語尾をつけなければなりません:

- 男性: Der gerade Weg ist **der beste**. 真直な道が最良の道。
 女性: Die erste Liebe ist **die beste**. 初恋が最良の恋。
 中性: Das eigene Land ist **das beste**. 自国が最良の国。「法」。
 複数: Kurze Predigten sind **die besten**. 短かい説法が最良の説

これらを, Der gerade Weg ist best. とか Die erste Liebe ist best. などと言うと誤りになります。

次に, この der beste, die beste などの代りに am besten という形を用いることもあります。この方を用いると, 性や数の区別を表現しなくていいわけです。

Der gerade Weg ist am besten.

けれども, 日本語でも「真直な道が最良の道」といった方が「真直な道が最良である」というよりも修辞上いくらか自然であるように, この場合は der besteの方がよいということになっています。換言すれば Von allen Wegen ist der gerade Weg der beste. (あらゆる道の中で直真な道が最良である) というふうに, いろんな道を比べてその中の一つを最良と判断する際には am —sten の形よりはむしろ der —ste などの形の方が自然なのです。

それに反して, 次のような場合には der —ste や die —ste はいけないという事になっています:

Frauen sind ungeschminkt **am schönsten**.

女はお化粧していない時が一番美しい。

schminken 「化粧する」(to paint) の過去分詞に否定の un- をつけた ungeschminkt (unpainted) は, 「化粧せざる状態において」の意です。この場合は, 「あらゆる婦人の中で」という意味合いではなく, 全然考え方の筋道が違います。すなわち, 先に述べた場合においては, たとえばいろいろとたくさんある道を比べて見て, その中で真直な道をとってこれを最良といったのですが, こんどは, たくさんある婦人の中で一人の特殊な婦人を指したのではなく, 同じ婦人を諸種の状態の下において考えて見て, ungeschminkt なる状態の下において最も美しいというのですから, 考え方の筋道が少しちがいます。問題は結局考え方にあるので, 婦人問題の方でも, ungeschminkte Frauen..... と切り出せば, もちろん sind die schönsten とした方がよいわけです。

定義化して言いますと: 一つの特殊条件の下にあるある物を, その他の諸条件の下にあるその物自身と比較する場合には必ず am —sten の形を用いるが, たくさんある同じ物を比べてその一つを抜き出す場合にはなるべく der —ste, die —ste などの形を用いる, となります。

その他、性・数にかかわらず、中性形 *das* *—ste* を用いる場合も起こってきます。たとえば、『初恋が最良の恋』(*Die erste Liebe ist die beste.*) なんてことは、よく言っておきますが、決してあなた方の奥さんや旦那様の前で言うてはいけませんよ。私は何番目の恋だろうということになりますから。旦那様や奥様の前で言う時には：

Die erste Liebe ist das beste.

でないといけません。かくして始めて、初恋を第二の恋や第三の恋と比べるのではなくて、たとえば金儲けや登山や成功や飲食と比較して初恋が一番よいというふうにきこえるのです。「初恋ほどよいものはない」です。中性の *das* はつまりこの「もの」を表現しているわけです。

話が少し詳しくなりすぎましたが、要するに *Die erste Liebe ist best.* とは言わないという点、この点が一番肝心です。(Dieser Punkt ist der wichtigste. または am wichtigsten.)

116. 副詞の最高級

比較級の場合は、副詞も形容詞も同じで、単に *-er* の語尾がつくだけですが、最高級になると、副詞は必ず *am* *—sten* の形を用います：

Verbotene Frucht schmeckt am schönsten.

禁断の実が一番うまい。

schön *schmecken* は「よい味がする」ですが、この *schmecken* は「味わう」ではなくて、「味する」とでもいったような語で(英語の *taste* [自動])、従って *schön* (うまく)は副詞です。

副詞には別に *auf* *das* *—ste* または *aufs* *—ste* という最高級形がありますが、この方は「すこぶる……に」、「きわめて……に」の意で、別に他と比較する際の最高級ではありません。

Rauchen ist aufs strengste verboten.

喫煙厳禁

備考： ついでに副詞に関する一般的注意ですが、ドイツ語では英語のように形容詞に *-ly* を付して副詞をつくるということはなく、大抵の場合形容詞のままがただちに副詞です。たとえば英語では、*practical* (実際のな) は、「实际的に」「实际的には」と言いたい時には *practically* としないといけませんが、ドイツ語では *praktisch* (実際のな) はこのままを副詞として「实际的に」、「实际的には」の意に用います。その代り、英語とは違って、副詞と形容詞との区別が形の上ではわかりません。*Das ist praktisch unmöglich.* (それは实际的には不可能だ。) *Das ist unmöglich praktisch.* (それはとうてい实际的とは言えない。)

—例 題 44—

- [1] Ich bin am Gehaltstag am reichsten. [2] Der
アム ゲハルツ・ターク アム ライヒステン
 erste Eindruck ist der wichtigste. [3] Zwischen
エールステ アインドルック ヴィヒティヒステ ツヴィッシェン
 zwei Punkten ist die gerade Linie die kürzeste.
ツヴァイ プンクテン グラーデ リーニエ キュルツェステ
 [4] Von allen Talenten zeigt sich das musikalische
タレンテン ツァイクト ムジカーリッシェ
 am frühesten. [5] Von allen Gasen ist das Helium-
フリューエステン ガーゼン ヘーリウム・
 gas das leichteste. [6] Beim Erdbeben ist in der
ガース ライヒテステ エールト・ペーベン
 Regel der erste Stoß am heftigsten. [7] Mitten im
レーゲル シュトース ヘフティヒステン ミッテン
 kalten Winter, im Januar, steht uns die Sonne am
カルテン ヴィンテル ヤヌアール ゾンネ
 nächsten. [8] Die Welt ist groß und weit, aber am
ネーヒステン ヴェルト グロース ヴァイト
 weitesten ist der Weg zu sich selbst; mancher
ヴァイテステン ヴェーク マンヒェル
 kommt überhaupt nie an.
ユムト ユーベルハオプト ニー アン

訳註: [1] ぼくは俸給日において最も裕福である。Gehalt, *n.*: salary. Gehaltstag: pay-day. an: on. reich: rich. [2] 第一印象が最も重要だ。erst: first. Eindruck, *m.*: impression. wichtig: important. [3] 二点間においては直線が最短である。Punkt, *m.*: point. gerade: direct. Linie, *f.*: line. [4] あらゆる才能中音楽の才が最も早期に顕れる。von: of. Talent, *n. pl.*—e: talent, endowment. musikalisch: musical. (das musikalische は次に Talent を省く) früh: early. [5] すべてのガス中ヘリウムガスが最も軽い。Gas, *n. pl.*—e: gas. Heliumgas, *n.*: helium gas. leicht: light. [6] 地震の際、通常第一衝撃が最も激しい。in der Regel: as a rule, generally. Stoß, *m.*: shock, concussion. heftig: violent. [7] 寒い冬の真最中の一月において太陽はわれわれに最も近いのである。mitten in: amidst. mitten im Winter: in the depth of winter. Januar, *m.*: January. [8] 世界は大きくて広い。けれども最も遠いのはわれわれ自身への道である。多くの人はずもも到着しない。Welt, *f.*: world. weit: wide. (この語は「広い」と「遠い」(fern, far) との両意を持っているから、それを利用してかく言うのである。) mancher: many a man. (mancher は英の many a と同じく、単数で「夥多(多)の」, 「幾多の」の意になる。) ankommen: arrive. überhaupt: at all. (そもそも) nie: never.

第23講 形容詞の名詞化

117. 形容詞の名詞化とは？

「学者」のことを *der Gelehrte* といいます。これは *gelehrt* (博学なる、物識りの) という形容詞から作った名詞です。(これは *lehren*, 「教える」の過去分詞だから、「教えられた人」のように考えそうですが、そうではなく、英語の *learned* [*tached* とはいわない] と同じように、*doctor* などの *doct-* というラテン語の直訳なのです。)

そうすると、英語を知っている人は、そうか、では *the learned* と同じだろう、と思うかも知れませんが、それは少し違います。英語の *the learned* (物識り連), *the ignorant* (文盲連), *the rich, the well-to-do* (裕福なる人々), *the needy* (貧困者), さては *the unemployed* (失業者たち), などは、なるほど形容詞の名詞化ではあるが、だいいち複数だけしか用いない、*a learned* なんてことはいわない。ドイツ語の *der Gelehrte* は、単数であり、また *ein Gelehrter* ともいい、また複数形 *die Gelehrten* を用いれば英語の *the learned* にもなるのです。*die Gelehrte* といえば、「女学者」の意にもなります。格変化は、(男性の場合):

1. *der Gelehrte-e* (*ein Gelehrter*)
2. *des Gelehrten* (*eines Gelehrten*)
3. *dem Gelehrten* (*einem Gelehrten*)
4. *den Gelehrten* (*einen Gelehrten*)

つまり、*der gelehrte Mann*, あるいは *ein gelehrter Mann* と考えて、*gelehrt-* の後の語尾を決定すればよろしいのです。(*der Gelehrte* という定冠詞つきの方の語尾変化を見ると、ちょっと男性弱変化名詞 [50] のような気がしますが、そうではありません。男性弱変化名詞ならば、*ein* がついて *Gelehrter* になるわけではないはずです。)

die Gelehrte (女学者) も、*die gelehrte Frau* と考えて格語尾を決定します。

こうした、形容詞の名詞化は、必ず大文字を用い、それ自身が名詞と化してしまったことを形の上でも明示することになっています。*der Gelehrte* は、英語の *the learned* とは違うと申しましたが、類例を求めるならば英語の *a captive* 「捕虜」(*ein Gefangener, eine Gefangene*), *an official* 「役人」(*ein Beamter, eine Beamte*), *the individuals* 「個人」(*die Einzelnen*), それから近頃政界で騒いでいる *Liberals* 「自由党员」や *Progressives* 「進歩党员」など、複数で *-s* をつける奴がこれに相当するで

しょう。the Germans もそうです。例は無限ですが：

der Deutsche	ドイツ人	die Schöne	美人
der Alte	老人	die Geliebte	恋人
der Fremde	外人	die Rechte	右手

die Rechte を右「手」とは変なようですが、これは die rechte Hand (the right hand) の省略から来たため女性なのです。

118. 名詞を略する場合とは違う

説明の便宜上、後へ来るはずの名詞を省略する、といったようなことをたびたび言いましたが、それは単にそういう説明法をとったまでで、「名詞が省かれる」という場合はまた別にあって、これは本講で述べている「形容詞の名詞化」とは全然違うのです。たとえば：

Mir scheint die letztere Erklärung die richtige zu sein.
 (to me) (seems) (the) (latter) (explanation) (the) (right) (to) (be)
 私には後の説明の方が正しいように思われる。

「後の説明の方が正しい説明のように思われる」というべきところを、同語が前に既にあるから省いたのです。こういう時には英語では one というのを使って：

To me the latter explanation seems [to be] the right one.

というでしょう。the right one は「正しいの」、「正しい奴」で、one というのは「の」や「奴」です。ドイツ語は one に相当する語を入れないが、その代り形容詞を小文字で書いて、既出名詞の省略たることを示します。こうした小文字の die richtige などは、決して名詞化ではありません。いぜんとしてやはり形容詞なのです。——たとえばここに二人の女がいるとして、左にいる女は私に対して知らん顔をしていたが、右の方のは私に右手をさしのべて握手を求めたとしましょう。これをドイツ語でいうと(英語でいうと one がはいるからちょっとまずいが.....) 両者は文字の大小だけの差になります：

Die rechte reichte mir die Rechte. 右手のが私に右手を差し出した。

例 題 45

[1] Offene Tür verführt auch einen Heiligen.
 オッフエネ テュール フェルフュールト ハイリゲン

[2] Ein Narr fragt viel, worauf ein Weiser nicht
 ナル フラークト フィール ヴォーラオフ ヴァイゼル

antworten kann. [3] Auch der Weise begeht einmal
 アントヴォルテン ヴァイゼ ベゲー ト アインマール
 eine Torheit. [4] In jedem Dreieck ist die Summe
 トールハイト イェーデム ドライ・エック ズムメ
 der inneren Winkel gleich zwei Rechten. [5] Von
 インネレン ヴィンケル グライヒ レヒテン
 einem Punkt kann man auf eine Gerade nur eine
 プンクト ゲラーデ
 Senkrechte fällen. [6] Das Känguruh-Weibchen
 センク・レヒテ フェルレン ケングールー・ヴァイプヒェン
 trägt sein Junges in seinem Beutel. [7] Es ist besser,
 トレークト ユンゲス ボイテル
 zwanzig Schuldige freizulassen, als einen Unschul-
 ツヴァンツィヒ シュルディゲ フライ・ツー・ラッセン アインェン ウン・シュル
 digen hinzuopfern. [8] Über dem Einzelnen steht
 ディゲン ヒン・ツー・オッフエルン アインツェルネン シュテート
 der Staat, über dem Staate aber steht der Mensch!
 シュタート デール

訳註: [1] 開いた扉は聖者をも誘惑する。offen: *open*. Tür, *f.*: *door*. verführen: *seduce*. der Heilige [形]: *saint*. (『機会が泥棒を作る』, *Gelegenheit macht Diebe*, *Opportunity makes the thief*. と同趣の俚諺) [2] 馬鹿は智者が答えきれないような多くの事を問う。(愚者の愚問はどうもさうものではない。) Narr, *m.*-*en*: *fool*. fragen: *ask, inquire*. viel: *much*. worauf: (関係代名詞: 「それに対して」: *whereupon*) der Weise: *sage, philosopher*. antworten: *answer, reply*. [3] 賢者もたまには愚行を演ずる事あり。begehen: *commit* (犯す, やらかす, 演ずる). einmal: *once, one day*. Torheit, *f.*: *folly*. [4] いかなる三角形においても内角の総和は二直角に等しい。Dreieck, *n.*: *triangle, trigon*. Summe, *f.*: *sum*. inner: *interior*. Winkel, *m. pl.*: *angle*. gleich: *equal*. der Rechte [形] (Winkel が男性, der rechte Winkel の略): *right angle, rectangle*. [5] 一点から一つの直線に向かってはただ一本の垂直線のみしか引くことが出来ない。die Gerade [形] (die gerade Linie ヨリ): *straight line*. die Senkrechte [形] (die senkrechte Linie ヨリ): *perpendicular [line]*. fällen (落とす): *let fall, draw*. (引く). eine と字間を開いたのは, *a, an* の *eine* と区別して, *one* の意に用いたためである。[6] カンガルーの雌はその仔を自分の袋の中に入れて持ち歩く。Känguruh, *n.*: *kangaroo*. Weibchen, *n.*: *female*. (Känguruh-Weibchen: *she-kangaroo*) tragen: *carry*. das Junge [形]: *young, young one*. Beutel, *m.*: *bag, pouch, pocket*. [7] 一人の罪なき者を犠牲にするよりはむしろ二十人の罪ある者を放免するに如かず。zwanzig: *twenty*. der Schuldige [形]: *guilty person*. freilassen: *release, set at liberty*. der Unschuldige [形]: *innocent person*. hinopfern: *sacrifice, immolate*. (フレデリック大王, Friedrich der Große, の言として有名な金言。法の処断は, 不明の場合には, 緩に過ぐるとも酷に過ぐるとも勿れ, 同じ過つならば, 無実なる者をまき添えにするよりはむしろ有罪者を見逃したという結果になる方がよい, の意。) [8] 個人の上には国家がある, けれども国家の上には「人間」というものが在るのだ! (個人としては国家に従わなければならないが, しかし国家が決して最高の存在ではない。国家の

上には、たとえ神というものは無くても、「人間」という権威があつてこれを監督している。だからわれわれは、個人たる資格においては国家に従わなくてはならぬが、人間たる資格においては国家の上に立っているのである、の意。) *der Einzelne* [形]: *individual*. *über: above*. *Staat, m.: state*. *der Mensch: Man*. (英語は「そも人間なるもの」を、無冠詞形の、時には大書した *Man* で表わすが、ドイツ語は定冠詞をつけた単数の *der Mensch* で表わす。その上更に *der* を強めて *der* とすると(アクセントを置く)「そも人間なるもの」という抽象的な観念がなおはっきりするのである。

119. Das Wahre などについて

性・数・格というものを冠詞や語尾ではっきりと表わすことの出来ない英語に比べて、ドイツ語はすべての点で概念が明確であるということは、既に今までの課程だけでも十分にお解りになったことと思いますが、ここにもまた好個の例証があります。英語では *the rich* とか *the poor* とかいうと、「富める人たち」、「貧しき人々」といったように、同じ部類に属する多くの人々を一括した意味(独: *die Reich-en, die Arm-en*)になりますが、その同じ形式が、形容詞によると、たとえば *the true* 「真、真理」、*the good* 「善、善事」、*the beautiful* 「美」といったように、一種の抽象概念になることがあります。*The civilization is fast blotting the picturesque, the poetic, and the beautiful out of human life.* といえは、「文明はとうとうとして人類の生活からあらゆる画趣、あらゆる詩趣、あらゆる美を一掃しつつある」であつて、決して美しい人間たちを一掃しつつあるのではないのです。

この点はドイツ語は非常にはっきりしていて、*the true, the good, the beautiful* は中性の *das Wahre, das Gute, das Schöne* で表現します。すなわち *das -e* の公式で名詞化した形容詞は、『……なる事がら』、『……なる方面』、『……なる点』という抽象名詞になるのです。訳語はそのときどきでいろいろになるでしょう。

das Beste 最善, ベスト

das Rechte 正鵠(きう)

das Bestehende 現状

das Wesentliche 主眼目

das Vergangene 過去

das Kommende 将来

das Gegebene 既知事項

das Historische 史実

用法はなかなか微妙で、例題でご研究をねがうほうが早道かと思ひます。

例 題 46

[1] *Nach Sokrates besteht die Tugend in der*
 ナーハ ゾークラテス ベシュエート トゥーゲント

Erkenntnis des Guten.
 エルケントニス ゲーテン

[2] *Die Radikalen wollen*
 ラディカーレン

mit dem Bestehenden tabula rasa machen. [3] Im
ベシュテーエンデン ターブラー ラーザー マッヘン

Dienst muß das Persönliche zurücktreten. [4] Erst
ディーンスト ペルゼーンリッヒェ ツーリュック・トレーテン エールスト

in der äußersten Not holt man das Letzte aus sich
オイセルステン ノート ホールト レッツテ

heraus. [5] Kein Lehrer kann uns geben, was nicht
ヘラオス レーレル

latent in uns vorhanden war. Er kann nur das
ラテント フォールハンデン

Schlummernde wecken, das Verschlussene befreien,
シュルンメルンデ ヴェッケン フェルシュロッセネ ベフライエン

das Verborgene hervorziehen.
フェルボルゲネ ヘルフォール・ツィーエン

訳註: [1] ソクラテスによれば、徳とはすなわち善の認識である。nach: *according to*. in etwas bestehen: *consist in something* (.....に存す,するにあり). Erkenntnis, f.: *acknowledgment*. Tugend, f.: *virtue*. [2] 過激分子は現状を打破せんとする。die Radikalen [形]: *the radicals*. tabula rasa (reine Tafel): *tabula rasa* (これはラテン語で, *tabula* はテーブル Tafel, *table* の原語, 「板」の意, *rasa* は「削られた」の意, 古代人は板に蠟を塗って鉄筆でガリガリ字を書いたものであるが, それを消すには表面を削った, そこで *tabula rasa* は「もとの白紙状態」の意になり, 現状を打破してご破算にすることを *tabula rasa machen* という。) mit ~ *tabula rasa machen*: *make tabula rasa with ~, do away with ~*. (~を一掃する, 清算する [*liquidieren, liquidate*]). [3] 公務においては情実を無視すべきである。Dienst, m.: *service*. das Persönliche (個人的な方面): *personal matters, private affairs* (私事). zurücktreten: *retire, withdraw* (引きさがる, 引き込む). [4] せっぱつまるに及んで初めて人は最後の底力をはたき出す。äußerst: *extreme, utmost, uttermost*. Not, f.: *necessity*. das Letzte (letzt: *last*): *the utmost of one's power*. herausholen: *fetch out*. aus sich: *out of himself*. erst in: ...において初めて。[5] いかなる教師といえどもわれわれ自身の裡に潜在的に存在していなかったものをわれわれに授けることはできない。彼はただ睡れるを醒まし, 閉されたるを放ち, 隠れたるを引き出すことができるのみである。Lehrer, m.: *teacher, instructor*. latent: *latently*. vorhanden sein: *be there, exist*. schlummern: *slumber*. wecken: *waken, call up*. verschließen, verschloß, verschlossen: *lock, close, shut up*. befreien: *free, deliver*. verbergen, verbarg, verborgen: *hide, conceal*. hervorziehen: *draw forth, pull forth*.

120. etwas Besonderes などについて

『何か特別に変わったこと』(etwas Besonderes, *something peculiar* または *anything peculiar*) でもあるのかと思って出席して見たら, 別に『何も変わったこと』(nichts Besonderes, *nothing peculiar*) は無かった, なんてことを言いますが, この Besonder-es というのは, 大文字で書いてはあるものの, 実は *besonder* (*particular, peculiar*,

special) という形容詞に中性語尾 *-es* をつけて名詞化したもので、その格変化はここに掲げた表のようになりますが、二格は殆んど用いないといってもよいくらいです。形容詞はたとえどんなものを持って来てもよく、*etwas Neues* (何か新しいこと), *etwas Interessantes* (何か面白いこと), *etwas Warmes* (何か暖かいもの), *etwas Gutes* (何かよいもの)——また *etwas* の代りにその略形の *was* を用いたり、またその否定に相当する *nichts*, 「多くの」という *viel*, その否定に相当する *wenig*, 「いろいろな」という *mancherlei*, *allerlei* などを置いても同じことです。

1. etwas Besonder-es
2. etwas Besonder-[e]n (稀)
3. etwas Besonder-em
4. etwas Besonder-es

1. etwas Besonder-es
2. etwas Besonder-[e]n (稀)
3. etwas Besonder-em
4. etwas Besonder-es

ただ *ander (other)* などの指示詞的な語だけは小文字で書いて *etwas anderes* (何か別なもの, 他のも), *nichts anderes, nothing else* (何も別なもの [ではない, など]) の形を用います。

例 題 47.

[1] Der Detektiv hat meistens seine „Theorie,“
デテクティブ ミステンス テオリー

bevor er etwas Positives erfährt. [2] Es ist nichts
ベフォール エトヴァス ポジティブェス エルフェールト

Neues unter der Sonne. [3] Wer etwas Großes will,
 ノイエス グローセス

fängt mit etwas Kleinem an. [4] „Unter der Sonne“
フエングト クライネム アン

bedeutet nichts anderes als „in der Welt.“ [5]
ベドイテット アンデレス ヴェルト

Heute steht in der Zeitung allerlei Wichtiges. [6]
 ホイテ ツァイトゥング アルレルライ ヴィヒティゲス

Für einen Philosophen geschieht in der Welt wenig
 フュール フィロゾフエン ゲシート ヴェーニヒ

Wichtiges, aber viel Komisches.
 フィール ヨーミツシエス

訳註： [1] 探偵は、何か具体的な事実を聞き込む前に、大抵自分だけの「構説」を持つものである。 Detektiv, m.: detective. meistens: generally, almost always. Theorie, f.: theory, hypothesis. bevor: before. etwas Positives: something positive. (単なる希望や推測の範囲を越えて、何か事実的根拠のある具体的な事柄のことを、英独のみならずヨーロッパの何語でも positiv という, Positivismus (実証主義) というのはこの意である。) erfahren: learn, know, come to know. [2] 天目の下、新事なし。(聖書中の句、今ある事は昔もあったことだ、昔あった事は今もある、具眼者から見れば、

世の中にはさほどおどろくべきことは何もない, の意) *Es ist: there is. neu: new.*
unter der Sonne: under the sun (とはすなわち *in der Welt, in the world* の意).
[3] 大事を欲する者は小事よりして始む。 *anfangen: begin.* [4] 「天日の下」というのは単に「世の中には」という意味にすぎない。(逐語的には: 「世の中に」よりも他の何事をも意味しない。) *nichts anderes als: nothing else than, nothing else but. bedeuten: mean.* [5] 今日は新聞にいろいろと重要なことが載っている。 *Zeitung, f.: newspaper. stehen* (新聞, 本などに「書いてある」ことを *stehen* という). *allerlei: of all sorts, of all kind.* [6] 哲人にとっては, 世の中には大して重要なことは起こらない, しかし多くの滑稽なことは起こる。 *für: for. Philosoph, m.—en: philosopher. geschehen: happen, occur, come to pass. wenig: few, little. komisch: comic.*

第24講 非人称動詞

121. Es regnet (*it rains*) など

『雨が降る』ということを、英独とも軌を一にして『それが・雨降る』(*Es regnet. it rains.*) といいます。妙な言い方をしますが、これは西洋人の各言語(すなわちいわゆるアーリアン系、あるいは印欧系の各語: サンスクリット語, ギリシア語, ラテン語, ロシア語, 英, 独, 仏, 伊その他)には昔から『雨降る』という一語があって、動詞そのものが既に『雨』という観念を含んでいるから、その上おまけに『雨が』という主語を持ってきた日には、『雨が雨降る』といったような変なことになるからでもありましょう。だから、本当をいうと、この動詞(*regnen, to rain*)は、主語はいらないはずなので、単に *regnet* とか *rains* とか言ったってよさそうなものなのですが、主語が無いということは、少なくとも英独仏語の習慣としては許されないのです。そこでまあ、単に形式を整えるためと申しましょうか、場所ふさぎと申しましょうか、単なる名義上の主語として *es, it* という単数三人称中性の代名詞を持ってきてすえるわけです。*es* 以外の代名詞だと、*er, sie, wir, ich, ihr* いずれにしても「人間」のような気持ちがしてまずいから、人間を意味しない *es* が一番適当なわけでしょう。だからこの種の *es* を非人称主語といいます。*regnen, to rain* は、つまり非人称動詞なのです。

備考: こういうふうに、とにかく形だけでも主語というものが無いと気がすまないのは、主要な西洋語では英独仏語だけです(仏語: *il pleut=es regnet*)。その他は、ラテン語(*pluit*)にせよ、イタリア語(*piove*)にせよ、大抵動詞だけで『雨降る』と言って簡潔に表現します。その他雪にせよ、雹(ひょう)にせよ、天候、気象関係の動詞はみなその通りです。

Es schneit.	(<i>it snows</i>)	雪が降る。
Es donnert.	(<i>it thunders</i>)	雷が鳴る。
Es blitzt.	(<i>it lightens</i>)	稲光がする。
Es tagt.	(<i>it dawns</i>)	夜が明ける。
Es friert.	(<i>it freezes</i>)	凍る, 氷が張る。
Es ist kalt.	(<i>it is cold</i>)	寒い。
Es klärt sich auf.	(<i>it clears up</i>)	晴れる。

122. Es hungert mich (*I am hungry*) など

非人称動詞の範囲は英語よりもずっと広く、たとえば『私は空腹だ』ということ Ich habe Hunger (私は空腹を持つ), Ich bin hungrig (私はひもじい), Ich hungere (私は飢える) などという以外に Es hungert mich (それが・私を・飢餓する) という変な言い方をします。体内の感じや、気持や、その他いろいろな主観的な現象にこうした非人称的な言い方が多く、元来主語たるべきはずの当人自身は、大抵四格または三格になるところにご注意ください。

Es durstet mich (=ich habe Durst).	私はのどが渴く。
Es juckt mich.	私はかゆい。
Es friert mich.	私は寒い。
Es schläfert mich.	私はねむい。
Es lächert mich.	私はおかしい。
Es schaudert mich (または mir).	私はぞっとする。
Es träumt mir.	私は夢を見る。
Es schwindelt mir.	私はめまいがする。
Es ekelt mir.	私は嘔吐をもよおす。
Es grippelt mir.	私は感冒気味だ。

これらの句は、mich や mir を先頭におくと、定形倒置になって Mich hungert es. となるべきところなのですが、大抵 es を省いて、単に Mich hungert. (私はひもじい), Ihn schläfernte (かれはねむかった), Ihm träumte. (かれは夢を見た) と言います。

123. Es gibt について

以上の外、熟語や成句の類で Es を主語にして用いるものがたくさんありますが、その中でも特に重要なのは Es gibt..... (『それが.....を与える』、すなわち『.....が存在する』、『.....がある』) という成句です：

Es gibt im ganzen 92 Elemente. 全部で九十二の元素がある。
There are 92 elements in all.

すなわち、『92の元素がある』を『それが92の元素を与えている』というわけで、つまり92の元素が与えられているということになるのです。この場合の es は、理屈を言えば、神あるいは自然を指すとも言えましようが、それは解釈上の方便で、それよりは「es gibt」を一つの形式として、あっさり受け入れた方がよいでしょう。

英語は *there is, there are* ですが、ドイツ語も *es ist, es sind* で表現することもあります。この場合は複数ですから *Es sind im ganzen 92 Elemente.* です。(この方は *Elemente* が一格。)

例 題 48

[1] *Es gibt Pflanzen, die nur im Schatten gedeihen.*

ギープト フランツェン

シャッテン

ゲダイエン

[2] *Zwischen uns gibt es keine Geheimnisse.* [3]

ツヴィッシェン

ゲハイムニッセ

Wenn die Nase juckt, gibt es noch Besuch. [4] *Der*

ナーゼ ユックト

ノホ

ベズーフ

Atheismus behauptet: Es gibt keinen Gott. [5] *Du*

アティスムス

ベハオブテット

ゴット

blutest: was hat's gegeben?

ブルーテスト

ハッツ

ゲゲーベン

訳註: [1] 蔭でしか育たない植物がある。Pflanze, *f.*: *plant*. Schatten, *m.*: *shade*. gedeihen: *grow*. [2] 我々の間に秘密はない。Geheimnis, *n. pl.*—*se: secret*. [3] 鼻がかゆいとお客がある。(これは西洋の迷信, いったい西洋人は鼻が高いせい, しょっちゅう鼻がかゆいと見えて, 何かという鼻をこする癖がある。) Nase, *f.*: *nose*. jucken: *itch*. noch (ドイツ語特有の軽い助辞で, 「今に」, 「いずれ」, 「そろそろ」, 「いよいよ」, 「どうやら」 くらいの意。) Besuch, *m.*: *visit*. [4] 無神論は「神は存在せず」と主張する。Atheismus, *m.*: (発音は「アティスムス」に非ず! -the- が「神」を意味するゆえ A-the-ismus と切る): *atheism*. behaupten: *pretend, allege*. [5] 君は血を出しているが, 何かあったのかい? bluten: *bleed*. hat's=hat es.

124. 非人称主語 *es* について

ただ今までに紹介したのは、非人称動詞の最もわかりやすい二三のタイプにすぎません。非人称動詞という奴は、ドイツ語においては、他のいかなる語においても比類を見ないほど発展していて、およそドイツ人ほどこの奇妙な *es* という主語を愛玩し、珍重し、神秘化し、かつまた同時に濫用する人種はありません。彼らはこの何の意味もない「それ」という主語の薄気味悪い空虚の中に、何かこう得体の知れない玄妙不可思議な未知数的存在が隠然としてうずくまり、この未知数的存在が、あるいは *regnen* したり、あるいは *hungern* したり、あるいは *träumen* したり、あるいは九十と二の *Elemente* を *geben* したりすると考えるのです。

昔の支那人はこれを天、あるいは道と呼びました。科学者はこれを自然と呼びます。カント (Kant) はこれを「物自体」(*Ding an sich*) と呼びます。Hegel はこれを *Weltgeist* (世霊) と呼びます。宗教家はこれを神と呼びます。ドイツ語はこれを *es*

と呼ぶのです。(数学者はこれを x と呼ぶそうですが、この x は、アインシュタインの宇宙以外の宇宙 No. 2 の方程式でも持って来ないと解けない x です。)

たとえばドイツ語には *menschen* (『人間めく』とでも訳しますか) という意味深長な動詞があります(他の国語には、私の知る限り、類例が無いようです)。Es menschelt bei ihm. (英語では *It MANs with him* とでもいいますか) というと、『かれにおいてそれが人間めく』、『かれの心の一角に人間めき出した何物かがある』、『かれの心底に、ふと人間らしい気持が胎動する』ということです。(つまり人間としてやむを得ぬある種のくだらぬ本性を出すことです。)

われわれの裡なる現象ばかりではありません。人生社会に起こる客観的現象をもまたドイツ語は *es* の振舞い、*es* の「たたずまい」、*es* の動きとみます。*kriseln* (危機する) という、*Krise* (*crisis*) 「危機」からつくった動詞がありますが、たとえば敗戦後の日本では、財政ではインフレ、食生活では主食難、交通では交通地獄、産業では石炭不足、労務ではストライキ、政治では内閣更迭、世態では徳義心の頹廢と、『それがあらゆる方面において危機して』います: *Es kriselt auf allen Gebieten*. 危機しているところの『それ』とはそもそも何者でしょうか?

あるいはわれわれ自身の杏(き)たる内奥から時々頭をもたげ、あるいはわれわれの眼前に豁然(きょげん)とひらけたこの人生・社会・現世・大自然・客観界の混沌たる真只中においてわれわれを芋の如くに揉み、洗い、擦りむき、ゆさぶるところの、われわれ自身の認めると認めざるとにかかわらず儼乎(げんぷ)として独自の巨歩を進めてやまざるところの、古来幾多の哲人が天と呼び、道と呼び、神と呼び、無と呼び、絶対者と呼び、物自体と呼び、その他たとえ何と呼んでも、呼びきれず、呼びあてず、常に呼び損ね、常に呼びはぐれ、常に呼び惑うて今日に至ったところのその者は一体全体そもそも何者なのでしょう? 何『が』われわれの裡において *menschen* し、何『が』われわれの四囲において *kriseln* するのでしょうか? それは全然わかりません。ただそれがドイツ語の *es* であることだけは絶対に確かです。カントもヘーゲルも *es* 以上の答はしていません。

未知なものは未知なままで立派に扱えることは、数学者が既に彼らの x を以て立派にやっていますが、その同じ事をドイツ人は彼らの *es* を以てやっているわけで、*es* 一つで人生社会の複雑怪奇を面白く、手際よく、しかも意義深くさばきこなしている様には実におどろくべきものがあります。この *es* 一語だけのためにドイツ語を研究しても十分意味をなします。

実例は次の例題で味わっていただくこととして、最後に、この非人称主語 *es* の定義といったようなものを試みておきましょう:

自然界・社会・体内・脳裡に生起しあるいは支配する諸種の現象(音響・気象・体感・運命・異変・心理の異状など)を、『いかにも現象らしく』言い表わす手段とし

て、明確なる主語を避け、なんら積極的内容を有しない *es* なる代名詞を以て主語の位置を充填(じゅうけん)する語法がドイツ語では他のいかなる国語よりも以上に著しい発達を遂げている。かくのごとき用い方の *es* を非人称主語 *es* という。

『現象を現象らしく表現する』——これを標語にして覚えておいてください。

例 題 49

- [1] *Es frühlingt in meiner Brust.* [2] *Es gärt in*
フリューリングト ブルスト ゲールト
den jungen Köpfen. [3] *In diesem alten Schlosse*
ユンゲン ケッフェン アルテン シュロッセ
spukt es jede Nacht. [4] *Es läutet am Telefon.*
シュプークト イェーデ ナハト ロイテット テレフォーン
[5] *Ein echter Dichter dichtet nicht, sondern es*
エヒテル デイヒテル デイヒテット ゾンデルン
dichtet nur in ihm. [6] „*Warum heulst du so?*“—
デイヒテット ヴァルム ホイルスト ソー
„*Ich heule ja nicht; es heult aus mir!*“ [7] „*Wie*
ホイレ ヤ ホイルト アオス ミール ヴィー
geht es Ihnen?“—„*Mir geht es ausgezeichnet.*“ [8]
ゲート イーネン アオス・ゲツァイヒネット
Es hat geklappt. [9] *Am 15. August, da krachte es.*
ゲクラップト アム アオグスト クラハテ
[10] *Wo zuviel Geld ist, da krankt es im Menschen.*
ヴォー ツーフィール ゲルト ダー クランクト

訳註: [1] わが胸は春めく。(私の胸の裡には、そこに何かしきりに春めくものがある。) *Frühling, m.: spring. Brust, f.: breast.* [2] 若い頭の中は鼎(てい)のわくがごとくだ。 *gären: ferment, effervesce.* (湧き立つ, 沸騰する)。 *Kopf, m. pl. "e: head.* [3] このお城は毎夜幽霊が出る。(This old castle is haunted.) *Schloß, n.: castle. spuken* (『もののけする』, 『化物が出る』) [4] 電話が鳴っている。 *läuten: to ring. 'l'elefon (Telephon ト同ジ): telephone.* [5] 本当の詩人は詩作しない、ただかれの中に詩作する何者かが宿っているだけの話である。 *echt: genuine.* (生粋の, 本物の) *Dichter, m.: poet. dichten* (詩作する, 創作する): *to make poetry (or verses).* [6] 『おまえはどうしてそんなに泣くの?』——『わたしは泣いてやしませんわ、ただこう自然と泣けてくるだけなのよ。』——*warum: why. heulen: cry, howl, wail, yell.* (weinen, weep, 「泣く」に対して, 声を出して泣くことをいう。) *Ich heule ja nicht.* の *ja* は一種の助詞で, 「...だよ」, 「...だわ」, 「...なんですもの」, 「...だぜ」などにあたる。 *Es heult aus mir* (何物かが私の中から泣き出す)。 [7] 『ごきげんいかがですか?』——『おかげさまで非常に達者です。』 *Wie geht es Ihnen?: How are you? How do you do? Mir geht es ausgezeichnet: I am alright.* (*ausgezeichnet: excellently*) [8] 上首尾だった。 *klappen* は、なんでも「ピタリと合う」, 「呼吸が合う」ことをいい, *es klappt* は、いわゆる「トントン拍子で行く」, 「滑らかに取り運ぶ」ことをいう。 [9] 八月十五日に、とう

とうペションと来た。am 15. (am fünfzehnten と読む): on the 15 August: August.
da: there. krachen: crack. (ガラッと崩れる, 土崩瓦解する) [10] 人間は金がありすぎると調子が狂って来る。(直訳: あまり多くの金がある所においては, そこでは人間の中に病的現象が起きる。) Wo: wherever. zuviel: too much. kranken: to sicken.

125. 文の非人称化

『現象らしく表現する』ための es は、元来は主語の空位を塞ぐための、取ってつけたような間に合わせ物であったのですが、それがあつた種の面白い機能（すなわち、いかにも現象らしい感じを与えるという機能）を持つようになると、ついには立派な主語がある際にも『わざわざ』これを用いることになります。たとえば『嵐がやって来た』は Ein Sturm kam. でもよいのですが、嵐の襲来という奴は、いかにも「現象」という言葉に相応しい現象ですから、大抵の場合：

Es kam ein Sturm. (*There came a storm.*)

といいます。この場合、この文章は二個の主語を持っているわけです。一つの文章の中に主語が二つもあるということは、ちょっと奇異な現象なので、文法学者もつとにこの現象に注目し、es の方を「文法上の主語」(Grammatisches Subjekt), ein Sturm の方を「論理的主語」(Logisches Subjekt) と呼んで、ここでは文法と論理との間に多少の行き違いがあることを認めています。

論理的主語（意味上の主語）が複数であると、動詞は複数になります。

Es blinken die Sterne. (*There twinkle the stars.*)

星はまたたく。

備考：この場合の es は、英語では there を用います。There goes a story that... (世間に...という話が伝わっている), とか There appeared, in a dream, a goddess. (夢に一人の女神が現われた) とかいう there がそれです。ただドイツ語の es は、文章の一番初めでないと用いられないが、英語は And now at once there ensued a panic and confusion throughout the whole army. (突如として全軍を通じて恐慌と混乱がまき起こった) といったように there を文の途中に入れ得るという便利があります。

例 題 50

- [1] Es wartet draußen ein Mann auf Sie. [2] Es
ヴァルテット ドラオセン
läuft ein Gemurmél durch das Publikum. [3] Es
ロイフト ゲムルメル プーブリクム
geht von ihm eine seltsame Sage. [4] Es taucht
ゼルトザーメ ザーゲ タオホト
eine Frage auf. [5] Es werden bessere Zeiten kom-
フラーゲ ベッセレ

men. [6] Es führen viele Wege nach Rom. [7] Es
フューレン フィーレ ヴェーゲ ナーハ ローム

irrt der Mensch, solange' er strebt. (Goethe)
イルト ゴーラング エル シュトレプト

訳註: [1] 表で誰か男の方があなたを待っていますよ。warten: *wait, be waiting*. draußen: *without*. auf: *for*. [2] 会衆は一斉にさざめく。(直訳: 一つのさざめきが会衆を貫いて渡る。) laufen: *run*. Gemurmel, *n.*: *murmur(s)*. Publikum, *n.*: *audience, public*. [3] この人に関して妙な風説が行なわれている。(There goes a strange story about him.) seltsam: *strange, odd, singular*. Sage, *f.*: *talk, tale, saying*. [4] ここに一つの疑問が台頭する。auftauchen: *to arise, emerge*. [5] もっと良い時代がやって来るだろう。Zeit (*time*) の複数 Zeiten (*times*) は「時代」, 「時節」。[6] ローマに至る道は一にしてとどまらず。(直訳: 多くの道がローマに導く。目的は一つでも、方法はいろいろある, の意。ローマは中世紀においてはヨーロッパ各国の巡礼が杖をひく聖地となっていた。Weg は英の *way* と同様, 「道」の外に「方法, 手段」の意がある: There are lots of ways of doing a thing.)—führen: *lead*. [7] 人間は, 努力する限りは, 迷うものである。(絶対に脱線しなければ過失も犯さないのは, それは何一つ確なことをしていない証拠だ, の意。Goethe の Faust 中の句。) irren: *to err, to go astray, to be mistaken*. solange' (=solange): *as long as, so long as*. streben: *strive*.

第25講 命 令 法

126. 親称二人称の命令法

まず du と ihr に対する命令法の形を表示しましょう。太文字のところは不定形の語幹です。

不定形: lieb-en 愛する	
単数: lieb-e ! または lieb !	複数: lieb-et ! または lieb-t !

(1) 単数の **liebe**! **lieb**! は、**liebe** の方が本格的な形で、**lieb**! は省略形ですが、しかし、両者ともよく用います。ある種の動詞では、力強い掛け声、号令、または殆んど間投詞のようになった用法ではもっぱら省略形の方を用い（たとえば **komm**! [さあ行こう! さあさあ!] **halt**! [待った! *stop*!])、普通の命令法には **-e** のある方を用います (**Komme** morgen um sechs! 「明日六時に来たまえ」、**Halte** den Dieb fest! 「泥棒をつかまえろ!」)

(2) 複数形の **-et** は、**t** をつけにくい時にのみ用います。この **lieben** のような場合に **e** がはいっているのは、少し古めかしい形です。Liebet eure Feinde! 「汝らの敵を愛せよ」(聖書) など。

(3) **sein** (*be*) という動詞だけは **sei**! **seid**! です。Sei ehrlich! (汝正直なれ!), Seid demütig! (汝ら謙虚なれ!)

(4) 単数二人称、三人称において、不定形語幹の **e** が **i** または **ie** に変る動詞(46!), たとえば **sprechen**, **sterben**, **nehmen**, **sehen**, **lesen** などは、命令法の語幹も単数だけは **i** または **ie** となります。そして単数の命令法語尾 **-e** はつけません:

不定形: nehmen (er nimmt)	
単 数: nimm !	複 数: nehmt !

ただし、**werden** だけは **wird**! ではなくて **werde**! です。

それから **sehen** は **sieh**! 以外に **siehe**! というのが用いられます。ただしこれは擬古体、文語体で、会話などでは使いません (**Siehe** Rückseite 『裏面を見よ』など)。

題 51

- [1] Teile und herrsche! [2] Eile mit Weile!
 タイレ ヘルシエ アイレ ヴァイレ
 [3] Ruhe in Frieden! [4] Mensch, erkenne dich
 ルーエ フリーデン エルケンネ
 selbst! [5] Stirb und werde! [6] Störe meine
 シュティルブ ヴェールデ シュテール
 Zirkel nicht! [7] Schweig und lern! [8] Geh mir
 ツィルケル シュヴァイク レルン
 aus der Sonne! [9] Lies nicht vieles, sondern viel!
 リース フィーレス フィール
 [10] Liebt euren Nachbarn, reißt aber den Zaun
 オイレン ナハバルン ライスト ツァオン
 nicht ein! [11] Kauft oder lauft! [12] Seid klug
 アイン カオフト ラオフト サイト クルーク
 wie die Schlangen, und ohne Falsch wie die Tauben!
 シュランゲン ファルシュ タオベン

訳註: [1] 分けよ、而して治めよ。(ラテン語の金言 *divide et impera* の訳。政治の秘訣を言ったもので、大勢の者が一致して来ると、とかく為政者としてはこれと対立しがちであるが、分裂していると非常に治めやすい。敵も味方もこちらを頼って来て、その調停などしているうちに結構両方ともよろしく手なずけることができるからである。毛利元就の矢の話の逆の真理。) *teilen: divide, separate. herrschen: reign.* [2] ゆるゆる急げ。(急がば回れ、に似ている。) *eilen: make haste, hurry.* (英: *The more haste, the less speed., Slow and steady wins the race., Fair and softly goes far in a day.*) [3] 安らかに眠れ。(文字通りには: 平和裡に憩え。死者に対していう言葉, 「成仏せよ」, 「英霊地下に瞑せよ」などにあたる。) *ruhen: rest. in Frieden: in peace.—(Peace to thy ashes!)* [4] 人間よ、汝みずからを知れ。(ギリシア古代の神殿に書いてあったという金言で、Sokrates の引用によって有名である。全世界を隈なく見聞しても自分自身は解らない、自分自身を隈なく知れば全世界がわかる。) *erkennen: acknowledge.* [5] 死せよ、而して成れ。(Goethe の言、いわゆる「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」, 「窮すれば通ず」にやや似ている。不死鳥という鳥 ([Phönix] は、百年生きると、百年目にみずから火に入って焼け死に、その灰の中から更生してまた百年生きるというが、人間の一生にもそうした局面があつて、ある種の破局に直面した場合には、現在の自己というものを思い切ってゴッソリとかなぐり捨てて、負けるべきところを負け、倒れるべきところを倒れ、笑われるべきところを笑われ、潰すべき面目を丸つぶれに潰して、一度徹底的に、立つ瀬も浮かぶ瀬もなくなってみた方が、かえってまた全然予期もしなかった方向に向かって進むべき道を発見するものだ、との意。自己の身に荒療治するに吝かなるなかれ、破局の裡に突入して発展的解消を遂げよ、との訓である。) *werde! (成れ!)* *werden* には発育、発展の意がある、漢人のいわゆる「生々化々」がこれ。[6] わが円を乱すなかれ。(ギリシアの数学者 Archimedes, アルキメデス、の言としてしばしば引用される警句。Archimedes がある日、大地の上に円や三角や点や線を描いて幾何の問題を考えていると、敵軍が市街に突入して、かれの所へも数名の兵士が近づいて、その図形の上を踏んだ時、アルキ

メデスは不機嫌そうに顔をあげ、おいそこを踏んじやいかん、と一喝したのがこの言葉である。一説によると、『殺すなら殺せ、ただその円形だけは踏むな』と言ったともいう。生死を超越した学問への関心、溜飲の下がるような言葉ではないか。) *stören: disturb. Zirkel, m. pl. —: circle.* [7] 黙れ、而して学べ。(人間は、しゃべっている最中には非常に頭が悪いものである。努力が口と舌に集中していると頭の働きはお留守になる。だから、言葉は少なくし、観察を鋭くせよ、そうすれば必ず得るところがある、といったもの。)[8] 我がために日なたを去れ。(『陰になるからそこをどけ』の意。古代ギリシアに犬儒または乞食哲人 (Zyniker ['tsy:nikər]) と呼ばれる哲学者の一派があつて、その代表的な一人が、樽の中に住んでいたという Diogenes [di'o:ge'nes] であることは誰も知るところであるが、Alexander 大王がある日のことこの樽仙人を見ようとしてやって来た。Diogenes はちょうど日なたぼっこをして瞑想に耽っていたが、その前に立った大王が『何か希望があれば申せ』と言ったのに対して『ではちょっとそこをどいてくれ、おれはいま日なたぼっこをしているんだから』と言ったという話が有名である。) Sonne はここでは太陽ではなくて日なた。[9] 多読するな、耽読せよ。(直訳: 多くのものを読むな、うんと読め。) *vieles* と *viel* との微妙な差を利用した言で、ラテン語の *non multa sed multum* の独訳、英語ならば *Don't read many things, but much.* であろう。*vieles* は *-es* という中性語尾によって「多くのもの」、すなわち多くの種類の意になるが、*viel* は単に「非常に」、「うんと」という副詞になる。*lies* (*lesen* の命令法)。[10] 汝らの隣人を愛せよ、ただし垣根を毀つなかれ。(『汝の隣人を愛せよ』[*Liebe deinen Nachbarn* または *Nächsten*] という聖書の句をもじった警句で、親睦は結構だが限度というものはおのずからある、の意。) *Nachbar, m.: neighbor.* (*Nachbar* は強変化以外に弱変化のこともある、ここで四格に *-n* のあるのは弱変化。) *einreißen: pull down, demolish. Zaun, m.: hedge.* [11] 買え、しからずんば去れ。(商人の立場をいった通り言葉、買いもせず立って見ているのは商売の邪魔になって困る、買うならさっさと買え、帰るならさっさと帰ってくれ、の意。Kauft と läuft との語呂を合せたもの。) *laufen* (走る) は「立ち去る」、「通行する」の意。[12] 汝ら蛇のごとく伶俐(ずい)に、鳩のごとく純真なれ。(聖書の句。抜け目のない人間は性が悪いと相場がきまっているが、それは間違いである。道徳の理想は、馬鹿な純朴な人間になることではなく、抜け目のない賢い純真な人間になることである。) *klug: clever. Schlange, f.: snake. ohne Falsch: without guile. (ohne Falsch wie die Tauben: harmless as doves) Falsch: guile* (二心、害意、偽り)。

127. その他の命令形

命令形には、前項で述べた場合の外、敬称二人称 *Sie* に対するものがあります。たとえば『こちらへいらっしやい』(*Come here!*) は *Kommen Sie hierher!* で、この *Kommen Sie* (必ず *Sie* をつける) が命令形です。

この *kommen* という形は、既にやった *kommen* の現在形であるように思われますが、文法的には、次講でやる「接続法」という形なのです。ただ動詞の殆んど全部が (*sein* 一語のみを例外として) *Sie* を主語とする場合には直説法と接続法とが同形になるので、実用的見地からは、直説法現在 (すなわち今までに用いて来た現在) の *Sie kommen, Sie gehen, Sie sprechen* などを倒置した形が *Sie* の命令形になると記憶すればよろしいわけで、また今までの例題にもこの形は幾度も用いて来ました。

ただ一語だけ、*sein* は例外です。*sein* だけは直説法現在は *Sie sind* ですが、接続法は *Sie seien* ですから、命令形もまた *Seien Sie!* でなければなりません。Sind

Sie というと、疑問文になってしまいます：

命令： **Seien Sie** unser Bundesgenosse! 我々の盟友におなりなさい。

疑問： **Sind Sie** unser Bundesgenosse? 貴君は我々の盟友ですか?

この区別は sein 一語きりで、他の動詞では、この命令、疑問の両形が同じ形になるわけです。

次に wir に対する命令形のようなものがあります。

Gehen wir nach Hause! (*Let us go home!*)

これも文法的には Sie と同じ関係にあり、sein の場合が seien wir となるだけで、他は疑問文と全然同形になります。意味は英語の *let us* と同じで、「.....しようではないか」です。また英語と同じく、lassen (*let*) の命令形で表現してもいいのです：
Laßt uns nach Hause gehen!

第26講 接続法の形

128. 直接法と接続法との区別

動詞の形に接続法というものがあることは、前項の *Seien Sie! (be!)* の *seien* によってちょっと紹介しましたが、これからいよいよこの接続法 (*Konjunktiv*, 英: *subjunctive mood*) なるものを根本的に究明致しましょう。

その前に、まずちょっと、ごく何でもなし常識的な話をしておきます。この接続法という奴は、あるいは可能法、あるいは付属法などと、いろいろな名前では呼ばれていて、英語にもごく貧弱ながらこの形があります。たとえば、*God save the king* (神が王を守り給はんことを) という英国国歌はどなたもご存じでしょうが、この *save* は接続法の形です。これがもし『神は王を守り給う』という意味の文であつたら、*saves* でなくてはならぬはずで、*save* という接続法の形に対して、この普通の形 *saves* を、直説法と呼びます。(ただし、本講座では、後で理由は述べますが、直接法と書くことに致します。)

しかし、英語では、現在はもはや直接法と接続法との間に大して形の差がなくなってしまったため、その用法も極めて小範囲にとどまり、*if* の次には接続法を用いるとか、*as if* といえは定形が *were* になるとかいったような、何の連絡もない個々の雑則を五つ六つ覚えればそれで実際的には十分間に合うようになっていますが、ドイツ語はそうはいきません。ドイツ語は、昔のラテン語、ギリシア語、サンスクリット語ほどではないにせよ、とにかく英語よりははるかに接続法というものが形の上でハッキリしています(フランス語はドイツ語よりもっとハッキリしています)。従つてその用法も、英語のようなわけのわからないあいまいなものではなく、ハッキリと系統的にのみ込むことが出来るのです。

しかし、用法よりも前に、まず形を研究しなければなりません。本講においては、意味や用法のことにはふれないで、まず『形』だけについて述べます。

129. 接続法には二種の形あり

英語でも接続法の形には二つの種類があります。たとえば *I am* に対する接続法には *I be* と *I were* とがあります。*he lives* に対する接続法には *he live* と *he lived* とがあります。ドイツ語もそうで、*ich bin* という直接法に対する接続法には *ich sei* (*I be*) と *ich wäre* (*I were*) との二形があります。*er lebt* (*he lives*) に対しても *er*

lebe (*he live*) と er lebte (*he lived*) との二形があります。この lebte は (英語の *lived* も同じですが), 過去と同じ形ではありますが, 文法的には, 過去ではなくて接続法なのです。

従来の文法家は, この sei (*be*) を接続法の「現在」, wäre (*were*) を接続法の「過去」と呼んでいますが, これはむしろ露骨な誤謬といってもよいほどの杜撰極まる命名法であるがゆえに私は採りません。時称の点から言えば sei も wäre も共に現在なのであって, 過去の意味には絶対に用いないのです。ただ wäre は, その形が過去形 (war) から来ているというだけの話なのです。形が過去形から来ているものを過去と呼ぶということになれば, ich weiß も過去, ich kann も können の過去と呼ばなければならなくなって来ます (82頁)。そんな不合理な文法用語に対しては誰だって反対するでしょう。だから sei を現在, wäre を過去と呼ぶのはなおさらおかしいことです。如何となれば sei は不定形から派生したものでこそあれ, 現在とは何の関係もなし, wäre も, weiß や kann のように過去形そのものではなく, 過去形を変えて全然別物にしたものだからです。

論議はまあ初学者には別に関係ないからこれで止しましょう。要するに私は二十年程前からこの名称に強硬に反対しているもので, ドイツ本国の学者も別に反駁して来ないから, 私は自説が通ったものと自惚れている次第です。

要するに, sei などの形を, 第一式接続法, wäre などを第二式接続法といって区別したいと思います。高等学校その他で使用されている拙著の諸文法, 諸教科書も全部この名称で統一しています。勝手な言い分ですが, みなさんにもこの名称をご支持ねがいたいのです。

130. 第一式接続法の作り方

第一式接続法は, 不定形の語幹から出立して作ります。次の sprechen (*speak*) がその一例ですが, 各人称に相当する人称語尾をよく覚えてください:

不 定 形: sprech-en			
ich	sprech-e	wir	sprech-en
du	sprech-est	ihr	sprech-et
er	sprech-e	sie	sprech-en

直接法の場合と, 大体よく似ていますが, 三人称の単数は -e という特殊な語尾によって, ハッキリと直接法から区別されます。殊に, この sprechen の場合にあっては, 直接法は du と er の二ヵ所で e を i に変じて du sprichst, er spricht となるのですから, この二ヵ所は随分はっきりと直接法から区別されることになります。そ

れに反して、規則的な変化をする普通の動詞、たとえば lieben (love) などにあっては、英語の場合と同様、er の所だけがハッキリと区別され、他のところでは大した区別がないわけです。(英語よりもドイツ語の方が接続法がハッキリしていると言いましたが、第一式のある種のもの、lieben などは、残念ながら英語と大して違いません。)

けれども、なんとかして、出来るだけ直接法と区別しようという傾向だけはありません。たとえば単に -st をつけないで特に -est をつけるとか、-t の代りに -et をつけて、接続法らしく聞かせようという努力をドイツ人がすることは事実ですから、変化表は -est, -et で示しておきました。-(e)st, -(e)t と示したのとはちがって、これはたとえ口調上の要求がなくてもなるべく e を入れよ、という意味です。

(1) 第一式接続法の作り方には例外なし

直接法の場合には、sprechen のように、e が i になるもの、fallen のように a が ä になるものなど、あるいはまた wissen, werden, haben, sein および話法の助動詞など、多くの例外がありましたが、第一式接続法には、次の (2) で述べる sein 一語の例外があるきりで、その他に一つの例外もなく、すべての動詞が劃一的に前掲の表にあてはまります。

(2) sein 一語のみ、二個所で -e を省く

sein のみ、ich, er のところで -e をつけません。すなわち ich seie ではなく ich sei; er seie ではなく er sei です。

(3) 第一式接続法と直接法現在の形の上の差

頭の良い人には以上だけでもはや十分なはずですが、念には念を入れよということがありますから、以上の規則によって作られた第一式接続法が、どんな所で、またどの程度まで直接法と違って来るかということ、二三の例について表示して見ましょう。かっこの中の斜体が(英語ではなくて)直接法形で、太文字は、『ここは直接法と形がちがっている』という意味です。

- | | | |
|------------|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1. lieben: | ich liebe (<i>liebe</i>) | wir lieben (<i>lieben</i>) |
| | du liebest (<i>liebst</i>) | ihr liebet (<i>liebt</i>) |
| | er liebe (<i>liebt</i>) | sie lieben (<i>lieben</i>) |
| 2. finden: | ich finde (<i>finde</i>) | wir finden (<i>finden</i>) |
| | du findest (<i>findest</i>) | ihr findet (<i>findet</i>) |
| | er finde (<i>findet</i>) | sie finden (<i>finden</i>) |
| 3. sehen: | ich sehe (<i>sehe</i>) | wir sehen (<i>sehen</i>) |
| | du sehest (<i>siehst</i>) | ihr sehet (<i>seht</i>) |
| | er sehe (<i>sieht</i>) | sie sehen (<i>sehen</i>) |

4. wollen:	ich wolle (<i>will</i>)	wir wollen (<i>wollen</i>)
	du wollest (<i>willst</i>)	ihr wollet (<i>wollt</i>)
	er wolle (<i>will</i>)	sie wollen (<i>wollen</i>)
5. sein:	ich sei (<i>bin</i>)	wir seien (<i>sind</i>)
	du seiest (<i>bist</i>)	ihr seiet (<i>seid</i>)
	er sei (<i>ist</i>)	sie seien (<i>sind</i>)

結論として、第一式接続法があらゆる人称に互って直接法と相違しているのは **sein** 一語だけで、その他の動詞においては、三人称(単)だけはいかなる際でも明瞭に区別されるが、その他の人称では区別されることもあり、同形になることもある、ということになります。

131. 第二式接続法の作り方

第二式接続法の作り方は、第一式の場合ほど簡単ではなく、二つの場合を区別する必要があります。すなわち、その動詞の三要形(第 13 講)を見て、不定形の語幹と過去形の語幹とを比較した上で、次の二つの筋路のいずれかによるのです。

第一則：不定形の語幹と過去の語幹とが同一である動詞は、過去形のままだが第二式接続法である。人称変化も過去と全然等しい。

つまり、規則変化動詞は全部これで行くわけです。規則変化のものばかりではない、不規則変化動詞の中にも *mahlen, mahlte, gemahlen* (粉をひく) など、過去分詞だけが不規則で、過去は規則的なのが少々ありますが(巻末の不規則動詞表を見よ)、こんなのもやはりこれで行きます。過去分詞などはどうでもよい、とにかく過去形が規則的であればいいわけですから。

既に過去形とその人称変化をご存じの皆様には、表示するにも及ばないはずですが、安心のために、たとえば *lieben* で例を示すと：

<i>lieben</i> , (三要形： lieb-en, lieb-te, geliebt)	
ich liebte	wir liebten
du liebtest	ihr liebtet
er liebte	sie liebten

第二則：不定形の語幹と過去の語幹とが違っている動詞は、過去形を——とすれば——e が第二式接続法(の *ich, er* に対する形)である。人称変化は過去形の場合と同じ。

この $-e$ なる公式に注意してください。" は、もし a, o, u, au の幹語音があればそれを ä, ö, ü, äu に変ずることを意味します (実際的には a, o, u だけしかありませんが)。e は、もし語尾 e がない場合には e を付することを意味します。たとえば gehen, ging, gegangen (go, went, gone) ならば, ging の i は変音できませんが, e はつけられるから ginge が第二式接続法です。sehen, sah, gesehen (see, saw, seen) ならば, sah は変音も e 語尾も可能ですから, sähe が第二式接続法です。müssen, mußte, gemußt (英: *must* に該当) は, (ちょっとした変音だけの相違ですが不定形の語幹と過去の語幹がちがっています), -e は既についているがその代り u を ü に変えることができますから müßte が第二式接続法です。

混同が起こらないように言っておきますが, 同じ話法助動詞でも wollen や sollen は規則的三要形 (wollen, wollte, gewollt; sollen, sollte, gesollt) を持っていますから, これは wölte とか sölte とかにはなりません。これらは第一則の方によって, wollte, sollte のままが第二式接続法です。まぎらわしいから特に注意すること。

この第二則による第二式接続法は, 巻末の不規則動詞表に全部載っていますが, 二三の重要なものを摘出して参考に供します:

不定形		過去	過去分詞	第二式接続法
sprechen	(<i>speak</i>)	sprach	gesprochen	spräche
tragen	(<i>carry</i>)	trug	getragen	trüge
sein	(<i>be</i>)	war	gewesen	wäre
fliegen	(<i>fly</i>)	flog	geflogen	flöge
schreiben	(<i>write</i>)	schrieb	geschrieben	schriebe
laufen	(<i>run</i>)	lief	gelaufen	liefe
werden	(<i>grow</i>)	wurde	geworden	würde
haben	(<i>have</i>)	hatte	gehabt	hätte

実際的には, a, o, u は変音する, i, ie は変音しないと言えばよいわけで, 不規則的な過去の語幹には a, o, u, i, ie 以外のものはありません。

英語では *was* と *were* との間関係が全然わかりませんが, ドイツ語の wäre (*were*) がこうした一般原則によって war (*was*) から派生したものであることがわかると, 英語の *was* と *were* との関係も文法的にわかって来るわけです。

最後に, 第二式接続法の例外的なものがいくらかあります。たとえば, いわゆる混合変化動詞 (79 の後方) は, すべて -ante, -ante という形の過去をもっていますが, これは -ännte, -ändte の代りに -ennte, -endete の形を以て第二式接続法とします:

不定形		過去	過去分詞	第二式接続法
nennen	(call)	nannte	genannt	nennte
rennen	(run)	rannte	gerannt	rennte
wenden	(turn)	wandte	gewandt	wendete
		(または wendete)	(または gewendet)	
senden	(send)	sandte	gesandt	sendete
		(または sendete)	(または gesendet)	

また、これらと同じく、とかく a となることをいやがる傾向があつて、u となる第二式にはよく ü または ö の別形を有するものがあります。巻末の表を見ればわかりますが、こうした多少の不規則は、語に即して覚えねばなりません。

不定形		過去	過去分詞	第二式接続法
stehen	(stand)	stand	gestanden	stände, stünde
sterben	(die)	starb	gestorben	stärbe, stürbe
gewinnen	(win)	gewann	gewonnen	gewänne, gewönne
sinnen	(muse)	sann	gesonnen	sänne, sönne

132. 接続法の用法

これで接続法の形に関する規則は終わりました。そこで今度は、用法を述べることになりますが、詳しいことは次講以下にゆずり、ここでちょっと用法全般の見通しを述べておきましょう。

まず劈頭(§)第一にお断りしておきたいことは、これから後の用法の述べ方は、形式から出立してその用法を述べるという行き方ではなく、むしろその逆に、用法を基礎として、次に形式を述べるという行き方を採るという点です。すなわち、たとえば、第一式接続法はこれこれの場合に用いる、第二式にはこれこれの用法がある、といったような説明法を採らないで、突然「要求を意味する場合には第一式を用いる」とか、「間接話法という意味関係の場合には第一第二の両方を用いる」とかいったようにして、まず意味と用法を題目にして、形の方は二の次に取り扱うわけです。

そこで、便宜上、用法を次のごとく三大別し、その一つ一つを一講として扱うことに致します。同時に、意味と形式との関係を覚えていただきます：

用法	説明箇所	使用形式
1. 間接話法	(第 27 講)	第一式を主とし、第二式を副とす
2. 要求話法	(第 28 講)	第 一 式
3. 約束話法	(第 29 講)	第 二 式

第27講 接続法の用法(1)

間 接 話 法

133. 間接話法とは?

間接話法というのは、直接話法に対していうのですが、理屈よりはまず次の文例を A と B と比較して、よく考えて見てください:

A. 直接話法

Ihr Mann **lebt** noch. 彼女の良人はまだ生きている。

B. 間接話法

Sie glaubt, ihr Mann **lebe** noch.

彼女は彼女の良人がまだ生きていると信ずる。

直接話法というのは、この文を口にする人(あるいはこの文の筆者)が自己の説としていう形式で、この Ihr Mann **lebt** noch. という句は、誰が言ったか知りませんが、その言った人の『直接の言』ですから、これを直接話法と言います。(形式は「直接法」です。間接話法と対照して直接話法というから、私は形式も直説法などと書かないで、直接法と書く方が便利だろうと思います。でないと、直「接」話法には直「説」法を用いる、などという厄介千万であると同時に無用千万億兆なる術語の使い分けが必要になって来ますから。)

間接話法の方は、たとえば ihr Mann **lebe** noch, すなわち「彼女の良人がまだ生きているということ」は、決して、この文を書いた人の直接の言ではありません。この文の筆者は、良人の存命を単に「彼女」の説として紹介の労をとっているだけで、従ってその真偽如何に関しては責任を持っていません。詳しいことは「直接」彼女に会ってきかなければわからないわけで、この文に表われたところでは、彼女の良人の健在は、単に筆者を介して『間接に』われわれに伝えられているにすぎません。ゆえにこの ihr Mann **lebe** noch の部を間接話法と言います。

ただし、断わっておきますが、ihr Mann **lebe** noch の部分だけです。Sie glaubt, ihr Mann **lebe** noch. 全体が間接話法だと思っただけはいけませんよ。Sie glaubt という文は、前の Ihr Mann **lebt** noch. と同様、直接話法なのですよ。

そこでこんどは動詞の形の問題ですが、Ihr Mann **lebt** noch. と Ihr Mann **lebe** noch. とを比べて見ればハッキリわかる通り、直接話法の場合には直接法を用い、間接

話法の場合には接続法を用いるのです。ただし接続法の第一式の方を用いるのです。

更にもっとわかりやすく言うならば, daß (*that*) という接続詞を用いる代りに, 動詞の形だけを接続法にすればよいということになって来ます。daß を用いると Sie glaubt, daß ihr Mann noch lebt. となって, ご存じのごとく定形後置になりますが, daß の代りに lebt を lebe とすれば, 定形後置にしないで, 主文章形式のままで従属文章になるのです。あるいはまた daß を使って定形後置にして, おまけにその上接続法を用いて Sie glaubt, daß ihr Mann noch lebe. と言ってもよいのです。

ところで, 以上までの説明では, 間接話法には必ず接続法の第一式の方を用いるということになりますが, それでは困る場合も起こって来ます。たとえば, 『彼女は, 彼女の子供たちはまだ生きていると信じている』という場合は, Sie glaubt, ihre Kinder **leben** noch. となるでしょう。この leben は, 接続法のつもりなのです。ところが, これでは直接法と何の差もありません。前講で研究した通り, どうもこの第一式接続法という奴は, 単数三人称だけがハッキリしているきりで, その他の人称では, とかく直接法と同形になってしまう傾向があって, 現にただ今のように複数三人称になるという, どうも間接話法らしく聞こえません。意味はまあ前後関係で大体察しがつくでしょうが, 『聞こえ方』がどうも直接話法のようになっていけない。そこで, こういう場合には, 第一式 leben を用いないで, 第二式 lebten (leben は規則動詞ですから, 過去形のままだが第二式です) を用います:

Sie glaubt, ihre Kinder **lebten** noch.

同じく, 『彼女は, 私はまだ生きていると信じている』も, ich のところは, ich lebe では直接法と同形になりますから:

Sie glaubt, ich **lebte** noch.

とします。

つまり, 間接法は, 原則としては第一式を用いるが, 第一式を用いると直接法と同形になる所では第二式を用いる, というのがまず第一の原則です。

だから, 直接法と同形にならない sein などは, 全部第一式を用い得ます: Sie glaubt, ich sei tot. (彼女は信ず, 我死せりと), Sie sagt, ihre Kinder seien gesund. (彼女は言う, 彼女の子たちは健康なりと。)

それから, これは別に原則ではなくて, むしろ「傾向」といった方がよいかもしれませんが, 不規則動詞の第二式接続法 (kommen に対する käme; sein に対する wäre; haben に対する hätte など, とにかく *-e* の公式で作られたもの) は, 発音しやすいせいでもありましょうが, 通俗のドイツ語では非常に好まれる傾向があって, そのために自然濫用の傾向が生じ, 第一式を用いても十分わかる所を第二式

で言うという現象が見受けられます。すなわち sei でよい所をわざわざ wäre と言い、komme でよい所を käme と言うのです。これは初学者諸君に言っても実感がないと首肯できないかも知れませんが、どうも sei とか komme とかよりは wäre とか käme とかの方が感じが「くだけ」て「柔らか」なので、論文や時事文では sei だが、通俗調では wäre という場合が多いのです。たとえば Sie glaubt, ich sei tot. といっ
て十分であるのに、会話などではむしろ Sie glaubt, ich wäre tot. と言います。この
場合 sei と wäre とでは少し意味合いがちがうとか、wäre の方は多少懐疑的口吻に
なるとか何とか、わかったようなことを言う人がいますが、それは嘘です。

例 題 52

- [1] Die Christen glauben, Selbstmord sei Sünde.
クリステン グラオベン ゼルプスト・モルト ザイ ズェンデ
- [2] Der Kommunismus behauptet, die Kapitalisten
コンムニスムス ベハオプテット カピタリステン
seien allein verantwortlich für alle Übel der Welt.
ザイエン アライン フェルアントヴォルトリヒ ユーベル
- [3] Die streikenden Arbeiter sagen, sie arbeiteten
シュトライケンデン アルバイテル アルバイテテン
zu lang und verdienten zu wenig. [4] Die Annahme,
ツー フェルディーンテン ヴェーニヒ アンナーメ
der Mensch stamme vom Affen, ist nur teilweise
シュタムメ アッフエン タイルヴァイゼ
richtig. [5] Schon Newton sprach die Ansicht aus,
リヒティヒ ショーン ニュートン アンジヒト
das Sonnensystem könne nur eine beschränkte Dauer
ゾンネン・ズステーム ケンネ ベシュレンクテ ダオエル
haben. [6] Die Erdforscher haben aus dem hohen
エールト・フォルシエル ホーエン
spezifischen Gewicht des Erdballs den Schluß
シュペツィーフィッシェン ゲヴィヒト エールト・バルス シュルス
gezogen, sein Kern müsse aus Eisen oder noch
ゲツォーゲン ケルン ミュッセ アイゼン
schwereren Metallen bestehen.
シュヴェーレレン メタルレン ベシュテューエン

訳註： [1] キリスト教徒は、自殺は罪であると信じている。Christ, *m.*—*en*: *Chris-
tian*. Selbstmord, *m.*: *suicide*. Sünde, *f.*: *sin*. [2] 共産党は、ただ資本家のみが世
のあらゆる禍に対して責任があると主張する。Kommunismus, *m.*: *communism*. be-
haupten: *pretend*, *allege*. Kapitalist, *m.*—*en*: *capitalist*. allein: *alone*, *only*.

verantwortlich für . . . : *liable for, responsible for*. Übel, *n.* : *evil, mischief*. [3] 罷業する労働者たちの言うには、自分たちは余りに長く働きすぎる、かつ余りに少なく儲けすぎると。streiken: *to strike*. zu lang: *too long*. verdienen: *gain, earn*. zu wenig: *too little*. [4] 人間は猿から派生したものだという臆説は、ほんの部分的にしに正しくない。Annahme, *f.* : *hypothesis*. stammen: *to descend*. Affe, *m.*—*en*: *ape, monkey*. teilweise: *partly, in part*. richtig: *correct, true*. [5] 既にニュートンが、太陽系はただ一定限度の存続期間しか持ち得ないという意見を述べた。aussprechen: *speak out, utter*. Ansicht, *f.* : *opinion*. Sonnensystem, *n.* : *solar system*. beschränkt: *limited*. Dauer, *f.* : *duration*. [6] 地質学者は、地球の高度の比重からして、その内核は鉄あるいはもっと重い金属からなっているに違いないという結論を導き出した。Erdforscher, *m.* : *geologist*. spezifisches Gewicht: *specific weight* (比重). Erdball, *m.* : *terrestrial globe*. (Erd- は Erde, 地, Ball は球) Schluß, *m.* : *conclusion*. (Schluß ziehen: *to draw conclusion*) Kern, *m.* : *kernel, nucleus* (核). aus . . . bestehen: *to consist of*. . . . Eisen, *n.* : *iron*. noch: *still* (もっと, 更になお). schwer: *heavy*. Metall, *n.* : *metal*.

134. 間接話法余録

ドイツ語は英語よりもずっと接続法の形が整備している関係上、その用い方もはるかに自由です。三人称単数は英語でもハッキリ直接法と区別されますが、ドイツ語には英語に貧弱な *—e* 形の第二式がたくさんあるので (käme, spräche, ginge など)、結局接続法がたくさん使えるわけです。だからたとえば

Sie **spräche** Englisch. 彼女は英語を話す由。

Sie **spreche** Englisch. (同)

などと言っていていいわけです。別に前に誰がそう言うとか、誰がそう信じている、などという文がなくて、ただこれきりの文で『.....なる由』、『.....ださうだ』の意になります。これは非常に便利です。

それから、間接話法には接続法を使うといっても、必ずしもいつも使うわけではありません。また *daß* を用いるのと同じとはいっても、それは必ずしも間接話法とは限りません。たとえば、

Sie wissen, daß ich kein Raucher bin.

Sie wissen, ich bin kein Raucher.

『あなたは私が喫煙者ではないことをご存じでしょう』という意味ですが、*ich bin kein Raucher* は、よく意味を考えればわかる通り、間接話法ではありません。これは、この文を言う人、または書く人の直接の言ですから、間接話法ではなく、従って接続法を用いて *ich sei kein Raucher* という必要はないのです。

次に、これは間接話法の場合ばかりではなく、接続法全体に関する問題ですが、接続法の時称に関して一言述べておきます。*wäre* や *spräche* などの第二式接続法は、

既に前講で述べた通り、その形は過去形から来たものではありませんが、意味用法は過去ではありません。前掲の文例 *Sie spreche Englisch.* も、*Sie spräche Englisch.* も、意味は全然同じことなので、前者が現在で後者が過去（たとえば『彼女は英語を語った由』といったような）というわけではないのです。両方とも現在なのです。

そうするとこういう疑問が起こります：『では接続法の過去はどうなるのだろう？未来はどうなのか？』

それはまことにもっともな疑問です。けれども、それに対する答はすこぶる簡単で、接続法には特に過去形というものも未来形というものもなく、過去形は完了形で間に合わせ、未来形は助動詞を接続法に変えればいいのです。

Sie sagt, sie habe (または hätte) Englisch gesprochen.

彼女は、彼女が英語をしゃべったと言う。

Sie sagt, sie werde Englisch sprechen.

彼女は、彼女が英語をしゃべるだろうと言う。

つまり、接続法というのは、後へ来る不定形や過去分詞には直接何の影響もないので、ただ定形だけの問題なのです。過去形も、それ自身の過去形はないので、助動詞によって過去を表現するしかないのです。

第28講 接続法の用法 (2)

要 求 話 法

135. 要求話法とは?

要求話法というのは、『……せよ!』、『……せんことを!』という意味の用法です。英語でも接続法にはこの用法があって、*God save the king!* (神が王を守り給わんことを!), *Long live the king!* (王万歳) の *save, live* が、直接法ならば元来なくてはならない *-s* の語尾をつけていないのも、これはつまり接続法 (の第一式) だからで、意味と用法の上からいうと、要求話法です。

要求話法として用いる接続法は、必ず第一式接続法を用います:

Lang lebe der König! (*Long live the king!*)

現在の習慣では、「王万歳」は大抵 *Der König lebe hoch!* と言いますが、英語と同構の *Lang lebe der König!* もあります (たとえば Schiller の *Der Taucher*, 16 節)。

ところが、既にたびたび指摘した通り、第一式接続法という奴は、とかく直接法と同形になりがちで、直接法と同形になるおそれのないのは単数三人称だけなので、従って要求話法は主として単数三人称だけと思えば、まあ大体間違いありません。だいいち、二人称には既に命令法というものがあるから、接続法など用いる必要はなく、一人称は、意味の方からいって、『私はこうせよ!』、『我々はかくすべし!』という場合はあまり起こらないから、それでまあ大体三人称だけでいいわけです。『われわれはかくすべし』、すなわち『われわれはこうしようではないか』の場合は、既に形式が別にあります (127!)。

ただ困るのは、三人称の複数の場合です。万歳! の場合には、まさか直接法と間違えるおそれはないので、たとえば王と王妃との万歳を唱えるのであったら:

Der König und die Königin leben hoch!

と言ってよいことになっていますが、必ずしもこんなふうに、文意からして動詞定形が第一式接続法であることが明瞭に理解される場合ばかりではないので、そんな時には助動詞 *sollen* (あるいは、意味が命令的でなく、希望的である時には *mögen*) を使います。*sollen* は (74!) つまり完全にここで言っている要求話法の意味の助動詞な

ので、本当を言うと、sollen という助動詞がある以上は、接続法を以て要求を表現する必要はないはずなのですが、sollen を用いるよりは簡潔に言い表わせるために存続しているのを見ると妥当でしょう。

ゆえに、たとえば『お客様にどうぞおはいりくださいと申し上げなさい』という代りに『客が入り来たらんことを』というとなれば、単数では：

接続法第一式で： Der Gast **trete** herein!
 sollen で： Der Gast **soll** hereintreten!
 mögen (第一式) で： Der Gast **möge** hereintreten!

の三つの言い方があり、複数 Die Gäste になると、接続法第一式では直接法と同じになるので、結局：

sollen で： Die Gäste **sollen** hereintreten!
 mögen (第一式) で： Die Gäste **mögen** hereintreten!

の二つの方法があることになります。(möchten [mögen の第二式接続法] も可能ですが、これは詳しいことになるから省きます。)

最後に、特に念を入れておきたいことは、間接話法の場合とは違って、要求話法の場合には、第一式が直接法と同形になるからといって、第二式で代用するということとは出来ないという点で、接続法を使うなら必ず第一式であるという点にご注意ねがいます。

例 題 53

[1] Dein Reich komme, dein Wille geschehe auf
ライヒ コムメ ヴィルレ ゲシェーエ
 Erden wie im Himmel! [2] Wer Ohren hat, zu
エールデン ヴィー ヒムメル ヴェール オーレン
 hören, der höre! [3] Wer unter euch ohne Sünde
ヘーレン ヘーレ オーネ ズンデ
 ist, der werfe den ersten Stein auf sie! [4] Der
ヴェルフエ エールステン シュタイン
 Mensch bleibe in seinen glücklichen Tagen stand-
ブライベ グリュックリッヒェン シュタント・
 hafter als in seinen unglücklichen. [5] Gott schütze
ハフテル ウン・グリュックリッヒェン シュッツェ
 mich vor meinen Freunden: vor meinen Feinden
フォール フロインデン ファインデン
 kann ich selbst mich schützen.
シュッツェン

訳註: [1] 汝の御国の来たらんことを、汝が意志は地上においてもまた天上においても実現せんことを! (聖書の句で、また祈禱の句。) *Reich, n.: kingdom.* (地上に実現するという神の国の意。) *Wille, m.: will. geschehen* (行なわれる、実現する): *to be done.* (*Dein Wille geschehe: Thy will be done.*) *auf Erden: on earth. Himmel, m.: heaven.* (ドイツ語では *sky* も *heaven* も *Himmel*) *wie: as, as well as.* [2] 聞くべき耳あらん者は聞け! (聖書用句で、予言する時などの序詞、『遠からん者は音にも聞け、近くば寄って眼にも見よ』といったようなもの。) *Ohr, n. pl.—en.: ear. der* (その者は) [3] 汝らのうち「心に」罪なき者は最初の石を彼女に向かって投げ打つべし。(キリストの言として有名な句。昔時のヘブライ人は、道徳が相当頹廢していたにもかかわらず人を責めることにはかなり酷であった。ある時イエスは、姦通をした女が人々に引き立てられて己が前にやって来て、人々がイエスの意見を徴し、正にこれを石で打ち殺そうとしたとき、一同に向かって『おまえたちのうちで、人妻や人の良人に対して絶対に心を動かした覚えのないものがいたら、まず最初に石をこの女に投げてみよ』という、人々はドキッとして、誰も石を投げるものはなかったという。) *unter: among, amongst. ohne: without. Sünde, f.: sin. der* (その者が) *werfen: throw, cast, fling. erst: first. Stein, m.: stone. auf sie: at her.* [4] 人間はその幸福な日々においては、その不幸な日々におけるよりは、より毅然たるべきである。 *bleiben: stay, remain, continue to be. standhaft bleiben: 「毅然ととどまる」* とは「毅然たる態度を失わない」こと。 *standhaft: constant, firm, steadfast. glücklich: happy. unglücklich: unhappy.* [5] 神われを我が味方に対して守り給え; わが敵に対してはわれ自力を以てわが身を守り得ればなり。(敵よりも味方の方が恐ろしい、如何となれば味方に対しては隙だらけだから。) *schützen: protect, defend. vor: from. Freund, m.: friend* (味方). *Feind, m.: enemy, foe.*

第29講 接続法の用法(3)

約 束 話 法

136. 約束話法とは?

『もし私の父が生きていたら、今年は百歳になっていたろう』とか、『もしこの雪がみんな砂糖だったら、私は一番にお汁粉を作るだろう』とか、『君の援助がなかったら、僕は失敗していたろう』とか、『もしこの3が2だったら僕は一万円当たっていたのに』とかいったような言い方を約束話法（あるいは条件法）と言います。かりにこういう約束で物を考えて見るとこういうことになる、という意味だからです。「約束」というのは、別に人と物を約束してどうのこうのなぞというその約束ではなく、『かりに設けた約束』という意味です。

かりにある約束を設けて、その約束から生ずる『はず』の結論を、単に言葉で言ってみるにすぎないのが約束話法です。この『はず』という日本語が巧みに約束話法の特徴を表現しています。すなわち、そういうふうに考えればそうなるはずだが、それは結局単なる『はず』にすぎないのであって、『はず』という以上は大抵『……ところが実際はそうではない』という認識がハッキリと基礎にあるのです。『もし私の父が生きていたら……』ということは、死んでいるからこそそう言うので、生きている父をつかまえてそんなことを言いはしません。『君の援助がなかったら僕は失敗していたろう』ということは、つまり君の援助があったればこそかくのごとく上首尾に行ったという現実の事実を基礎として言うのです。

ひどくやばくさい屁理屈をこねるようですが、以上の点にピッタリと考えの焦点を合わせていただかないというと、ドイツ語や英語に何のためにわざわざ約束話法とか条件法とかいったような文法があるのかという事が本当にのみ込めません。『なるほど人間の考え方にはこういう形式がいたるところで用いられている、気がついてみるとなる程これは一つの重要な型だ』という認識が生じて初めて、これから紹介する接続法の一用法がはっきりと頭にはいり、同時にまた、他の何語を将来研究するにしても、約束法とか条件法とかいったような表題を一目みて内容がすぐわかり、言葉の方の問題に関しても初手から興味と重大関心が生じますから、人が三日かかっても覚えられないことが、一目見て一秒で覚えてしまうことになります。どんなに頭の良い人でも、特に関心の向かない事を暗記しろとなったら、その能率は低能児と大して違いません。たとえ低能児といえども、一たびある一点に向かって鋭く関心が集中するに至った暁には、その記憶力、その理解力は、その一点に関する限り、天才といえども三舍を避くるものがあるでしょう。『時々ある特殊な変なことを、人より以上に、特に面白がって見ることに、これが理解力と暗記力とを人以上に発達させる唯一の方法です。諸賢諸愚、以て如何んと為す?』

意味に対してピントが合ったら、次に表現法に移りましょう。たとえば、(なにかウンと簡明な、模範的な例はないかと思って一服煙草を吸っていると、私の家の向かい側の井戸の所で立話している近所のお婆さんが、『本気ならそんなことを言やしないわよ』と言った。これだ！お婆さんありがとう！)：

Wenn es sein Ernst wäre, er redete nicht davon.

逐語的には：wenn もしも es それが sein Ernst かれの真面目 (本心) wäre であつたら, er かれは davon それについて redete nicht 語りはしなかりう。

死ぬと言う人間に死んだためしなしで、死ぬ気がなければこそ死ぬと言うのですから、『ほんとに死ぬ気なら、死ぬなんて言いはしない』という意味のこのお婆さんの啖呵(さん)は、模範的な約束話法です。

約束話法は必ず『前提部』と『結論部』とから成っていますが、上例でわかる通り、前提部も結論部も、接続法の第二式が使っています。wäre (were) は ist (is) に該当するもの、redete は redet に該当するものです。redete は過去形のようにですが、これは (131, 第一則) reden という動詞が規則動詞 (reden, redete, geredet) だからで、規則動詞の第二式接続法は、英語の殆んど全部の動詞がそうであるように、過去形と全然同形なのです。

ついでに英語の方も対照しておきましょう。Oscar Wilde の *The Decay of Lying* に：

No great artist ever sees things as they really are. If he did, he would cease to be an artist.

という名句があります。『およそ偉大なる芸術家というものは、決して事物を事実通りに観はしない。もしかりに事実通りに観るとしたら、それはもはや芸術家とは言えないであろう』ということです。ご覧の通り英語では仮定部には過去形 *did* が用いてあるように見えますが、これは前掲の文の *redete* と同様、形は同じでも文法的には過去ではなくて接続法の第二式 (英語では接続法の過去、付属法の過去、などといっていますが) なのです。結論部には *would* という助動詞が用いてあります。(ドイツ語の *würde* です、次項参照) *would* 以外に、『こういう回り合わせになるだろう』というふうに特に運命を強調している際には *should* になるとか、また人称によって *would*, *should* の決め方がちがうとか、かなりやっかいなことがあります。

If 以下をドイツ語でいうと：

Wenn er es täte, er würde aufhören, ein Künstler zu sein.

if he it did he would cease an artist to be

täte は tun, tat, getan (*do, did, done*) の tat から例の —e の公式によって作った第二式接続法です。tun はこの三要形を見ればわかる通り不規則で、過去形が不定形とちがった語幹を持っているから、過去のままだが第二式接続法にはなりません。würde も werden, wurde, geworden の wurde から —e に従って作られたもの、つまり英語の *would* です。

もしこれを *If he do* (*do* は第一式接続法です。直接法なら *does* のはずですから) というと、ひよっとするとそんなことをするかも知れないということを前提として言っているような口振りになって、それはもはや約束話法ではなくなります。「そんなことは絶対にないので、むしろそんなことは絶対にないということを極端に表現せんと欲したればこそかりにそんなことがあった場合をわざわざ仮想して、それから当然生ずるべき『はず』の不条理な結論をば読者の前にどうだ! とばかり叩きつけて見せたのがこの *Wilde* の句の鋭さではないでしょうか」——要するに、『もしも……』といいさえすれば約束話法だと思ってはいけません。

たとえば、前の例にかえて、次のように言う場合には、それはもはや約束話法ではなく、従ってまた接続法の第二式などは用いないのです。

Wenn es sein Ernst **ist**, so **redet** er nicht davon. Wenn er davon **redet**, dann **ist** es ein Scherz.

Scherz は冗談 (*joke*) で、so も dann も『そうすると』の意。つまりその人の癖を述べているわけで、『本気だと黙っていて口にしない、もし口にすればそれは冗談である』というのですから、これはもう事を事実通りに言っているだけで、裏も約束もありません。こういう場合には直接法を使います。

備考： 約束話法の表現形式は各国語によってまちまちではありますが、大体において一致しているのは、なんらかの形で『過去』あるいは『過去に似た』形式が採用されるという点です。既に日本語がそうで、『もしこの雪が砂糖だったら……』という『だった』は過去形式ですが、西洋語でも、ロシア語などは全然過去で表現し、ただ *бы* という助辞を入れることによって約束話法の特徴を出します。(助辞を入れるのはギリシア語もそうです：*εάν*.) ラテン語、及びラテン系統の仏伊語などは、少なくとも前提部だけは全然の過去、あるいは接続法の過去です。英語も前提部は、形だけから言えば、まあ過去と言っても差し支えありません。ドイツ語でも、例外的には全然過去で表現することもないではありません。——けれども、ただ一つ、人工語たるエスペラント語だけは、創始者 Zamenhoff はこの約束話法なるものの重要性を鋭く認識し、特に約束話法のための語尾 *-us* を定めています。しかも、ラテン系諸語のやっかいな前提・結論の組み合わせ方を排して、前提部をも結論部をも共に *-us* で表現することに決めたということは、Zamenhoff の語学者としての判断の鋭かったことを証するものだと思います。

137. 約束話法の構文

以上で、約束話法は、前提部にも結論部にもともに接続法の第二式を用いるという

ことがわかりましたから、これからいよいよ、その各部分の構文、および両者の結合法について述べます。

- (1) 前提部には、**wenn** を用いて仮定の表現をする以外に、定形倒置を用いる方法がある

これは約束話法の場合ばかりではなく、一般的にいて、**wenn** を用いる代りに定形倒置を用いること

とがドイツ語では非常に多いのです：『もし雨が降れば』は *Wenn es regnet*, でもよし, 単に *Regnet es*, でもよいわけです。約束話法もそれで、前に用いた文例でいうと：

Wäre es sein Ernst, er redete nicht davon.

- (2) 結論部には好んで助動詞 **würde** (*would*) を用いる

これは英語と平行していて覚えやすいでしょう。

しかも、英語のように、*would* だろうか *should* だろうかと考える必要はなく、いかなる場合でも *würde* です。これを用いると、本動詞 *reden* は、もちろん不定法に還元されて最後位に遊離します：

Wäre es sein Ernst, er **würde** nicht davon **reden**.

- (3) 結論部は、力強く前提部と対立させるためには主文章形式をとる（すなわち定形正置）

これは *er würde.....* のことですから別に改めていうまでもありません。こういう時には **[:]** を

用いることもあります。

Wäre es sein Ernst: **er würde** nicht davon **reden**.

- (4) しかし、そう力強く対立させる必要がないと思ったら、普通一般の規則通り (68!) 定形倒置にする

Wäre es sein Ernst, **würde er** nicht davon **reden**.

- (5) 結論部には **so**, または **dann** (しかれば, しかる時は) を先行させてもよい

そうするとももちろん *so, dann* という副詞のために定形は倒置になります：

Wenn es sein Ernst wäre, **so** redete er nicht davon.

Wäre es sein Ernst, **dann** würde er nicht davon **reden**.

- (6) 結論部を前に、前提部を後にしてもよい

文法的見地からはこれがむしろ正確な順序です。論理的には逆かも知れませんが。

Er redete nicht davon, wenn es sein Ernst wäre.

Er würde nicht davon reden, wäre es sein Ernst.

(7) 過去の事実を述べる時には, **hätte**
または **wäre** と過去分詞を用いる

たとえば, 四五日前に『そんなにおれ
をいじめやがると, おれはいっそ首でも
くくって死んじゃうぞ!』という凄文句

を残して出て行った男があるとしします。後に残った妻君は, 過去形で『もしあの人が
本気だったら, あんなことを言いはしなかったろう』と思って自から慰めるでしょう:

Er **hätte** nicht davon **geredet**, wenn es sein Ernst **gewesen**
wäre.

Er würde nicht davon **geredet haben**, **wäre** es sein Ernst **ge-**
wesen.

例 題 54

- [1] Würde ich eifersüchtig sein, wenn ich dich
ヴェルデ アイフェル・ズュヒティヒ
 nicht liebte? [2] Hätte er Geld, so würde er über-
リープテ ヘッテ ゴー ユーベル
 haupt nicht arbeiten. [3] Wollte man die kosmische
ハオプト ヴォルテ コスミッシェ
 Strahlung künstlich erzeugen, brauchte man Span-
シュトラールンク キュンストリヒ エルツォイゲン ブラオホテ シュパン
 nungen bis zu 1 000 000 000 000 Volt. [4] Wenn
ヌンゲン ビス ツー アイネル・ビルリオーン ヴォルト
 die Menschen nicht egoistisch wären, dann stünde
エゴイステイッシェ ダン シュテュンデ
 der soziale Mechanismus still. [5] Könnte man die
ゾツィアーレ メヒャニスムス シュテイル ケンテ
 Energie der Sonnenstrahlen voll ausnutzen, so würde
エネルギー ゾンネン・シュトラールン フォル アオス・ヌツツェン
 es möglich sein, auf jedem Quadratmeter Erd-
メークリヒ クヴァドラート・メーテル エールト
 oberfläche eine Maschine von 45 Pferdekraften Effekt
オーベルフレッヒェ マシーネ フェールデ・クレフテン エッフエクト
 aufzustellen. [6] Klopfte man an die Gräber und
アオフ・ツー・シュテルン クロップテ グレーベル
 fragte die Toten, ob sie wieder aufstehen wollten:
フラークテ トーテン オップ ヴィーデル アオフ・シュテーエン

sie würden mit dem Kopfe schütteln. (*Schopenhauer*)

コッフェ シュッテルン

[7] Die Weltgeschichte hätte einen ganz andern Lauf

ヴェルト・ゲシヒテ

ラオフ

genommen, wenn die Nase der Kleopatra um einige

ゲノムメン

ナーゼ

クレオーパトラ ウム アイニゲ

Millimeter kürzer gewesen wäre.

ミル リメーテル キュルツェル ゲヴェーゼン

訳註: [1] もし私がおまえを愛していなかったら嫉妬などするだろうか。eifersüchtig: *jealous*. [2] 彼は金があったら、そもそも働きなどはしないに違いない。überhaupt: *at all*. [3] 宇宙線をかりに人工的に製造しようと思ったら 1 000 000 000 000 ヴォルトにも達する電圧を要するだろう。kosmische Strahlung, *f.* (kosmische Strahlen, *pl.*と同じ): *cosmic rays*. künstlich: *artificially*. brauchen: *need, want*. Spannung (すなわち elektrische Spannung 電圧): *electric tension, electric pressure*. bis zu (...にも達する): *as strong as*. 1 000 000 000 000 (eine Billion): *one billion* (ただし英語式である、米語式だと trillion になる). Volt: *volt*. [4] もし人間が利己的でなかったら、社会機構は停止してしまうだろう。egoistisch: *egoistic*. stillstehen: *stop*. der soziale Mechanismus: *the social mechanism*. (需要と供給、その他の実利関係で動いている社会全体を、回転する機械と見て言うことばである。) [5] 太陽の光線のエネルギーを全幅的に利用することができるとしたら、地表の一平方メートルごとに、四十五馬力の効率を持つ機械を一台ずつ据えることが可能となるであろう。Sonnenstrahlen, *pl.*: *sunbeams, solar rays*. voll: *fully, to the full*. ausnutzen: *use*. (voll ausnutzen: *to make the most of*.) möglich: *possible*. auf jedem Quadratmeter: *on each square-metre*. Erdoberfläche, *f.*: *surface of the earth*. (auf jedem Quadratmeter Erdoberfl.: *on each square-metre of the surface of the earth*.) Maschine, *f.*: *machine*. von: *of*. 45 (fünfundvierzig). Pferdekraft, *f. pl.*: *horse power*. Effekt, *m.*: *effect*. aufstellen: *install, set up*. [6] 人もし墓を敲きて、彼ら再び蘇生せんことを欲するや否やと死者に問うとせば、彼らはおそらく頭を横に振るならん。(ドイツの厭世哲学者ショーペンハオエルが己が哲学の帰結を要約した有名な句。) klopfen: *knock*. Grab, *n. pl.*: *graves*. fragen: *question*. die Toten [形]: *the dead*. ob: *whether*, wieder: *again*. wieder aufstehen: *revive, rise up again*. mit dem Kopfe schütteln (den Kopf schütteln): *shake their head*. [7] もし仮にクレオパトラの鼻がほんの数ミリメートルばかり短かかったら、世界史はおそらく全然別個の針路を取っていたに相違ない。(人のよく言う奇論である。ローマ史で、ローマの Antonius がエジプトの美しい女王クレオパトラに惚れたために Antonius はローマの覇者になり得なかったのであるが、もし女王の鼻が一ミリも短かかったら、Antonius は女王に惚れなかったろうから、そうすればローマ史が全然別物になり、従って欧州史もすっかり変わり、ひいては世界史全体が全然変わって来たらう、というわけである。原因結果の関係を論ずる時によく利用される奇論である。) Weltgeschichte, *f.*: *universal history*. ganz: *wholly*. Lauf, *m.*: *course*. nehmen, nahm, genommen: *take, took, taken*. Nase, *f.*: *nose*. um einige Millimeter: *by several millimetres*. (um は「...だけ」) kürzer (kurz の比較級): *shorter*.

138. 前提部または結論部の独立用法

約束話法の前提部だけを用いて、結論部を特に言う必要のないことがあります。

Wäre ich doch reich! (*Would that I were rich!*)

おれが金持だったらなあ!

結論部は申すまでも……ありますかな?『さぞよかろうに』です。『さぞ悪かろうに』じゃないことはきまっているから省くのです。この形式は大抵こうした愚痴ですが、ドイツ語では doch という(ほとんど訳しようのない、単に文に力を入れるための)型通りの助勢詞を入れることになっています。英語は *Would that* が形式で、その後へ定形正置で第二式接続法(すなわち *were* 以外は全部過去形と同じもの)を使えばよいわけです。

また、結論部だけ用いて:

Ich hätte gern geraucht. (*I should like to smoke.*)

煙草がのみたいなあ。

これは文字通りには『よろこんで喫煙したろうになあ』です。すなわち『もしそれが出来たとしたら』(*wenn ich es gekonnt hätte* または *wenn es mir möglich gewesen wäre*)という前提は、言うのは野暮(き)だから省くわけです。gern は、英語では、普通あまり用いない *fain* (好んで、なんとかして)で、つまり直訳すれば *I would fain smoke.* です。ドイツ語ではまた *Ich möchte gern rauchen.* とも言います。möchte は mögen (好む)の第二式で、möchte gern は『好んで好む』ではまるで Pleonasmus (贅語)のようですが、これは英語の *should like* や *would fain* と同じように、単に『……したいものだ』という形式をなしています。英語の *should* も *would* も、その元来の用法から言えば、やはり約束話法の結論部の独立用法なのです。

Ich hätte gern geraucht. は、仮想らしく響かせるためにわざと過去形を用いたのですが、なんなら現在形で

Ich rauchte gern.

Ich würde gern rauchen.

と言ってもよろしい。*Ich rauchte gern.* は『私は好んで喫煙した』という過去形と一致してしまいますから、前後関係から誤解の起こるような場合には用いられません。しかし、—e 形の第二式接続法ならそのおそれはありません。たとえば『私は何か飲みたいなあ』なら (*trinken, trank, getrunken* ゆえ、第二式接続法は *tränke*):

Ich tränke gern etwas.

139. Als ob について

『あたかも……であるかのごとく』、『まるで……であるかのように』という接続詞

(すなわち英語の *as if*, もしくは *as though*) は, ドイツ語では *als ob* で, この接続詞を用いると, その文末の定形は接続法の第二式 (あるいは第一式) を用います。英語は *as if* と言えは *as if I were* とか *as if he had* とかいったように, 第二式接続法ときまっています。

たとえば, あまりよく知りもしない人が『僕は山田ですが……』などといって, 山田とさえ言えはこちらですぐ思い出さずだといわんばかりの調子で話しかけて来たとします。そうすると, 英語でなら:

He mentions his name as if I should recognize it.

recognize (wiedererkennen) というのは, 『思いあたる』, すなわちある物を見て, あるいは聞いて, ははあと思い出さずことです。*should* は, 云々するはずだ, 云々するのが当然だ, という助動詞ですが, これは元来文法的には第二式接続法 (前項で述べた, 結論部の独立用法から生じたものですが) だから, ここではちょうどよいわけです。

これをドイツ語に翻訳しますと, 『云々するはずだ』はドイツ語では *müssen*, *mußte*, *gemußt* で, —e によって *müßte* を用います。あるいは『云々すべきはずのものだ』というのなら *sollen*, *sollte*, *gesollt* ですから (これは規則動詞ゆえ, —e によって *sollte* とやっては誤りで, 第二式は過去形のままです!) *sollte* を用いてもよいわけで, そうすればちょうど英語と全然同じことになります, *should* は語源的にも文法的にも, また用法からいっても殆んど全然 *sollte* と同じものですから。

Er nennt seinen Namen, **als ob** ich ihn wiedererkennen **müßte** (または *sollte*).

ところで, この *als ob* の代りに単に *als* を用いることがあります, その場合には定形倒置になります:

Er nennt seinen Namen, **als müßte** ich ihn wiedererkennen.

また, 接続法は, 第二式も第一式も使います。『彼は, あたかも我々が旧友であるかのごとく私に挨拶した』ならば:

1. Er grüßte mich, als **wären** wir alte Freunde.
2. Er grüßte mich, als **seien** wir alte Freunde.
3. Er grüßte mich, als ob wir alte Freunde **wären**.
4. Er grüßte mich, als ob wir alte Freunde **seien**.

備考: *als ob* の代りに *wie wenn*, *als wenn* を用いることもあります。また, 定形は, 往々にして直接法を用いることもないではありません (殊に *wie wenn*, *als wenn* の際には)。

例 題 55

- [1] Die japanischen Bauern sind so reich geworden,
ヤパーニッシェン バオエルン ライヒ ゲヴォル
 den, als ob sie den Krieg gewonnen hätten. [2]
デン アルス オップ クリーヒ ゲヴォンネン ヘッテン
 Die Japaner bieten ihren Toten Speise und Trank,
ヤパーネル ビーテン トーテン シュパイゼ トランク
 als ob sie noch lebten. [3] In Wirklichkeit ist der
レープテン ヴィルクリヒカイト
 Wasserspiegel konvex, aber praktisch kann man ihn
ヴァッセル・シュピーゲル コンヴェックス プラクティッシュ
 so betrachten, als wäre er eine geometrische Fläche.
ベトラハテン ゲオメートリッシェ フレッシュ
 [4] Lebe an jedem Tage so, als ob es dein letzter sei.
レッツテル ザイ

訳註: [1] 日本の百姓は、まるで戦争に勝ちでもしたように金持になった。japanisch: *Japanese*. Bauer, m. pl.—n: *farmer*. so: *so*. reich: *rich*. werden, wurde, geworden: *become, became, become*. Krieg, m.: *war*. gewinnen, gewann, gewonnen: *win, won, won*. [2] 日本人は、彼らがあたかも生きているかのごとくに、死者に食物や飲物を供える。bieten: *offer*. Speise, f.: *food, meat*. Trank, m.: *drink*. noch: *still*. [3] 実を言うと水面は凸面なのである、けれども実際的には幾何学的平面であるかのごとく見なして差支えない。In Wirklichkeit: *in reality, in fact, to be exact*. Wasserspiegel, m.: *mirror (or surface) of the water*. konvex: *convex*. praktisch: *practically*. betrachten: *consider*. geometrische Fläche: *geometric plane surface*. [4] 来る日も来る日もそれが汝の最後の日であるかのごとくに生きよ。an jedem Tage: *every day*. es: Tag を受ける。こういう時は必ずしも男性だからといって er で受けることはしない。たとえば Da kommt ein Besucher! (訪問者が来た) と言った後、『それはあなたの従兄です』というには Es ist Ihr Vetter. と、es を主語にする。dein letzter [Tag]: *thy last one*.

第30講 数

詞

140. 基数

基数というのは、次項以下の序数とか倍数とかいったような場合に対して言うので、要するに普通の 1, 2, 3 のことです。まず 1 から 20 までを覚えましょう。英語と同様、12 までは特別な単語で、それから上は分解的に構成されています：

1	eins	[アインス]	11	elf	[エルフ]
2	zwei	[ツヴァイ]	12	zwölf	[ツヴェルフ]
3	drei	[ドライ]	13	dreizehn	[ドライ・ツェーン]
4	vier	[フィール]	14	vierzehn	[フィル・ツェーン]
5	fünf	[フュンフ]	15	fünfzehn	[フュンフ・ツェーン]
6	sechs	[ゼックス]	16	sechzehn	[ゼヒ・ツェーン]
7	sieben	[ジーベン]	17	siebzehn	[ジープ・ツェーン]
8	acht	[アハト]	18	achtzehn	[アハ・ツェーン]
9	neun	[ノイン]	19	neunzehn	[ノイン・ツェーン]
10	zehn	[ツェーン]	20	zwanzig	[ツヴァンツィヒ]

eins は、数える時の形で、次に名詞が来れば不定冠詞と同じく語尾がつきます：eine Meile (一マイル) など。vierzehn (14) は、vier を短綴としてフィルと発音するのが普通です。zwei 以上は、名詞と結びつくとき、語尾はつけません：acht Monate (八ヵ月), sechzehn Tage (十六日間) など。

次は、20 から 90 まで：

20	zwanzig	[ツヴァンツィヒ]	60	sechzig	[ゼヒツィヒ]
30	dreißig	[ドライシヒ]	70	siebzig	[ジープツィヒ]
40	vierzig	[フィルツィヒ]	80	achtzig	[アハツィヒ]
50	fünfzig	[フュンフツィヒ]	90	neunzig	[ノインツィヒ]

すべて -zig に終わるが、ただ 30 だけが -ßig です。vierzig の vier も、14 と同様、フィルと短かく読むのが普通です。

さて、21 や 45 などの構成法が英語と大変ちがいます、英語では 45 なら *forty-five* と、日本語の通りの順ですが、ドイツ語は *fünfundvierzig*, すなわち「5 と 40」

というふうに逆に数え、間に und がはいります：

48 achtundvierzig

52 zweiundfünfzig

71 einundsiebzig

39 neununddreißig

次には百、千、万など：

100 hundert

100,000 hunderttausend

1,000 tausend

1,000,000 eine Million

10,000 zehntausend

10,000,000 zehn Millionen

次に、どんな長い数字でも読めるような覚え方をしましょう。長い数字は、三位数 (452 とか 139 とか) が読めさえすれば読めるような仕組みになっていますから、まず三位数の読み方を研究します：

101 (ein)hundert-(und)-eins

111 (ein)hundert-(und)-elf

254 zweihundert-vierundfünfzig

821 achthundert-einundzwanzig

407 vierhundert-(und)-sieben

百位の次の und は、入れても省いてもよいが、十位と単位との間の und は決して省いてはいけません。

これがわかると、どんな長いものでも読めます。すなわち、三つずつに仕切って、その仕切ったところに単位名称があるからです。

0 Qui 000 tQ 000 Q 000 tT 000 T 000 tB 000 B 000 m 000 M 000 t 000 a

a の所は名称なしで、何もつけなくてよろしい。t = tausend. M = Million (*pl.* Millionen). m = Milliarde (*pl.* Milliarden). B = Billion (*pl.* Billionen). tB = tausend Billionen. T = Trillion (*pl.* Trillionen). tT = tausend Trillionen. Q = Quadrillion (*pl.* Quadrillionen). tQ = tausend Quadrillionen. Qui = Quintillion (*pl.* Quintillionen).

たとえば 415 334 は vierhundertundfünfzehntausend dreihundertvierunddreißig です。1 920 038 は eine Million neunhundertundzwanzigtausend achtunddreißig です。5 429 337 412 は fünf Milliarden vierhundertneunundzwanzig Millionen dreihundertsiebenunddreißigtausend vierhundertundzwölf です。367 701 268 345 002 001 ならば dreihundertsiebenundsechzigtausend (Billionen) siebenhundertund-eine Billion zweihundertachtundsechzig Milliarden dreihundertfünfundvierzig

Millionen zweitausend und eins です。カッコ内の Billionen は次に Billion があるから省きます。

要するに三位を読んでは単位名をつけて行けばよく、ただ tausend Billionen や tausend Trillionen など、千のつく単位名は、次位の単位に同名の Billion, Billionen などが来る場合には省き、次位が 000 となる時にのみ読むというわけです。

上例でわかる通り、hundert や tausend は名詞扱いにせず、従って小文字ですが Milliarde および -ion つきの単位はすべて女性名詞で、名詞ゆえ複数形があり、また大書します。

Billion 以上の単位系統は、たとえば英国と米国とでもちがいますが、ドイツは英語式です。米国では Million の一つ上が Milliarde ではなくて Billion, その上が Trillion となっていくので、英独語式とはずいぶん違ってきます。

さて、これらの数詞を名詞の前に冠して用いる場合には、1 より大なる数の次に置かれる名詞は複数形ですが (fünfundzwanzig Häuser 「二十五の家屋」など)、101 とか 3 001 とか、最後に ein の来る時は単数を用います: zweihundertundein Haus 「二百一の家屋」、tausendundeine Nacht 「千一夜物語」など。

度量衡の単位名が次に来る時には、規則が非常に厄介です。ある時は (主として女性の度量衡名) 複数形を用いたり (zwei Meilen 二マイル; drei Tonnen 三トン, など), またある時は単数を用いたりします: (vier Fuß 四フィート; fünf Grad 五度, など)。後者は英語では 4 feet, 5 degrees と複数を用います。(ただ英語は、その句が名詞に冠して用いられる際には単数になります: 37-minute flight 三十七分間の飛行; 8-foot 6-inch giant 八フィート六インチの巨男, など)。要するに、度量衡名の単か複かの問題は英独語ともはなはだ厄介です。

141. 序 数

序数というのは、第一、第二などのことで、すべて形容詞ですが、まず 10 までを念のために覚えましょう:

erst	[エールスト] (<i>first</i>)	sechst	[ゼックスト] (<i>sixth</i>)
zweit	[ツヴァイト] (<i>second</i>)	siebent	[ジーベント] (<i>seventh</i>)
dritt	[ドリット] (<i>third</i>)	acht	[アハト] (<i>eighth</i>)
viert	[フィールト] (<i>fourth</i>)	neunt	[ノイント] (<i>nineth</i>)
fünft	[フュンフト] (<i>fifth</i>)	zehnt	[ツェーント] (<i>tenth</i>)

後は簡単で、19 (neunzehnt) まではすべて基数に -t の語尾をつける、20 以上には -st をつける、という規則です:

- 17. siebzehnt
- 21. einundzwanzigst
- 45. fünfundvierzigst
- 100. hundertst
- 1000. tausendst

千から上の, Milliarde は milliardst ですが -ion のつくものは -t と -st とも
いいます: milliont, millionst.

101. や 1001. などの 1 は, hundert und erst と hundert und eint ともい
います。

不規則動詞表

- 【1】 太文字は特に注意すべきことを示す。
 【2】 イタリックは、方言、古語、その他の特殊形なることを示す。
 【3】 () は別形なることを示す。
 【4】 訳語は単に基本的意味を暗示するに過ぎない。
 【5】 空所は文法上の法則により、あるいは語幹によって帰結し得るものゆえ、各自記入すべし。
 【6】 — は、欠けたる形、あるいは普通用いない個所を示す。
 【7】 R は全然規則的なことを、[R] は同時に規則的な形もあることを示す。

不定形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過去分詞	命令法
backen パンを焼く	bäckst bäckt	buk		gebacken	
befehlen 命ずる	befiehlt befiehlt	befahl	beföhle	befohlen	befiehl !
befleißē (再 励む)		befleiß		beflissen	
beginnen 始める		begann	begönnē (<i>begänne</i>)	begonnen	
beißen 噛む		biß		gebissen	
bergen 隠す	birgst birgt	barg	bürge (<i>bärge</i>)	geborgen	birg !
bersten 裂ける	birst [R] birst [R]	barst (<i>borst</i>)	börste	geborsten	birst !
bewegen 説き動かす		bewog		bewogen	
biegen 曲げる		bog		gebogen	
bieten 提供する	R. (<i>beut</i>)	bot		geboten	R. (<i>beut !</i>)
binden 結ぶ		band		gebunden	

不定形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過去分詞	命令法
bitten 願う		bat		gebeten	
blasen 吹く	blä[se]st bläst	blies		geblasen	
bleiben とどまる		blieb		geblieben	
braten あぶる	brätst brät	briet		gebraten	
brechen 破る	brichst bricht	bräch		gebrochen	brich !
brennen 燃える		brannte	brennte	gebrannt	
bringen もたらす		brachte		gebracht	
denken 考える		dachte		gedacht	
dingen 雇う		dang (dingte)	(<i>dänge</i>) dünge (dingte)	gedungen (gedingt)	
dreschen 打穀する	drisch[es]t drischt	dräsch (drösch)	drösche	gedroschen	drisch !
dringen 乗り込む		drang		gedrungen	
dürfen	darf darfst darf	durfte		gedurft (dürfen)	—
dünken 思われる	mich dünkt (mich deucht)	dünkte (deuchte)		gedünkt (gedeucht)	—
empfangen 受け取る		empfang		empfangen	
empfehlen 薦める	empfiehlst empfieht	empfah!	empfähle	empfohlen	empfiehl !
empfinden 感ずる		empfund		empfund	
erbleichen 物故する [蒼ざめる]		erblich [erbleichte]		erblichen [erbleicht]	
erkiesen 選び出す		erkor (erkieste)		erkoren (erkiest)	
erlöschen 消える	erlisch(es)t erlischt	erlosch		erloschen	erlisch !
erschrecken おどろく	erschrickst erschrickt	erschrak		erschrocken	erschrick !

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
essen. 食う	isest, ißt ißt	āß		gegessen	
fahren 乗物で行く	fährst fährt	fuhr		gefahren	
fallen 落ちる	fällst fällt	fiel		gefallen	
fangen 捕える	fängst fängt	fang		gefangen	
fechten 闘う	fichtst ficht	focht		gefochten	ficht!
finden 見出す		fand		gefunden	
flechten 編む	flichtst licht	flocht		geflochten	flicht!
fliegen 飛ぶ	R. (<i>fleugt</i>)	flog		geflogen	R. (<i>fleug!</i>)
fliehen 逃げる		floh		geflohen	
fließen 流れる		flöß		geflossen	
fragen 問う	R. (<i>fragst</i>) (<i>frägt</i>)	fragte (<i>frug</i>)	fragte (<i>früge</i>)	gefragt	
fressen (動物が) 食う	frisest (frißt) frißt	fräß		gefressen	friß!
frieren 凍える		fror		gefroren	
gären 醗酵する		gor (gärte)	göre (gärte)	gegoren	
gebären 産む	gebierst gebiert	gebar		geboren	gebier!
geben 与える	gibst, <i>giebst</i> gibt, <i>giebt</i>	gab		gegeben	<i>gib!</i> <i>gieb!</i>
gedeihen 栄える		gedieh		gediehen	
gehen 行く		ging		gegangen	
gelingen 成功する	es gelingt	es gelang		gelungen	es gelinge!
gelten 価する	giltst gilt	galt	gölte (gälte)	gegolten	gilt!
genesen 癒る		genas		genesen	

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
genießen 享樂する	es geschieht	genöß	gewönne (gewänne)	genossen	es geschehe!
geschehen 起る		es geschah		geschehen	
gewinnen 利得する		gewann		gewonnen	
gießen そそぐ		göß		gegossen	
gleichen 似る		glich		geglichen	
gleißen 閃めく		gliß (gleißte)		geglissen (gegleißt)	
gleiten 滑る		glitt		geglitten	
glimmen 微光を発する		glomm (glimmte)		geglommen (geglimmt)	
graben 掘る		grub		gegraben	
greifen 掴む		griff		gegriffen	
haben 持つ	hast hat	hatte	hätte	gehabt	hilf!
halten 保つ	hältst hält	hielt		gehalten	
hangen 懸かる	hängst hängt	hing		gehangen	
hauen 斬る		hieb		gehauen	
heben 揚げる		hob		gehoben	
heißen 名乗る		hieß		gcheißen	
helfen 助ける	hilfst hilft	half		geholffen	
kennen 識る		kannte		gekannt	
klieben 裂き破る		klob (kliebte)		gekloben (gekliebt)	
klimmen よじのぼる		klomm (klimmte)		geklommen (geklimmt)	
klingen 響く		klang		geklungen	

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
kneifen つねる		kniff		gekniffen	
kommen 来る	R. (<i>kömmst</i>) (<i>kömmst</i>)	kam		gekommen	
können できる	kann kannst kann	konnte		gekonnt (können)	
kreischen 叫ぶ		kreischte (krisch)	kreischte (krische)	gekreischt gekreischen	
kriechen はう	R. (<i>er kreucht</i>)	kroch		gekrochen	R. <i>kreuch!</i>
küren 選ぶ		kor (kürte)	köre (kürte)	gekoren	
laden [荷を] 積む	lädst [R] lädt [R]	lud ladete	lüde ladete	geladen	
lassen 英 <i>let</i>	lässest (läßt) läßt	ließ		gelassen (lassen)	laß!
laufen 走る	läufst läuft	lief		gelaufen	
leiden 悩む		litt		gelitten	
leihen 貸す		lieh		geliehen	
lesen 読む	lie(se)st liest	las		gelesen	lies!
liegen 横たわる		lag		gelegen	
lügen 嘘を吐く		log		gelogen	
mahlen [粉を] 挽く		mahlte	mahlte	gemahlen	
meiden 避ける		mied		gemieden	
melken [乳を] しぼる	milkst [R] milkt [R]	molk (melkte)	mölke (melkte)	gemolken (gemelkt)	milk! melke!
messen 計る	missest, (mißt) mißt	māß		gemessen	miß!
mögen 英 <i>may</i>	mag magst mag	mochte		gemocht (mögen)	—

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
müssen 英 <i>must</i>	muß mußt muß	mußte		gemußt (müssen)	—
nehmen 取る	nimmst nimmt	nahm		genommen	nimm !
nennen 名づける		nannte	nennte	genannt	
pfeifen 口笛を吹く		pfiff		gepfiffen	
pflügen 育てる		pflög (pfliegte)	pflöge (pfliegte)	gepflügen (gepflügt)	
preisen 称える		pries		gepriesen	
quellen 湧く	quillst quillt	quoll		gequollen	quill !
rächen 仇を討つ		rächte	rächte	gerächt (gerochen)	
raten 忠言する	rätst rät	riet		geraten	
reiben 摩擦する		rieb		gerieben	
reißen 引ったくる		riß		gerissen	
reiten 騎行する		ritt		geritten	
rennen 駆る		rannte	rennte	gerannt	
riechen 匂う		roch		gerochen	
ringen 格闘する		rang		gerungen	
rinnen 流れる		rann	rönne (ränne)	geronnen	
rufen 呼ぶ		rief		gerufen	
salzen 塩漬けにする	R.	R.	R.	gesalzen	
saufen 鯨飲する	säufst säuft	soff		gesoffen	
saugen 吸う		sog (saugte)	söge (saugte)	gesogen (gesaugt)	
schaffen 創造する		schuf		geschaffen	

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
schallen 響く		scholl (schallte)	schölle (schallte)	geschollen (geschallt)	
scheiden 別れる		schied		geschieden	
scheinen 輝く		schien		geschienen	
schelten 罵しる	schiltst schilt	schalt (scholt)	schölte (schälte)	gescholten	schilt !
scheren 剃る	schierst [R] schiert [R]	schor (scherte)	schöre (scherte)	geschoren geschert	schier ! schere !
schieben 押す		schob		geschoben	
schießen 射る		schöß		geschossen	
schinden [皮を] 剥ぐ		schund (schand)	schünde	geschunden	
schlafen 眠る	schläfst schläft	schief		geschlafen	
schlagen 打つ	schlägst schlägt	schlug		geschlagen	
schleichen 徐歩する		schlich		geschlichen	
schleifen 磨く		schliff		geschliffen	
schleißén 裂き割る		schleiß (schleißte)	schlisse (schleißte)	geschlissen (geschleißt)	
schliefen 滑り込む		schloff		geschlossen	
schließen 閉じる		schloß		geschlossen	
schlingen 嚙み下す		schlang		geschlungen	
schmeißén 叩きつける		schmiß		geschmissen	
schmelzen 融ける	schmilz[es]t schmilzt	schmolz		geschmolzen	schmilz !
schnauben 鼻息吹く	R.	R. (schnob)	R. (schnöbe)	R. (geschnoben)	
schneiden 切る		schnitt		geschnitten	
schrauben ねじる	R.	R. (schrob)	R. (schröbe)	R. (geschroben)	

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
schrecken おどろく	schrickst schrickt	schrak		geschrocken	schrick !
schreiben 書く		schrieb		geschrieben	
schreien 叫ぶ		schrie		geschrie[e]n	
schreiten 澗歩する		schritt		geschritten	
schrinden 裂け開く		schrund		geschrunden	
schwären 膿む	schwiert (schwärt)	schwor		geschworen	schwier ! schwäre !
schweigen 黙る		schwie		geschwiegen	
schwellen 脹らむ	schwillst schwillt	schwoll		geschwollen	schwill !
schwimmen 泳ぐ		schwamm	schwömme (schwämme)	geschwommen	
schwinden 消える		schwand	schwände	geschwunden	
schwingen 振る		schwang		geschwungen	
schwören 誓う		schwur (schwor)	schwüre	geschworen	
sehen 見る	siehst sieht	sah		gesehen	sieh ! siehe !
sein 英 <i>be</i>	bin. sind. bist. seid. ist. sind.	war		gewesen (gewest)	sei !
senden 送る		sandte (sendete)	sendete	gesandt (gesendet)	
sieden 煮る (煮える)		sott (siedete)	sötte (siedete)	gesotten (gesiedet)	
singen 歌う		sang		gesungen	
sinken 沈む		sank		gesunken	
sinnen 思案する		sann	sänne (sönne)	gesonnen	
sitzen 坐っている		säß		gesessen	
spalten 割る	R.	R.	R.	R. (gespalten)	

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
speien 吐く		spie	spiee	gespie[e]n	
spinnen 紡ぐ		spann	spönne (spänne)	gesponnen	
spleißen 割る		spliß (spleiße)	splisse (spleiße)	gesplissen (gespleißt)	
sprechen 話す	sprichst spricht	spräch		gesprochen	sprich !
sprießen 萌え出る		spröß		gesprossen	
springen 跳ぶ		sprang		gesprungen	
stechen 刺す	stichst sticht	stäch		gestochen	stich !
stecken 刺し込む 刺し込んである	R. (<i>stickst</i>) (<i>stickt</i>)	stak steckte	stäke steckte	gesteckt	stecke ! (<i>stick</i>) !
stehen 立つ		stand (<i>stund</i>)	stünde (stände)	gestanden	
stehlen 盗む	stiehlst stiehlt	stahl	stöhle (stähle)	gestohlen	stiehl !
steigen 登る		stieg		gestiegen	
sterben 死ぬ	stirbst stirbt	starb	stürbe stärbe	gestorben	stirb !
stieben 散る		stob		gestoben	
stinken 悪臭を放つ		stank		gestunken	
stoßen 突く	stöß[es]t stößt	stieß		gestoßen	
streichen こする		strich		gestrichen	
streiten 争う		stritt		gestritten	
tragen 担う	trägst trägt	trug		getragen	
treffen 当てる	triffst trifft	traf		getroffen	triff !
treiben 駆る		trieb		getrieben	
treten 歩む	trittst tritt	trat		getreten	tritt !

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
triefen [掣が] 滴る		troff (triefte)	tröffe (triefte)	getroffen (getrieft)	
trinken 飲む		trank		getrunken	
trügen 騙す		trog		getrogen	
tun 為す		tat (tät)		getan	
verderben 毀損する	verdirbst verdirbt	verdarb	verdürbe	verdorben verderbt	verdirb !
verdrießen 厭がらす		verdröß		verdrossen	
vergessen 忘れる	vergissest (vergißt) vergißt	vergäß		vergessen	vergiß !
verlieren 失う		verlor		verloren	
verzeihen 宥す		verzieh		verziehen	
wachsen 生える	wächst wächst	wuchs [wüchs]		gewachsen	
wägen はかる		wog (wägte)	wöge (wägte)	gewogen (gewägt)	
waschen 洗う	wäsch[es]t wäscht	wüsch		gewaschen	
weben 織る		wob (webte)	wöbe (webte)	gewoben (gewebt)	
weichen 避ける		wich		gewichen	
weisen 示す		wies		gewiesen	
wenden 回す		wandte (wendete)	wendete	gewandt (gewendet)	
werben 募る	wirbst wirbt	warb	würbe	geworben	wirb !
werden なる	wirst wird	wurde (ward)		geworden (worden)	werde !
werfen 投げる	wirfst wirft	warf	würfe	geworfen	wirf !
wiegen 重さがある		wog		gewogen	
winden 捲く		wand		gewunden	

不 定 形	直接法現在	直接法過去	接続法 (II.)	過 去 分 詞	命 令 法
wissen 知る	weiß weißst weiß	wußte		gewußt	wisse !
wollen 欲する	will willst will	wollte		gewollt (wollen)	wolle !
wringen しぼる		wrang		gewrungen	
zeihen 罪を負わせる		zieh		geziehen	
ziehen 引く		zog		gezogen	
zwingen 強いる		zwang		gezwungen	